

Escape from Aincrad

リンクス二等兵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——何もかもがおかしくなった、どうしようもないこの世界で

初のフルダイブ型VRMMORPGであるソードアート・オンライン発売と同日、同じく初のVRFPSであるEscape from Tarkovが発売になった。

RPGの要素を取り入れ、死の代償は全ての装備、戦利品のロスト。リアルを追求したFPSはSAOと並んでこれからのVRを引っ張っていくと期待されていた。

それなのに、EFTを購入したはずの”レイジ”はSAOの世界にいた。他のPMCたちも同じようにSAOに放り込まれ、更にはログアウトさえもが出来なくなった。

脱出地点は2つ。100層のボスを撃破してアインクラッドを脱出するか、ゲームで死に、同時に現実で死ぬこと。

レイジの隣にはベータテスターの少女”コハル”がいて、かつての相棒のリョーハ、スナイパーのシノンやPMCたちが集っていく。

リアルで得ることの出来なかった敬意を、友情を、愛情をロストしないために、彼らをリアルへ帰すために戦い、この鋼鉄の城から脱出せよ。

目次

プロローグ	作戦名”トゥームストーン”	1
1層	1 見知らぬ世界のPMC	4
1層	2 アインクラッド封鎖	12
1層	3 旅路の始まり	19
1層	4 草原のSCAV	25
1層	5 隠れ家のパーティ	31
1層	6 ホルンカ	38
1層	7 伐採場の死闘	45
1層	8 伐採場の死闘—2	50
1層	9 しばしの別れ	56
1層	10 不思議な槍使い	61
1層	11 2層への道	65
1層	12 怨念マリモ	72
1層	13 出撃前夜	79
1層	14 犠牲の覚悟	85
1層	15 生還者	93
幕間	ピクニックはもう勘弁	100
2層	1 次の戦場へ	106
2層	2 Azure Coast	112
2層	3 Sanitar	118
2層	4 海の見える場所	125
3層	1 3層への道すから	129
3層	2 ガンスミス	134
5層	1 嵐の予兆	141

5層	2	悪意の陰	147
5層	3	思惑	154
5層	4	騎士の帰還	159
幕間		武具屋の一コマ	165
5層	5	協力者	169
5層	6	旗	175
5層	7	助っ人	180
5層	8	イエーガー	186
5層	9	Customs	192
5層	10	悪意の一撃	198
5層	11	トカレフ	205
5層	12	守りたいもの	211
5層	13	死闘の果てに	216
5層	14	塔へ！	222
5層	15	戦いの前に	229
5層	16	混迷の戦場	233
5層	17	コラテラル・ダメージ	239
5層	18	怒りのままに	246
5層	19	それぞれの戦後	252
5層	20	守りたかったもの	259
幕間		風邪の日	264
11層	0	憤怒の目覚め	269
11層	1	旅は道連れ	272
11層	2	ULTRAでお買い物	277
11層	3	服屋巡りの最中に	282

1 1 層—4	万引き犯にはお仕置きを	286
1 1 層—5	バーガーショップ作戦会議	291
1 1 層—6	店長こちら、銃鳴る方へ	295
1 1 層—7	包囲網	300
幕間	クリスマスのタルコフで	305
1 1 層—8	一難去つて	309
1 2 層—0	W e t j o b	315
1 2 層—1	夕焼けの海に	318
1 2 層—2	顕現した悪意	323
1 2 層—3	止まぬ銃声	329
1 2 層—4	再会	334
1 2 層—5	衝撃と畏怖	339
1 2 層—6	竜使いの少女	344
幕間	コハルの誕生日	350
1 2 層—7	避難先で	357
1 2 層—8	護衛部隊	362
1 2 層—9	ウサギの穴に落ちて	368
1 2 層—9.5	返らない声	373
1 2 層—10	奈落の先へ	377
1 2 層—11	深淵の先に	381
1 2 層—12	会敵	385
1 2 層—13	余波	390
2 0 層—0	悪夢の中で	394
2 0 層—1	浮かない顔で	396
2 0 層—2	搜索救難任務	401

20層	3	灯台	405
20層	4	キリトの苦悩	410
20層	5	挟撃の中で	415
20層	6	撤退	420
幕間		魔法陣に祈る声	425
20層	7	終わらない悪夢	432
20層	8	進撃	437
20層	9	殺戮	442
20層	10	罪禍	447

プロローグ 作戦名「トゥームストーン」

Raid #no data
Day no data
Level 51 BEAR Operator "Rage"
Task Force "Atlas" lth Raid g
rope
Aincrad Polkihim" Factory Zone

“

窓からグレネードを放り込み、敵を混乱させる。たちまちPMCは事務所に突入して銃撃戦を繰り広げた。

逃げ惑う敵、更衣室で籠城戦に持ち込もうとする敵、様々な動きをする敵を制圧射撃で押さえつける。階段は俺たちが押さえた。奴らに逃げ場はない。俺たちが奴等をすり潰すか、この包囲を食い破るかだ。

硝煙が辺りを白く染め上げ、視界が悪くなっていく。でも敵にPMCは少ないようで、返ってくる銃弾は少ない。ただ、ダガーとか片手剣を持った奴らが煙の向こうから突っ込んでくるのだ。

「仕留めろー！」

「死ね、ラフコフの人でなしが！」

怒り心頭の味方が激しい弾幕を浴びせると、突っ込んできた敵が転倒した。それで済ませるかと思いきや、追いつきの銃弾を撃ち込み、味方がグレネードを放り投げてトドメを刺す。

爆発とともにHPバーが削れて、そいつの死を告げる。ゲームの世界での死だから、本当ならばどこかで生き返るのだろうけれども、このゲームでリスポーンは存在しない。正真正銘のワンライフ制なのだ。

そんな世界でも、プレイヤー同士で殺し合う。現実の自分が、相手が死ぬと分かっているにもかかわらず止まらない。こうするしかないから。想いに別れも言わず、こんな戦場に来てしまった。

「1人仕留めたぞ！ 残りも殺せ！」

「マウスが被弾！ 血塗れだ！」

「シヴァタ、カバールをくれ！ マウスを引つ張る！」

盾を持った剣士が前に躍り出て、銃弾を受け止める。その間に別のPMCが負傷して倒れる仲間を引きずり、物陰へと運ぶ。

「弾切れ……リロードする！」

「リヨーハ、グレネード撃て！」

「制圧中、制圧中！ 廊下は押さえてる！」

味方が弾幕で敵の動きを押さえつける。その間にグレネードランチャーを取り出した相棒が廊下へと躍り出た。

「グレネード撃つぞ！」

ポン、という銃弾に比べたら間抜けな音がする。でも少しのラグのち、銃弾とは比べ物にならない爆音が響き渡って、何人が倒れ込むのが見えた。

もちろん、倒れた哀れな連中は追い討ちの銃弾が命中し、残っていた僅かなHPも削り切られる。殺した罪悪感なんて後にとっておけ。今の俺たちには復讐心があれば良いんだ。

「レイジ、このままじゃジリ貧だ！ 突っ込むか退くかしねえと！」

「押し込むぞ！ キリトにトゥームストーン作戦発動を伝えたから、じきに援軍が来る！」

「クソツタレのイカレ野郎め、そもそも事前通告なしの作戦だろーがよ！」

そうだ。本来なら偵察任務だったのに、こっそり用意した奇襲作戦計画に変更してこうなった。発動までは読むなど作戦計画書を渡しはしたが、命令違反に等しい真似をした俺たちを助けになんて来るものか。鼓舞するための嘘っぱちだ。

だから、俺たちだけでやるしかない。どうせ、この先俺たちはついて行けないのだ。せめて最後に、あのPKギルドの連中を道連れに葬り去ってやるのが、せめて置土産だ。

「弾の少なえやつは予備を出せ！ グレネードの合図で詰めて、一気に潰す！ 捕虜は不要、POH以下幹部全員をここで殺す！」

「言われなくてもわかってる！ 弟と仲間の仇だ。奴らを生かして帰

すか！」

ポケットからグレネードを取り出す。パイナップルみたいな塊が攻撃の合図となり、仲間たちに死ねと命令するも等しい。

でも、それはリーダーとして負わなければならない責任だ。この作戦を立案した時から、覚悟は出来ていた。自分の墓の場所さえ分からず、悲嘆に暮れる想い人を幻視して尚、俺は戦う。

目の前の敵があの子を人質に取った時、ローグをけしかけてその少女を殺そうとした時、仲間を殺しやがった時。その全てが過ぎり、覚悟となった。ここで終わらせてやろう。何もかもを。

「やれ、デアデビル！俺もついていく！」

相棒が背中を押す。覚悟を決めて、俺はピンを引っこ抜いた。もう戻せない。この手の中の殺意を、奴らに投げつけるだけだ。

「Пошла ^{グレ} ^{ネー} ^ド ^投 ^げ ^る ^ぞ граhasta！」

狼煙を上げた。グレネードと敵が叫び、ロッカーに身を隠している。走り回る音もした。

それから遅れて響く爆音は突撃の合図。どんな結末が待っているかわかっている。俺たちは進み出した。激しい銃火を浴びせかけ、恐怖をかき消しながら。

許してくれ、コハル。俺はまた約束を破る。

1層——見知らぬ世界のPMC

キャラメイク画面というのはドキドキする物だ。これから新しい世界を旅する自分の相棒、分身を作る時間なのだから。

今だけは辛い現実を忘れて、思い通りの自分になれる。手に入らぬ理想がここでは手に入るから、ゲームに思いこがれるのだろう。

ナーヴギアという、バイクのヘルメットのようなヘッドセットを被っただけだ。それだけで、俺は変わった。

世界初のフルダイブ型VR機器。今まさに、世界中が待ち望んだVRゲームの世界が始まろうとしているのだ。

弓や魔法を廃し、純粋に剣で戦い、冒険する王道のMMORPGのソードアート・オンライン(SAO)と、ハードコアシューティングが売りのFPS、Escape from Arkov(EFT)の発売は世界を賑わせた。

ゲームの革命、新時代の始まり。そう期待されたSAOとEFTの2タイトル。どちらを買うか正直迷った人も多い。

そして今、EFTのキャラメイク画面でひとりのPMCオペレーターが生まれた。コードネーム“レイジ”。

ロシア系PMC“BEAR”所属のレイジは、扮装地帯“タルコフ特別市”に取り残され、かつての仇敵“USEC”と手を組んでも Terra Gropeの謎を解き明かし、タルコフから生還することを目指す。

「……筈だったんだけどなあ」

原っぱに大の字に寝転がり、空を見上げていた。これだけならばタルコフにも見える。

Woodsという森林マップの一角に見えなくもないのだ。だが、最大の違いはそこらを走り回る猪の存在だろう。しかも多い。そして、こっちに向かって来る。

「タルコフに猪がいるかボケェ！ 鳥もオブジェクトだろうがい！」

突進してきた猪(フレンジーボアとか言うらしい)の頭めがけてタクティカルマホークを振り下ろす。

トラックも嫌だが、猪に轢かれて死ぬなんて絶対にごめんだ！ 初期装備を失くしてたまるか！

トマホークは最上級グレードパッケージ、Edge of Darkness（通称闇落ち）の特典だ。一撃の威力とリーチはそこそこ。近接攻撃があまり息をしていないEFTで、これがまともに使える日が来るなんて誰が思うだろうか。俺も思っただけじゃなかった。

血の代わりに、ガラスのようなエフェクトが飛び散る。フレンジーボアの頭上のHPバーが削れるが、まだ殺すには至らなかったらしい。

「俺にEFTをやらせやがれ、ボリスううう！」

VR版EFT開発主任の名を叫びつつ、AK-74N（これも闇落ち特典）を構える。

照準器もグリップもない。弾も対人戦には最低限と言われるBP弾。それでも、この怒りを収めてくれるには十分だ。

突進してくる猪に狙いを合わせ、トリガーを引く。トリガーを引いている限り、弾のある限りAKは5.45mmの弾丸を吐き出し、フレンジーボアに無数の穴を穿つ。

その反動で銃が暴れ回る。目の前のフレンジーボアも真つ青な暴れぶりで30発の弾を撃ち尽くし、ようやく射撃は止まった。

「ペレザリヤドウド！」

援護してくれる味方はいない。ヤケクソで叫びながら弾倉を弾き飛ばして再装填に移るが、それより早く別のフレンジーボアが突進を仕掛けて来た。

回避は間に合わない。両手が塞がっているせいで、咄嗟に斧を抜くこともできない。

これはやられた。

覚悟を決め、装備ロスの悲しみを待ち構える。EFTは死んだら装備を全ロスしてしまう。

闇落ち特典は後半でないと手に入らないグレードの装備もあるため、無くすのは心にくる。特に、今着てるプレートキャリアとか。

「後ろに飛べ！」

そんな男の声に、悲痛な覚悟は吹き飛んだ。

咄嗟にバックステップして、悪あがき程度にフレンジーボアとの距離を取ると、横合いから突っ込んできた男が一撃でフレンジーボアを斬り殺したのだ。

その間にチャージングハンドルを引く。カチャ、という金属音が射撃準備完了を伝えてくれた。

「おい、後ろだ！」

今度は巨大な蜂、ピリツクワスプが男へ襲いかかる。それに対してフルオート射撃で弾幕を浴びせると、薄い羽がたちまち穴だらけになっていく。

飛行能力を失ったピリツクワスプは地に落ちた。

考えている暇はない。跳ね上がるように駆け出し、その頭をトマホークで叩き割ってトドメを刺す。ぐちゃりと虫を潰したような、嫌な感触がした。

「借りは返せたか？」

「そうみたいだな。そっちは大丈夫か？」

「タルコフやろうとしたら別ゲーに放り込まれて、大丈夫に見えるか？」

落としたマガジンを拾いながら答えると、男は苦笑いを浮かべていた。彼も、俺と同じ立場になったら大丈夫とは言えないらしい。

「おいキリト！ 1人で行かないでくれよ！」

「すごい音だったけど、大丈夫!？」

銃を構えようとして、すぐに下ろした。走って来た男女2人組は、どうやら助けてくれた彼の仲間らしい。

……美男美女揃いかこの野郎。どうしてタルコフのキャラメイクは、厳ついかわむさいおっさんしかないんだ？

「ああ、大丈夫だったけど、ゲーム的には大丈夫じゃなさそうなんだ」
「言ってるぜ。SAO体験版が特典についてたらしい」

「是非製品版も買ってくれよ」

「抽選に受かればな」

ははは、と豪快に男と笑う。仲間の方が置いてけぼりになっている

が、仕方なからう。

「俺はレイジ。EFTプレイヤーだ、見ての通りの」

BEARの文字とロゴが刺繍された黒の野球帽にアーミーグリーン
の半袖シャツとズボン、胴体は緑を基調とした迷彩柄のM1プレー
トキャリア。

どう見てもFPSキャラクターの出立ちで、間違ってもファンタ
ジーなRPGに出てくるキャラクターの格好ではない。お陰様で、好
機の目に晒されることとなった。特に彼らの。

「キリトだ。よろしく」

黒髪黒目に青い服。RPGの初期装備といった出立ちのキリトは
すらつと背が高く、少女漫画にでも出て来そうなキリツと整った顔を
している。

厳ついロシア人顔の俺は、その顔に1発弾丸をぶち込むべきかと迷
いつつ握手を交わす。

「俺はクライン！ あんたを見てたら、俺もタルコフ買えばよかつ
たって迷うじゃねえか！」

長めの赤髪とバンダナの男と握手を交わす。

なんだかクラインが気の良い兄ちゃんのように見えた。見た目は
チャラいような雰囲気だが。

「じゃあタルコフ買って、一緒に戦おうぜ」

「SAOとナーヴギアで財布がすっからかんなんだよ。ボーナスまで
待っててくれ」

「世知辛いもう」

そして最後の少女だが、どうやら引いてしまっているらしい。

セミロングの黒髪に緑の瞳で、可愛らしい見た目の少女が厳ついP
MCを前にすれば、確かに警戒するだろう。

「レイジだ。短い間だろうけど、よろしくな」

「コハルです。その……別ゲームの人なんですよね？」

「その筈だ。俺がタルコフと間違ってSAO買ってなければな」

「じゃあ、その装備はチートで手に入れたんですか？」

「はは、一本取られたな」

思わず笑ってしまう。そして、コハルと握手した手を2度見してしまった。VRとは言え、女の子と握手するなど滅多にない経験なのだ。

ネカマの危険性はあるが、見た目は美少女。この綺麗な思い出だけあればよからう。ご飯3杯はいける。

「にしてもよお、あっちもこっちもEFTの傭兵だらけだけぜ？ SA Oは剣の世界だって聞いてたが、いつから紛争地帯になったんだ？」
「そいつは俺が聞きたいね。紛争地帯タルコフ中に投入されるはずが、いつから異世界の冒険になったんだ？」

そりやそうか、とクラインは笑う。お互いわからないことだらけで、キリトも何やら不思議そうにフレンジーボアとピリックワスプの死体を眺めている。

「レイジ、EFTは倒した敵の死体って残るのか？」

「ああ。戦利品はその死体を漁って入手するし、死体があれば戦闘があった証拠だから警戒もする。それがどうした……」

そこまで言っただけ違和感を覚えた。PC版からEFTをプレイしているせいで慣れてしまっているが、RPGからすればおかしな事態だ。

大概のRPGは倒した敵はすぐに消えて、戦利品だけドロップする。復活待ちの仲間ならともかく、倒したモンスターがその場に残ることなんてあるだろうか？

「俺が倒したフレンジーボアからアイテムはドロップしなかった。普通なら、倒したと同時にラストアタックした人にドロップアイテムと経験値が入るはずなんだ。少なくともベータではな」

「まさかな」

試しにフレンジーボアに近寄り、死体に触れてみる。するとたちまちウィンドウが開き、自分の装備欄と並んで死体の装備欄が開いた。しばらくのサーチ時間の後、欄にアイテムが表示されていく。どうやら、ドロップのシステムが変わったらしい。

「キリト、ビンゴだ。倒した死体から漁らないとダメらしい。タルコフのシステムだぞこれ」

このフレンジーボアを倒したのはキリトだ。アイテムを奪うのは忍びないと、ウィンドウを閉じてキリトへ譲る。戦利品は倒した奴のものだ。

「おかしいな。最初はオープニングイベントの一環でキャラだけコンバートしてるものだと思っただけけど……そうならシステムまで合わせるか?」

「それに、ステータス画面に水と……雷かな? アイコンが増えてて、何かや残量を表してるみたいなんだけど」

コハルの疑問に思い当たる節がある。ピリツクワスの死体を漁るのをやめてコハルへ駆け寄る。丁度ステータス画面を開いているところだし、説明もしやすそうだ。

「……水分とエネルギー残量? SAOも餓死とかあるのか?」

同じくステータス画面を開き、コハルへ見せる。キリトとクラインも他ゲームの画面に興味があるのか、すぐに寄って来た。

「あ、これだね。同じマークがあるけど、何を表してるの?」

「雷はエネルギー、水は水分だ。適度に水飲んだり飯食わないと、デバフ食らったりスリップダメージを受けるようになる」

「いや、ベータでは空腹は感じるけど、直接ダメージになるようなことはなかった。仕様変更のようだな」

「おいおい、RPGで餓死なんざ聞いたことないぜ……あ、餓死で思い出した!」

突然クラインが大声を上げるものだから、コハルが驚いて飛びのいた。

俺も驚き、思わず銃を構えようとしたが、距離が近すぎたせいで構える事はできなかった。拳銃を持っておくべきだったか。

「なんだよ、昼飯抜いたのか?」

「違う違う、夕方にドーバーイーツ頼んだんだよ! ピッツアが冷めちまうだろ! 冷めたピッツアなんて、粘らない納豆以下だぜ……」

「ああ、ドーバー海峡の先にもお届けの? ログアウトして食って来なよ。オープニングイベントまでに戻れりゃ万々歳だろ?」

そりゃ大問題だと、笑いが溢れる。冷めたピザは確かにまずいし、

受け取れなければキャンセル料を取られてしまう。

SAOを買って懐の寒いクライアントには大事だろう。ゲームのために飯を犠牲にするのは廃人がやる事だ。

「そうだな……だけどよ、ログアウトボタンがねえんだ……」

「フィールドだからじゃないか？ 街に戻ったら離脱可能に仕様変更してるとか」

「確かに、その方法は試してなかったな」

キリトたちはログアウトボタン消滅に気付いていたらしい。俺はそれを全く知らなかった。

そもそも、EFTでログアウトの操作ができるのは出撃中レイドでない時に限る。だから、フィールドでログアウトボタンを見るなんて発想がなかったのだ。

「じゃあ、はじまりの街に戻らない？ 私の水分残量、結構減って来ちゃった」

「そうしようか。レイジもついて来るか？」

「是非ともお供させてもらうよ」

キリトの申し出をありがたく受け取っておく。短い縁になるかもしれないが、もしどちらかのゲームで出会えたらまたご一緒したいものだ。

そう思いつつ、背負っていた“Berikut”バックパックからボトルを取り出し、コハルへ差し出す。

「あと、コハルはこれ飲んで。全部やるよ」

「ありがとう。お水？」

「そう。初期配布アイテムだから遠慮はいらん。グビツと一杯」
「お酒じゃないんだから」

もう、とコハルは笑って水を飲み干す。これで街まで保つだろう。脱水はスリップダメージを受ける上に、視野狭窄や消費スタミナ倍増と、嫌な事づくめだ。

そんな考えを杞憂にってしまったのは、鳴り響く鐘の音と体を包み込む謎の青い光だった。

それが、終わりを告げる鐘だなんて想像出来ただろうか？ 朝起き

て「俺は今日死ぬんだ」と思うようなものだっただろう。

1層―2 アイנקラッド封鎖

スタングレネードを喰らったように目眩がする。光に包まれた視界はぼんやりしていて、耳鳴りで声も聞こえない。

何が起きた。それさえもわからず、ただ突っ立っていた。

誰かが体を揺さぶっている。視界がぐらついて、それを誰がやっているのか分からない。代わりに、少しずつ聴覚が戻って来た。

「レイジー！ レイジー！」

コハルの声だ。相変わらず耳に優しい。目覚まし時計のアラームをコハルの声にしておきたいな。

「ねえ、起きてって！ 立ったまま寝たらダメだよ！」

流石にガクガク揺すられ、首が取れそう。目眩の原因は、コハルが揺すっているせいじゃなからうか？

「起きてる、だから揺するのをやめてくれ。酔っちまう」

「ごめんごめん。でも、まだEFTに戻ってないんだね」

「今度はコハルたちがタルコフに来たりしてな」

そうになったら地獄だろう。みんな銃を持っているPVP主体のゲームに剣士を突っ込んだら待つのは虐殺だ。

ナイフ一本で走り回り、アイテムを拾い集めるナイフアーもいるが、大概NPCに殺されている。というか、ナイフアーはめっちゃ追われる仕様なんだよな。

「タルコフじゃないけど、転移門広場には来たね」

「やつぱりバグってて、運営が説明するんじゃないか？」

「ピツアの補償、してもらえるといいな」

クラインの言うことには一理ある。ログアウト出来ない上に、別ゲームのプレイヤーがごちゃ混ぜになっているのだ。デバツガーは何しているんだと、責任問題にもなりかねない。

それにしても、全プレイヤーが集められているのではないかと思うほどの密度だ。何かしらのイベントか、説明と思っても仕方なからう。じやなきや訳がわからない。

「オープニングイベント全員参加してもらうために、わざとログアウト

ト不可にしたりして」

「なら、始まるのは校長先生の長話か？」

「せんせー、キリトくんが倒れました〜」

キリトとジョークを飛ばしていたら、少し緊張が緩んだ。やはりユーモアというのはどこの世界でも大切なのだろう。

「ちよ、押すなって！ 密です、密です！」

隣でプレイヤーの波に押され、悲鳴をあげる見知らぬBEAR野郎もいるんだ。逆に落ち着くと言うものだ。

「落ち着け同志。ゲームで密でも、リアルじゃキロ単位の距離を取ってるぞ」

「そうだな同志よ。だがまずはアルコール消毒というこう」

そう言って彼はバックパックからウオツカ(BEARの初期配布アイテム)を取り出す。まさか、ここで飲むつもりなのか？

「イベント前だぞ。後で草原の景色を楽しみながら飲めよ」

「タルコフの廃墟に戻すって話かもしれないんだ。今を置いて他にあるか？」

「俺しーらね」

ウオツカは鎮痛効果やストレス耐性上昇のバフもあるが、水分量減少に加え255秒後に手の震えのデバフが発生する代物だ。他にも、スキル関連のデバフが多い。

そんな馬鹿げたことする奴があるかと思っていたら、彼の隣にいたUSECオペレーターがウイスキー(やはりUSECの初期配布)を取り出して、呑気に乾杯し始めた。

こいつら、ゲームじゃなくて頭がバグってるんじゃないのか？

そんな馬鹿どもを無視していると、遙か100m上空に真紅の市松模様が目撃された。

望遠鏡代わりに持っていたライフルスコープで見ると、『Warning』やら『System Announcement』など、不穏な単語が書いてある。

「なんかアナウンスかバグ警報か？ 運営め、やっとバグを認知したらしいな」

「おめえの隣でバグってる奴らは平気か？」

クラインが見ている先では、さっきのPMC2名が肩を組んで歌っていた。高々と酒瓶を掲げて、完全に酔っ払いになっている。

「無視してくれ。タルコフの恥だ」

「タルコフってヤベーんだな」

流星に市松模様の隙間からドロリと血のような液体が滴り落ちて来て、空中で巨大なローブ……死神を思わせる風貌の人型を作り出すと、彼らは酒瓶を落とし、俺や他のPMCと同じように銃を構えた。銃を構えても、まだトリガーは引かない。あれがモンスターなのか、ホラー演出なのかまだわかっていないのだ。

「プレイヤー諸君。私の世界へようこそ」

まるで神のような一言に全員が傾聴した。銃口を力なく下ろし、次の言葉を待つ。神の使徒にでもなった気分だ。敬虔な信者のように、その神託を待つ。

それにしても、随分ホラーな演出をするものだ。コハルが怯えていてるのではないか。

「私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールできる唯一の間だ」

そう言えば、SAOもナーヴギアも彼が作ったものか。唯一、と言うことはEFTの運営サイドはどうなったのだろう。

「待ってましたー！ ボリスを出せー！」

隣のBEAR野郎がまた騒いでいるが、それはどうでもいい。

「茅場さんってSAOの開発者だよな？ やっぱりこれって正式オーブンの挨拶？」

「いや……茅場晶彦は今までメディアへの露出を避けて来た。ゲームマスターの役割だって、一度もしたことがないんだ。なぜこんな真似を……!?!」

「それに、挨拶にしてはEFTのスタッフもいないしな。ロシア語で喋られてもどの道わからないが」

謎は深まるばかりで、キリトは茅場と思われるローブを凝視し、コハルは不安そうに、祈るように手を組んでただ次の言葉を待つ。

ロクな言葉が紡がれないのだろうけど。

「また、Escape from Arkovのプレイヤー諸君も、この事態に困惑していると思われる。君たち1万人はソードアート・オンラインのゲストとして、私が招いた」

ゲストだと？ 一体どうやったのだろう。キャラクターだけコンバートするならともかく、武器や装備はそのまま、なんならSAOにも一部EFTのシステムが導入されている。

ただのイベントゲストとは思えない。まるで、2つのゲームを融合させたようだ。

「また、既にメインメニューからログアウトボタンが消失していることに気付いていると思う。しかし、これはゲームの不具合ではない。これはソードアート・オンライン本来の仕様である」

その言葉は、俺たちに最悪をプレゼントしてくれた。

ログアウトするための唯一の方法がなくなり、体は動かせない。意識だけ、この電脳世界を漂うことになったのだ。

キリトやクライン、コハルが何かを呟いているが聞こえない。隣の酔っ払いが「やってやるぜ!」「舐めんなコラ!」と騒いでいるせいだ。酒瓶で殴っておくべきか？

「諸君は今後、この城の頂を極めるまでゲームから自発的にログアウトすることは出来ない。外部の人間によるナーヴギアの停止、あるいは解除もあり得ない。それが試みられた場合」

茅場は一呼吸置く。まさかな、と可能性に過ぎない考えが脳裏にチラつく。

意識が戻らない、何かしらの後遺症が残る。そう言った可能性が幾つも浮かんでは消える。そして最後に一つだけ、最悪の可能性が残った。

「ナーヴギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが諸君の脳を破壊し、生命活動を停止させる」

最悪の可能性に行きついてしまった。思考が止まり、無数の選択肢が浮かび上がっては、泡沫のように消えていく。

でも、不思議と嫌な気分ではない。現実のしがらみを捨てて、ここ

で思いのままに生きられるのではないだろうか？ パンドラの箱を開けたような気分だ。

「レイジ……大丈夫？」

コハルに肩を叩かれ、思考が中断する。きつと、死ぬのが怖くて呆然としたと思われただろう。

不安そうに自分の胸元で拳を握りしめている、そんな彼女の方が随分怖かろうに。デスゲームに放り込むには惜しいほど、優しい少女なのだから。

「大丈夫。少し考え事さ」

おかげで茅場の話を少し聞き漏らしてしまったが、まあそこまで重要な話でもあるまい。

「しかし、十分に留意してもらいたい。諸君にとつてソードアート・オンラインはもう一つの現実といふべき存在だ。ヒットポイントが0になった瞬間、諸君のアバターは永久に消滅し、同時に諸君らの脳はナーヴギアによって破壊される」

ずいぶん現実感が増したものだ。死んで覚える、死んだ経験を次に活かせるからこそ、ゲームはゲームたりえた。

でもこの瞬間、死んで学ぶことは出来なくなった。生きて知識と経験を蓄積し、死んだら全てをロスする。現実と何ら変わらないではないか。

「尚、EFTプレイヤーについては、頭部および胸部のヒットポイントが0になっても即死はしない。あくまで、全体のヒットポイントが0になった場合にのみ死亡する」

元々は頭部、または胸部の耐久値を全損したら即死だったのに、随分と温情をくれたものだ。それでも、厳しい戦いを強いられるのは変わらないのだろうか。

俺の頭は冷めている。現実とて、何気ない日常の中で突然に死ぬ危険はいくらでもある。意識しているかどうかの違いだ。

ダラダラ生きて、重圧の中で苦しむくらいならば、一瞬だけ輝いて消える生き方を望もう。

最期の瞬間まで、俺は俺でありたい。現実で生き方を選べなかった

分、この世界では存分に選んでやろう。

「レイジ……」

でも、みんながそうではない。俺がほくそ笑んでいる横で、コハルは震えていた。レベルは僅かに1で、体力量はEFTプレイヤーの自分より僅かに少ない。

平和な日本で生きて来た人間が、突然死の危険に晒されたのだから、これが正常なのだろう。

「そう簡単に死なないさ。俺が援護してやる」

コハルの手を握り、そつと語りかける。

俺は自然と笑っていたと思う。現実では必要とされない自分だが、ここでは必要としてくれる人がいるのだろうか。

そう思うと、やはりこの世界にきてよかった。周りの人たちとは真逆な、破滅的な思考が俺の背中を押す。

戦おう、思いのままに。死神が俺を捕まえるまで。

「このゲームから解放される条件はたった一つ。アインクラッド最上部、第100層まで辿り着き、最終ボスを倒してゲームクリアすれば良い」

周りのプレイヤー達から不満の声が上がる。ベータじやろくに上がれなかった、出来るわけないだろう。そんな無数の声が木霊する。

失う覚悟もなく、与えられるのを待つばかりなら、いつまでも囚われの身のままだ。

生き残りたいければ戦え。迷い、立ち止まれば死ぬ。ベータ版のEFTで味わって来た、無数の擬似的な死を思い出せ。

銃弾に身を切り裂かれ、爆風に吹き飛ばされ、霞む視界の中で体は言うことを聞かず、出血につれて視界が暗く、意識が途絶えていくあの感覚を。

何度も、何度も死んで学んできた。生き残るためには攻撃的にならねばならないと。それは、この鋼鉄の城を相手にしても変わらないはずだ。

「それでは最後に、諸君にとってこの世界が唯一の現実である証拠を見せよう」

手元に手鏡が現れ、思わずそれを覗き込む。キャラメイクで致し方なく選んだ厳しい顔が浮かび上がるのだろう。
記憶に残るその姿を見ることは、もうなかった。

1層―3 旅路の始まり

またどこかに転移させられたのか。そう思ったが、転移門広場から動いてはいなかった。

ところで、鏡には何の役割があるのか。そう思って鏡を覗き……思わず落としてしまった。

「……俺の顔？」

大人になりそうでなりきれない、そんな微妙な年頃の顔。歳を食った厳つい顔ではない。

嫌と言うほど見て来た。自分の顔だ。

「えっ……みんな、見た目が……」

コハルが何やら驚いているので、視線の先に目を向けると、キリトとクラインであろう人物がいた。

クラインは精悍な顔つきに顎髭を生やした野武士になっている。まだ面影はあるし、気のいい兄ちゃんは崩れていない。

問題はキリトだ。クールなイケメンはどこかへ消え去り、幼さを残す中性的な顔立ちの少年になっていた。大人に憧れたのだろうか。背も低くなっている。

「クラインとキリトだよな？」

「お前レイジか!? あの顔からそれは想像つかねえ！」

「タルコフのキャラメイクに文句言え！」

時に、コハルはどうなのだろうか。ネカマの可能性も捨てきれず、目を向けるのが怖い。

だが、現実を直視する時が来たのだ。勇気を出そう。

そう思って首を動かすが、コハルは全く変わっていないかった。そのまんまの美少女がオロオロしながら立っている。

「コハル、まんまだな」

「VR試着用のアバターをそのままコンバートしたの。ほら、自分の顔じゃなきやに合う服を選べないでしょ？ それで、ゲームを始める時に出て来たメッセージを適当にOKしたらこの姿で……」

「今となったら、手間が省けたみたいなものか」

タルコフのキャラメイクで身長を変えられなかったから、これはありがたい。

目線が普段の生活と違うと、中々動きに慣れないのだ。これなら思うように動けるだろう。

隣の酔っ払い2名も、驚きながら自分の体をあちこち触っている。楽しそうで何よりだ。

「レイジ、その姿の方がいいかも」

「ゴツイロシア人キャラよりはいいか？」

「そうだけど、何だかお兄さんって感じがするよ」

「おだてても缶詰かチョコバーしか出ねーぞ？」

スキャンがどうだとキリトが考察しているが、それはどうでもいい。今この場に囚われて、自分自身の姿でここにいる。その事実で十分だ。謎解きゲームじゃあるまいし。

「以上で、ソードアート・オンライン正式サービスのチュートリアルを終了する。プレイヤー諸君の健闘を祈る」

死神は消え、赤く染まった空は青空へ戻る。

一瞬の静寂の後に、悲鳴、怒号、罵声。ありとあらゆる声が転移門広場に木霊した。隣にいるはずのコハルの声が、かなり遠くに聞こえるほどに。

「ねえ、レイジ……これ、ドツキリじゃないのかな。ほら、よくバラエティ番組であるやつ！ ね、そうだよね……」

無理矢理作った笑顔に、継るような目が心を抉る。覚悟して、ここで戦うと決めただけなのに。それが、この瞳を見ただけで揺らいでしまう。

何か答えなければ。それなのに、俺の頭には何も言葉が浮かばない。

彼女の流す涙を見ているのが、あまりにも辛すぎたから。

その無言は、コハルに現実を突き付けるには十分すぎた。

コハルはその場に崩れ落ち、何とか抱き止めるのが間に合った。早くこの場から離れなければ。

「クライン、どっか休めるところを。雰囲気は飲まれるぞ」

「あいよ。案内してやるから運んでくれ」

コハルを抱き抱え、クラインとキリトの先導に従って広場を離れる。

雰囲気にも飲まれて絶望したらそれまでだ。一度挫けて仕舞えば、再び立ち直って戦うのは難しい。

「レイジ、クライン。聞いてくれ」

移動の最中、キリトは神妙な顔で口を開く。何かあったかと耳だけ傾けつつ、目は意識を手放したコハルに向けていた。

「何だ」

「俺はこの街を出る。生き残るにはレベルを上げることが必要不可欠だが、みんなが気付くのは時間の問題だろう。すぐにこの辺のリソースは足りなくなる」

モンスターも狩り過ぎればいなくなる。それなのに、ここはプレイヤーが密集しすぎていた。

だからこそ、キリトは誰も来ない場所でいち早くレベリングをして、足元を固めるつもりなのだろう。

「そうか。で、俺らにも来ないかと?」

「ああ。少人数ならば俺も助けられるから」

「もう出るのか?」

「そうしないと間に合わない」

どうする? とクラインへ目を向ける。正直な話、俺にはあまり関係がない話だ。

レベルが上がって強くなるのはSAOプレイヤーに限った話で、俺たちPMCは違う。

HPは増えないし、スキルは特定の行動をしないと成長しない。精々、トレーダーから購入できるアイテムが増えるくらいだろう。

「悪い、俺はダチが待つてるんだ。前のゲームからの仲間で、まだ広場にいるはずなんだ。放って置けねえよ」

クラインはどこか寂しげで、それを笑顔で無理矢理隠していた。

キリトと共に行きたい気持ちもあるのだろうが、かつての仲間を見捨てられない。そんな優しさが滲み出ていた。

キリトはクラインを置いていくことを躊躇っている様子だ。かと言って、クラインの友人全員を守れるわけもない。

苦渋の決断、というやつか。

「俺もコハルを放って置けねえ。後から追いつくから、先に行つてくれ」

コハル出会ったばかりではあるが、放り出すわけにはいかない。

あの縫るような瞳が脳裏に浮かぶ。誰かが支えにならなければ、立ち上がるのすら難しいだろう。

だから、せめてとばかりにスマホ型の端末を取り出し、キリトとクラインへフレンド申請を送る。

すぐに届いたのか、2人は承認してくれた。その通知が画面に浮かび、嬉しく思う。これは訣別ではない。少しばかりの別れだ。またいつの日にか会える。

「何かの縁だ。生きてまた会おうぜ。お互いの知識が役に立つかも、だろ?」

「なんかあつたらオレを呼べよ! すぐ駆けつけてやるからよ!」

クラインに肩を叩かれ、嬉しく思う。自分も不安だろうに、安心させようとしてくれたのかもしれない。

「レイジ、クライン……すまない」
「行つちまえ。お互い出来ることをするんだ。胸張って行きやがれ!」

饑別に水と食料を手渡し、今度は俺がキリトの肩を叩く。キリトも俺たちを置いて、1人旅立つのを心苦しく思っているのだろう。

ベータでの知識を持つていて、少し有利に立ち回れる。それでも、その両手の届く範囲はまだ広くない。

助けたいと思うなら、強くなれ。願わくば、プレイヤーたちを導く存在にまで。

キリトはもう振り返らない。小さくなっていく背中を、俺とクラインは見守っていた。不思議と、また会える気がする。

「……走れ、走れ、走れ、走れ!」

俺も、俺に出来ることをしなければ。

※

「あれ……ここ、アインクラッド……？」

「よう、起きたか眠り姫」

ようやく目を覚ましたコハルはあちこちを見回し、状況を理解しようとする。夢でなかったと理解して、落胆した様子だ。

「やつぱり、夢じゃないんだね」

コハルはまた泣き出してしまいそうだった。少しでも安心させようと頭を撫でると、心地良さそうに目を細める。

「そういうこった。ほら、食べるか？」

コハルが枕にしていたバックパックに手を入れ、チョコバーを取り出して手渡す。

街などの”圏内”ではエネルギーも水分も減らないようだが、落ちて着くために甘いものを食べるのはまた別問題だ。食事には娯楽の意味もある。

「ありがとう……キリトとクラインは？」

「キリトは山にレベリング、クラインは川で仲間探しを」

「桃太郎じゃないんだから」

「鬼退治的なことはするだろ？」

クスリとでも、コハルは笑ってくれた。笑えているならばまだ大丈夫。笑えなくなっていたらどうしようかと思っただけのものだ。

「このチョコバー、かなり甘くない？」

「激甘だぞ。割と好きだけど」

「レイジ、見た目によらず甘党なの？」

「失礼な。人生辛口なんだから、食い物くらい甘口でいいだろ」

そう言いながらコーラの缶と緑茶の缶を差し出すと、コハルは迷わずコーラを選んだ。コハルも甘いのが好きじゃないか。

「それに、ここなら食べても太らないしね」

「それな。稼いで甘いもの食い倒そう」

「目標がそんなのでいいの？」

コハルはまた笑う。俺はこのアインクラッドを楽しむつもりのスダンスなのだ。甘味の食べ歩きだつて最高の目標じゃないか。

そのためには、戦って稼がねばならないのだが。

「開き直っただけさ。俺たちがメソメソしてるのを見て、茅場の野郎がほくそ笑んでると思うとムカつくし」

「レイジは強いね」

「強いんじゃないくて、勢い任せって言うんだよ」

お茶を一气飲みして、もう一度街を見つめる。座り込んでしまう人、泣いてる人、見ていてあまり精神衛生上良くなさそうだ。

こう言う時こそ、何かに熱中して忘れるべきなのだろう。辛いことも悲しいことも、意識の外に追いやるように。

「コハル、俺たちもレベル上げに行くか」

俺たち、その言葉にコハルは驚いたような表情を浮かべる。なんだ、置いてけぼりにするとも思っていたのか？

「いいの？ 私、ゲーム下手なんだよ？ ベータでも全然戦えなくて……」

「構わん。接近されるまでは俺が削るから、剣が届く位置に来たらコハルが仕留めてくれ。俺にはソードスキルなんてないからな」

「……わかった。よろしくね」

「決まり、だな」

コハルにフレンド申請とパーティ招待を送ると、笑顔で承諾してくれた。

全くの別ゲームから来て、出会ったばかりの俺たち。それなのに、こうして信用してくれるのが嬉しくてたまらない。

ソロプレイもいいが、どうやら俺はチームプレイの方が好きなようだ。

1層―4 草原のSCAV

原初の草原に出ると、既に何人かプレイヤーが戦っていた。レベル上げの重要性を知っている者たちなのだろう。

PMCをあんまり見かけないのは、レベル上げの旨みがないからなのだろうか。その他の理由かは想像するしかない。

「じゃあ始めようか。打ち合わせ通りにな」

「うん、頑張るね」

剣と銃、全く違う武器種での連携なんて聞いたことがない。でも、生き残るにはやるしかない。

まずは、あのピリックワスパに犠牲となってもらおうか。

「行くぞ」

しゃがみ、安定した姿勢で射撃を開始する。

弾薬はトレーダーから購入した5・45×39mmPRS弾。与ダメージ量は60程度で、貫通力は皆無。序盤でしか使わない弾薬だ。

今買えるのがこれだけ故に、嫌でも使わなければならない。それでも、ピリックワスパの薄い羽根をボロ切れにするには事足りた。

「リロード、スイッチしてくれ！」

「うん、行くよ！」

弾切れと同時にコハルが飛び出す。ピリックワスパは飛行能力を失い、地面でもがいていた。コハルの練習台にはうって付けだろう。

レイピアが淡い光を放ち、鋭い一撃がピリックワスパの胴体を切り裂く。流星のようなその一撃に、手を止めて思わず見惚れていた。

その姿はあまりにも美しい。戦乙女、そんな言葉が思い浮かぶくらいには。

「仕留めたよ！」

「すげえよ、強いな！」

はにかむコハルの姿に、上の空だった意識がようやく戻ってくる。何を見惚れているんだ。やる事があるだろうに。

「ううん、レイジのおかげだよ。動き回るピリックワスパに当てるの

結構大変だもん。それに、すごく戦いやすいよ！」

そういえば、周りのSAOプレイヤーは飛んでいるピリックワस्प相手に攻撃を外している。

何だか高笑いしながら乱射して、次々ピリックワस्पを撃ち落とすPMCがいるが、それは無視しよう。あの時の酔っ払いBEAR野郎じゃないか。

「じゃ、フレンジーボアはコハルに頼む。この雑魚弾で倒せる気がしない」

「そ、そんな！」

「冗談だよ。脚潰して走れないようにしてやるさ」

視界の先ではフレンジーボアが突進の構えを見せていた。「今夜の晩飯だな」と指差すと、コハルは早速構えを取った。

「来やがれ○アンゴ！ 肉剥ぎ取ってこんがり肉にしてやる！」

「レイジ、それ何か違うくない!?!」

コハルのツツコミは銃声にかき消された。肉になればそれでいいのさ。

フレンジーボアの脚に何発か命中した。すると、フレンジーボアはバランスを崩して派手に転倒し、その場でもがく。これじゃあ転がり落ちた肉団子だな。

「やつちまえコハル！」

「うん！」

コハルが戦う間、俺はまたしてもリロードしていた。

カスタムしていないAKはともかく反動が強いせいで、撃つたうちの半分くらいは外れてしまう。それでも猛スピードで突っ込んでくる相手には弾幕を張るしかない。撃たなきゃ当たらないでしょ。

「倒したよ！」

「周辺クリア！ 今のうちに漁ってしまおう」

手分けして、死体から戦利品を回収する。何かの素材になりそうなものがいくつか手に入るが、流星に虫からは食料となるものは出ないらしい。

「あ、お肉出たよ！」

「やったな！」

日没も近い。この辺りで切り上げて街へ帰ろう。アイテムを換金したら、焼肉どころかレストランでいい飯を食べるかもしれない。

「Шеми берцов！」

滑舌の悪いロシア語が聞こえた。ぞわりと背筋を寒気が伝い、俺は咄嗟に銃を構えて辺りを見回す。

最悪だ。EFTから諸々コンバートされてるなら、奴の存在にも気付くべきだった。遭遇しないから忘れていた！

「レイジ、どうしたの？ 何だか声も聞こえたし……誰か怒ってる？」
「気をつける、厄介な奴が近くにいます！」

「あ、後ろに誰か……」

振り向いたが、遅かった。肩のあたりが赤いオリンピックジャケットを着た禿頭の人は、プレイヤーではない。

しっかりと目線を向けると、頭の上にモンスターを表す赤いアイコンが表示され、名前が出てくる。

これで、タルコフの敵対NPC”SCAV”だ。

「伏せろコハル！」

銃声は同時だった。左足に不快な感覚が走り、視界の端に出血とダメージを表すアイコンが表示される。

左脚が赤。相当ダメージを受けたが持ち堪えた。

「この野郎！」

胸に1発当てた。それでもまだ倒れない。

次に、逃げるSCAVに弾幕を浴びせてようやく倒した。

「コハル、無事か!？」

「何とか……あれ、モンスターなの?！」

「タルコフの敵対NPCだ。クソ、気付いておくべきだったな……」

とりあえず脚を治療しなければ。重度出血のデバフをもらってしまい、スリップダメージで体力が減っていく。

しかし新手のSCAVはそれを許さない。しゃがんで止血帯を巻いている最中に現れ、銃口をこちらに向けてきた。

例え散弾の1発でも頭に当たれば、死なずとも何かしらのペナル

テイをもらってしまおう。

そんなシビアな体力システムを引き継いでこの世界を戦い抜けとは、無理なのではないかと思いがよぎってしまう。

回復をキャンセルして、武器を構えるのが早いかな？ それより、奴の弾が当たる方が早いだろうか。

銃声が響くが、ダメージは入らなかった。SCAVの腕が跳ね上がり、散弾は頭の上を飛び越していったのだ。

狙撃？ 一体どこからだ？

「伏せろ！」

「コハル！」

「わわ、レイジ?!」

男の声がした。その言葉の意味を理解するより先に、コハルへ覆い被さるようにして伏せる。

無意識に動けた自分へ驚いたが、コハルも相当驚いたようだ。でも、そんな場合ではない。

頭上を銃弾が飛び抜ける。SCAVが呻き声を上げて絶命すると、声の主は近くまで駆け寄ってきて、周辺を確認した。

「クリア！ 大丈夫か同志よ」

「助かったぜ酔っ払いさん。今夜のディナーは俺がご馳走しよう」

「はは、期待してるぜ？」

あの時の酔っ払いBEAR野郎が差し出す手を握り、俺は立ち上がる。今度は俺がコハルの手を取って立たせると、何だか赤面していた。

「まさかSCAVがいるとはな。油断したよ」

「競合の草原に湧いてて、PMCはみんなそっちをやりについてるんだ。ここまで流れてくるとはな」

なるほど、だから街に近いところでSCAVを見なかったのか。とはいえここまで来るということは、巡回ルートに入っているのかもしれない。

「あの、助けてくれてありがとうございました！」

ペコリ、とコハルが頭を下げると、酔っ払いさんは自分の胸を叩き、

笑ってみせた。

「いいってことよ。今や同じ目的の仲間、だろ？」

「熱いこと言ってるけど、チュートリアルの中で酒飲んでた件は語り継いでやる」

「あ、あの時の酔っ払い！」

「その呼び方はやめろや！俺はリョーハだ！」

リョーハ？ 覚えがあるどころの話ではない。俺は、こいつのことを知っている。

「死神リョーハか？」

「そらそうだが……命知らずのレイジ？」デアデビル

時が止まったように感じる。コハルは俺とリョーハの間でオロオロしており、どうすればいいかわからない様子だ。

少なくとも、悪いことは起こらない。そう知るのはすぐだ。

「おいおいおい、生きてたか相棒！」

「たった今死にかけて、お前に助けられたがな！」

2人で高笑いしながらハイタッチすると、コハルの理解能力はどうとう追いつかなくなったらしい。フリーズして、首を傾げていた。

「レイジ、酔っ払いさんといつの間に仲良くなってたの？」

「こいつはベータ時代の相棒でな。2人であちこち暴れ回ったんだ」

「おかげで俺は死神、突撃役のレイジはデアデビルとか呼ばれる羽目になったな。おい、お前のパーティに入れてくれ。あのUSEC野郎、兄弟で来ると置いてけぼりにしやがった」

どうする？ とコハルに目を向けてみると、うんと頷いてくれた。

「よろしくお願いします、死神さん」

「だから、呼ぶならリョーハで頼む。縁起悪すぎだろ」

「PKで付いた2つ名だし、確かに縁起わりーな」

積もる話はいくらでもあるし、コハルにも聞かせたいところだ。日没も近いし、さっさと街に帰って飯に行こう。

とりあえず、SCAVの装備を根こそぎ売ればダイナーの代金は賄えるだろう。

「リョーハ、さっさと装備漁って帰るぞ。暗くなってカルト出たら嫌

だ」

「ここにいたら最悪だけどな。ちやちやつと漁ってくるわ」

リヨーハは倒したSCAVに駆け寄り、一喜一憂しながらその雑煮を物色する。

倒した敵から装備を奪うのもEFTの楽しみだが、今は気楽に楽しむめなくなってしまったものだ。

「コハル、周りを見ていてくれ。俺も漁って来る」

「レアアイテム引き当ててきてね」

「そしたら、デザート追加だ」

コハルの応援を受けてSCAVの装備を物色するが、バツクパツクにはアップルジュースが1本入っていただけだった。クソが。

1層―5 隠れ家のパーティ

街に入ると同時にリザルト画面が現れた。キルリストや受けたダメージ等の一覧を読み飛ばし、灯りの灯る街に目を移す。

これがゲームだった頃なら、綺麗な街並みだと思ふ余裕があつたのだろう。今は緊張感の張り詰めたやばい街に見えてしまっていた。くるるるう……

「おい、何だ今の音」

リヨハはどこからの音だと見回すが、俺にはわかってしまった。キャップの上から装備しているGsshヘッドセットは飾りではない。周辺の音を増幅する機能を有しており、コハルから腹の鳴る音がしたのもしつかりキャッチしている。

「そんなことより店探しだ」

「そ、そうだね！ 美味しいお店がいいな！」

「初日だぞ、グルメレポートも網羅しきれてないさ」

誤魔化しているようだが、誤魔化せていないからな。若干赤面しているのも、何だか可愛らしいからいいが。

「残念なことに、どこも満員のようだな」

リヨハが溜息を吐く。視界の先のレストランは人でごった返していた。

S A Oプレイヤー1万人に合わせて、同じくらいのPMCオペレーターが増えたのだ。キリトの言う通り、リソースが足りていない。

それからしばらく、マップのアイコンを頼りにレストランを探すも、どこも30分とか1時間待ちの状態だ。

俺たちはともかく、コハルの腹が耐えられない。既に捨て犬か捨て猫のような、デスゲーム開始とは違った継るような目で訴えてきている。

「こうなりや仕方ねえ。テイクアウトして、俺のハイドアウト隠れ家でパーティするぞ」

「ハイドアウト？」

何それ？ とコハルは首を傾げる。EFTの機能だからコハルが

知らないのも当然だ。

「PMCに割り当てられてる隠れ家だ。廃墟だけど、拡張すればマシンになる。ホームみたいなもんだ」

「最初から持ち家かあ……いいなあ」

果たして、アレをホームと言っているのだろうか。俺はリョーハと顔を見合わせて苦笑いを浮かべる。きっと、コハルが見たらがっかりするだろう。

「美味しい店をお探しかナ？」

「うおっ!？」

「お前どっから!？」

「きゃっ!？」

急に生えてきた黄色の塊に、三者三様の悲鳴が上がる。コハルなんてお化けでも見たような反応で、犯人である少女はどこか不服そうな表情を浮かべていた。

いや、お前が驚かすのが悪いんだからな？

「ずっと探してたのサ。キー坊の情報と違うから、探すのに手間取ったヨ」

「キー坊？もしかしてキリトか？」

「そうサ。街に残した知り合いがいるから、面倒見てやってくれってナ」

あいつ、俺たちに気を回してくれるとは優しいじゃないか。今度会ったら奢ってやろう。

「なら、飯でも食いながら話を聞かせてくれ。どこも混んでるから、テイクアウトの店で」

「情報屋にお任せダ」

とりあえず、今夜の飯は確保出来そうだ。缶詰や携行食レーションを食わずに済むことに感謝しなければ。

※

「それじゃあ、我らの生存を祝って乾杯!」

乾杯! と思いきいのドリンクを掲げる。急に生えてきた彼女はアルゴといい、ベータ時代から情報屋をしているらしい。

おかげでテイクアウトの美味しい店をいくつも教え貰うことが出来、ピザにグラタン、ポテチやスイーツ等々が目の前に並んでいる。アルゴに感謝しなければ。

「それにしても、暗いね」

コハルが隠れ家を見回して呟くが、我慢してほしい。

EFTの隠れ家はどこかの地下室を改造したものらしく、最初は本当に廃墟の地下室でしかない。

レベルを上げ、金やアイテムを集めて拡張していくと、アイテムのクラフトや自然回復が早まるなどのボーナスがある訳だが、最初は本当に貧相なものだ。

「発電機と照明が作れなくてな。明日からアイテム集めか」

拡張すれば電球がつけられるのだが、いかんせん材料が足りない。蠟燭で明かりを灯すしかなく、ネズミにでもなったような気分だ。

食堂ユニットは作ったからコンロと冷蔵庫くらいならある。マシといえばマシか。

「でも、宿代浮いて助かるよ。こうしてみると、やっぱりSAOとEFTって違うんだね」

「そりゃ、ジャンルからして違うからな。一応、タルコフもMMORPG要素を取り込んだFPSっていう触れ込みだが」

「それならレイジ、オイラにタルコフのことを教えてヨ」

「私も知りたいな。レイジやリョーハがどんな世界で戦ってきたのか、すっごく気になるよ!」

アルゴは情報屋だから、全く知られてないEFTの情報に価値を見出したのだろう。売り捌くか、他の誰かの役に立てるのかはアルゴ次第だが。

コハルは間違いなく興味本位だろうし、ツマミに話してやろうか。

アルゴがいない時にでも、とっておきの話をしてやろうか。

「じゃ、システムとかその辺かな?」

「その後に、俺とレイジの思い出話だな」

「怨念マリモ事件もか?」

「やめろ、怖くて眠れなくなる」

タルコーラで喉を潤しつつ、まずはアルゴの知りたいたいことを、次にアルゴが聞いてこなかった部分を伝える。

体力システム、回復、武器やそのカスタマイズにSCAVの存在。

この場では語り尽くせぬほどの情報を、雑談を交えながら話すと笑い起きる。

「ホント酷かったぞ。リヨーハがボスに喧嘩売ったら反撃されて、両足骨折しやがってさ」

骨折状態に陥ると、壊死と同じデバフを受けることになる。

脚なら片方につき45%の移動速度低下に加え、ケンケン歩きになって狙いがブレる。ダッシュもジャンプも出来なくなる、嫌なデバフだ。

「それで、どうしたの？」

「こいつを盾にしてボスを撃つたのさ。リヨーハはギリギリ生きてたし、ボスも倒せたから文句ないだろ」

「この人でなしが！」

まだ死ねた時だからこそその芸当だ。最悪死んでも、まあドンマイと揶揄うつもりだった。今は、そもいかないけど。

「PMCは本当に血の気が多いナ。デスゲーム宣言の後に、結構な人数がパーティ組んで狩りに行っていたヨ」

「タルコフは攻めた方が勝つってジンクスあるからな。あと、戦いを避けて漁るのも美味い。死体以外にもクレートとか、オブジェクトに素湧きしてるアイテムあるし」

低レベルの頃は死んでロスしても惜しくないような、低コスト装備でフィールドを駆け回ったものだ。レアアイテムをかき集め、金稼ぎに躍起になっていたのを思い出す。

だが、リヨーハの意見は違うらしい。

「みんな銃を撃ちたいだけだろ。FPSの中でもコアな部類がタルコフだ。実銃まんまのが使えるんだから、みんな喜んでるだろうさ」

「レイジに限らず、みんな命知らずなんだナ」

「レイジは無理しちやダメだからね？ 本当に死んじやうんだから」

心配は嬉しいが、戦うべき時は戦わなきゃならない。それに、仲間

のために犠牲になる覚悟も必要な時がある。

口にする必要がないだけで、俺はいつだつて死ぬ覚悟はある。ただ、さつきと死んだら面白くないだけだ。

「安心しろ。簡単には死なねえよ」

「確かにな。『こいつ死んだわ』つて突っ込み方する癖して、毎回生きて帰ってくるんだぜ？ しかも敵を皆殺しにして」

「リョーハより、レイジの方が死神だったり？」

「コハルまで……！」

笑っていたまさにその時、端末が震えた。画面を見ると、キリトからのメッセージが来ていた。

なんだ、心配になったかとメッセージを開くと、安否確認の他に『確認してもらいたいことがあるから、可能なら』ホルンカ』に来て欲しい』と添えられていた。

「どうした、ラブレターでも来たか？」

「どっちかというとは赤紙だな。キリトからだ」

キリトの名前を聞いたコハルが近寄ってきて、端末を覗き込む。なんだなんだとアルゴもメッセージを覗き、首を傾げていた。

「ホルンカなら、武器入手クエストが出る村だな。片手剣使いのキリトなら間違いなく行く所だ」

「そこで確認に来てくれて、タルコフ絡みのなんかあったんだろうさ。俺は明日にでも行くが、アルゴも来るか？」

「もちろんサ。情報は生命線だからナ」

「私も行くよ。いいよね？」

コハルの顔には怯えではなく、決意が見て取れた。今日の戦闘で少し自信がついたのだろうか？ それに、彼女の師匠たるキリトもいるのだ。気合も入るだろう。

「ああ。今のうちに水と食料、回復アイテムを調達しよう。リョーハ、テメーも自分のハイドアウトで補給して来い」

「拒否権なしだよ。まあ行くけどな」

リョーハは置いていたバックパックを背負い、挨拶もなしにハイドアウトから出ていく。

あいつは仕事をきつちりこなす。さよならの挨拶をしないのも、また会えるための験担ぎだろうし。

「アルゴ、泊まっていくか？」

「いや、オイラは宿を取るサ。見たところ、マットレスはひとつだけのようだからナ」

休憩スペース(LV1)はボロいマットレスひとつを敷いただけだ。廃品置き場から拾ってきたのか？　と思うくらいに酷い。泊まる気にもならないか。

「じゃ、コハルも宿取るか？」

「ううん、私は泊まって行くよ。準備もあるでしょ？」

意外だった。こんな汚いところで寝られないだろうと思ったのに。

まあいいや。買い出しに行こう。弾薬も結構使ってしまったし、そろそろ照準器諸々も必要だ。

※

蝋燭の火が消えた地下室は何も見えない。星空の下でもないから、本当の闇に包まれている。

そんな中で、私はボロボロのマットレスの上で何度目かわからない寝返りを打つ。

どうしてだろう。全然眠気がやってこない。ゲームだからなのか。

でも、レイジはぐっすり寝ている。私にマットレスを譲ったせいで、壁にもたれて眠り始めちゃった。銃を肩に立てかけているのは、それが落ち着くからなのか。

「レイジ……」

そっと手を伸ばすと、レイジの頬に触れた。疲れちゃったのか、ぐっすり眠って起きる様子がない。

レベルは漸く2になったらしいけど、HP量は私の方が多くなっちゃった。PMCの人は、レベルが上がってもHP最大値は440のままだった。

「私より、簡単に死んじゃうのかな」

私は一撃でフレンジーボアを倒せるようになったけど、レイジは何

発も撃ち込んで漸く倒している。SCAVに襲われた時だって、かなり危なかった。

きつと、SAOPプレイヤーが間違つてソードスキルをレイジに当てたら一発で死んじゃう。強いのに、すごく脆い。

1番守られなきやいけないはずなのに、私を守るために残ってくれた。見返りがあるわけでもないというのに。

「……私が、守るから」

強くならなきや。お互い死なないで、それでも臆病にならず、戦わなきや。

1層―6 ホルンカ

はじまりの街から数時間歩き、俺たちはホルンカの村に到着した。待ち合わせ場所ではキリトが立っていて、動かないものだからNPCに見えてしまった。

「キリト、来たぜ」

「無事でよかった。変なNPCに絡まれなかったか？」

「ああ、SCAVの事か？俺とリヨーハで皆殺しにして、片っ端から装備を奪ってきた。どっかで換金できるか？」

「それならあそこで……」

どうも、SCAVは従来通り頭か胸部の耐久値を全損すると死亡するらしい。1発60ダメージの銃弾で削り殺すのも大変だから、これは嬉しい情報だった。

その辺はアルゴが嬉々として纏めていたし、いい収穫だろう。

「あと、アルゴに俺らの事頼んでくれたって？ ありがとうな」

「いいさ。アルゴもEFTのことを知りたがっていたし。それで、1人増えたのか？」

「ベータ時代の仲間だ。ほら、茅場の話の時に酒飲んで酔っ払ってたアホ」

「誰がアホだ！」

リヨーハが後ろから組みついてくるが、脇腹に肘を入れて反撃する。アホはアホだ。事実なのだから仕方あるまい。

「ああ、あの時の……よろしく。キリトだ」

「リヨーハだ。心強い仲間が増えて嬉しいぜ」

キリトとリヨーハは握手を交わす。リヨーハは中々にコミュ力が高いので、初対面の人でも打ち解けられるのが強みだ。

「で、状況を。俺を呼んだってことは、タルコフ絡みの何かなんだろう？」

「その可能性があるんだ」

キリトの説明によると、道続きで“ホルンカの森”へ行けるはずだったのだが、ホルンカの森が無くなって草原になっていたらしい。

そして、村にいる案内人に話すことで森のダンジョンに行けるのを見つけたが、行き先はホルンカの森ではなく”Prozersk自然保護区”となっていたという。

「プリオゼルスキー自然保護区……レイジ」

「ああ、予想通りならWoodsだろうな」

「Woods？ タルコフのマップなの？」

「少し待て」

タブレットを取り出し、トレーダー画面を開く。村や街の鍛冶屋と違い、EFTにいた8人のトレーダーはこの端末を介して取引及びタスクの受注を行うようになっていた。

その中から”Therapist”を選び、Woodsの地図を購入する。こうして買ったものは直接イベントリか、ハイドアウトのスタッシュに格納される。

「そういえば、そのマップにはもう入ったのか？」

「まだだ。説明も随分変わっていたから、無茶はできなかったんだ」

「賢明だな。変わっていたって言うのは？」

地図を開きつつ、変わっていたと言う部分について訊いてみる。今の環境ではそういった些細な変化も見逃すことは出来ない。

「本来のダンジョンはスタート地点から始まり、ゴール地点から出る、それは大丈夫だよな？」

「ああ、RPGは齧ってたからな」

本当に申し訳程度だが、この手のRPGの経験があるから基本知識は問題ない。キリトが困惑する変更とすれば、EFT絡みだろうか？「それが、ランダムな地点にスポーンして、指定された複数の脱出地点のどれかに到達するってなっていたんだ。それに、パーティが1つにつき5人までになってる」

「ああ、完全にタルコフのシステムだな。地図がなきゃ分からないだろうし、入らなくて賢明だ」

「地図推奨と説明もあったし、近くの道具屋でも地図を取り扱ってたぞ」

SAOプレイヤー向けの説明なのだろう。PMCなら大体の脱出

地点は覚えている。地名で示された脱出地点は、攻略サイトでも見ないと見つけるのは困難だ。

地図にも脱出地点の位置は書いてあるが、そもそも自己位置を判別するのが難しすぎる。

「偵察に行こう。ハッキリさせないとな」

「オイラもついて行っていいよナ？」

「勿論だ。アルゴにはこの情報を広めてもらわないと、SAO連中が遭難しちまう。パーティは2つ。俺とリョーハがそれぞれ先導。それでいいな？」

意見は出なかった。Woodsを歩き回った経験があるのは俺とリョーハだけなのだから、当然だろう。後は、SAOプレイヤーの振り分けだけだ。

あとは、無線機を全員に渡ししておくか。

Raid #1

Day 1

Level 2 BEAR Operator "Rage"

Aincrad Layer 1 "Woods"

ブラックアウトした視界に光が戻る。砂浜を思わせる湖畔と、潰れかけたログハウスの集落が視界に入る。

嗚呼、ここか。PC版からVR版と、歩き慣れた場所だった。

「レイジ、ここってどこ？」

俺に同行するコハルは地図と睨めっこして、現在地を把握しようとしているが、上手く行っていない様子だ。

「マップ北側、小さな湖が5個あるところだ。南に伐採場がある」

Woodsはマップ中央付近に巨大な岩山が存在し、目印となっている。その近くには伐採場があつて、かつては諸般の事情で激戦区になっていた。

「ここだね。脱出地点はどこだろう？」

「南側、Outskirtsだろうな。スポーンが北か南かで脱出地点が決まってるのさ」

視界右上に意識を集中すると、脱出地点の表示が現れる。といっても、地名を表すだけだから地図がないと役に立たないが。

脱出地点は“Outskirts”“ZB-014”“Factory gate”“Bridgextraction”の3箇所。ZB-014とFactory gate、Bridgextractionはギミックがあるため、確定で使える脱出ポイントはOutskirtsのみになる。

『レイジ、こちらリョーハ。Outskirts付近でスポーン。そっちはどこだ?』

無線機からリョーハの声が聞こえる。トレーダーに追加されていたアイテムで、ダンジョン内でも仲間と連絡が取れる便利アイテムだ。

正直、メールで事足りそうと思ってしまったが。

「新エリア、水没した村のあたりだ。魔法陣とかUSECキャンプ近く」

『なら、スナ岩頂上で待ち合わせよう。ログハウスと検問所漁ってからそっちに行く』

「じゃ、俺らは魔法陣とUSECキャンプ漁るわ。村はお前らが帰りにでも漁れ」

『助かる。着いたらまた連絡するぜ』

リョーハの方にはキリトとアルゴが付いていった。くじ引きの結果とは言え、何か作画的なものを感じるのは俺だけか。

「リョーハ、どこでスポーンしたって?」

「Outskirts。俺たちの脱出ポイントだ。本来なら、伐採場あたりで鉢合わせてPMC同士の大激戦になるところだな」

まずはこの近くの釣り場所にコハルを連れて行こう。いいところがある。地図に載っていない情報を調べ、記録して広めるのも、先駆者の大切な役目だ。

「それで、あの家にアイテムが出るの?」

「家にクレートとか食品が湧くこともあるが……目的は別にある。魔法陣が本命だな」

「魔法陣？ 魔法なんてあるの？」

「違う違う。タルコフにはカルト教団がいて、所々に儀式の跡があるんだ。奴らはそこにお供物をする」

「つまり、レアアイテム？」

「高確率でな。武器とかアイテム収納用のケースとかスポンするから、周辺はいつも激戦だよ」

他のマップだと、魔法陣のあるところには鍵が掛かっている。マークド部屋や魔法陣部屋と言われるそこは、タルコフのガチャ的存在だ。

潰れかけた木造家屋の庭、物干し竿近くの地面に目を凝らすと、それはあった。

ミステリーサークルのように丸く草を刈り取ったそこに、稲妻模様と円形の魔法陣があった。

「見つけたよ！ これは……レイピア？」

「SAOのアイテムも湧くようになったか。強いかどうかはキリトに見てもらおう。後は……AKMNか」

有名なAK-47の改良モデルAKMの夜戦対応型で、側面にサイドマウントが増設されている。

俺はAKMなどの大口径弾は使わないから、リョーハにでもくれてやろう。奴はパワーこそ全てなタイプだ。

「これ、今より強いから使ってみるよ。幸先がいいね」

「コハルの行いがいいからじゃないか？ 次行こう次」

そこから丘を越え、道無き道をかき分けて岩山へ登る。木の茂る岩山の中部には、偽装網バラキユーダを張って隠されたキャンプがある。

SAOの世界には似つかわしくないオフロード車や、ヘスコという大型の土嚢で作られたそれはUS&Cの拠点だった場所で、食料やウェポンパーツがスポンする。

「テントに折りたたみベッド……これ、持ち帰れないかな？」

「オブジェクトは無理だろ。欲しい気持ちは俺もわかるけどな。寝転んでいくか？」

折りたたみベッドは確かに欲しいが、血痕が残るものを使おうとは

思えない。コハルも血痕に気付いたのか、嫌そうな顔をしていた。

「やめておくよ……あ、何か出た」

コハルがクレートから取り出したのは黒い照準器。

HH S—1はホログラフィックサイトと倍率ブースターのコンボで、等倍と3倍に切り替えが可能。近く中距離戦闘に対応できる優れたものだ。

「序盤だとお高いやつだ。持って帰って売るといいぞ」

「レイジは使わないの？」

「あると嬉しいけど……コハルの儲けだろ」

EFTは見つけたもの勝ちだ。タスクの納品などで必要な時はシェアすることもあるが、トラブル防止のためにそう取り決めておくことが多い。

「ううん、レイジが使つて。私にはこれがあるから」

すらり、と抜いたレイピアは僅かに緑色を帯びていた。さっきの魔法陣からスポーンしたそれは、目を引くほどに美しい。

「レイジが教えてくれた魔法陣で、独り占め出来たのにくれたんだもん。お礼させてよ」

「お礼したいのは俺の方なんだけどな」

コハルがいなかったら、今頃俺は死んでいたかもしれない。背負うものもなく、守るものもない。好きなように戦い、好きなように死んでいったはずだ。

その支えが、枷がコハルだ。どこかへ消えてしまわぬよう、捕まえていくれる。

「レイピアと照準器の交換だよ。プレゼント交換みたいに！」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

ちやうどよくサイドマウントレールを拾っていたので、それを介してコハルのくれたサイトを銃に取り付ける。

ベータでも愛用していたサイトだけあって、随分しっくりくる。装備が良くなるにつれて、少しずつ自分を取り戻すような感覚がした。

「すごかつこいいよ、特殊部隊みたい！」

「コハルのおかげさね。さ、残りも漁っていこう。牛乳とオートミ-

ルがあるぞ」

「朝ごはんに良さそう。牛乳はハイドアウトの冷蔵庫に入れておこうね」

まるで、おまけ付きのお菓子を開けるかのようなワクワク感を楽しみつつ、キャンプを漁っていく。

漁るのは確かに楽しいのだが、コハルと喋っているのはもっと楽しい。取り留めもなく、暇を潰すだけだったとしても、一つ一つが宝物のように思えた。

1層―7 伐採場の死闘

キャンプ漁りを終え、再び丘を越えて歩き出す。送電線を目印にすれば、この辺は歩きやすくなる。

「地図のこの位置だ。迷っても送電線を辿れば、北側出口か南側に通じてる。ソロでは来ないと思うけどな」

「1人じゃ嫌だよ。夜とかお化けが出そうだし」

「お化けは出ないが、カルト教団はいるぞ」

「……嘘だよな？」

「これがマジなんだ。毒ナイフとか、超強力な武器で襲ってくるヤベーNPCが夜限定でスポーンする。リョーハの方にある森の魔法陣と……さつきの魔法陣周りにな」

ちなみに、俺とリョーハでカルトに挑んだ時は酷い目にあつた。奴らは熱源探知スコープに映らないこともあり、茂みの中から奇襲を受けて2人とも猛毒を食らってしまったのだ。

更には視界は霞み、痛みが走り、大混乱の中でリョーハを誤射してしまった。

解毒剤で治療して体制を立て直した後は反撃に出て、カルト集団を全滅させたものの、リョーハのアーマーを弁償する羽目になり、その時の儲けはすつからかん。むしろ解毒剤の分マイナスだ。

Slickアーマー、マジで高かった。2度とカルト狩りなんて行くもんか。

「ま、待って！ 置いていかないで！」

「置いて行かないよ。でも急げー」

コハルにはカルトの話がよっぽど怖かったらしい。茂みから襲ってくる、毒持ちハゲの集団なんて恐怖以外でもない。実害がある分、お化けよりタチが悪いだろう。

涙目で走ってくるコハルが、捨てられた子犬のように見えて面白かった。あまりからかい過ぎても良くないが、少しのユーモアは心の癒しだ。

「レイジの意地悪！」

そんなコハルの声が Woods に木霊した。リョーハの野郎が笑っているような気がしたが、きつと気のせいだろう。

10分後

「レイジ、待ってよ……!」

「待ってるよ。俺もスタミナ切れだ。持久力も筋力も初期状態だしな」

俺はコハルの手を掴んで引つ張り上げる。今は2人仲良くロツククライミングの真つ最中だ。

Woods の中心よりやや北西にある岩山には、スナイパーSCAV がスポーンするため、スナ岩とかスナイパー岩とPMC たちは呼んでいる。

見晴らしはいいが木々が邪魔で狙撃は難しく、逆に周りから丸見えでカウンタースナイプされる危険も高い位置である。

「ほら、これで最後だ!」

「私、レベル上がったら筋力あげる!」

「マッチョにはなるなよ? 可愛い見た目でいてくれ」

「か、可愛い!?!」

途端に茹蛸のように赤くなってしまった。そんなわかりやすいコハルが面白くて、つつい目に向けてしまう。

面白いバディが出来たものだ。リョーハとゲラ笑いしながらSCAV 狩りをするのもいいが、これもこれで悪くない。

「もう……わあ、すごくいい眺め!」

「今じゃ狙撃してくる奴もないし、ピクニック気分だな」

見渡す限りの森と草原。それを一望できる景色に、コハルは目を輝かせている。俺はその場にしゃがんで、リョーハがいないか見回すばかりだ。

「ヤッホー!」

山彦なんて帰ってこないぞ、と言おうとした途端「アッホー」と返ってきた。リョーハの阿呆め。カルトに襲われてしまえ。

「煩いわよ。静かに狙撃させてくれないかしら？」

そんな声が聞こえた。少し前、一段下がったテラスに近寄ると、スナイパーが伏せている。隣ではSCAVが死んでいるし、ライフルを奪って使っているらしい。

「シュトウルマン狩りか？」

「可能ならね」

クールな雰囲気だが、声からして女か。ただ静かに、スコープを介して伐採場を見つめていた。

「反対側から仲間が来る。誤射だけしないでくれ」

「了解」

「レイジ、シュトウルマンって何？」

そう言えば、コハルにはまだ教えていなかった。この森に巣食うクソ野郎のお話を。

「このボス。あの伐採場に出現するんだ。黒フードのジャケットを着ていて、ドラグノフ狙撃銃^Sを持ってる。あと、取り巻きも2人」

「強いのか？」

「弾は強力だが、本体はそうでもなかったりする。接近戦に持ち込めばこっちのものだしな」

それでも振り返りにあうことは何度もあった。油断は禁物である。

例え、掲示板でボス最弱と言われていようとも。

「今の段階で倒せれば、経験値も装備も美味しいでしょう？」

「それは言ってるな。だが、まずは飯にしないか？」

バックパックからジュースと缶詰を取り出し、スナイパーに声をかけると、腹が減っていたのかこちらにやってきた。猫かな？

「いいの？」

「キャンプで拾ってきたから気にすんな。コハル、アップルとパイナップルどっちがいい？」

「アップルちょうだい」

「ほらよ」

「パイナップルは貰うわ」

コハルにアップルジュースを渡す間に、スナイパーの方にパイナツ

ブルジュースを取られてしまった。仕方ない、俺はH o d l o d (エナジードリンク)を飲むとするか。バフあるし。

「私、コハルって言います。こっちはレイジ」

そういえば名前を聞いていなかった。自然と飯を食う流れになっていたから、すっかり忘れていた。

「シノンよ」

「ん？ シノン？」

聞き覚えがある。しかも、ロクでもない記憶が思い浮かんできた。このスナ岩と合わせて、俺とリヨーハのトラウマレベルの思い出がだ。

「レイジ、知ってる人？」

「……シノン、俺とリヨーハを殺したことあるな？ しかも、このスナ岩から」

「もしかして、あの時のPMC？」

シノンは苦笑いを浮かべる。ベータの時に殺した相手と再会するなんて、誰が思った事だろう。

ちなみに、コハルは俺とシノンの間でオロオロしている。

「レイジ、喧嘩しちゃダメだからね」

「しねえよ。ただの思い出話さ」

懐かしい話だ。シュトウルマンの死体を漁っていたリヨーハが狙撃されて死に、ムカついて復讐に行った俺もあえなく返り討ちに遭ってしまったのだ。

そんな話をしたら、コハルはシノンに熱い眼差しを向けていた。

「凄い、こんなに遠くから当てるなんて！ よく倒しましたね！」

「倒してから猟犬コンビって知ってたわ。まさか死神リヨーハがあんなにあっさり倒せるなんてね」

「被害者の会2号、デアデビルです。頭に当たったのに、メットに弾かされたせいで負けましたー」

そんな俺の頭を、コハルはよしよしと撫でる。まるで宥められる子供のようで不服だが、コハルに撫でられるのは嬉しいので文句はない。

スリスリ、と猫のように甘えて楽しんでいたら、突然森に銃声が響いた。

リヨーハのAKではない、甲高い3連射。覚えのあるこの音に、俺とシノンは思わず口角を釣り上げた。

いる。奴がああ伐採場に。

『伐採場でシュトゥルマンに絡まれた！ 外側大回りしてそっち行くぞ！』

リヨーハが叫びながら連絡してくる。高威力のドラグノフ3連射を喰らったらひとたまりもない。しかも、やられれば死ぬのだから緊張感は割り増しだ。

「俺たちもスナ岩降りて外周の丸太に行く。優秀なスナイパー連れて行くから楽しみにしとけ」

『嫌な予感しかしねーぜ！』

きつと大丈夫だから安心するといい。泣くほど優秀だ。主に俺たちちがな。

「私はここから狙うわ。援護してあげる」

「取り分用意しとくわ。行くぞコハル」

「よろしくね」

「シノンも、気をつけてね！」

1層―8 伐採場の死闘―2

コハルを伴ってスナ岩を下り、原っぱを駆け抜けた先に窪地がある。その窪地に伐採場があり、コロシアムのようにになっている。

窪地手前には積み上げられた丸太や重機、窪地の中にも丸太や倉庫、車両などの遮蔽が存在し、シュトウルマンと取り巻き2人はそういったところに隠れながら狙撃してくる。

「接近戦に持ち込めばこっちのものなんだがな」

向かいの大岩、ダツフル岩（ダツフルバックがあるからそう呼ばれる）に手を振ると、同じく手が振り返された。リヨーハかキリトか、はたまたアルゴか。俺から距離100メートル程度。その間にボスがいる。

「シノン、味方はダツフル岩。俺は手前側丸太に隠れてる」

『見えたわ。白倉庫と赤吹き抜けの間に取り巻き』

俺たちから見て、伐採場南奥、西にある白い倉庫が白倉庫。中央と東の赤い屋根で、側面が吹き抜けになっている丸太置き場が赤吹き抜け。

その白倉庫と中央赤吹き抜けの間をシノンが狙撃し、遅れて銃声が響いてきた。

『キル』

「ナイス！ リヨーハ、取り巻き1ダウン！」

『シュトウルマン確認、白倉庫と3連小屋の間！』

3連小屋は伐採場北西にある3つの木造小屋。俺とコハルの足元だ。白倉庫方面に目をやると、スタックした車両の近くに黒フードのスナイパーが見えた。

「アレだ、あの黒フード！」

咄嗟に頭を引っ込めると、銃弾が飛んできて丸太を削る。コハルもビククリして首をすくめ、丸太の後ろに隠れた。

「レイジ、アレどうやって倒すの!？」

「狙撃か詰めるかだな。それか……」

SCAVのアルゴリズムが変わっていないなら、一つの手段があ

る。例えボスだとしても、タゲ取った人以外に意識が向かないのは変わらない。

「奴をここに追い込むから、丸太の後ろに隠れてろ。いいな？」

「大丈夫なの？」

「奴は至近距離になると反応が悪いからな。俺とリョーハで追い込んで削り殺してやるさ」

頭か胸の耐久を全損させてもいいのだが、説明が面倒なのでカット。

不安そうなコハルの肩を掴み、目を合わせる。俺が不安がつて心配させるわけにもいくまいと、しっかりと、真っ直ぐに向き合う。

「俺が仕留めてくるから、信じて待ってろ」

このアーマーでは、奴の一撃で胸部耐久力を全損させられる恐れがある。即死はせずとも、追撃を喰らって死ぬだろう。

でも、それは伏せた。コハルに余計な責任を負わせるものか。俺の命の責任は、俺一人が背負えばいい。

「……わかった。死なないでね」

うなづくコハルに笑顔を見せる。作らずとも、自然と笑えてきた。「死なねえよ。シノンに誤射されなければな」

それだけ言つて、俺は走り出す。ぐるりと大きく回るように動き、シュトウルマンの横に回り込む。

リョーハと俺、その中心にシュトウルマン。ちょうど十字に挟む、いいポジションだ。

「リョーハ、奴を3連倉庫に追い込んで詰めるぞ！ 横から撃つ！」
『気を付ける、お前にタゲ向いてる！』

コハルのくれたサイトがシュトウルマンを映し出す。スコープ越しに目が合い、次の瞬間には光がそれを覆い隠した。

嫌な予感がして、丸太に身を隠す。甲高い銃声と着弾音が響き、丸太を削る。ダメージはないな。

『おらおら、そっち行けー！』

俺とリョーハに挟まれ、ダメージを負ったシュトウルマンは逃げ出す。被弾したら攻撃より物陰に逃げようとする、SCAVのアルゴリ

ズムはボスでも変わらない。

何度も何度も射撃を繰り返し、互いのリロードタイミングをずらし、弾幕を絶やささない。圧倒的な火力を持って、奴を制圧する。

『3連倉庫に逃げたぞー！』

更に銃声。かなり遠いからシノンの狙撃か。血飛沫のエフェクトを見るに、シウトウルマンの腹部に命中したか。

『少し下に当たった……やり損ねたわ。あと、白倉庫に取り巻きーよ』
「取り巻き頼んだ、本体は仕留めてやる！」

もう少し。もう少しでシウトウルマンが倉庫の影に飛び込んで回復するはずだ。

奴の持つI F A K個人救急キットは使用時間3秒。ボスは回復モーションのキャンセルをしないから、それだけあれば十分に詰めて仕留められる。

「コハル、そっち行ったから気を付けろ！」

勝った、そう思ったのに。どうして、奴は何もないところで立ち止まった？ どうして、しゃがんで俺を狙っている？

『ヤバイ！ 逃げろレイジ！』

忘れていた。S C A Vボスとやりあう上での最大の鉄則を。

近距離でも遠距離でもない、中途半端な距離で戦うことは絶対に避けるべし、だ。

左脚が痺れる。撃たれたか。視界の端にあるアイコンのうち、左脚が黒く染まり、壊死を示す。

次は腹。そして、3発目は胸に当たった。視界が霞み、体が動かない。気付けば青空を見上げていて、少しずつ赤く染まっていく。

重傷時のエフェクトか。今まで守ってくれたアーマーは容易く貫通され、体力はほとんど残っていない。胸部をやられ、立ち上がることもできない。

本当なら即死のところを、茅場の温情でまだ生きている。せめて、別れを告げる猶予を、とでも言いたいのか。

「コハル……ごめん」

よく知っている、疑似的な死。それが本当の死になる。悔しくてた

まらない。この先にあるであろう楽しいことを何も知らずに、このまま倒れていくのが。

Raid #1
Day 1
Level 4 SAO Player “Koharu”
Aincrad Layer 1 “Woods”

その動きは早かった。たちまちポジションにつくと、猛烈な銃撃がボスを襲った。

豪雨に降られたような弾丸の雨。相手は本当にボスなのかと疑うほど、一方的な展開になっていた。

レイジとリョーハのコンビネーションは、このEFTの世界だからこそ最大限発揮されている。

そこでは、私に基礎を教えてくれたキリトでさえも手出しができないほどの戦闘が繰り広げられていた。

それなのにどうして、嫌な予感がするんだろう。

「コハル！ そっち行ったから気を付けろ！」

レイジが怒鳴る。銃声に負けない大声で情報を伝えると、逃げる黒フードのシュトゥルマンを追いかけていた。

レイジの言う通りなら、あのボスはここに逃げてくる。そして、レイジが近距離戦で仕留める。

そのはずだったのに、ボスはその場で立ち止まった。その銃口の先にいたのは、レイジ。

「レイジ！」

『ヤバイ！ 逃げろレイジ！』

甲高い銃声に驚き、身を硬らせて目を瞑る。3つの銃声がして、それを最後に静寂が訪れた。森の中に銃声が広がり、小さくなって消えていくような余韻がある。

何が起きたのか、理解できない。どうして、レイジはゆっくり後ろ向きに倒れているのだろう。

どうして、リョーハやシノンの悲鳴が聞こえるのだろう。

「あ……あ……」

視界が歪む。どうして、こんなに目頭が熱いの？ 教えて、レイジ。私に戦い方を教えてくれたみたいに、この感情の止め方を教えてよ。

「死なないって、言ったじゃん……」

強いプレイヤーだったんでしょ？ ならば立ってよ。また、笑ってみせてよ。

『クソツタレ、救援に行く！』

『取り巻きがまだいる！ 危険よ！』

『うるせえ！ 奴を見殺しにすんなら俺も死なせろ！』

リョーハの声も、頭に入ってこない。ただ、彼を殺した黒の死神が眼下にいることしかわからない。

80度くらいはありそうな急勾配、3mは下にいる。ポーチを取り出して、包帯を巻き始めた。

「……よくも」

レイピアを構え、私は踏み出した。落下の速度をソードスキル”リニア”に乗せて、渾身の一撃を叩き込む。

「よくもレイジを……」

ガラスが砕けるような感触。あれだけレイジとリョーハが苦労した相手なのに、その一撃で倒れた。

HPバーは見えないけれど、倒れて動かないから倒したのだろう。脚に力が入らない。見上げた先には青空があって、その向こうには無限に続く鋼鉄の城がある。

まだその最底辺なのに、もう逝ってしまったのかな。

「リョーハ、レイジは？」

『生きてるが、なかなかヤバイ状態だ。ボスはどうした？』

「やったよ。私が倒した」

『よくやった。シノン、取り巻きは？』

『見つけた』

また銃声がして、白い倉庫の中にいた取り巻きがもんどり打って倒れた。私もあのくらい遠くに手が伸ばせたなら、レイジを守れたのか

な。

私はただ、レイジを見つめていた。リヨーハに担がれ、ぐったりと動かない彼の姿を。

1層―9 しばしの別れ

Level 3 BEAR Operator "Rage"
Aincrad layer1 "Holnka"

小鳥の囀りが聞こえて、風がそよぐ音がする。

嗚呼、なんと心地のいい音なのだろう。安らかな眠りを妨げず、心を落ち着かせてくれる穏やかな音が耳に優しい。

もう少し、眠りを享受していようか。でも、何か忘れていようかなんだったかな。

もう少し。そんな俺の頭を誰かが撫でる。嗚呼、なんだか落ち着く。小さく、細い手のひらに守られているような気がした。

もう、起きなきゃ。

ふと、そんな声が聞こえたような気がした。僅かに目を開けて見ると、窓から暖かな光が差し込んでいる。それが顔を照らさないのは、コハルの体が影になっているからだ。

俺の顔を見下ろす翠の双眸。優しいその顔がくしゃりと歪んで雨を降らす。どうした、怖い夢でも見たのか？

そこで、思い出した。俺はシウトウルマンに撃たれてダウンして、そのまま失神したはずだ。ならば、ここはまだWoodsだろうか。にしては覚えのない場所だ。ウィンドウを操作しようと伸ばした手は、コハルに掴まれてしまう。

「もう、大丈夫。終わったよ」

「じゃあ、ここは村？」

「うん。私とキリトで担いだの。重かったよ？」

悪いことをした。それに、信じろと言っておきながらこの様だ。顔向けするのも気まずくてたまらない。

どう接すればいいのか迷う俺の額に、コハルの手が添えられた。動いちゃダメ、そんな意思が伝わってくる。

「おかえり、レイジ」

「……ただいま」

「命知らずって話は、本当だったね」

暖かな雨が頬を濡らす。見るべきではないと目を閉じ、俺は雨に降られ続けた。

リヨーハの治療によって回復したものの、俺は失神してしまっていたそうだ。

デバフでもなんでもなく、本当に失神だ。回復させようが鎮痛剤を使おうが、起きなかったのも仕方ない。そんな俺に、コハルはずっと付きつきりで看病してくれたという。

「ホント、ごめんな」

危うくトラウマを植え付けるところだった。EFTの頃と同じように胸部耐久全損が即死ならば、俺の脳味噌は焼かれていた頃だろう。

きつと死体になってフィールドに残り、消え去るその瞬間までそこに転がり続けていたと思う。それも、第1層。まだまだこれからの時に。

そんな思考を切るかのように、軽く頬を叩かれた。コハルの手が叩いたらしい。

銃撃に比べればなんてことがないのに、どうしてこんなに重いのだろうか。

「……約束して。勝手にいなくならないって」

「まだ組んで2日目の野郎に、それ言うか？」

「レイジがいなくなったたら、私はどうすればいいの？」

キリトやリヨーハ、クラインがいる。そう言おうとして、やめた。繋がりは確かにあるけれど、一緒にいた時間は断然俺の方が長い。

それに、まだまだ開始2日目。不安定であつてもおかしくない。落ち着くその時までには、無茶はよそう。

俺がいなければ、なんて思い上がりはしないけど。

「すまない」

「約束、だからね。私は、レイジのパートナーなんだから」

俺の小指をコハルの小指が絡めとる。指切りなんていつぶりだろうか。それで落ち着くなら、いくらでもするけど。

「嘘ついたら……どうしようか？」

「針千本飲ませるんじゃないのか？」

「そんなことしないよ。財布が空になるまで食べ歩きで許すね」

「えぐっ！　せめて弾代は大目に見て！」

決まりだね、とコハルは笑う。命を預けあっただけあって、たった2日なのに随分濃密な思い出が増えたと思う。

きっと何気ない1日のことでさえ、最期の瞬間まで忘れることはないんだろうな。

※

「で、俺の装備は放り投げてきたと？」

「そうだ。重くてどうしようもなかったからな」

リヨーハからはシヨッキングな報告を受けた。失神さえしていなければ、自分の装備を着て帰って来れたのになあ。

「でも保険あるだろ？」

「まーな」

EFTでは死ぬと装備をロストしてしまう。だが、保険を掛けた装備は拾われなければ数時間後に返ってくる。

入手したアーマーと着ているものを交換することもあるだろうと、保険を掛けていたのが役に立ちそうだ。

「返ってくるまではありあわせ装備で我慢しろ。コハルを泣かせた罰と思え」

「もつと重い罰になりそうだが」

「それは後でコハルに執行して貰うんだな。ブチ切れたコハルがシユトゥルマン倒したおかげで、ゆっくり治療出来たんだ。ヤンデレ開花したかと思っただわ」

「……コハルには殺させたくなかったな」

「NPCとはいえ、まんま人間だしな」

SCAVもボスも、NPCの人間だ。人を攻撃することを一度でもして仕舞えば、次からは躊躇いがなくなる。

俺はコハルを怪物になどしたくはない。だから、散々タルコフの世界で擬似的な殺しに慣れ親しんでしまった俺とリヨーハ、シノンで仕留めるはずだったのだ。

「つて、お前が持つてるAKMN、俺が拾ったやつか？」

「ああ、捨てるの勿体無くて」

「元々お前にあげるつもりだったから」

「持つべきものは友達だな」

サンキュ、とリヨーハが差し出してきたのは、B-13マウントベースとHH-1サイト。あの時AKに取り付けていた物で、拾い物だから保険が掛かっていないと諦めていた物だ。

「どうしたこれ」

「外して持って帰ってきた。お前のお好みのサイトだったしな」

「助かる。コハルがくれたやつだから、無くしたの気にしてたんだよ」

あとは取り付け可能なAKを探すか。そう思っていた俺を、リヨーハがニヤニヤと見つめていた。

「何だよ」

「随分仲良いんだな。ホの字か？」

馬鹿なことを言うリヨーハに蹴りを入れ、俺は立ち上がる。そろそろ行かなければ。コハルとはじまりの街へ戻るのだ。

「リヨーハ、お前はどっする？」

「ああ、キリトとシノン、あとアルゴに誘われて、しばらくWoodsでレベリング兼情報収集。しばらくお別れだな」

ベータの頃、それ以前からの付き合いの友に再会して、またお別れか。寂しい気もするが、これで最後ではあるまい。

今回ばかりはハマしたが、こいつも俺もそんなにヤワではない。タルコフに鍛えられてきたのだ。簡単に死ぬもんか。

「寂しくなる」

「また会えるさ」

拳を打合せてから部屋を出ると、廊下の壁にシノンが寄りかかっていた。何だ、待ってたのか？

「助けられた。ありがとう」

「別に。コハルからコレも貰ったし、私は文句なしよ」

シノンはSVDSを大切そうに持っている。高威力の弾薬を絶え間なく撃てるこの銃は、現環境において間違いなく最強格だ。それを

得てホクホク気分だろう。

「そうか。リヨーハをしばらく頼む」

「後で子守代請求するわね」

「勘弁してくれ……」

シノンとの軽い雑談を終え、俺は宿を後にする。外ではチエツクアウトを済ませたコハルが待っていて、俺を見つけると子犬のように駆け寄ってきた。

「行こっか」

「ああ。強くなつて、ボス戦で再会するでしょう」

振り向けば、キリトやリヨーハ、アルゴにシノンが見送りに来てくれた。なんだかんだ言つて、互いの身を預けた戦友だ。やはり、他の人間とは思入れが違う。

そんな仲間との暫しの別れ。転移門が輝きだし、俺とコハルは光に包まれる。仲間たちの姿が見えなくなるまで、俺は手を振り続けた。た。

1層―10 不思議な槍使い

はじまりの街に戻ってから数日、俺は窮地を迎えていた。始まって以来の大ピンチだ。その元凶は俺の隣で幸せそうに笑っている。

「んー！ ベータの時にもすごく並んでただけあって、本当に美味しい！」

本当に幸せそうなもんだ。噴水に腰掛け、行列ができる店のケーキに舌鼓を打つコハルは天使のように可愛らしく、同時に悪魔に見えた。○鉄でデビルカード引いた気分だ。

始まってしまった、はじまりの街食い倒れの旅。今回ばかりはハイドアウトでパーティなんていう誤魔化しは効かなそうだし、覚悟を決めよう。

レベリングがてらに倒したSCAVの装備を軒並み売り払ったが、それでもコハルの食欲には及ばない。ゲームで太らないから、スイーツ食べ放題なのだ。

おまけに、保険で帰ってきたアーマーは耐久値を全損しており、修理費をかなり取られた。金欠で倒れそうだ。

帰ったら、多分使わないであろう初期配布の装備を売るしかない。PP―19あたり、売っても問題なさそうだよなあ……

「メニニュー全網羅かと思った」

「その前に耐久値が無くなっちゃうよ。ほら」

コハルが渡してきたパンを齧って、思わず顔を顰めた。歯が折れそうなほど硬い。

「俺の前歯が耐久全損しそう。ラスクというにも無理があるな」

「うう、せっかくキリトに教わったお店だったのに……」

ホルンカの隠れ名店をキリトから教わり、しばらく朝ごはんにするんだとありつたけ買い込んでいたな。

それが軒並み”乾き切ったパン”に変貌した今朝、コハルの悲鳴で目を覚ます羽目になったのは記憶に新しい。

「まさか悲鳴で挫傷のデバフもらうとは思わなかった。耳がキーンとしたぞ」

「うう、私のパン……ライラおばさんの焼き立てパン……」

ケーキを食べて喜んで、パンが硬くなつて落ち込んで忙しそうだ。俺も金策に忙しくなりそうだしな。

「ふふっ」

そんなやりとりをする俺たちの近くで、1人の少女が笑っていた。黒髪セミロングの槍使いで、どこか薄幸そうな雰囲気をしている。

「笑ったりしてごめんなさい。君たちが賑やかだったからつい嬉しくなっちゃって」

妙に安心感を覚えるような笑顔だ。包容力というか、なんかこう、感じるものがある。

「うるさかった……よね。うう、恥ずかしいなあ」

そう言いながら足を踏むな。見惚れるのは自由だろうが。しかも、踵に全体重を乗せおつて。圈内じゃなければダメーじものだぞ。オレンジプレイヤーになりたいか？

「恥ずかしくなんかないよ。お腹が空いたとかパンが不味いとか、普通の話ができるのつて、いいことでしょ？」

「こんな時だ。ユーモアがないと窒息してメンタルが死んでしまうよ」

食べる？ とカップケーキを差し出すと、少女は少し迷ってから受けとってくれた。

「そういうのが好きなんだ。凄く気持ちが落ち着くから」

「分かる気がする。美味い飯食つてバカやって、最後はゲラゲラ笑つてハイおしまい。理由も意味も、楽しいのそれだけで十分だしな」

リョーハとは大抵そうだ。ネタ装備でボス狩りに行って返り討ちにあつて、次行こう次とゲラゲラ笑つていたのが懐かしい。

それを見ていた仲間も「またバカやってる」と釣られて笑つていたっけ。

怨念マリモ事件とかトラウマランキングTOP10に入ってるけど、面白かったしな。

「なんだか気が合いそう。名前は？」

「レイジ。で、こっちは相棒^{バディ}」

「コハルです」

「私はサチ。2人の噂は少し聞いていたわ。私たちと同一年くらいの女の子で、前線ですごく頑張ってる子がいるって。それに、EFTプレイヤーの人と息の合ってるって話だもの」

確かに息が合ってる。最近では俺の弾切れタイミングを体で覚えたらしく、射撃が止まると同時にコハルが突撃、トドメを刺すスタイルが確立しつつある。

勿論SCAV相手には俺の独壇場だが、モンスター相手ならばコハルがいなければどうにもならない。本当に助けられている。

「昨日フィールドで見かけた時も、思わず見続けちゃうほど凄かった。凄く強いし、信頼し合ってるんだなあって」

「ちつとも凄くないよ。レイジがいなかったら、私は前線になんていなかったと思う。今も、どこかの宿で泣いてたんじゃないかな」

「Woodsのボスぶつ殺した奴がよく言うぜ」

「レイジがハマするからじゃん!」

そんな俺たちを見て、サチはまた笑い出す。

「やっぱり、君たちは面白いね」

「おかげで退屈しない。何なら、サチもパーティ入るか? 笑いすぎで顎が腹筋疲れるけど」

しかし、サチは首を横に振った。

「同じ高校の……リアルの仲間と組んでるんだ。今は別行動だけだね」

「そっか……でも、必要なら呼んで! 私はすぐ行くし、レイジも連れてくるから! レイジはこう見えて優秀なんだよ!」

「おい、普段どう見えてるんだ」

尚、回答については黙秘された。おのれ、後で激辛料理の店に連れて行ってくれようか。

「ありがとう。その時はよろしくね」

「おーい、サチー!」

門の方からサチを呼ぶ声がする。4人組の彼らがパーティメンバーだろうか。「もう行かなきゃ」とサチは立ち上がる。

「楽しかったよ。ありがとう」

「ごちらこそ、またどこかでね！」

俺もお土産にとフレンド申請を送っておく。きつと、また会える日が来るだろう。死ぬとすれば、俺の方が先か。

「さて、腹一杯食ったらまた狩りに行くか」

「そうだね。キリトやリョーハたちも元気かな？」

「Woodsで色んなプレイヤーをキャリアしてるらしいぞ。PMCは兎も角SAO連中はマップに不慣れだしな」

「大変そうだね」

「しかも、序盤で最強格の片手剣が出るクエストあるとかで、順番待ちの列が出来てるらしい。今や死神じゃなくて森の熊熊さんだよ」

BEAR熊だしな、と言ったところでコハルが笑い出す。最初の頃の泣きそうな顔は何処へやら、随分笑うようになったじゃないか。

こつちの顔の方が見えて好きだし、また泣かれたら嫌だなと、理由もわからぬままに思ってしまう。

きつと、生きていれば分かる日が来るのだろう。でも、まだ見ぬ未来よりも生きている今に目を向けてしまうのは、俺が短絡的だからだろうか。

「私たちも負けないように、草原に行こう。またお腹減らさなきゃ」「勘弁してくれ」

また食われるのか。ヘルメット売っ払ったのに、まだまだ足りなそうだ。

1層―11 2層への道

このゲームが始まって1ヶ月が経過しようとしていた。第1層は未だに突破されず、一部にはクリア不可能なんて噂が飛び交う始末だ。

そんな中でもやる気満々、やったれ精神なのがPMC連中。元々ハードコアを売りにして、FPS慣れした玄人を唸らせるのがEFTだ。やはり、プレイヤー層が違いすぎる。

おかげさまで、このツールバーナの円形広場にはやる気に満ち溢れたPMC共が笑い話や下品なジョークを飛ばしていて、気圧されているSAOプレイヤーたちにドン引きされている。

「やれやれ、アホばつかだな」

「それが売りたいの？ 1にも2にもクソ度胸。その中でも頭飛び抜けてるから、お前さんは”デアデビル”なのさ」

俺の隣には、久しぶりに相棒が戻ってきた。森の案内人をしていたリョーハをあるプレイヤーが訪れ、ボス攻略組にスカウトしたのだという。

勿論、俺もきてくれとリョーハに呼ばれ、コハルも付いてきた。置いていかないと約束してしまったからな。

他のPMCたちもリョーハが呼び寄せた。Woods案内をした人たちに片っ端から声をかけ、命知らずどもを集めるとは流石なもんだ。

「PMCの人たち、すごいやる気だね」

「ギリギリの緊張感とか、勝った時の興奮とかの味を占めてるからな」
コアな連中が多いし、ぶっちゃけて言えば俺もそっちの人間だ。強敵を倒しに行く聞いて、静かに心を躍らせている。

いつも一步踏み込んで、ギリギリまで死に近づいて勝利を奪い取る。だから、”命知らず”^{デアデビル}なんだ。

「それに、私たちは近付かなければ食らわないでしょう？」

シノンにはSVDSのチャージングハンドルをカチャカチャ引いて遊んでいる。サプレッサーがついているが、パーツ拾ったのか？

「よう、あんたが”デアデビル”か？」

声を掛けてきた男はUSSECキャップを被った青年で、所属勢力はキャップの通りUSSECらしい。どこか自信に満ち溢れたその笑顔が、何とも眩しい。

しっかし見覚えがある。それで思い出した。あの時の男だ。

「そういうあんたは、チュートリアルの際にリヨーハと呑んでくれたUSSEC野郎か」

「覚えてたか。あいつが”死神”リヨーハとはな。ブラックバーンだ」

彼の差し出す手を握る。その後ろには4人のPMCがいて、1人は彼とそっくりな顔をしている。そういえば、リヨーハが「あいつは兄弟でやってる」とか言ってたっけ。

「レイジだ。後ろのは弟か？」

「レッカーです。ベータの時はどうも」

「どっかでぶっ殺した？」

「いや、最終日の怨念マリモ事件」

……嫌な事を思い出した。リヨーハも顔が引き攣っているし、シノンも無表情に見せて手が震えている。ベータ最終日の怨念マリモ事件は、PMCの間で語り草になっている。

「ねえレイジ、怨念マリモって何？」

「俺たちのトラウマ」

「それは心外ですな、某はベータ最終日を満喫してただけでありま
すぞ」

誰だこの変な口調。そして、この金属で反響するようなくぐもった声はなんだ。嫌な予感しかしねーぞ。

「……レイジ、紹介する。うちのパーティメンバーだ」

ブラックバーンが目を伏せ、横にズレる。その後ろには金属バケツか溶接工のフェイスシールドか、緑の特徴的なヘルメットのPMCがいた。

鉄板にスリットをつけただけのようなフェイスシールドのそれを、俺もリヨーハもよく覚えていた。

「あの時の怨念マリモじゃねーか!!」

「怨念マリモではありません。某はタチャンカと申しますぞ」

悲鳴をあげる俺たちについて行けず、コハルの傾げる首の角度がさらに急になっていく。

しかし周りのPMCたちは気付いた。彼らをベータ最終日に恐怖のどん底に陥れ、「すわ、Tagillaに続く新ボス登場か?」「パッチ0・12・10のキラ店長Factory出張再び!」とまで噂になったこの男のことに。

「てめーか最終日の怨念マリモ!」

「キラ様かタチャンカか紛らわしい格好しやがって!」

「オラ! ツラ見せろツラ!」

タチャンカはたちまち周りのPMCに取り囲まれ、マスカヘルメットを奪い取られそうになっている。それだけ恨みは深いらしい。

「……最終日にさ、薄暗い廃工場で奇声を上げながらマシンガンを乱射するマリモが現れたんだ」

「それがあの人?」

「そう。知らずに行つた俺とリョーハが悲鳴をあげて逃走して、別パーティだったブラックバーンとレッカー巻き込んで逃げ回つたよ」

思い出したくもない。金属製ヘルメットで顔をすっぽり覆つたせいで、変に声が反響していたのだ。奇声も相まって不気味極まりないし、マシンガンを絶え間なく乱射してくるなんて怖すぎる。

しかも、最強のアーマーを着ているせいで攻撃が通らず、不死身かと思つたほどだ。

ログアウトしてからSNSを見たら、こいつのスクショで溢れていたっけなあ……

「よくあんな奴見つけたな」

「Woodsで無口なPMCに出会つてな。『マスカヘルメットをお持ちではないでしょうか?』って声かけて回つてた。高値で買い取つてくれたのはいいが、被つた瞬間アレだ」

ブラックバーンよ、お前がマリモヘルメットを与えたのか。何ということをしてくれた。

「やめてくだされ！ このマスクが無いと、某はまともに喋れないのですー！」

「うるせえ！ 口開くな！」

「お前の奇声が今も夢に出てくるんだ！ 責任とってマリモヘルメツト脱ぎやがれ！」

「バイザーをもぎ取れ！」

奴はまだシバかれていた。圈内だからダメージは入らないし、まあいいか。SAOプレイヤーの視線が痛いけど。

「アレ、止めなくていいの？」

「いいんだ。自業自得だから」

しかし、コハルは気になって仕方ないらしい。あの怨念マリモに追いかけられていないからこそだ。

このPMCは被害者の会だと言っても過言ではないくらいなのだから。あの恐怖がわかってたまるか。

「君たち、そろそろ始めてもいいかな？」

青髪を纏めた騎士風の男は苦笑いを浮かべながら声を掛けてきた。劇場中央にいるあたり、彼が攻略の発起人なのだろう。

「おっと、俺をスカウトした人だ」

「あの騎士さんがリーダーか。おいアホども！ 隊長殿のお話だ、行儀良くしな！ Shorelineの沼地に沈めるぞ！」

「おーこわこわ、レイジなら本気でやりそうだ」

「後で覚えとけよ、マリモ野郎」

PMCたちは落ち着き(?)を取り戻し、各々席に座る。タチヤンカは「感謝いたします、レイジ殿」とか言っているがお前のためじゃない。機会を見て後ろ弾してやろうか。

「みんな静かになっただけ……いつリーダーになったの？」

「なっていない。ベータでやり合っただくらいのもんだ」

「あのマリモさんより、レイジ被害者の会の方が多いいんじゃないの？」

「……奴の方が多と思う」

その議論は青髪騎士の演説によって中断されることとなる。うん、それでよかったんだ。俺が恐れられるのは、敵対だけじゃなくてパー

テイを組んだ奴の宣伝もあるし。

コハルとはじっくり話をせねばなるまい。

「みんな、集まってくれてありがとう！ オレはディアベル！ 気持ち的に、職業はナイトやってます！」

場から笑いが巻き起こる。「ジョブシステムなんてないだろ！」「勇者志望か？」と言う人もいれば、「ナイト様、側仕えにこの傭兵を雇ってください！」と冗談で返す奴もいて、一気に場が和む。

ユーモアで緊張をとき解せるのも、またリーダーの素質なのだろう。それに、プレイヤーたちの反応もいい。掴みは最高だな。

「俺たちにはできない芸当だな」

「そろそろさ。俺もレイジも、口より陣頭に立って鼓舞するタイプだろうが」

そんな無駄口を叩いている間に、ディアベルの演説は続く。爽やかイケメンナイトの語る、ボス討伐の意義に誰もが聞き入っていた。

ここで勝利すれば、多くのプレイヤーにクリアの希望を与えることができる。

確かにその通りだが、逆に敗北は絶望を与える。

開始から2週間、既に3千名近くのプレイヤーが犠牲となっている現状を打破するためにも、目に見える成果が必要なのだ。

場は熱気に包まれ、集まったプレイヤーたちは勝利のためにとその意思を決める。

「ちよおつと待ってんかー」

嗚呼、この雰囲気の水を差す空気の読めない輩がいたか。

トゲトゲ頭に茶色っぽい色合いの男が中央に躍り出る。ロクなことを言わないのだろうと雰囲気を感じ取れた。本当にロクでもないことを言うなら、ボスとまとめて撃ってやろう。

「わいはキバオウつてもんや。ボスと戦う前に言わしてもらいたいことがある。こん中に、今まで死んでいったプレイヤーにワビい入れなあかん奴らがおるはずや」

「何だあのイガグリ親父」

「ドリアンかもよ？ 臭え野郎だしな」

リヨーハめ、毒舌の熟練度はどれだけ上がった？ 面と向かって言って欲しいくらいだ。きつと、あのイガグリ頭りもよくぶつ刺さるだろう。

「ベトコンのブービートラップみたいな頭しやがって」とか言ったのは誰だ。マニアックすぎてわからねえぞ。せめてモヤツとボールにしとけ。本当にモヤツとするし。

「キバオウさん、君の言う奴らとはつまり、元ベータテスターの人たちかな？」

「あとEFTの連中や！」

いや、俺らこそ最大の被害者なんだが。別ゲー買ったら拉致されてここにいるんだぞ？

「ベータ上がりの連中はビギナー見捨てて消えよって、ウマイ狩場にクエストを独占して、その後もずーっと知らんぷりや。EFT連中はええのう、遠距離から安全にバカスカ撃ってレベル上げてるんやから！ 心当たりがある奴おるやろ！」

「いや、アホか」

「やっぱ臭えと思ったよ」

P M Cの方を見てみれば、額に青筋を立てていそうなのが何人かいる。おい、安全装置外したの誰だ。タチチャンカが。

「そいつらに土下座さして、溜め込んだ金やアイテムを差し出してもらわな、共同戦線なんて夢のまた夢や！」

よろしい。ならば戦争だ。

「ひどい……レイジやリヨーハも、キリトだつていい人なのに」

「いるよな、ああいう主語がでかい奴。この状況で対立煽りとかよーやるわ」

リヨーハは怒りを通り越して呆れ返っている。ブラックバースとレッカーは必死にタチチャンカを押さえつけていた。乱射事件でも起こしかねない勢いだ。

「私、抗議してくる！」

「よせ。槍玉に挙げられるだけだぞ」

「でも！」

「そんな震えながら行くのか？」

コハルはキバオウの威圧に震えていた。それに、荒事に向く性格でもなからう。そんな女の子を生贄に捧げるほど、俺らは弱くない。

ならば、アイテムを差し出してやろうじゃないか。お望み通りにな。

「俺に任せろ。荒事といえば傭兵だろ？」

「……読めたぞ。怨念マリモ事件再びか」

「その、穏便にね？」

「あいつが穏便に済ませるつもりならばな」

隅っこの方ではキリトが俯いている。あいつも攻略会議に出てきてこの状況だ。助け舟を出さねばなるまい。

それにSAOとEFTで分裂したらそれこそおしまいだ。攻略どころではなくなる。

「へーへー、申し訳ありませんでしたねえ！」

「ウチのアホどもが四方八方で暴れ倒したようで！」

申し訳なさそうにすると思ったか？ 俺とリョーハは満面の笑みで立ち上がり、堂々と腕を組んでキバオウへ向き合った。

1層―12 怨念マリモ

「おい、何だよあいつら?」

「EFTの連中か? なんか笑ってるけど」

「この状況でよく出られるな」

SAOプレイヤーが何やらヒソヒソ話していて、キリトは驚愕の表情を浮かべていた。

俺に任せろ、とサムズアップしたけど、伝わったかな? 隣のフードを被ったプレイヤーも訝し気にしているし、伝わってなさそうだ。

「誰だよ、このタイミングで出てった奴?」

「どこのアホだ……げ! あのBEARコンビ、死神と命知らずじゃねーか! ホント何考えてんだあいつら!」

「やべーよ、アインクラッド初のPK出るんじゃないか?」

「マリモよりあいつらが先に出るって、予想外だった……」

PMC連中がザワザワしているが気にしない。あと、圈内じゃダメージ入らんからPKにはならないぞ。

「何やジブンら! 悪いっちゆう意識あるんやな!」

「いやはや、どうもアイテムとコルにお困りの様子でしたのでねえ」

リョーハよ、それは「お前貧乏だな」って煽ってるのか? まあ、それでいいんだが。むしろもつと煽れ。

俺たちは不敵に笑みを浮かべながら中央に歩み寄っていく。キバオウは若干気圧されて、ディアベルは俺たちの真意を読み取れずに困惑していた。完全武装の2人組が出てくりやそうだろうよ。

「と言うわけでたっぷり吐き出させていただきます。タチヤンカ! たっぷりくれてやれ! 当てるなよ!」

押さえつけていたブラックバーンが「マジか!」という顔をしながら、俺は手を払って合図してやる。

レッカーも覚悟を決めたのか、目を背けながら手を離し、ブラックバーン共々その場に伏せた。周りのPMCもその場に伏せ、祈りまで捧げる始末だ。

「AAAAAAAAAAAAAAAA! Сука! Бля! аааа

aaaaaa!

顔をすつぽり覆うスチール製ヘルメットから不気味な叫び声が響く。コハルがドン引きしているのがここからでもよく見えるぞ。引き攣った顔も可愛いな。

しかしゆっくり眺めている余裕はない。我らPMCのトラウマがこのアインクラッドの地にも現れてしまったのだから。

「ディアベル伏せろ！」

俺はディアベルに飛びかかり、無理矢理その場に伏せさせる。リヨーハもとつくに伏せていて、棒立ちなのはキバオウだけだ。

「なんやなんや!？」

答えはすぐに出た。タチャンカは軽機関銃RPK―16に95連ドラムマガジンを装填すると、叫びながら乱射し始めたのだ。

確かにここは圏内で、ダメージは無効化される。だが、怒れるマリモが不気味な叫び声をあげて銃乱射など恐怖でしかなかろう。実際怖い。当てるなどは言っただけど。

弾丸が巻き起こす衝撃波、見えない殺意の塊突き抜けていくのを肌で感じる。分間650発の連射速度で95発を撃ち切るのはいつになるのか。早く終わってお願い。

お祈りを始めて数秒程度経っただろうか。何時間にも感じる豪雨が止み、静寂が訪れた。周りのSAOプレイヤーは啞然として、キバオウは腰を抜かしている。これでいい。この空気をぶち壊すには、これしかない。

「ペレザリヤドウカー！」

「ブラックバーン！ タチャンカを止めろりロードさせるな！」

PMCたちがラグビー選手の如くタチャンカへタツクルを繰り出し、その動きを封じる。これで十分なのだ。これ以上やられたら流石にたまらない。

「おい、このマリモを止めろ！」

「タルコフの恥め！ やっぱりそのメット剥ぎ取ってやる！」

よし、タチャンカは片付いた。なんかスズメバチを蒸し殺すニホンミツバチの群れって、あんな感じだったなあ。

「発射レートは分間650発。それで、こいつが撃ち出されるわけだ」
取り出したPRS弾を一発指で弾くと、キバオウは見事にキャッチしてまじまじと見つめる。銃弾を見るのは初めてらしいな。

「それ一発のダメージ量は60しかない。貫通力も低いから、ちよつとしたアーマー持ちの相手にはあつさり防がれて役に立たない。それに、後ろ見てみな」

キバオウが振り向くと、壁には破壊不能を示す警告が無数に表示されている。タチヤンカの弾丸が当たった場所で、水風船をぶつけたかの如く散らばっていた。

「25メートルもない距離から95発撃つてこの散らばりようだ。あんたの胸に撃つたとしても、最初の2、3発以外は全部ハズレ。貫通力も低いからその革鎧に防がれるだろうし、100ダメージも入るか怪しいな」

「100……？ そんなわけあるか！ ボアも倒せへんやろ！」

「そうだよ。レベルが上がろうと攻撃力は弾薬依存、体力だつて440固定さね。SAOでのカスダメは俺たちにとっては致命傷。その癖ボアもワンパン出来ねえ」

実際、ラストアタックはコハルに譲ってるから俺のレベルは高くない。SCAVキルと探索経験値だけで稼いでいるから、まだレベル5だ。

キバオウはあり得ないとでも言いたそうに俺やPMCを見回す。他のSAOプレイヤーも啞然とした表情だ。キリトくらいか、驚いていないのは。

「俺たちはボスの一撃にも耐えられないだろう。剣先カスつて致命傷、直撃は即死だろう。アーマーがどれほど防いでくれるかも未知数。それでも役に立ちたいと集まってんだ。ここの飛び切りの命知らずを筆頭にな」

リヨハは俺と肩を組んで言う。キバオウへではなく、他のプレイヤーたちへ語りかけるように。全く、劇場で役者気分だ。乗ってやろう。

「俺はベータテスターに助けられて、その知識のおかげで生き残れた。

そして彼は後続のため、タルコフのマップに置き換えられたダンジョンに挑み、情報を持ち帰って広めてくれた。最初にビギナーを見捨てたようで、実はもつと多くの人を救ってるんじゃないか?」

俺も俺で、よくもスラスラと出任せが出るもんだ。オペラ歌手にでもなった気分だ。まあ、悪くない。周りのプレイヤーたちも耳を傾けてくれているしな。

「ベータテスターを拒んでどうする? 情報を持つてるなら利用すべきだろう。俺たちでノウハウを確立するまでは、その補助輪に頼るべきじゃないか? 自転車でいきなり補助輪なしに走らないように。転んで痛い目見たくないだろ?」

そうだそうだと声上がる。PMCたちは骨身に染みている。

動く人影を、スナイパーの存在や敵の武器、位置情報の全てが鍵であり、見逃したが故にパーティ全滅の憂き目に遭うことさえも体験しているはずだ。

でもRPGプレイヤーには馴染みが薄いかもかもしれない。だから例えを混ぜ込んだり、語りかけるようにして促すのだ。考えることを。「俺の言いたいことは以上だ。ディアベルさんの指揮の下、俺たちで勝つぞ」

ベータテスターへの不信感や敵愾心を拭れたかというと微妙だが、軽減はできただろうか。

少なくともボールは俺が奪って、ディアベルに渡した。後は彼の采配次第だな。

俺と入れ替わりに、色黒の強面男が「情報ならあった」とベータテスター（恐らくアルゴ）が作った攻略本の存在を話すのだが、俺にはどうでもいいことだった。

※

攻略会議はディアベル主導で円滑に進み始めた。

パーティ編成は少し手間取ったが、俺たち4人にキリトと、その連れであるアスナというフードの少女を加えた6人でフルパーティを編成した。タルコフより1人多いな。

そして会議が終わった今、俺はキリトと噴水に腰掛け、明日のボス

戦に向けて話をしている。勿論、コハル同伴だ。キリトもアスナ同伴だし、文句あるまい。

ちなみにリョーハはシノンに連れられてどこかへ消えた。何かの勝負に負けたらしく、飯を奢る約束をしていたらしい。

「運用方法が確立してないし、とりあえず予備隊兼後方支援つてところか」

P M Cは俺たちを入れて8名。それを2パーティに分け、俺とブラックバーンがそれぞれ率いる。

S A Oプレイヤーを擁するのは俺のところだけで、ブラックバーンのグループ2は5名全員がP M Cで構成されている。

与えられた役目は医薬品を用意して、負傷者発生時の後送及び救護。後はキリトと連携して取り巻きの始末だ。

「重要なのは理解できるけどな。P M Cをダメージソースにするには心許ないし」

キリトはそう言いながら小瓶を差し出してくる。どこかのクエストで手に入ったバターが詰められていて、パサパサのアーミークラッカーに塗ればいい味になる。

それにしても、アスナは随分無口な上に目が死んでいる。ただ、バターを塗った黒パンを齧るときだけは目が輝いているな。

「てつきり、やり過ぎたレイジを左遷したのかと思ったよ」

「見かけによらず毒舌だな!？」

コハルの何気ない一言が突き刺さる。あの立ちは回りの後、席に戻ったらコハルに小声で説教されてしまったのだ。銃乱射はやり過ぎだろう、と。

「私も肝が冷えたわ。やり過ぎよ」

「アスナまで……ああするしかなかったんだ。キバオウが作っちゃったあの空気をぶち壊して作り直すには、みんなの思考を止めて、忘れさせるほどのインパクトが必要だったのさ」

「それが怨念マリモね……早速こっちにも広まってたわよ。タルコフの悪夢、怨念マリモってね」

許せタチャンカ。いや、赦しは乞わなくていいか。奴のストレス発

散も入ってたわけだしな。

それにしても、あちこちでSAOプレイヤーとPMCが立ち話をする姿が見える。銃を持たせてもらって喜んでるSAOプレイヤーや、剣を持って喜ぶPMCもいるし、さっきのが効いたというより物好きただけか？

まあ、いつの時代も男の子は剣とか銃とか好きだもんな。修学旅行で木刀買ったのは覚えてるぞ。

「そんなことより、明日のことを考えよう。キリト、場合によってはコハルをそつちに預けて動こう」

「了解。プランはあるのか？」

「取り巻きは俺らが制圧射撃で怯ませるから、弾切れと同時に突っ込んで仕留めてくれ。コハルが得意としてるから、コツを聞いてくれると助かる」

「わ、私が教えるの!？」

コハルは自分が教える側に回ると思っていなかったようだが、PMCとの連携を一番やっているのはコハルだ。そこは俺が保証しよう。

「そうだ。自信持て。俺と散々やっただろ？」

「……うん、頑張るね!」

決意を秘めた笑顔に心が癒される。コハルマジ天使。精神安定剤になりそうだな。撫でたくなる。

「で、キリト。今回のボスなんだが、負傷者大量発生する可能性があるか？」

ボスのイルフアング・ザ・コボルトロードは体力が減ると曲刀に持ち替えるとかなんとか言っていたが、そんな違いはわからない。当たったら死ぬとしか知らないのだ。

「いや、考え得る限りではないな。範囲攻撃や状態異常はなかったし、ディアベルの作戦ならば問題ないと思う」

「怖いのは仕様変更か」

ただでさえ、SAOとEFTを混ぜこぜという仕様変更がされているのだ。更なる仕様変更があってもおかしくない。取り巻きが銃を持っていたり、とかな。

「ああ。考えられる限りは考えたけど」

「やってみないとわからないか」

俺は天を仰ぎ、溜息を吐く。キリトでわからないのに、俺にわかるわけがない。ぶつつけ本番しかなさそうだ。

「最悪の場合はキリトが指示を出してくれ。勝手知ったる、だろ？」

「わかった。最善を尽くすよ」

「死ぬなよ、友よ」

俺はキリトと拳を打ち合わせる。大丈夫、俺たちは勝つき。出来れば何事もなく。

1層―13 出撃前夜

どうしてだか、俺は夜の円形広場にディアベルと座っている。どうにも俺と話したかったらしくて、キリトたちとの訓練を終えた帰りに声をかけられたのだ。

何でも、大事なことを話しておきたいと。

「悪いね、疲れているところを」

「いいいえ、騎士様のお呼びですからね」

飲みますか？ とウオツカを差し出してみる。俺は酒は飲まん。コーラなら飲むけどな。

ディアベルはウオツカを受け取ると、蓋を開けて豪快にラツパ飲みしてみせた。中々いい飲みっぷりじゃないか。

「ふう、アインクラッドにウオツカがあるなんてね」

「タルコフのアイテムですけどね。ウイスキーもありますよ」

「今度探してみるよ。カクテル作れるか試してみたいからね」

「モロトフ・カクテル炎瓶を？」

そんな冗談で笑い、気を解す。彼もリーダーとして背負っているものがあるのだろう。少しくらい飲んで、気を休めて欲しいものだ。

「実は、オレは元ベータテスターなんだ」

ディアベルの独白に耳を貸しつつ、コーラの缶を傾ける。今は、静かに聴くべきだろう。

「今とは名前も見た目も、プレイスタイルさえもが違う。だけど……第2層より先の景色を見てきた。それがオレなんだよ」

ツمامミになるかは分からないが、キビナゴの缶詰を開けて差し出すと、ディアベルは切り身をひとつまみ口に放り込み、またウオツカを呷る。

ただの酔っ払いの世間話。明日にはきつと、スッキリ全てを忘れているはずだ。

「攻略会議でキバオウが話したことは正しいよ。デスゲームが始まった時、オレは……本当ならみんなを助けるべきだった」

「でも、1人の手が届く範囲は狭い。そうでしよう？」

俺だってコハルくらいしか守れない。むしろ、俺が守られたいくらいなのだ。キリトやクラインでさえ、自分や旧友を守るのに精一杯なのに。それなのにどうして彼を責められようか。

「……その通りだ。オレは失った命に責任を持ってない。だから、仲間にも勘がいいと嘘をついて、誘導するしか出来なかつたんだ」

それは懺悔のような独白。ベータテスターに助けられたと、拒むべきではないと言い放った俺だからこそ話せる真実だというわけか。

「それで十分でしょう。自分も守れないままに誰かを救うなんて、無理な話です。でも、今はもつと多くのプレイヤーを救おうとしている。違いますか？」

心肺蘇生だって、救助する人に危機が差し迫った場合は中止することが許されている。自分を守れて初めて、誰かにその手を伸ばせるのだ。

弱いままなのに、誰かのためにその命を危険に晒せなど、誰に言う権利があるだろうか。

それに、助け方は一つじゃない。戦う理由が一つでないように。

「君と話していると、教会で懺悔してる気分になるよ」

「なら、PMCからクレリックにジョブチェンジしてきましょうか？」

「ははは、悪くない」

ディアベルはウオツカを飲み干すと、スツと立ち上がる。その顔にさっきのような迷いはなく、清々したような顔をしていた。

「ここを攻略したら、今度はタルコフに来てくださいよ。俺たちが見てきた地獄を、たつぷり味わわせてやります」

「あのマリモに追いかけられるのは、ごめん被りたいなあ」

そりゃ同感だ、とこの日1番の笑い声を上げた。

※

キリトの教えに従い、農家の2階を借りたのはいい選択だった。ベッドはハイドアウトと違ってフカフカで、部屋もデカくて眺めはいい。何より、風呂付きなのだ。

「で、どうしてこうなった？」

2部屋しかないから、当然コハルとアスナが相部屋になると思っ

いたのだが、コハルは俺の部屋の方に転がり込んできた。

消去法でキリトはアスナと同部屋という気まずい状況も巻き起こる。

リヨーハに助けるとメッセージを送ったが『俺野宿、リア充爆発しろ』と返ってきた。どこも満室で、シノンしか宿に泊まれなかったそう。

「サツパリしたよ、やっぱりお風呂はいいね」

「そ、そうか」

ベッドに飛び込むコハルをよそに、俺はいつものように壁にもたれて座り、銃を肩に立てかける。

流石に同衾するわけにはいくまい。というかコハルは何を考えているんだ？

「さつきね、アスナと話してきたんだ」

そう言いながらコハルはベッドを下り、俺の隣に座る。柔らかいベッドに寝てればいいのに、どうしてわざわざここにきた。

「ガールズトークってやつか？」

「そんなもんじゃないよ。このヴァーチャルの、偽物の世界をどう思うかって言われたの」

「偽物、ね」

自分の手を見してみる。本物とそんなに変わらない手で、細かいところは確かに違うのかもしれないが、こうして自分の体の一部として動かせる。

この世界が何かの演算システムに動かされているとして、ならば現実の世界は何に動かされているというのか？ 哲学的すぎて、分からなくなりそう。

「レイジはどう思う？」

「さあな。誰がそんなこと決めるんだ？ 俺はここにいて生きているんだ。本物も偽物も関係ないさ」

「そうやって割り切れるの、見習いたいよ」

「現実逃避してるだけかもよ？」

コハルは笑う。そんなにおかしいことを言った覚えはないが、まあ

いいか。

なんて考えていたら、コハルがその頭を肩に乗せてきた。重みが、その温かみが伝わってくる。確かにそこにいて、感じられる。それがどうして偽物と断じられようか。

「私ね、自分が攻略組にいるなんて考えてもいかなかったよ。きつと、1日中何処かに引きこもって泣いていて、帰りたいてって嘆いていたと思う」

そういう人間も少なからず存在するし、それを臆病だと詰る気もない。俺はただ、最期の瞬間まで自分でありたかったから戦った。それだけの話だ。

デアデレル 命知らずのレイジ。それがこの世界での俺で、ここでしか誇れない名誉だから。

どう答えようか迷う俺の手がコハルの手に包まれる。華奢で小さな手なのに、剣を握って今日この日まで生き残ってきた強い手だ。

その手が、指が俺の指を絡めとる。その意味がわかっているのか？ その顔を見て真意を確かめようにも、肩に頭を乗せられたせいで上手く見れずにいた。

「だから、レイジには感謝してるんだ。私を連れ出してくれて、勇気を与えたから。突っ込む時だって、レイジが守ってくれているって思うと怖くないんだよ」

「そりゃ買い被り過ぎだ。俺じゃなくても、キリトやクラインがいた。俺がいなくても、コハルはここにいたと思う」

俺はただトリガーを引いただけ。その役目は誰だつていい。現実と同じで、俺の代わりはいなくても上位互換はいくらでもいる。いつだってそうだったから。戦わなければ、戦っても何も得られないから。

「……それじゃ、だめだよ」

コハルの手に力がこもる。少し痛いくらいに。悪い方向にいく思考を無理矢理中断させるような、心地よい痛みがする。

「レイジだったから、今の私がいるんだよ。ちよつとおバカで命知らずで、私を泣かせてさ」

「最初2つは兎も角、最後はぐうの音も出ねえわ」

シウトウルマンに殺されかけた時、コハルはどれだけ俺のために泣いたのだろう。

現実世界で俺のために泣く奴なんてそうそういない。両親でさえも。そんな人が仮想世界（バーチャル）にはいるという事実が、どうしてこんなに嬉しいのか。

「でも、強くて優しくして……いつだって、私に夢を見せてくれる。そんな最高のパートナーだから」

「夢？」

いつそんな夢を見せただろうか。俺はその日を戦い、生き残っているだけなのに。耳に心地いい言葉の一つ、聞かせた覚えがない。

「うん、夢。レイジと一緒になら100層も突破できるって、そんな夢を見てる。私はその後ろじゃなくて、隣で肩を並べて戦うの」

「コハルが隣に、か。いい夢だ。俺も同じ夢を見れたらいいんだけどな」

でも、きつとそうはいかない。俺たちPMCのステータスには限界があつて、どこかで前線を退く日が来るだろう。

最後の瞬間に俺は立ち会えない。そこに立っているのはキリトやコハルたち。悲しいけれども、同じ夢を見るには壁が高すぎる。

「見えるよ。レイジが見せてくれてるんだから。私も、置いていかれないように頑張るよ」

「……ホント、こんな俺のどこがいいんだか」

どうしてこうも、俺を信頼してくれるのだろうか。どうして、こんなに嬉しいのだろうか。

「明日、一緒に生き残ろうね。ボスも倒してさ」

「ああ、暴れ倒してやろう」

コハルは漸くベッドへ戻っていく。俺も寝ようかと思つたが、コハルに腕を掴まれた。

「寝るまで、手を握ってて」

「甘えん坊か？」

「やっぱり怖いからね。だから、お願い」

ベッドの縁に腰をかけ、そつと手を握る。ついでに頭を撫でてやると、嬉しそうに微笑んだ。この可愛らしい笑顔を、もうしばらく見守っていたい。そう思えた。

睡魔がやってきて、その笑顔を覆い隠す瞬間まで、俺は静かにコハルを見守っていた。

もう少しだけ。斃れるのを先延ばしにしても、一緒にいたい。案外、俺は寂しがりようだ。

1層―14 犠牲の覚悟

「コハル、スイッチ！」

「行くよー！」

今日は何だか調子がいい。コハルの「おはよう」は破壊力が高かったからな。バフがついたのだろう。

手を繋いだまま寝てしまったから、結果として添い寝になっていたのも来るものがある。

そんな調子で迷宮区のモンスターどもを蹴散らしたのは何回目か。後ろでSAO連中が舌を巻いているのが見える。

俺がモンスターを怯ませ、そこにコハルが突っ込んで仕留める。仕留めきれない時は俺が銃撃したり、トマホークで頭をかち割ってトドメを刺す。

流れるような動き、阿吽の呼吸。初日からずっと組み続けてきたおかげか、最高のチームプレイに仕上がっていると思う。

「おいおい、レイジの相棒は俺だったのによ。コハルにお株奪われちゃった」

「なら、リヨーハには私のスポッターをやって貰おうかしら」

「シノンの？ 喜んで。距離観測から護衛、身の回りのお世話まで」

「じゃあ、焼きそばパン買ってきて」

「そりゃパシリだー！」

リヨーハは再就職先を見つけたらしいし、心置きなく暴れられる。そらそら、次だ次。

「レイジ、弾を温存しろよ。ボス用まで使うな」

「バックいっぱいにあるし、何ならタチャンカが分けてくれるさ」

「だどいいが」

まあ自由にしろとリヨーハは苦笑いを浮かべる。そんな悲しそうな顔をするな。タルコフのマップになったらお前とのバディ復活だ。

そうして俺たちはボス部屋の前に辿り着く。ここまで損耗はなし。弾薬使用量は想定範囲内。予備弾薬をマガジンに突っ込んだら、いよいよ攻略開始だ。

「レイジ、準備はいいかい？」

振り向くと、ディアベルが立っていた。俺たちの準備状況を確認に来たのだろう。

「後2分。それで済みます」

「分かった。突入したら先制攻撃を頼むよ。打ち合わせ通りにね」

「勿論です。勝ったらまたウオツカをご馳走しますよ」

「はは、楽しみにしてるよ」

ディアベルと拳を打ち合わせる。昨夜に打ち解けてみれば、中々いい人ではないか。個人的に仲良くしたい。

そんな個人的友誼もあるが、SAOとEFTの共同作戦であるということを強調するのもまた目的だ。

弾薬を詰め込んだマガジンをポーチ入れ、立ち上がる。そんな俺の腕をコハルがつつく。

「ねえ、レイジ」

「どうした？」

「これ、プレゼント！」

コハルが差し出してきたのは緑のヘルメット。その辺のクレートからドロップしたのだろう。

6B47ヘルメットはロシア軍主力ヘルメットで、タルコフにおいてはアーマークラス3、頭頂部と後頭部、耳を保護してくれて、序盤で購入できるヘルメットのひとつだ。

「おいおい、持ち帰って売った方がいいんじゃないか？」

「レイジ、いつも帽子だから心配なんだよ。ほら、被って」

そう言うなら仕方ない。お気に入りのBEARキャップからヘルメットに変えてみる。頭に重量物があるのは好きじゃないんだけどな。

「ディアベルさん！ PMCは準備完了、命令を待ってる！」

「分かった！ さあ、行こう！」

ディアベルの掛け声でボス部屋の扉は開かれた。

先陣を切るのは俺たちPMCで、入ってすぐにバックパックを放り投げ、左右に散らばって射撃を始める。SAO組の体勢が整うまで、

制圧射撃でボスを拘束するためだ。

「横隊展開！ 準備できた奴から撃て！」

「接近するなよ！ 奴を拘束できればそれでいい！」

「2グループは入口付近で救護体勢を整えろ！ 制圧は1グループに任せろ！」

ブラックバーン率いる2グループが入口付近の一角にバツクパツクを置き、周辺を固める。

その中には回復アイテムがこれでもかと詰められており、重傷者発生時の支援体制を整えている。

「レイジ、SAO隊突入するぞ！」

「了解、1グループ射撃中止！ 下がれ！」

ディアベルが叫んでいる。準備ができたならば、次の段階に移行するでしょう。キリトを援護して取り巻きの始末、あとボス攻撃隊に負傷者が出たら救助。やること盛りだくさんだな。

※

攻略は順調に進んでいた。俺たちグループ1が救援に行くような事態も起こらず、グループ2は下がってきた隊のデバフ解除や水を渡す程度。あまり役目がないのはいいことなのだが、どこかもどかしい。

「このまま押し切っちゃまうんじゃねえか？」

リョーハは壁際に身を寄せ、空のマガジンに弾薬を込めながら漏らす。それはそれで良いことなのだが、何となく嫌な予感がする。上手くいきすぎているのだろうか？

「キリト、ベータの時もこんな感じか？」

「ああ。ディアベルは随分手慣れたるな」

そりや、彼もベータテスターだからな。とは言え俺の口から言うことではない。男同士の腹を割った話を、他人に話すべきではなからう。

「問題は武器チェンジか？」

「情報通りなら問題はない。範囲攻撃はしてこないし、タゲを取つてる人が気をつければいいんだ」

「でも、戦場の霧は立ち込めている」

歴史を見てもそうだ。作戦は完璧なのに、敵の動き、気象条件や環境に未知の要因が加わり、予想外の事態を引き起こす。

情報だつてそうだ。敵は情報を隠蔽したり偽装して、混乱を起こさせようとする。25%集まれば作戦を実行していいと言ってくるんだ。

偽装、それがどうにも引つかかる。何か隠しているのだろうか。実際、このゲームがデスゲームであるってこともしばらく隠してたわけだし。

「……リヨーハ、動けるように準備しろ。何だか嫌な予感がする」

「俺はいつでも。出来てねえのは死ぬ準備だけだ」

「レイジ、何かあったの？」

「まだ勘だ。何かこう、側面に回り込まれてるんじゃないかって不安になるような……」

自分の横が遮蔽されていない時に限って、何かに狙われているような感覚がするのだ。レーザーを当てられているようで、嫌な気分がする。

そして、それは往々にして現実のものとなる。

そうじゃなきゃ、手慣れのMMORPGプレイヤーたちが1ヶ月も突破できない訳がないのだから。

「気を付けろ！ ボスが武器を変えるぞ！」

誰が叫んだか。コボルトロードはそれまで持っていた剣を捨て、腰から新たな武器を持つ。細身の片刃で、緩い湾曲を描くそれは、イメージの曲刀とは違っていた。

曲刀ってこう、海賊のサーベルとかアラビアンナイトのカトラスみたいなイメージなんだが、あれじゃ時代劇の刀だろう。

「まずい、アレは……！」

本当、嫌な予感ってこんな時にばかり当たるんだよな。

しかも、ディアベルが突出してしまっている。功を焦ったな。そういう奴は大概最初に死んでいき、作戦の綻びとなりうる。

考え得る中でも最悪のパターンが来たわけか。

「情報が違う！ 全力で後ろに飛べ！」

「全グループスタンバイ！ 重傷者発生に備えろ！」

キリトの叫びは届かない。コボルトロードの横薙ぎがディアベルを含めて6名を巻き込み、ガラスが飛び散るようなエフェクトが現れた。

全員生きてはいるようだが、ダメージが大きい。しかも、その場に倒れて動けなくなっていた。頭の上を星のエフェクトが回っている。

「まずい、スタン攻撃……！」

「スーカ……！ キリト、手を貸せ！ 救助の間、奴の気を引けるか!？」

キリトは俺の顔を見て、覚悟を決めたように表情を引き締めた。このままでは攻略組が瓦解してしまうし、最悪死傷者が出る。その意味をキリトも理解してくれたのだろう。

現実、残った攻略組の連中は統率を失い、怯んで逃げ惑う始末なのだから。こんな時こそ、俺たちが行かなければ。

「分かった。俺とアスナで引き受ける」

「頼むぜ。グループ1、行けるか!？」

「俺はいつでも！」

「私も行けるわ」

リョーハとシノンは大丈夫。問題はコハルか。

彼女が恐怖を感じているのが伝わってくる。無理に突っ込ませて、ボスの前で立ち止まられたら二次災害になり得る。連れて行くべきではないな。

「コハル、グループ2の直掩についてくれ。追って指示を出す」

「待つて、レイジ……」

「突撃支援射撃、撃て！ 行けキリト！」

コハルの声を銃声が掻き消す。ごめんな、約束守れそうにないや。置いていかないって言ったのに、俺はまた行っちゃまう。

キリトとアスナが突っ込んでいった。いいぞ、ボスの気を引いている。上手く負傷者から引き剥がしてくれよ。

「シノン、そのまま狙撃頼んだ。リョーハは俺と！」

「無茶苦茶するわね」

「性分なもので」

「右に同じく、な」

「リヨーハは私が買い取ったんだから、ちゃんと返してよ」

元々俺の相棒なだけどな。まあいいか。リヨーハも満更じやなさそうだし、傷物にして返すわけにもいくまい。

「任せろ。行くぞ相棒！」

「おうよ、相棒！」

いつも通り。リヨーハが正面から突っ込み、俺が右側面大回りで挟み込む。お互いを、味方を射線に入れないように位置を取り、2方向からの攻撃で敵を混乱させる。

中々に効いた。ボスはリヨーハを狙おうとしたら俺に撃たれ、ヘイトをこつちに移せばリヨーハに撃たれる。シノンの狙撃も加われば、ボスは狙いを一つに絞りきれなくなる。

そして最後は、キリトとアスナが突っ込んできて痛烈な一撃をぶちかます。その一撃は俺たちの射撃よりも大きく、ヘイトが一気にキリトとアスナへ向いた。

「今しかねえ、ブラックバーン！ 4人出して負傷者を収容しろ！」

「クソツタレ、やっぱり無茶しやがって！ レッカー、コハル、ここは任せた。残りは俺と来い！」

ブラックバーンが来てくれて、負傷者の回収が始まる。俺とリヨーハも合わせれば、一気に負傷者を回収できるはずだ。作戦通りならば、そうなるはず。

「ほら、もう大丈夫だ」

「すまない、借りができた」

「帰ったら奢れ。それでチャラにしてやるよ。レイジ、俺たちは下がる！」

「先行け！」

俺はリヨーハとギリギリまで援護射撃をして、ブラックバーンたちが負傷者を連れて行くのを見届ける。彼らが安全圏まで下がったら、次は俺たちだ。

「リヨーハ、先に！」

「任せた！」

リョーハはディアベルを連れて行くとしたが「仲間を先に」というものだからもう1人を先に連れて行く。

「キリト、最後は俺だ！ そのまま頼む！」

射撃をやめてディアベルを担ぐ。スタン状態がまだ回復せず、自力では歩けないようだ。さっさとここからおさらばしよう。

「助かった、おかげで仲間を死なせずに済む」

「リーダーが先走ってどうするんですか。今度は奢ってもらいますからね」

「はは、レイジからウオツカ貰ったし、オレはウイスキーかな」

「酒飲まないから、コーラで頼みます」

何か背中に感じる。こう、ビリビリと電流が流れるような、嫌な感触だ。何かが訴えかける。何かが来ていると。

「レイジ、そっちにヘイトが向いたぞ！ 逃げろ！」

キリトの叫び声が答え合わせになった。何が気に触れたのだろうか。ボスのヘイトが俺に向いているのではないか。

キリトが被弾してヘイトがリセットされたか？ いや、そんな考察は後回しだ。

みんなは救護や負傷者の搬送に手一杯で、射撃支援は望めない。

逃げようにも全く距離が開かず、逆に縮んでいく。タルコフの重量システムのせいだ。筋力スキルが低いのに大の男を抱えているせいで、Critical over weightに陥っている。

移動速度は3分の1にまで低下して、スタミナ消費は増大。そのくせ回復しないからまともに走れない。逃げられるわけがなかった。

ディアベルを置いて逃げれば俺は助かる。でも、それをやったが最後SAOとEFT間の亀裂は決定的になる。そうならば攻略は夢のまた夢と消えてしまうことになるだろう。

俺1人のために、全体を危険に晒せるものか。

「レイジ、逃げて！」

ボスの横薙ぎが来る。退避は不可能。このまま2人で死ぬか、どちらかが生き残るか。答えは決まっていた。

「……ディアベル、みんなと……コハルを頼む！」

「待て、何を！」

「うらあああああ！」

問答の余裕はない。その場で一回転して勢いを乗せ、担いでいたディアベルを投げ飛ばす。

大した距離を飛ぶわけじゃない。それでも、攻撃範囲からは逃れられたはずだ。ディアベルが無事ならば、また攻略組は団結できる。EFTしか纏められない俺より、彼が生き残るべきだ。

バランスを崩して片膝をつく。ディアベルを投げた姿勢のまま崩れ落ち、俺は手を伸ばした。

コハルが手を伸ばしている。その手を握れば、きつと引っ張ってくれただろう。あの温もりを、もう一度味わえただろう。でも、あまりにも遠すぎた。

その手を握れたならば、俺自身が救われただろうに。

ごめん。約束、破っちゃった。

叫び声が聞こえた。みんなが俺を呼んでいる。でも、いいんだ。俺は役目を果たした。覚えていてくれ。命を捧げた、1人の兵士のことを。先にヴァルハラで待ってるから。

頭頂部を強い衝撃が襲い、視界が霞む。何回転したのだろう。目まぐるしく変わる視界の中、俺は地面を見つめていた。

1層―15 生還者

私は手を伸ばした。届くと信じて。

ディアベルさんを投げたレイジはバランスを崩して、その場に片膝をついていた。そんな不安定な姿勢からは走り出せなくて、誰かの助けがなければ逃げられない。

でも、手は届かない。10メートル先は遠すぎて、悲しそうに笑うレイジの顔を見つめるのが精一杯だった。

ボスの剣がレイジの頭を斬りつける。鈍い金属音と火花が散り、吹き飛ばされたレイジは倒れて動かない。

レイジのHPはたったの440。攻略組が行動不能になるようなダメージを耐えられるわけがない。HPバーなんて、見る価値もない。

「嫌……レイジ、レイジ……」

「嘘だろ……レイジ！ クソが、この野郎やりやがった！」

「殺せ、そのクソツタレコボルト野郎を殺せ！」

「Сука Блядь！」

EFTプレイヤーが怒り、攻撃する中でディアベルさんは救出された。でも、レイジには誰も駆け寄らない。死んだ人に割ける人はいないってことかな。嫌になるほど合理的すぎる。

私が行こうにもボスが邪魔をする。怖くて足が震えて、武器があるのに進めない。

レイジの顔が、思い出がよぎって、視界が霞んでいく。私はまた泣いているのだろう。あの時のように。

レイジは武器を持ってボスに挑んだ。それなのに私は、また立ち止まっているというの？

「また、生きてるんだよね？」

HPバーを見る勇気がない。現実を受け入れられると思えないから。見てしまったら、私はここに帰ってこられないかもしれない。

戻らなくてもいいかな。レイジが見せてくれた優しい夢を思い出しながら、あのハイドアウトで眠っていようかな。思い出の毛布に包

まれて。

そう思っても、どうしても見てしまう。まだ希望があるって信じたいから。

その答えは、名前の下の緑色が教えてくれた。

「え……バグ？」

涙を袖で拭って、もう一度見てみる。確かに名前はレイジで、リョーハでもシノンでもなくて……その下のバーは緑色。僅かにドット一つ削れているだけだ。

スタンを示す星のマークと、渦巻みたいなマークが出ているけど、死んではいなかった。

「リョーハ！ レイジが！」

「なんだ!? 命知らずが命なしになったの見ただろ！」

「違うの、HPバーを見て！」

「あ、忘れてた」

後で聞いたけど、EFTは味方のHPを見ることは出来ないから、リョーハもシノンもすっかり忘れていたらしい。

そして、緑のバーは表示バグじゃないって証明された。2人が叫び出したから、言われずともわかっちゃった。

「なんで生きてんだアイツ!？」

「知らないわよ！ 回収しないと！」

「わかってる！ 野郎ども、レイジを回収するから援護してくれ！」

「奴は生きてる！ 生きてるぞー！」

「ウツソだろおい!？」

「どうやって生きてるんだアイツ？」

「メットだ！ 珍しく被ってたメットで弾いたんだ！ 信じられねえ！」

「ハラショー！」

たちまちEFTプレイヤーが活気付いて、レイジからボスを引き離そうとしてくれた。キリトとアスナも加わって、足止めできてくれる。

「援護する、行けコハル！」

「うん！」

リョーハが、シノンが助けてくれる。ボスと戦うのはまだ怖いけど、いつか、私もキリトやアスナみたいに戦いたい。

そうすれば、傷付く人が減るはずだから。今度こそ、あの手を引く張れるようになりたいから。

※

ぼやけた視界に光が戻る。死んだと思ったのに、なんで俺は生きている。どうして、ダメージ表記は緑のままなのだろう。

天井を見上げていて、頭は何か柔らかいものに乗せられている。覚えがある。降り注ぐこの暖かい雨でさえも、俺は知っている。

俺は死んだはずだ。ボスに頭をぶった斬られて。なのにどうして生きていて、コハルの膝に頭を乗せられているのだろう。

「……ばか」

「……ごめん」

そつと手を伸ばし、コハルの頬に触れる。指先に触れる涙は暖かくて、確かに生きているんだと感じ取れた。

「ボスは？」

「終わったよ。キリトが倒した。ディアベルさんも、攻略組のみんなも無事」

「そっか」

あの後、キバオウはまたキリトに突っかかったらしい。情報を隠してだのなんだのと。

それでキリトは「ベータテスターなんて素人ばかり、上まで行ったのは俺だけだ」的なことを言い放って汚れ役を買って出たとか。ヘイトを1人で持っていった訳か。

それに、ディアベルも自らがベータテスターだと明かした後、攻略組から一度身を引くことを宣言したようだ。攻略組の旗頭でいて欲しかったから助けたんだけどな。個人的な友誼もあるけど。

そして、ディアベルの後継であるリンドは”ドラゴンナイト・ブリゲート(DKB)”、キバオウは”アインクラッド解放隊(ALS)”結成を宣言し、それぞれ違う方針を掲げて2層へ向かっていった。そ

れが、俺が気絶している間の顛末らしい。

「また怨念マリモさんが叫びながら撃ちまくってたよ。みんな、レイジの仇を討て！　ってさ」

「明日には、アルゴが」マリモ、怒りのボス攻略、とかタイトルつけて新聞にしそうだ」

コハルの手が頬に添えられる。そして、軽く叩かれた。

「約束したのに」

「こうするしかなかった、なんて言い訳か。ごめん」

「財布が空になるまで食べ歩きだからね。キリトが2層には高いけど美味しいケーキがあるって言ってたから」

文句はなしだ。俺が大暴走してやらかしたのだから。戦略的判断といったところで、約束を破ったことに変わりはないから。

「わかってるさ。それに、生き残れたのはコハルのおかげだからな」

ヘルメットを外してコハルへ差し出す。あまりにも低確率すぎて忘れていたシステム。コハルがこれをくれなければ、その奇跡は起きなかった。

「浅い角度で攻撃が入った時、跳弾判定が入るんだ。コハルがメットくれなければ跳弾判定なんて起きないから、間違いなく即死してた」ヘルメットには跳弾確率が設定されており、浅い角度で入った弾を稀に弾く。

2000時間近いプレイ時間で2〜3回程度しか（半分くらいヘルメットしていないことを加味しても）起きたことがない。どうやら俺は幸運の女神ヘルに救われたらしい。

近接攻撃にも跳弾判定が発生するなんて聞いたことがないけどな。どうやら変更点のようだ。単に剣に貫通力がなくて、ヘルメットそのものが防いだ可能性もあるけど。

「そっか、バランス崩して膝をついてたから」

「そ、頭を引っ掛けるみたいに当たったらしい。スタンと挫傷食らって動けなくなったが」

のそりと起き上がる俺へコハルが飛びついてきた。胸に顔を埋めても、プレートキャリアのせいで硬いだけだ。

それでも、声を上げて泣く彼女を撫でていることしかできない。胸が張り裂けそうになり、苦しい。そして同時に、生きていて良かったと思える。

俺のために泣いてくれた、それが嬉しかったから。そして、その顔を笑わせるチャンスを得られたから。

「よう、この大馬鹿野郎。女の子泣かせた気分はいかが？」

リョーハはそう言っただけで肩を叩いてきた。この野郎、なんで面白そうに笑ってやがる。

「最悪だな。俺もすっかり悪役だ」

「2層スイーツ食べ放題ツアー決定だな。こここの連中に感謝しろよ。お前が生きてるってわかった瞬間、救出のために必死に突っ込んで行ったんだから」

SAO組はさつさと上に行くか、街に戻っていた。それなのに、PMCたちと見知った青髪騎士は俺が起きるのを待っていたらしい。

「レイジ」

この爽やかな声がよく通って聞こえた。集団の中から出てきたディアベルは、何やら神妙な面持ちだ。

まあ、なんとなく理由はわかるけど。

「すまなかった」

頭を下げられるところまでは予想通り。功を焦って突っ込んで、その尻拭いをした俺が死にかけたのだ。これで気にしないような男なら、そもそも旗頭になどなれるわけがないしな。

「気持ちわかるけど、ディアベルさんが死んだら総崩れ。下手に見捨てりゃSAOとEFTは真つ二つ。自分の価値を天秤にかけ直した方がいいですよ」

最も、その地位は後継者たるリンドとかいう奴に譲ったらしいけど。

「……面目もないが、その言葉はそのままレイジにも返すよ」

「そうだぞこの大馬鹿が」

リョーハにまでも怒られた。コハルは腕に力をこめてきているし、どうも逃げ場はないようだ。

「分かったよ。次はもうちょい気を付ける」

「お前は気を付けて突撃するじゃねーか。コハル、ちゃんとリードつけておいてくれ」

「2層で首輪とリード買ってくるよ」

「俺は犬か!?!」

そんなことをしたら「S Mプレイしてる変なプレイヤーがいる」と有名人になるだろうが。そんなのはごめんだ。断固阻止してやる。

「痴話喧嘩はその辺にして。そろそろ上に行きたいわ」

「おい、痴話喧嘩って何だ」

シノンめ、サラツと爆弾を落としてきやがる。変な噂が立ったらどうするんだ。

「レイジ」

ようやく泣き止んだコハルは俺と目を合わせる。まだ不安そうな顔だけど、その瞳には決意を宿しているように見えた。

「私、レイジの隣で戦えるよう頑張るから。パートナーって、胸を張って言えるように」

「今のままでも十分なんだがな。期待してるぞ」

「うん!・でも心が傷ついたから、ケーキを食べて癒したいなあ」

「……今度は何を売るかね」

切腹前の武士のような面持ちで立ち上がると、P M Cたちは俺を見て待っていた。いつの間に俺が指揮官になったんだ。ほんと、ベータで暴れすぎた。

「これから2層へ向かう。補給が足りないやつは帰還、余裕のある奴はついて来い」

「おいおい、それだけか?」

そうだそうだとP M Cたちが声を上げる。ブラックバーンめ、煽りやがって。どうせ、俺の寝てる間になんか画策してたんだろ? D K BとA L Sに触発されやがって。

いいだろう。少しくらい表舞台で暴れてやる。振り回されて泣き目を見るがいい。

「なら、現時刻を持って俺たちもチームを作ろう。E F TもS A Oも

ベータも関係ない、同じ目的のための部隊を」

待つてましたと声上がり、タチャンカは「y pa!」と雄叫びをあげる。やめろ、声が反響して不気味すぎる。オーソイダーが美声に聞こえるレベルだぞ。

「で、チーム名はどうする？ どうせそのうちギルド結成するんだろうし、まともなのを頼むぜ」

リョーハよ、貴様は副官としてこき使つてやる。俺のことを祭り上げたのを後悔するがいい。覚悟済みなのだらうけど。

「タスクフォース・アトラス。これでどうだ？」

「天を支える神ね。いいんじゃない？ リョーハが考えるよりまともそうだし」

「それどんな基準だよ！」

リョーハとシノンが騒いでいる横で、俺はディアベルに向き合う。どうしても必要だからだ。

「ディアベルさん、俺たちと来て欲しい。より多くの人を救い、導くために」

最初に見捨てた人たちの事を、今からでも助けられる。ディアベルもキリトも、そんな負い目があるなら今から取り返せばいい。

差し出した手を握り返され、拍手が巻き起こる。総兵力10名。それが、俺たちアトラスの始まりだった。

幕間 ピクニックはもう勘弁

Raid#45

Day 4

BEAR Operator "Rage"

Task Force "Atlas"

Aincrad layer1 "Woods"

「……コハル、これで何回目だっけ？」

「もう忘れたよ。同じ道ぐるぐる回ってるもんね」

「シュトゥルマン25キルのタスク、半分終わりにかけてるんだけど。地雷原を裸足で走ろうかな」

「やめて。死んじゃったら嫌だよ」

そうは言うけど、俺とコハルの目は死んでいるんだよなあ。その目の前ではキリトがぐったりしたりしゃがみ込み、全ての元凶であるアスナは地面と睨めっこしていた。

ここは初めてコハルとWoodsに來た時スポーンした廃村近く。勿論、お目当ては魔法陣。

2層攻略中、アスナはひとつの武器を使い続けることに価値を見出したらしい。それで主力に相応しい武器を探していたところ、コハルのレイピアが目にとまったそうだ。

出所を答えたところ、俺やコハル、リョーハにシノンと勿論キリトがWoods周回に付き合わされる羽目となり、交代交代で地獄ランを続けていた。

尚、キリトのみ皆勤賞である。目覚めさせたのはお前だ。責任とれ。

「うーん、要らないのしか出なかったなあ」

「この大馬鹿、そのドキュメントケースは高額アイテムだ！」

アスナが放り投げた革製のポーチをなんとか受け止め、バックパツクへ仕舞う。

中には高額アイテムの”Terra Grope Lab access keycard”が入っていたが、こっそり受け取ってお

こう。コハルとの食事代だ。

「でも、目的の物じゃないから……」

「これ売って、その金で作ればいいんじゃない？」

キリトに目をやるが、首を横に振るばかりだ。どうも、この品質と強化ランクは金を出して解決するような代物じゃないらしい。

お陰で要らない子扱いの武器が増え、売却も考えたがアトラスに入ってきた新人プレイヤーへの貸出装備として保管することとなった。

「後は伐採場越えた先の魔法陣だ。他のプレイヤーに漁られる前ならばな」

その副次効果でボス狩りが捗る捗る。ボスも取り巻きも体力は多いが、キリトたちにかかればワンパンだ。接近さえできれば効率良く狩れる。

ボスとはなんだったのかと言いたくなる。シュトウルマンは泣いていいだろう。

シュトウルマンキーを何度開けても、Red Rebel ice pickは出なかつたけどな！

「コハル、伐採場過ぎた辺りの森で休もう。SCAVさえ轢き殺せば安全だ。森林浴と行こう」

「賛成。もうお腹減ったよ」

廃村内に湧いたSCAVがスーカスーカ叫んでいる。うるせえこの野郎。コハルとの話を邪魔するんじゃないやねえ。

そんな憎しみの小銃弾が頭を貫き、SCAVはその場に崩れ落ちる。持っていたアイテムはそんなに美味しくなかった。スーカ。

そして結構な距離を歩き回り、伐採場を越えて森の中にいる。アスナはキリトを連れて魔法陣へ行き、俺はコハルと湖畔に腰掛ける。

森と草原の境目、どこまでも続く巨大な湖を見ながら昼飯だ。小虫や土汚れを気にしなくていいから、仮想世界は楽だ。

「コハル、飲み物何にする？」

「紅茶あったよね？」

「ああ、もちろん」

タルコフの頃には交換とかクラフトに使うだけだった茶葉やコーヒード豆だが、ここではちゃんと飲み物に出来る。

それを詰めた水筒を取り出し、コハルのカップへ注ぐ。タルコフがロシアだからか、少し肌寒い。おかげさまで温かい紅茶が美味く感じるのだ。

「さて、食い物は……」

ビーフシチューの缶詰“Tushonka”を取り出そうとして、その手をコハルが握る。待って、そういうかのように。

ただ、女の子に手を握られるとドキツとしてしまう。それがグロブ越しであったとしてもだ。

「その……お弁当、作ってきたの。食べる？」

恥ずかしそうに目を潤ませているコハルから目が離せない。破壊力が高すぎて、核兵器禁止条約に引っかかりそうだ。

勇気を振り絞って言ってくれたのに、俺は驚きのあまり声が出ない。不安そうに震えるコハルのためにも、動いてくれ、俺の声帯。

「……食べる」

その一言でコハルは緊張から解放されたらしい。表情が緩み、手を離してストレージを操作し始めた。残念、もう少し握られていたかったのに。

その代わりに、俺たちの間にはバスケットが現れた。蓋を開けてみると、色とりどりのサンドイッチが詰め込まれていた。

「その……料理スキルはまだまだだから、あまり期待しないでね？」

「ごめん、もう期待で俺の胸部耐久値全損してるわ」

もう、とコハルに背中を叩かれた。こんなプレートキャリアも何もを外して、のんびりとピクニックを楽しみたいんだけどなあ。

「ほら、召し上がれ。お腹減ってるんでしよう？」

サンドイッチに目を移すのが惜しくなるほど、コハルの優しい笑顔を見ていたくなる。でも、早いところ食べなきゃ。じゃないとコハルが不安になるだろうし、そろそろエネルギー切れでデバフを喰らってしまう。

まずは一切れ、豪快にかぶりついて天を仰ぐ。美味しいじゃないか。

シャキシヤキレタスにみずみずしいトマト、程よい塩味のハムとそれを包み込むパン。その全てが口の中で混ざり、舌の上に極楽浄土が現れる。

嗚呼、ここがエデンか。

「美味しい」

「本当？ よかった……って、サンドイッチを不味く作る方が難しいと思うけどね」

はむ、とコハルがサンドイッチを啜える。俺に比べれば口は小さいし、女の子が豪快にかぶりつく事はそうそうないだろう。

なんだかハムスターみたいで、少し心がほっこりとする。なんだこの可愛い生き物。

一つ、また一つとサンドイッチに手を伸ばし、紅茶を啜ってホッと一息。デスゲームの中にいることを忘れてしまうような、そんな穏やかな時間に包まれて俺は微笑む。

コハルもいつしか微笑んでいた。これが幸せというものなのだろうか。この心地よさが、鎖から解き放たれたような、この気分がずっと続いて欲しい。

それがコハルのおかげだというのなら……もう少しだけ、欲張っていいだろうか。いつか離れる時が来ると覚悟した癖に。それなのに、コハルを求めようとして……本当に、いいのだろうか。

「最初にここを通った時ね、この湖を呪ったよ。この湖がなければ脱出地点までもっと短くて、レイジをもっと早く助けられるのになって」「あの時か……」

コハルの涙を俺は知らない。気絶していた人間にできる事は、後で知る人から聞くことのみ。

守りたいって思っておきながら、俺が一番傷つけてしまっている。なんの皮肉だ。

「でも、今はこの湖があつてよかったなつて思ってるの。レイジとピクニックして、取り止めもないことを話してさ……そうしていると、ここにいても辛いことばかりじゃないんだって、そう思えるから」

「それは俺もだ。戦って、パツと死のうと思つてたのにさ……あまり

にも楽しくて、まだ死にたくないって思ってる」

この一瞬でさえも、俺にとっては宝物だ。最期の瞬間まで忘れることはないだろう。

もう少しだけ、コハルのそばにいたい。何なら、好きだと言っても過言ではない。

でも、それを言う勇氣はまだない。だから、この瞬間をスクリーンショットに収めておくにとどめた。

「レイジ、何したの？」

「スクショ。保存先がナーヴギアのメモリだから、ログアウトしないと見れないけどね」

「タイムカプセルみたい。私も撮っておこう」

「景色を？」

「それと、レイジをね」

花が咲いたような笑顔に、俺は思わずもう一枚スクショを撮っていた。コハルは俺に守られているとよく言うが、コハルこそ俺のことをよく救ってくれている。

「かつこよく頼むぜ」

薄く笑みを浮かべ、銃を肩に立てかける。これで立派な兵士の写真になるだろう。どちらかが生還するか、志半ばで倒れたとしても、その記憶は必ず残る。

もう少し、多めにスクショを撮る癖をつけておこう。俺が先に斃れたとして、必ずメモリは分析される。その時にコハルのスクショが見つかって、親御さんを安心させられるだろうから。

「あーっ！」

そんな叫びが森から響き、小鳥が慌てて飛んで逃げていった。俺は銃を、コハルはレイピアを手にして身構える。アスナが悲鳴を上げるなんてよっほどの事だ。キリトもいるんだぞ。

「コハル、行こう！」

「うん、任せて！」

おかげさまで、コハルが初めて撮った俺のスクショはブレてよくわからない画像になっていた。データは現在進行形で吸い出されてい

て、” 正体不明の男” としてコハルの父親をヤキモキさせたのはまた別の話になる。

ちなみにアスナの悲鳴は、魔法陣からようやくレアなレイピアが出たからだった。驚かせおつて。

何かともあれ、ようやくWoodsお百度巡りは終わりを告げた。

2層―1 次の戦場へ

2層に上がって早数日。キリト曰く”モーモー天国”の2層は確かに牛だらけだった。

リョーハがドロップアイテムのアラミド生地を広げて闘牛をしたところ、見事に跳ね飛ばされた。あいつは本当にアホだ。シノンが腹抱えて笑うレベルにはな。

ところで、この2層”ウルバス”の街は美味しい乳製品の店が多い。特に、コハルと食べているこのケーキとかその最たるものだ。

濃厚なクリームがたまらない。砂糖の甘さより、ミルクそのものの甘さを活かしているような感じだ。ふわっとした食感もまたグッド。

「んー！ 美味しい！」

「そいつはよかった。俺もケーキにしちまったけど、クレープも試しておくべきだったかな」

財布はぶっ飛んだけど、コハルの笑顔が見れたから良しとしよう。この満面の笑みに癒されない男がいるものか。

尚、後ろの席ではキリトが涙目でケーキを頬張っている。アスナとの賭けに負けて奢る羽目になったそうだ。ドンマイ。

「また食べにこようよ。リョーハやシノンに、キリトとアスナのみんなでさ」

「戦勝会だな。そうしようか」

きつと、楽しいパーティになるだろう。それが出来るのが、生きていくってことか。

「そういえば、ここにもEFTのマップがあるのかな？」

コハルから興味を持つとは珍しい。思わずイチゴを取り落としてしまった。皿の上に落ちたからセーフ。

「アルゴから調べろってメッセージ来てたし、あるかは分からないけど探す価値はあるだろう。リョーハ引きずり込むか」

「リョーハ連れて行くのは決定なんだね」

「ボスとタイマン張りたくねえもん」

コハルと笑いながらコーヒーを啜り、ホッと一息。1層で張り続け

ていた緊張の糸が溶け、少し休む余裕が出来た気がする。

次々とプレイヤーが2層にやってきて、レベリングに勤しむ姿を見ることも増えた。俺たちがしたことは、確かにプレイヤーたちに希望を与えたのだろう。

次もコハルと共に乗り切ってみせよう。彼女を泣かせるわけにもいかない。俺の手が届く範囲にいるうちは、笑顔でいてもらいたいのだ。

「ねえ、レイジ」

「どうした？」

「2層も頑張ろうね」

「ああ、俺たちで突破してやろうぜ」

俺は自信たっぷり、コハルは嬉しそうに笑顔を浮かべ、互いの手を握る。

きっと、この関係が続くのはこの城にいるうちだけになるだろうか。だから、せめて今だけは許して欲しい。彼女に、俺の戦う意味を委ねることを。

「お2人サン、熱々だネ」

「きゃっ!？」

「また生えてきた!」

急に飛び出してきたアルゴに驚き、悲鳴を上げてしまう。キリトとアスナも振り向いたが、アルゴが生えてきたと見るやまた向かい合っ
て話に戻ってしまった。

折角のコーヒーが溢れてしまったではないか。アルゴめ、覚えてお
けよ？

「ん？ デートの邪魔だったかな？」

「で、デート……!？」

「アルゴ、揶揄わないでやってくれ。コハルがオーバーロードしてる」
コハルの顔は真っ赤で、頭から湯気が出ていそう。そんなところ
も可愛いのだが、これでは話にならない。

「おやおや、レー坊は満更でもないようだネ」

「悪い気はしないからな。だが、ネタにはすんなよ？ 口封じしな

きやならなくなる」

「怖いこと言わないでヨ。仕事を頼みにきたんだからサ」

「ちよつと待ってレイジ、悪い気はしないって!？」

すまんコハル。俺は命知らずではあるけど、こういうことに関しては割とチキンハートなのだ。まだ詳しく言う勇氣がないものでな。

「仕事と書いて生贄だろう？ 今度はどこの調査だ」

「はぐらかさないでよね……」

コハルは不満そうにこちらを見つめてくる。これは、後々尋問されそうで怖いな。

「クエストを探して回ってたら、見たことないNPCがいたのサ。髭を生やしたニット帽の男で『湾を望む部屋にアルバムを置いてきてしまった、それをとってきて欲しい』ってナ。覚えがあつたりしないか？」

思い当たる節がある。個人的には激しく面倒なタスクだ。激戦区に行かされる上、途中で死んだらやり直しなのに報酬はドキュメントケースと発電所の鍵。

本当ならあまり行きたくないのだが、今はPMC同士で戦闘にならないし、楽な部類かもしれない。

「それ、タスク名“Nostalgia”だな？」

「知ってると言うことは、タルコフ絡みのタスクだな？」

「依頼人はタルコフのトレーダーだ。早速行ってくるよ。場所を教えてください」

「気をつけてナ。コーちゃんはレー坊と楽しくやれヨ」

「あ、あ、アルゴさん!？」

コハルはアルゴに揶揄われ、顔を真っ赤にしながら立ち上がる。相当動揺しているではないか。

そんな姿も可愛いと思いつつ、俺はリヨーハにメッセージを飛ばしていた。

※

帰ってからハイドアウトで準備を進める間、コハルは顔を合わせてくれなかった。少し目が合うと、顔を真っ赤にしてそっぽを向いてし

まうのだ。

少し寂しい気もするが仕方ない。俺もコハルに好意は持っているし、脈はありそうな気がする。でも、リスクを冒す勇気が持てず이었다。

「コハル、水と食料は多めにな。予想通りならデカイマップになるから、すぐ足りなくなる」

「う、うん……どんなところなの？」

「多分、"Shoreline"だな。Nostalgiaと来たらここしかない。保養地だったらしくて、水力発電所や村、マップ中央にはリゾートホテルがあるんだ」

ちなみに、タルコフで一番大きいマップでもある。

高価な装備に身を固めたPMCはレアアイテムを狙ってリゾートに行ってしまうため、外周は接敵率が低い傾向にある。

そんな理由で、初心者や金欠PMCが出稼ぎに来ることも多い。激突したら地獄が待っているわけだが。

「泳げたらいいのにな」

「モンスターとかSCAVがいなければな。もしかしたら、この上の層に安全なビーチがあるかもしれないし、今回は我慢だ」

コハルの水着が見たいと言うのも本音だが、あんなところで泳ぐわけにもいかない。海岸はSCAVもいるし、場合によってはボートハウスにボスまで湧くのだ。

「キリトに聞いてみよう。いつか、泳ぎに行けたらいいね」

「ああ、きつと行けるさ。俺が連れて行ってみせる」

自分の装備を変えている最中だったから、ウィンドウ以外を見ていなかった。そんな俺の背中に重み加わる。

両手を背中に乗せられたらしい。装備を外しているから、今はシャツ一枚。その手の感触がよく伝わってくる。

柔らかさ、暖かさ。仮想世界で感じるこの感触は、現実でも同じなのだろうか。それを俺は知らない。

現実で得られなかったものをここで得られた。厳しい世界なのに、どうして現実よりもこんなに優しいのだろうか。

「その時まで……うん、それより先。現実^{リアル}に帰るまで、死なないで」
震えが伝わってくる。今もスタッシユに仕舞われている6B47
ヘルメットが、彼女の震えの理由を物語る。

耐久力を全損したそれは、ボスに頭を斬りつけられた時のもの。跳
弾判定のおかげで九死に一生を得て、俺はここにいる。

勝利のため、分裂を防ぐためにしかたない犠牲だった。でも、コハ
ルにそんなことは関係ない。相棒が死んだと言う事実だけが、彼女に
残るはずだったのだ。

俺のために流された涙を、忘れることなどできなかつた。

「約束しただろ、置いていかないって。パートナーだからな」

本当は、現実^{リアル}に帰りたくなどない。ストレスとプレッシャーの濁流
に押し流され、色のないそこで溺れるくらいならばここで死にたい。

敬意、友情、愛情。仮想の世界ならいくらでも手に入る偽物で、現
実のものだから価値があると人は言う。ならば、この優しい夢の中に
包まれて眠ってほしい。

でも、コハルは共に生きて、この城から脱出する事を望んでくれた。
捨てるつもりだった命を拾ってくれると言うならば、その望みを叶え
よう。

「うん。すぐに追いついてみせるから……だから、待っててね」

「ああ。待ってるさ。もし……」

もし、その先が許されるのだとしたら……現実でも、「レイジ”の
皮を脱ぎ捨てた俺にも、同じように接して欲しいとさえ願ってしま
う。どうやら、俺は欲深いらしい。

「……いいや。今は生き残ろうぜ。またケーキ食いにいきたいから
な」

「そうだね。今度は私のご馳走するよ」

「やめとけ。破産するから」
こうして笑っていられるのが嬉しい。叶うならば、もう一步踏み込
んでしまいたいとさえ思う。

でも、それはまだだ。彼女の可能性を狭めるべきではない。まだま
だ無限に広がっていくのだから、俺一人に囚われるべきではない。

そう、自分に言い訳をして答えをまた先延ばしにする。悪い癖だ。きつと、Shorelineを走る間に答えを出せるだろう。

アスナ計画の Woods 魔法陣お百度参りによって Shoreline 行きが数日遅れ、結果として答えを先送りにしたのはまた別の話としておこう。

2層―2 Azure Coast

真つ暗な視界に光が戻り、青々とした草原が目に入る。ここはここで懐かしい。タスク以外で訪れることは少なかったが、眺めの良いマップだ。

「全員湧いたな」

振り向くと金属製の門があり、そこから先の方へ道路が伸びている。これだけで場所は把握できた。

「Rord to Custom」か。元のタルコフだったらハズレ湧き扱いしてたよな」

リョーハが言うことは確かだ。Shorelineはマップ東側脱出地点の”Rord to Custom”側スポーンと、西側脱出地点”Tunnel”側スポーンに分けられる。

そして、無数のスポーン地点の中でもリゾートに近いかどうかはPMCの戦術を左右する。近ければ先に入って敵を待ち構えるし、遠ければリゾートを諦めるか、戦闘に割り込んで暴れたり、終わった所に漁夫の利を求めめるか。

今はスポーン地点気にしなくていいのが楽だと言えよう。PMC同士で殺し合うわけでもなし。ゆっくり探索して、タスクさえ終わればいい。

「森林浴に良さそうだね。こういうところでお散歩してみたいかも」

「SCAVが湧かない場所もあるし、余裕があったらそうしようか」

「本当？ やったー！」

はしゃぐコハルを見て、思わず笑みが漏れる。Shorelineといえば、いかに敵PMCを倒してレアアイテムを手に入れるかばかりに意識が向くから、こんな事を考えた事はない。森林だって、視界が利かないから奇襲が怖いと思うくらいだ。

彼女といるとやはり面白い。移動中も話したり、隣を歩いて散歩気分を楽しみたいが、敵に警戒しなければならぬからそうもいかない。

まったくもどかしいものだ。道路沿いに歩き、コンクリートの壁で

要塞化されたビーチの一角を通り過ぎてさらに進む。

景色は変わらないし、覚えている限りのクレートの位置も同じ、歩き慣れた Shoreline。それでも、コハルはその一つ一つに目を輝かせている。

「レイジ、あの塔は？」

コハルが指さすのは、堤防に聳える灯台。ほとんど骨組みのようなものだから、灯台と言われなければわからないかもしれない。

「灯台だ。上からは眺めがいいし、知ってみるか？」

「うん、行こう！」

はしゃぐコハルをよそに、俺はシノンに目配せをしておく。彼女も意図に気づいたらしく、縦に頷いた。リヨーハはそもそもわかっているからいいか。

港湾事務所ポートハウスを警戒しながら進み、SCAVを何人が殺す。3人くらい倒したところで辺りは静かになり、灯台までの道が拓けた。

「クリアー！」

「レイジ、俺とシノンで前出るぞ」

「あいよ」

2人が灯台を制圧し、ようやく俺はコハルを連れて天辺へと登る。コハルはその眺めに目を輝かせていた。

どこまでも続く青い大海原と、振り向けば森林が青々と茂り、海原のように広がる。現実では滅多にお目にかかれない景色に、コハルは目を輝かせていた。

俺はそれを一歩下がって見守る。俺はシノンと共に海でも森でもなく、通ってきたポートハウスや森に目を向けている。

「いなかったな」

「楽でよかったじゃない。あいつらの弾、リヨーハのアーマー簡単に抜いてくるわよ」

「おお怖い怖い。ここじゃなければコテージカリゾートか……今の装備で会いたくねえよな」

リヨーハはいつもの熱意を宿した笑みではなく、気怠げな愛想笑いを浮かべていた。

アスナに連れまわされた Woods 地獄ランのお土産で弾薬はいものになったが、それでも”奴”を相手には弾数が足りなく思っているだろうし、俺もそう思う。

アーマーももつといいのが欲しかったが、手に入らなかったから仕方ない。クラス4じゃ心許ないが、なるようになるさ。

「レイジ、何してるの?」

海を見ていたはずのコハルが俺に寄ってきた。さつき拾った緑茶を差し出すと、喜んで受け取ってくれた。

「あそこのボートハウスにボスがいなかったから、どこにスポーンしてるか考えてた」

「もう、レイジは景色よりボスなんだね」

「死にたくねえからな。探知範囲外から狙撃できるならそれがいい」

こんな逃げ場のない灯台に登る奴はそうそういない。いるとすれば、100mヘッドショットのタスクをやっているか、この灯台からボスを狙撃しようとしているかだ。

「海岸も綺麗なのに要塞になってたり……本当にタルコフって紛争地帯だなんて思うと、嫌になっちゃう」

「紛争初期に軍が封鎖したり、Terrra Grope 職員の脱出地点になったり、曰く付きの場所だからな」

「Terrra Grope って?」

「あちこちのコンテナにロゴあるだろ? タルコフで政治的スキャンダルを起こして、タルコフを戦場に変えた元凶」

「悪い人たちだね」

「茅場もどっこいどっこいだろ」

確かに、とコハルは笑う。ここにあまり用事はないし、ボートハウスを漁って移動するのだろうか。

※

あれからボートハウスを漁ったり、移動してコテージを偵察したが普通のSCAVしかいなかった。

鍵がないからコテージには入れないし、周りを漁っても旨みがないからスルーしたが、俺やりヨーハ、シノンは事情を知るだけあって緊

張している。

「野郎、ここにもいないとなれば、いよいよリゾートか？」

「落ち着けよレイジ。奴のスポーン確率は3割とちよい。いないこともあるだろ」

「その通りだが、俺はリゾートで奴に力チ合うのが一番嫌いなんだよ。コテージとかボートハウスにいるのを狙撃する方が好きだ」

「俺はリゾートの方が楽だがね」

「俺は本来、中距離戦が得意なんだよ」

リヨーハは余裕そうにしているが、俺としては気が重い。コハルはそんなただならぬ雰囲気、不安そうな顔をしていた。

「何かあるの？」

「このボスがいるかどうかさ。いない方が楽なんだけどな」

「サニターなら、頭に当てれば一撃よ」

「そりゃシノンだからだろ？俺とリヨーハじゃ2発だ」

シノンはSVDにSNBと呼ばれる弾薬を入れてきている。貫通力が高く、最高クラスのアーマーも一撃で貫通して、75ダメージを与えることができる。

ボスはPMCやSCAVに比べて体力が多く、その中でもSanitarは2番目くらいに体力が多い。頭部耐久値は70あり、胸部に至っては360。俺やリヨーハの弾丸が頭に1発当たっても耐えてしまう。でも、シノンならば一撃でキル出来るわけだ。当たればな。「レイジ、そのボスってどんなの？」

「青ジャケットを着て、頭に包帯巻いたハゲ。厄介なのはこいつが闇医者で、本体も取り巻き2人も興奮剤注射でバフかけながら戦うから長期戦になりがちだ。ちなみにTerra Gruppeの元職員で、本名は”ラザニー・ベルグ”。離婚歴もあるらしいぜ」

もちろん使われた興奮剤はストレージから消えてしまうので、高価なそれらが欲しければさっさと倒すに限る。

そして何より厄介なのは、取り巻きはクラス5のアーマーを着ていることだ。

2番目の防御力を誇るクラス5を貫通できる弾は少ない。持って

はいるけど、果たして足りるかわからない。

「……出来れば会いたくないね」

「序盤でやりあう相手じゃないのは確かだ」

奴がいないといいいな。そう祈りながら坂道を登ると、リゾートホテルが目の前に現れた。

岩山の上に作られたホテル。今は閉業したそうだが、元になるホテルがロシアにあるらしい。それが今やすっかり廃墟となって、SCAVの溜まり場になっているのは物悲しく思える。

「Nostalgiaなら西棟の303号室だ。さつさと行つて帰ろうぜ」

リヨハは記憶力がいいから、タスクで行くべき場所を大体覚えている。

このリゾートは主に3つの建物で構成されている。それぞれ3回建ての西棟と東棟があり、その少し奥に中央棟がある。

西棟と東棟は2階の渡り廊下で連結され、中央棟はそれぞれ1階で連結されている構造だ。中も複雑で、割と迷いやすい。

「入って左手ね。正面からエントリーして、西棟の螺旋階段を上がるのが早いかしら」

「鍵があるならついでに漁りてえが……シノン、持つてるか？」

「あるわけないでしょう」

「だよなー」

このリゾート内は多くの部屋に鍵がかかっており、その中にはレアアイテムがスポーンする。しかしその鍵集めも中々大変で、SCAVの死体やオブジェクトのジャケットを漁っても、お目当てのは中々出てこない。

「鍵ってこれ？」

コハルが取り出したのは、赤の鍵、西棟の鍵だ。どうやら、ここに来るまで村とかを漁って見つけたらしい。

「West Wing203……いいね、レアアイテムが湧く部屋だ。低確率すぎるけど」

「俺とレイジで何回回ったっけ？ 結局レッドカードキー来ないまま

正式サービスだったな」

まあ、きつと出ないけど夢だけは持つていていいだろう。出たら数千万単位の値段がつく代物だしな。

「リヨーハ、俺と前衛。シノンとコハルは後衛を頼む。あと、コハルは中に入ったら俺のベルト掴んで離すなよ」

「レイジ、気をつけてね」

「慣れたマップで、相手にPMCはいない。ハマなんてしないさ。行くぞ」

シノンが門の影に隠れて周辺を警戒する。その間に俺とリヨーハは西棟の入口を目指して駆け抜ける。

西棟と東棟の間にはヘリコプターや花壇、壊れた車がある影響で、東棟からの見通しは悪い。上手いこと隠れられるだろう。

その狙い通り、俺とリヨーハは西棟へ飛び込んだ。とりあえず外に敵はいないらしい。

「先行く、背中頼んだ!」

「任せろ。シノン、入口クリアだ来ていいぞ! 俺たちは先に行く!」

俺はリヨーハの背中を守りつつ、中へ進む。そして螺旋階段へ向かっていくと、音もなくリヨーハの足から血が噴き出した。

1発だけではない。数発の無音の弾丸が脚を貫き、リヨーハはその場へと崩れ落ちた。

2層―3 Sanitar

「リョーハ！ クソ、1階廊下に敵性！」

俺は1階廊下へ制圧射撃をしてリョーハを援護する。バリケードのせいでうまく狙えないが、1発くらい当たったらしい。敵はこれ以上の攻撃をせずに下がっていった。

リョーハは倒れているが、まだ生きている。血痕を残しているのを見るに、重度出血のデバフをもらっているのだろう。

「クソツタレ、両足壊死！ 重度出血のおまけ付きだブリヤー！」

「リョーハ、早くこっちに来なさい！」

「援護してやる！ 入口へ下がれ！」

「スーカ、気を付けろレイジ！ ありや間違いなくサニターだ！」

「VSSなんて持つてんのサニターしかいねーだろ！ 鎮痛キメてさっさと行きやがれ！」

赤い曳光弾がバリケードのベニヤ板を削っていく。Woodsで拾い集めたBT弾だ。それが飛び出していた敵の腕に当たると、同じく赤い血飛沫が飛び散る。

敵はさらに下がっていく。あれがサニター本体か取り巻きかは分からない。

「奴は下がった！」

「そっち行くぞ！ クソつたれがああああ！」

リョーハはモルヒネ注射器を腕に刺すと、呻き声を上げながら走り、曲がり角へ飛び込んだ。お前、今シノンに抱き止められただろ、狙ったな？

脚の壊死は片足につき45%の移動速度低下や、ケンケン歩きになって移動中の狙いがブレる他、ダツシユとジャンプが不可能になる。

鎮痛剤はそれらのデバフを打ち消すが、ダツシユ3歩かジャンプをすると呻き声を上げ、微小なダメージを受けてしまう。安全な場所に隠れて、根本的な治療が必要だ。

「コハル、リョーハの治療を手伝ってやれ！ シノン、こっち来て手

伝ってくれ！」

「レイジもシノンも、ケガしないでね！」

ボスのAIは中々狡猾だ。この瞬間にも奴らは詰めてきて、俺たちを殲滅するつもりかもしれない。コハルがリヨーハをさっさと治してくれば戦力が増えて、それだけ安全になる。

特に、俺の後ろの階段から回り込まれる恐れがある。足音を聞き逃さないように気をつけてはいるが、やはり不安だ。

「レイジ、取り巻きが詰めてきてるわ！」

「タチチャン力連れてくるべきだった！ リロード！」

最悪なことに弾切れだ。空のマガジンを回収する暇がなく、止む無くその場に放り投げて新しいものを叩き込む。

森で手に入れたとっておき、使うしかない。

「早くして、もうそこまで来てるわよ！」

「あと2秒！」

シノンのSVDSは確かに強力だが、その4倍スコープは至近距離の敵を狙いにくいという弱点がある。おまけに単発で反動も強く、弾幕を張るのは無理だ。

故に距離を詰められるとどうしようもなく、至近戦用に持ち替えたMP5Kは貫通力に劣り、取り巻きに対して有効とはいえない。

だからこそ、俺のAKが光るわけだ。

「スイッチ！ シュトウルマンからのプレゼントだこの野郎！」

シノンと交代して、突っ込んできた取り巻きへ採算度外視の弾幕を見舞う。

取り巻きは胸部耐久値160。それをクラス5アーマーで守っているが故に堅牢さを誇るわけだが、この弾はそのアーマーを貫き、敵がダツシュ状態から射撃態勢に移行するより早く耐久を削り切った。

「1人やった！」

崩れ落ちる取り巻きを見て、俺は空になったマガジンを交換する。

シュトウルマンが持っていた5.45mm弾の一つ、7N39“Igolnik”は与ダメージこそ37と最低クラスだが、代わりに貫通力は62の徹甲弾であり、最高クラスのクラス6アーマーさえ初弾

から貫く。

シノンのSNBの半分程度のダメージ量だが、毎分650発のレートで放たれるこっちの方が近距離では脅威的だろう。

「レイジ、足音が迫ってきてるよ！ 多分上から！」

「シノン、ここは任せた。俺は螺旋階段を！」

リョーハはまだ動けない。壊死はCMSやSurv12のような手術キットを使わねば治せない上に、1部位治すのに20秒近くかかってしまう。

あと少し。それで、死神は戻ってくる。

「なんだか、スーカスーカ言ってるけど!？」

「それはロシア語でFuckって意味！ それ言うのはSCAVだ！」

タチヤンカもよくスーカだのブリヤーだの、ロシア語でのFワードを叫ぶから間違って撃ちそうになる。それでオレンジになりかけた奴がいるからたまったものではない。

螺旋階段を少し登り、上を覗いた瞬間に弾が飛んできた。それも、音もなく。

「クソが、上だ！ 上にサニターがいやがる！」

銃声がほとんどしないのは、サニターが持っている特殊消音狙撃銃VSS“Vintorez”独特のものだ。

俺は螺旋階段上に向けて何発か撃ち、サニターを追い払う。このまま撃ち下されるのはあまりにも危険だ。

「リョーハ、行けるか？」

「回復したからやれるぜ。取り巻きを始末しよう。シノン、俺もそっち加勢するぞ！」

「ええ」

シノンはそれだけ言うと、SVDSに持ち替えて狙撃態勢を整える。こういう室内戦は俺とリョーハこそ輝く。俺たちで仕留めよう。

「レイジ、さっきどこから撃たれた？」

「螺旋階段の上からだ。2階だろうよ」

「なら、上がって殴るしかねえ。螺旋は俺に任せろ。お前は迂回して、

横からぶん殴れ！」

「よし来た」

やるなら外階段から屋上に上がり、上から挟むようにするのがベストか。

さあ行こう、踏み出す俺の肩をコハルが掴んだ。少し震えているのに、その目は真っ直ぐ俺を見つめていた。

「私も連れて行って。レイジー人で行かせたくないの」

迷った。コハルを危険に晒したくないのもあるが、モンスターと違って、NPCではあるが人間を殺させたくない。彼女には、俺やリョーハのようにタガの外れた人間になって欲しくない。

でも、置いていかないと約束してしまった。それに、この真っ直ぐな目を拒絶することが出来なかった。

「ピツタリ後ろについてこい。離れるなよっ！」

「うん、分かった！」

来いと言った瞬間、コハルがいい笑顔を見せた。俺なんかの背中を追ったところで、危険な目に遭うだけなのに。

それなのにどうして、こんなにも嬉しく思っているのだろう。

リョーハ以外に背中を預けるなんて、初めてかもしれない。

「行ってこい、俺が死ぬ前に頼むぜ！」

「任せろ」

リョーハはこちらを見ず、上のサニターと撃ち合う。奴が押さえている間に、俺たちで仕留めよう。

※

コハルと外階段を登って屋上に上がる。眺めのいい場所だが、外から狙撃を喰らうのであまり好きではない場所だ。それを気にしなくていいのがあるがたい。

「景色がいいね。終わったら、少しここで弁当にしよう」

「そりゃいいな。さっさと終わらせよう」

コハルからご飯のお誘いだ、断る奴いるか？ 楽しく食事を楽しむためにも、死傷者なしで切り抜けなければ。すまんリョーハ、お前よりコハルとの飯だ。分かってくれるだろう？

さて、屋上は外側の非常階段の他に、直接中へ続く階段もある。しかしそれは螺旋階段とは逆サイドの端にある、通称“端階段”の方だ。

サニターを殴るためには、どこかで廊下を突破しなければならぬ。SCAVがいる危険もあるが、行くしかないか。

「コハル、2階廊下を突破して螺旋階段のサニターを挟む。迷ったら迎えにいく暇ないから、ベルト掴んで離すなよ」

西棟3階はバリケードがあって進めない。螺旋階段に行くには2階を通るしかないのだ。

「その後は？」

「いつも通り。俺が撃つからコハルが仕留めてくれ。コハルなら一撃で仕留められるはずだ」

ずっと一緒にやってきた。そこで確立したやり方に、疑問の余地はない。

コハルも、役目を任されたことに少し驚いたような顔をするも、すぐに頷いた。随分、戦士らしい顔をするようになったものだ。

「わかった。頑張ろうね」

「奴は負傷するとすぐに逃げて回復する。そこを狙え。行くぞ」

階段を降り、2階のバリケードを越えて先へ進む。ベルトを握るコハルの手に、震えは一切なかった。

静寂の中で俺たちの足音だけがする。俺もコハルも、お喋りを楽しむ余裕などない。下では断続的に銃声が響いて、2人が戦っているのだ。早く助けにいかなければ。

『1人仕留めた！ 取り巻きよ！』

『よくやった！ すまんがケツを守ってくれ！ SCAVが来そうだし！』

シノンが取り巻きを仕留めたから、残るはサニター本体のみ。リョーハが階段で撃ち合っているが、決定打に持ち込めないでいるようだ。

サニターは負傷するとすぐに隠れて回復する。それがまだ粘っているとすることは、当たっていない証拠なのだから。

「リヨーハ、俺たちはもうすぐ螺旋階段！ 横から挟む！」

『来る時言えよ、巻き込んだじまうぞ！』

「コハル、スタンバイ！」

「うん！」

コハルは俺のベルトから手を離し、レイピアを抜いた。俺はAKを構え、廊下を突き進む。

そこにサニターはいた。リヨーハに夢中なのか、横から来た俺に気づかない。迷うことなくトリガーを引き、サニターに弾幕の雨を降らせる。

サニターはアーマーを着ていないから、それに合わせて使う弾は肉体ダメージの高いBT弾。曳光弾であるために、赤い光が無数に飛び交い、数発は床を跳ねてあらゆる方向へ飛んでいく。

反動が強すぎて結構外した。頭に当たったかもしれないが、BT弾の与えるダメージは44。奴の頭はそれに1発耐えるのだ。どんな頭蓋骨をしていることやら。

「奴が逃げるぞ！」

「俺はリロードだ、コハル！」

「了解、スイッチ！」

リヨーハも駆け上がってきてサニターを追い、俺もリロードしつつ追跡に移る。コハルは階段で俺を追い越そうとして、少しもたついた。

奴は回復に移るだろう。そう思っていたのに、どうして振り返った。シウトウルマンの時のような、嫌な感覚が体を襲う。

「伏せろリヨーハ！」

「うわ、おい!？」

咄嗟にリヨーハを蹴飛ばした。その反作用で俺もコハルを巻き込んでずっこける。

倒れるまでの間に、両足を不快な痺れが襲う。被弾したのだ。重度出血のアイコンがひとつ、骨折がひとつ。かなり貰ったか。

「クソツタレが！」

リヨーハが倒れながら銃撃すると、サニターはまた逃げ出す。コハ

ルは俺を助けるか、サニターを追うか迷っているようだ。

「コハル、奴を仕留めろ！ 俺は軽傷だ！」

「……わかった、行つてくるよ！」

正直軽傷とは言えず、本来なら物陰に隠れるべきだ。

でも、そんな必要はもうなくなった。逃げるサニターにコハルが追いつき、BT弾なんかよりも明るい流星が奴を貫いたのだから。

「サニターダウン！ コハルがやりやがったぜ！」

『私も上に行くわ。リヨーハ、無事？』

「俺はいいが、レイジがまたハマしやがった。まあ生きてはいるぜ」「またって何だまたって」

重度出血は止血帯を巻いて止め、骨折も添木を嵌めて治療する。リヨーハと同じように、俺も両足が壊死してしまっていた。

何とか立ち上がろうとして転んでしまう。PC版の頃と違って、脚をやられると立ち上がるのも大変らしい。

「レイジ」

そんな俺に、コハルが手を差し出してきた。やったよ、そう言うかのような笑みに、俺も釣られて笑ってしまった。

「今日は大金星だな」

「レイジのおかげだよ。もう、また怪我して」

「でも、今回は死にかけてないだろ？」

コハルの手を握り、立たせてもらう。この手も、随分力強くなったものだ。頼もしいことに。

2層―4 海の見える場所

戦利品とアルバムの回収も終わり、俺はコハルと屋上にいた。間にはバスケットが置いてあり、その中身はコハルお手製のサンドイッチだ。

「ここ、すごく景色がいいね」

「保養地だしな。元ネタのホテルがロシアにあるらしいぜ」

「本当？ 行ってみたいなあ」

「もう廃業してるらしいけど」

残念、とコハルが肩を落とす。その間にサンドイッチをひとつ齧ると、シャキシャキとした野菜の食感がした。耐久値はまだ残っているらしく、さっぱりとした旨味が口に広がっていく。

「ホテルの料理はないけど、コハルの飯があるからな」

「練習してよかったよ。苦手な物はない？」

「ナスとオクラくらいのもんだ」

「そんなのサンドイッチに入れないよ」

でも、覚えておくね。そう言ったのは聞き違いではないだろうな？
つまり、また何か作ってくれるのか。これは期待してしまう。

もう一口サンドイッチを齧り、紅茶で喉を潤す。流石に海は遠すぎてさざなみの音が聞こえることはなく、代わりに風に揺れる葉がBGMを奏でている。

「2層も大変だったね」

「そうだな。リョーハが牛に轢かれたり、アスナの Woods 御百度参りとかな」

「あんまり Woods にいるから、レイジまで”森の熊さん”って言われてたもんね」

「それはリョーハに返したよ」

そんな他愛もない雑談が時間を忘れさせる。サンドイッチもいつの間にか無くなって、バスケットが片付けられた分距離が近くなった。

それだけ、コハルの笑顔が近くなる。一緒に2層を戦って何日経つ

ただろうか。怯えた顔よりも、笑顔を見せることの方が多くなった。戦い方も随分上手くなった。今では、コハルの方からMobにケンを売らさずらいだ。

きつと、彼女は俺に近付いたと思っっているのだろう。本当は、もう突き放されているというのに。

「コハルは、随分強くなったよな」

「まだレイジの後ろに隠れてばかりだよ。今度は、私がレイジを守れるようになりたいな」

「はは、悪くない」

それほど強くなってくれたら、俺はどうしようか。静かに消えてしまうのも悪くないと思っていたが、これ以上コハルとの約束を破りたくない。

俺だって、強くありたいのに。得られたものを失いたくないのに。

「だから、それまでレイジが私を守ってね。すぐに追いつくから」

「シユトウルマンに続いてサニターぶっ殺して、まだ守られるほどってか？」

「もう、それだけじゃないでしょ」

ならどれだ。銃も格闘も限界があつて、スキルをエリート化してもどこまで対抗できるかわからない。そんな俺に、何があるというんだ。

「身を張って攻略組の分裂を防いで、自分以外の命も背負って……そんなレイジが、弱いはずないよ。私にはできないし、そんな覚悟もないもん」

俺じゃなくてもよかつた。でも、誰もやらないから俺がやった。いつだってそうだったから。

それだけか？ 自分に問う。それだけの理由で、俺はここにいるのだろうか。

祭り上げられたから、手が届くところにいたから。それだけでアトラスのリーダーになったり、身を張ってディアベルを助け出したり、コハルのパートナーになったのか？

理由なんてもうわかつてるくせに。こじつけて遠回りして、言い訳

してそれを信じようとして……悪い癖だ。

「コハルがいたからだ」

え、コハルがそんな声を漏らす。鳩が豆鉄砲を食ったような顔、とはまさにこの顔だろうな。

「ぶつちやけ、俺は脱出なんてどうでもいいし、リアルになんて帰りたくない。どうせならここで好きに暴れて、最期は笑って死んでいこうって思ったくらいだ」

でも、と呟いて紅茶を啜る。コハルは何も言えず、次の言葉を待っていた。そりやそうだ。生き残るところか死に方を考えるような奴がいたら、正気を疑うだろう。

そのくらい、俺のリアルは最悪ってことだけだ。

「でも、気付いたらもう少しコハルと一緒にいたいって思ってた。そうでもなければアスナみたいに無茶苦茶やって、今頃脳味噌をチンされてただろうよ」

そう言うと、コハルは優しく微笑んだ。そつと手が重ねられて、安心感を覚える。

きつと、俺は守られていたかったのだ。いつだって自分一人で誰にも頼らず、頼れずに切り抜けてくるしかなかったから。

「だから、パートナーでいてくれて言うのは俺の方だ。その……いいか?」

上手い言葉もマシな言い回しも知らなくて、こんな言い方しか来ない。でも、それが俺だ。”デアデビル”でも”レイジ”でもなくて、ありのままの俺だ。

そんな俺に、コハルは満面の笑みを向けてくれた。

「もちろんだよ。レイジがいてくれると、私も怖さを忘れて、楽しいことを考えていられるの。いつも、ありがとう」

やられた。この満面の笑顔に屈しない奴がいるか。それに、これだけ信頼してくれているのだ。真っ向からぶつかってもいいと、信じてみようか。

「なあ、コハル……」

そんな最中に、階段のドアが開いた。リヨーハが連絡なしに上がっ

てくるとは考えられない。ベータではなかったが、SCAVが屋上にまで来たのか？

咄嗟にAK-74Nを手に、コハルの盾になるように陣取るが、すぐに銃口を下ろした。

「ブラックバード、なんでここに？」

USCの男はブラックバード。我らアトラスの一員で、今はもう一つのレイドグループ“メイベル”を率いてくれている。チュートリアル中にリョーハと飲んだくれていたアホではあるがな。

「アルゴから『お使いクエなのに中々帰ってこない、何かあったかもしれないから探してきてくれ』って頼まれたんだが……邪魔だったか？」

「邪魔だ大馬鹿野郎、空気読みやがれ。ちなみに遅れの原因はサニターとやり合ってたからだ」

「辛辣だな……まあ無事ならさっさと帰るから、後はごゆっくり」

タチャンカとレッカーが扉の影からコソコソ見ているのがなんだかムカつく。せつかく勇気を出そうとしたのに、そんな空気ではなくなったぞ。

「……帰ろうか」

「そうだね。今夜は何食べよっか」

立ち上がろうとするコハルの手を握る。自分でももどかしい気持ちはあるが、今はこの関係を味わっていよう。

こうして、俺はまた言い訳して先延ばしにしていくのだ。

3層―1 3層への道すがら

2層ボス攻略は割と楽だった。Nostalgiaの報酬で「星の名を冠する王」の情報がもたらされ、ベータでは2体だったボスが3体が増えたことへの対策が取れたのが非常に大きかった。

しかも、ボス自体がでかいおかげで、突撃するSAOプレイヤーの頭越しに援護射撃出来たのは中々良かったな。

おまけに弱点である王冠の耐久値が低いから、そこに俺たちPMCが集中砲火を浴びせてダウン取り放題だった。タチチャンカの弾幕は味方ながら怖かったけど。

「コハル、今回は大活躍だったな。今晚はボスの肉ですき焼きにしようぜ」

ついてくるPMCたちが大爆笑している。肉が硬そうとか、そもそも肉が取れなかったとヤジを飛ばしてくる。

「ダメだよ、お醤油がないから割り下作れないもん」

「クソが。茅場はアインクラッドを作っておきながら、醤油を作らなかつたか」

これは重罪だぞ。今すぐアップデートしやがれ。バグフィックスするんだ。

「お醤油……作れたらいいね」

「攻略の理由が増えちゃった」

あの甘塩っぱいタレが欲しい。体が塩分を渴望しているようだ。1層攻略後に糖分を取りすぎたせいで、辛いものとかしよっぱいものが恋しくなっている気がする。

「そっぴやキリト、あの件は前向きに考えてくれてるか?」

前を歩く少年は振り向き、迷ったような表情を見せる。今回もキリトはアスナと大暴れして、その強さを遺憾無く発揮した。

ボスの動きを見切って、適切に攻撃タイミングを教えてくれたのも良かったな。お陰でコハルがボス相手に真っ向から戦っていたのだ。

「悪い、ギルドとか全然考えてなくてな」

「別に、金払えとかノルマがとか言わん。元よりガチ勢のチーム兼後

進育成だからな」

ディアベルは1層で初心者 of 戦闘訓練をやってくれているし、リヨールハとシノンのスナイパーチームは普段 Woods で案内人をやっている。

リヨールハはそろそろ後継決めて、先の層で暴れたいとぼやいていった。

「ビーターの俺が入って、印象悪くならないのか？」

「そういう垣根を越えて、攻略という目的のために組んでるから タスクフォース 統合任務部隊名乗ってんだよ。DKBとALSがあ of 調子だし、俺らが受け皿にならないと」

あ of 2チームはバチバチにやり合っている。そのうち抗争でも始めそうな勢いだ。

早く中和剤を ディアベル ぶち込みたいが、本人にその気がないから仕方ない。後進育成にやり甲斐を感じているようだし、しばらくは好きにやってもらおう。

「どうかその知識欲しいんだよ。キリトだって、タルコフの知識入るから万々歳だろ？」

「まあな……魔法陣の件はアスナが一番喜んでいたけど」

あ of 件は思い出したくもない。コハルが魔法陣から引いたレイピアはしばらく戦えるほどの性能だったらしく、アスナがキリトや俺を連れて Woods 周回の旅を始めたのだから。

それで強化済みウインド・フルーレを手に入れたわけだが、100回ほど巡ったのではなからうか？ 他 of レアアイテムが出たり、シウトウルマンにリベンジマッチしたりもしたし、しばらく行きたくない。

「また魔法陣があるなら教えてね？」

「教えるけど、WoodsとShoreline以外は鍵掛かってるんだ。その辺 of ジャケットとかSCAVの死体から引いてくれ」

元々魔法陣部屋は超激戦区で、レアアイテムを目の前に殺されたことは数知れず。喜んでる最中にグレネード投げ込まれたのは悲劇だったな。道連れにしたけど。

そんな雑談をしながら階段を登ると、そこは森の中だった。また Woodsか？ もうやめてくれ。

「さて、SAOはここからが本番みたいなものだ。本格的に人型モンスターが出てきて、喋ったりもするようになる」

「SCAVを除いてな」

「アレはまた別だと思っぞ」

SAOプレイヤーにとってSCAVは頭痛の種だ。攻撃力は低いから、HPに物言わせてゴリ押すことも可能ではあるものの、ショットガンをもとに食らえば出血や骨折、部位破壊のデバフを喰らうし、アーマーの耐久値が削られる。

おまけにSCAVの探知距離が50メートルくらいあるせいか、探知スキルより先に見つかったりすることもある。PMCの募集が絶えないのはそのせいだ。

「この層にはさらに先の層まで続くキャンペーンクエストがあるんだ。俺はそれを攻略しようと思う」

「ほう、いいじゃないか。俺も行ってみようかな」

「それなら、私も行くよ！」

とはいえやるべきことが盛り沢山だ。またしてもタルコフのマップが隠されていないとも限らない。

「俺はシノンとあちこち探検するわ。なんかあったら呼んでくれ」

「Factoryだったら行かないからね」

「今のところタスクもないしな。その辺でハイドアウト拡張の素材を集めようぜ」

「賛成。見つけた者勝ちだからね」

「総取りされそうだ」

そういえばそれもあつた。いい加減寢床を改良したいから、アイテム集めを頑張らなければなるまい。どうしたものか。

「コハル、街に行ったら何か食べるか？」

「じゃあ、おやつにしようよ。もうすぐ3時だし」

「3時じゃなくても食ってるだろ」

「そうだったね」

笑うコハルを見てみると、俺もつられて笑ってしまおう。周りを笑顔にする、不思議な才能を持っているらしい。

お陰で、今やアトラスのアイドル的存在だ。そのコハルと組んで俺に刺さる目線が痛い。

敵も出てこないし、銃を背に吊るして歩く。両手は楽になるが、今度は手持ち無沙汰だ。

そう思っていたら、コハルがチョンチョンと手の甲を突いてきた。その合図を受け取ったら、そつと手を握るようになっていて、今日も自然な流れで手を握る。

この温もりが、生きていると教えてくれる。俺が死にかけて以降、コハルは事あるごとに俺が生きているのかを確かめようとする。

まだ不安なのだろうか。1人になってしまうことが。

「レイジとコハルって本当に仲良いね。付き合ってるの?」

「あ、あ、あ、アスナ!」

アスナが軽い気持ちで投げた言葉のグレネードを喰らい、コハルは顔を真っ赤にして動揺する。俺もたまたま飲んでいた水を派手に吹き出してしまい、汚い虹を描くハメになった。

「だって、凄く仲いいじゃない。ほら、手も繋いでるし」

しまった。いつもの流れでやってしまったけど、普段は2人で狩りに行った帰りとかで人目を気にしなかったんだ。今は思い切り人目があるじゃないか。

今更遅いが、コハルは投げ捨てるように俺の手を離れた。アスナめ、余計なことを。

「アスナだって、キリトとずっと一緒じゃん!」

「暫定パーティーだからね。色々知ってるから便利なの。電子辞書とかスマホみたいなものよ」

「確かに、一家に一台欲しいくらいだね。リョーハとは大違い」

シノンの一言が突き刺さったらしく、リョーハは倒れた。止まるんじゃないぞ、そう言い残して。友よ、お前だけを置き去りにはしない。俺もやる。

「それで、2人は何してるの?」

見えてはいないが、シノンのジト目が俺たちに刺さっていることだろう。仰向けに倒れ、草木に紛れようとしているのだ。不審極まりないと思ながら思う。

「俺たちキリトと違って役立つはずですので」

「光合成でもして、アインクラッドの環境美化に貢献しようかと」

「いや草」

キリトよ、お前ボケるタイプだったっけ？

「それにしても少し背の高い草ね。むしろの方がいいかしら？」

シノンは草むしりとか言ってるリョーハの首根っこを掴み、引っ張っていく。よかったな相棒。随分気に入られているじゃないか。

俺はどうなるのだろう。そう思っていたら、首に何か装備が追加された。そこからは紐が伸びていて、コハルの手に繋がっている。

「行くよ、レイジ」

「おい待て、リードの件は冗談じゃなかったのかよ!？」

どんな羞恥プレイだ。そんな抗議の声聞き入れられることはなく、街の手前までリードをつけて散歩するハメになってしまった。人がいなくてよかった。

3層―2 ガンスミス

3層に到着した翌日、俺は珍しく1人で出掛けていた。

コハルはアスナと服屋巡りに行き、キリトはレベリング。そう言うわけで、俺もショッピングを楽しむことにした。買うのはウエポンパーツだけだ。

いい加減銃をカスタムしたい。射撃時の反動がキツすぎて、弱点部位を集中攻撃し辛い。

ただでさえ火力で劣るのだ。この辺りをなんとかしなければ、この先役になど立てないだろう。

「あ、傭兵のお兄さん！少し見て行ってよ！」

考え事をしていたら少女に呼び止められた。茶髪の癖っ毛で、その快活な笑みに思わず釣られてしまった。

道端で露店を開いているらしく『鍛冶屋リズベット オーダーメイド承ります』と看板を出している。

品揃えは剣とか防具がメインだが、僅かにウエポンパーツも取り扱っているではないか。見ていこう。

「銃の部品はこれだけ？」

「もう少しストックがあるけど……どんなものを探しているの？」

「これに合うやつで、ハンドガードと銃床の方のストックが欲しい」

「それってどこよ？」

だろうな、と思わず呟いてしまった。彼女はSAOプレイヤーであって、PMCではない。銃の部品など分かるはずもないか。

というわけで、俺は背中からAK―74Nを下ろして説明することにした。そろそろ耐久もまずいし、本体も買い替えてしまおうか。

「ハンドガードはここ。銃身を覆ってる、いかにも握るところっぽいやつで、ストックはこの肩当て」

「それなら……これかな？」

彼女が差し出してきたのは茶色のハンドガード。上下左右の4面にレイルが備え付けられたそれは、残念ながら俺のAKと互換性が無い。

「こいつはダメだな。互換性がない」

「銃って難しいわね……」

「でも、これは序盤でかなり貴重なパーツだ。M4使ってるやつなら、50000コル……いや、もっと高値で買い取ってくれると思う」

「え、本当に!?!」

これは本当だ。グリップやライトの取り付けスロットが多く、反動リコイル低下率やエルゴノミクス（構えの早さなど、取り回しに関わるステータス）上昇値が店売りのものより高い。

「ああ。いいか、肩に”US&C”ってワッペン貼ってる奴らに売りつけるんだ。これが合う銃を初期配布されてる。俺たち”BEAR”はまだ別のだぞ」

在庫一覧を見てみると、いくつかAK用のアタッチメントがあった。しかしデフォルトのパーツだったりして、性能はあまりよろしくない。

特にハンドガードなんてレールもないし、グリップも取り付け不能だ。

「うーん、いいのがないな。オーダーメイドだかどうか?」

「割増料金掛かるけど、大丈夫?」

「命には変えられねえ。ある程度作るものを絞れたりするか?」

「出来るけど、銃の部品はわからないわよ」

「見せてくれ。教えよう」

ウエポンパーツは大まかな区分に分けると3種類ある。

照準器やフオアグリップ、ライトやマズルデバイスは”Functional”、ストックやレール単体、ハンドルは”Gear”、バレルやハンドガード、ピストルグリップなどは”Vital”に分類される。

鍛冶スキルが上げればさらに細かく絞って作れるようらしいが、今はこの大分類から選んでランダムに作成するような状態だった。

「まあ説明あるからそれを見ながらで。一旦はVital絞ってくれるか?」

「ええ。違うのだったらどうする?」

「仲間に売り払うさ。損してたまるか」

「商魂逞しいわね。それじゃ、見てなさい！」

代金を払うと、彼女はアルミインゴットをハンマーで殴り始めた。火花が散り、激しい音が響く。

俺のGSSh-01ヘッドセットはノイズキャンセリング機能がほとんどなく、ノイズすらも増幅してしまうので耳がぶっ壊れそう
だ。

「んがっ!? このクソヘッドセットが！」

思わずヘッドセットを投げ捨てるが、彼女は気にもせずハンマーを振るう。かなり集中しているようだ。こりゃ、大物かもしれない。

Comtac2作れたりしないかな? あっちならノイズキャンセリング付きだし、聞きやすくて好きなんだよなあ。リヨーハはSoldin一択って言うけど。

「出来た……これはどうかしら?」

彼女が差し出してきたのは筒状で、雪だるまのような穴がいくつも空いているパーツ。これが使えるかどうかを彼女では判別できないようだ。

だが、これは最高のものだと俺にはわかる。このレベル帯で手に入るとは、幸先がいい。

「最高だ! まさかここで手に入るとは! 上乘せさせてくれ！」

「え? え? そんなにいいものなの!？」

「少なくとも俺には！」

出来たのはガスブロック内蔵型のハンドガード”VS-24コンボ”だ。グリップを取り付けるには別途でレイルが必要になるが、これ自体がリコイルを4%低減させる優れものだったりする。

「よかった、お眼鏡にかなって嬉しいわ」

「仲間にもいいスミスがいるって紹介しておくよ。名前は？」

「リズベット。注文でもなんでも承るから、宣伝よろしくね」

「レイジだ。今後ともよろしく頼むぜ、なんならウチの専属になって欲しいくらい」

名乗った矢先にリズベットが硬直した。なんだ、俺の顔に何かつい

てたか？

「レイジってアレ？ 1層ボスに突っ込んだっていう、命知らずでクソ度胸の？」

「アトラスのリーダーとかじゃなくてそこかよ」

アルゴめ、どんな風に触れ回ったんだ？ 知らないところで変な噂が立ってやがる。

兎も角、パーツを作れる人がいるのは嬉しい。ドロップや購入より、こつちの方が安く済みそうだしな。

「相棒の武器も欲しいんだけど、それも作れそうか？」

「素材がねー。ちなみに何がいい？」

「今はレイピアなんだが、意外と深く突っ込んで戦うからなあ。あと、AK使いの野郎がいるからついでにそいつのパーツも」

コハルはどこで度胸を手に入れたのだろうか、最近は深めに突っ込んで一撃を加えることが増えてきた。レイピアもいいが、若干長くて当て辛そうにしているのをよく見かける。

特に、この前のShorelineのリゾート内では狭い室内での戦闘だったためか、長めのレイピアを使いにくいと言っていた。

あと、リヨーハもそろそろAKをカスタムしたい頃だろう。ついでに見繕っておくか。

「ならばダガーかなあ……でも素材が足りないし」

「何がいる？」

「メッセで送ってあげるわ」

デバイスが震え、リズベットからのメッセージとフレンド申請が来ていた。素材はそんなに難しくないと、今から集めに行つてこようか。

コハルが喜んでくれるといいんだけどな。

「集めたらまた来る。期待してるぜ」

「そつちこそ、いい素材持ってきてよね」

「おうよ。ついでに、授業料分割引してくれるとありがたいんだが」

「そうね。クーポン付きのメルマガ送るわ」

「リズのメルマガだけは迷惑メールリストから外しておくよ」

たつぷり笑ってから素材集めのため、俺は圏外へと足を踏み出す。へまをしてコハルを泣かせないように、気をつけて行かないとな。

※

ハイドアウトに帰ると、何やらいい匂いが漂ってきた。可愛らしい鼻歌が聴こえる。コハルが何かしているのだろう。料理かな？

「おかえり。ずいぶん遅かったね」

「ただいま。そんなに遅かったか？」

「お陰で、ちょうどいい感じになったよ」

コハルが鍋の蓋を開けると、スパイシーな香りが漂ってくる。カレーが目の前にあるではないか。なんて事だ、アインクラッドでまでカレーが食えるなんて。

「すげえ、凄えよコハル！」

「アスナと料理スキル上げてたんだ。上手く出来るといいんだけど」

「これは間違いなく美味しいと思うぞ、最高だよ！」

腹の虫が嘶く。それ以上に、コハルがあまりにも可愛らしく見えてスリップダメージを喰らいそうだ。黒鉄宮の生命の碑に「萌死」とかいう死因を書かれるのは勘弁だが。

「喜ぶのはまだ早いよ。食べる前でしょ？」

「そうだな、完成が待ち遠しいよ」

「そういえば、どこ行ってたの？」

1人で出かけるなんて珍しい、とコハルが顔を覗き込んできた。確かに、いつもならリョーハと連れ立って買い物に行くし、最近だとアトラスのメンバーとつるんでいるからな。

「プレイヤーの鍛冶屋に。色々武器を探してたもんでな」

色々いじったAKを見せると、コハルは納得してくれた。耐久値もやばかったから、思い切って本体も作ってもらったのだ。AK―74NがAK―74Mになったが、コハルにはわかるまい。

でも取り付けたアタッチメントは今までと大きく違うし、この低レベルでNPCから買える代物でもない。コハルはそんなパーツを見て、少し羨ましそうにしている。

「なんだかかつこよくなったね」

「ああ、性能もピカイチだ。スミスの腕が良かった」

そして、俺は自分のインベントリからダガーを取り出してコハルへと差し出す。コハルは自分へのお土産と思わなかったのか、一瞬驚いていた。

「これ、私に？」

「そうだ。お土産に作ってもらったよ。この前リゾート内で戦いにくそうにしてたし、これならどうだ？」

鋭さと頑丈さに重きを置いたダガーは、レイピアのようなりーチはないが取り回しがいい。サブウェポンとして使えるはずだ。

「……ありがとう、すっごく嬉しいよー！」

コハルは満面の笑みでダガーを胸に抱く。花が咲いたような、見ていっただけで心を洗われる笑顔にどれほど救われたことか。この笑顔のために苦勞をした甲斐があった。

まあ、生き残って欲しいからというのが本来の目的で、喜んで欲しいのは副次目標だが気にしたら負けだ。

「明日、慣らしに行こうか。最近リョーハたちとのパーティも多かったし、久しぶりにデュオで行こうぜ」

「そうだね。レイジと2人きり、か……楽しみだよ」

「そんなにか？」

「レイジといると、何かしら面白いことが起きるからね」

巻き込まれ体質みたいに扱わないで欲しい。そうじゃない。多分。

「でも、その前にご飯食べないとね」

コハルはダガーをストレージに格納すると、鍋へ手を伸ばした。たちまちスパイシーな香り漂うカレーは皿に盛り付けられていき、俺はそれをテーブルへ運んでいく。

「流石にお米はなかったから、バケツトだけどいいいかな？」

「コハルのカレーが食えるんだ、文句はないよ。むしろルーのまま飲んでもいいぜ」

「飲み物じゃないんだから」

「カレーは飲み物って言うだろ？」

コハルのカレーでそんな勿体無いことはしないけどな。

熱々のジャガイモがゴロゴロと入っていて、2層では余るほど手に入る牛肉もたっぷりだ。これを一気に飲みなど出来るわけがない。ゆっくり味わわなければ。

コハルは俺の対面に座ると、カレーに手をつけず俺の方ばかり見ている。反応が気になるのだろうか。その気持ちよくわかる。

だから、早速バケツトでカレーを掬い取って口に運んだ。辛さと熱さ、それを掻き分けて進んだ先に旨みが待つ。味の七変化と、ジャガイモや肉の甘味の洪水。

これは暴力的すぎる。こんな暴力にさらされた舌と胃になす術はない。そして残念なのは、俺はそれを言語化するだけの語彙力を持っていないことだ。

「美味い」

天を仰ぎ、目頭を押さええて呟くのが精一杯だった。コハルも、その一言で報われたように微笑んでくれたのが嬉しかった。

5層―1 嵐の予兆

正面50メートルに建築中の倉庫がある。あちこち穴があつて、まだ骨組みだけのコンクリート製2階建ての廃墟だ。

そのこの2階では死の音楽を奏でる奴らがいる。タルコフの芸術家は随分情熱的なものだ。時折光の尾を引いて飛んでくる曳光弾は、音の恐怖に視覚のアクセントをつけていた。

全く、最悪の音楽だバカやろー。

「コハル、頭上げんなよ！ キズメルも絶対動くな！」

「言われなくても上げたくないよ！」

「人の作る兵器とは、中々に面妖だな！」

俺の隠れている盛り土は重機関銃の弾を防いでくれている。ちよつとした古墳くらいに盛られた土の密度は銃弾すら防ぐ、強い味方になるのだ。

とはいえ音や衝撃波は絶え間なく俺たちを襲ってきていて、隣でコハルが悲鳴をあげる。

スーカ！ ベータに比べて強化されすぎだ！

「リヨーハ、シンノン！ てめーらどこにいやがる!? こっちは新建築で制圧くらつて動けない！」

『旧建築迂回して、側面に回る！』

「早くしてくれ、奴ら詰めてくるぞ！ 頭あげらんねえ！」

重機関銃は俺たちが隠れている盛り土に狙いを合わせて制圧射撃をしている。なんつー賢さだ。中身人間じゃないのかあいつら？

支援がなければすり潰される。こんなクソな状況に、どうして陥つたのだろうか。

※

年の暮れも近づくアインクラッド第5層はまだ突破されておらず、俺はコハルやアトラスの面々と共に攻略に勤しむ毎日を送っている。アトラスはノルマを設定しておらず、タスクや攻略などの目的別でパーティを組んで挑んだり、気心知れたメンツで固定パーティを組ん

だりと様々だ。タルコフ時代そのまま、俺としては居心地がいい。そして今日の予定は、コハルと夜景を楽しみながらスイーツ巡りの旅だ。リーダーの俺も、たまには休暇が欲しいからな。

「アルゴから情報買った甲斐があったよ」

「代わりに、レイジの新しい服は買えなかったけどね」

ズボンだけは”BEAR Summer Field”に変えることが出来たが、上はまだデフォルトの半袖シャツのままだ。アルゴから店の地図を買うのに使ってしまったって、服を買う予算が残らなかったからだ。

「一応12月だし、長袖が着たいな」

「寒かったり、雪が降ってたりはしないけどね」

「雪、か……」

青空を眺め、少しだけ故郷を思い出す。冬にはバカみたいに雪が降り、一面が白く染まる世界へと変貌する。

どんな豪雪で道路が埋まろうと休校にならないくせに、弱い台風ではすぐ休校になるのだ。そんな理不尽を思い出し、思わず笑ってしまった。

「リアルなこと、思い出してた？」

こういう時にコハルは鋭い。俺の考えを正確に見抜いて、心配そうに目を向けてくるのだ。

帰りたくななんてない、って言った癖にな。

「ああ。雪かきで腰をおかしくしかけたな、って」

「もう、おじいちゃんみたい」

「雪を舐めたら死ぬぜ」

そう笑いながら料理に手をつける。この店はアルゴの一押し店であり、スイーツ以外の料理も最高だ。割と予算も潤沢になってきたし、たまに贅沢をするのも悪くない。

まだまだ5層だが、こんな贅沢ができるならばインクラッド生活も悪くない。現実でこんなに豪華な食事を食べるとしたら、どれだけ貯金が必要なことか。

「あ、このお肉美味しい」

「チキンステーキもバカに出来ないな。それに酒は苦手な方だけど、このワインはスツといけるよ」

「お酒飲まない人？」

「ジョッキ半分も飲んでないのに倒れたことがあってな」

「本当に弱いね。酔いつぶされちやいそう」

「そのままテイクアウト……する人いるか？」

笑うコハルを見てみると、俺もつられて笑ってしまふ。この楽しい時間がずっと続けばいいのに。そんな時間をくれるアインクラッドが好きになりつつあった。

そんな俺たちのテーブルにタルトが並べられる。ブルーベリーが山と盛られていて、隙間から見えるカスタードが甘味の想像を引き立てる。

アルゴ曰く、アイテム発見のバフがついているらしい。数量限定で、ベータではすぐに売り切れる代物だったとか。これが食べられるのはラッキーという話だ。

「わあ……！ レイジ、これすごく美味しそう！」

「写真撮っておきたいくらいだな。有名パティシエのなんとか、みたいな感じだもん」

「そうだね、スクショ撮っておこうよ」

タルトを前に微笑むコハルとタルトを収める。でも、これは見るこ
とができない。

「やっぱりナーヴギアのメモリに行っちゃった。ログアウトしないと見れないっほいな」

「でも、少し楽しみだね。ここを出てから、みんなや……もちろん、レイジとスクショを見て、思い出話がしたいね」

「やっぱりタイムカプセルみたいだ」

「もつと撮っておこうつと」

話しながらもコハルはスクショを撮ったり、フォークをタルトへ突き立て、口へと運んでいく。その顔はなんと表現すればいいかわからない、満面の笑みを浮かべていた。

俺はそつとその顔をスクショに収めておく。刹那に消えてしまふ

命だからこそ、この一つ一つが大切な思い出なのだ。例え死んだとしても、忘れたくない。

「美味しい、これすごく美味しいよ！」

「うん、ベリーは程よい甘酸っぱさ、そこに濃厚なカスタードとサクサク生地……バフ云々を抜きにしても、また食べたくなっちゃうな」

甘いものは好きだ。それ以上に、笑顔のコハルを見れるのが嬉しくてたまらないのだ。

またこの時間を楽しむためにも、頑張らないといけないな。生き残る理由が出来てしまった。

「それで、アルゴさんが言ってたバフってどんなのかな？」

「落ちてるアイテムが分かるようになるらしいぞ」

へえ、とコハルはあちこちを見回す。すると、何か光るものが地面に落ちてるのが見えた。試しにそれを拾ってみると、古びたコインのようだ。

「もしかしてこれか？」

「アルゴさんの本にも載ってるね。カルルコインって言って、集めると換金してくれるみたいだよ」

「バフ効果1時間、街中に落ちているのか……探してみるか？」

「うん、食べ終わったら行こう！」

この美味いタルトを食べ終わるのは惜しいが、モタモタしていればバフが切れてしまう。せめて、この味を忘れないようにしよう。

※

「あ、またあつたよ！」

「今度は宝石か？　すげえな！」

コハルとの宝探しは盛り上がった。コインだけでなく、指輪や宝石といった装飾品も落ちているのだ。これは目を輝かせるのも無理はない。

砂遊びをする子供のような心で楽しめる、中々いいシステムだ。嫌な事とか辛いことも忘れて、楽しく遊べて金が稼げるのだから。

「でも、バフはもう切れちゃうね」

「もう1時間か？　楽しかった分早いな」

「私も時間を忘れちゃったよ。換金しに行こっか」
「だな」

俺のバックパックにはたっぷりとお宝が入っている。コハルのストレージに入れた方が容量とか重量の制限は緩いのだが、俺のスキル上げのために俺が運んでいる。

タルコフのスキルは特定の行動をすれば経験値が溜まり、スキル効果は常時発動する。

重量オーバー状態で移動すれば「筋力」のスキルポイントが溜まり、レベルが高いほど重量制限が緩和され、近接攻撃のダメージも増える。いいこと尽くめだ。

しばらく歩いて、店に到着した俺たちは早速お宝を鑑定に出す。そのお宝は売却してコハルと山分けにするのだが、俺は2つくらい売らずにとって置いた。

「コハル、これプレゼントだ」

まずはひとつ、大きめの宝石を渡す。拾った時に目を輝かせていて、売るのを惜しそうにしていたからだ。

宝石のひとつくらい売らずにいても困るわけではない。それより、コハルが喜ぶ方が優先したい。

「わあ……いいの？　こんなに大きな宝石、売ったら結構な値段になるよっ。」

「そんなくらいすぐに稼いでやるさ。でも、その宝石は買えるかわからねえぞ？　それともうひとつ」

コハルの手を取り、右手の中指へ指輪を嵌める。小さな宝石が嵌め込まれたそれは、敏捷アップの効果付きだ。バフ付きだし、きつと喜んでくれるだろうから。

「指輪……？　レイジ、これって……」

「似合うと思ったからさ……こそつとつといた。バフがついてたのはたまたまだ」

多分、言葉はしどろもどろだっただろうし、キョドっていたことだろう。女の子にアクセサリー、それも指輪を贈るなど、俺の人生で前代未聞だしな。

だから、少しだけ怖かった。拒絶されるのが、嫌がられるのが。でも、コハルの笑顔はそんな迷いを杞憂に変えてくれた。

「ありがとう……い！　これ、大事にするね！」

渡してよかった。そう思うと同時に、もう少し信じてもいいのかなと、そう思えた。こんな俺でも受け入れてくれる人はいる。今まで戦ってきて、ようやくそう思えるようになっていた。

その先の言葉を伝えようとしたが、それは入店してきたキリトとアスナのせいで言えず、またしても胸の中に収めておくしかなかった。

収集合戦に負けて、晩飯を奢ることになったキリトの姿を見て溜飲を下げたのはまた別の話だ。

5層―2 悪意の陰

俺は珍しく宿にいた。キリトに話があると呼ばれたので、彼が泊まる部屋に来ている。

コハルはアスナに呼ばれたそうで、きつとガールズトークでもしているのだろう。

「で、話ってなんだ。やっとアトラスに入ってくれる気になったか？」

「そっちじゃない。俺はソロの方が動きやすいからな」

「ま、期待はしてなかったさ。なら本命は？」

ここまでソロを貫いてきているのだ。今更入ります、と言われた方が驚く。それに、ソロだからこそ対立する攻略組の中で立ち回れる場合もある。

まあ、アトラスとしてはこそっとバックアップくらいはするけどな。

アスナに告白する、とかだったら面白いのに。

「3層の件、覚えているか？」

「あのエルフクエか？」

3層で俺たちがサニターとやり合っている頃、キリトはキャンペーンクエストに挑んでいた。

3層から9層まで続く”エルフ戦争”クエストの最中、ALSとDKBでPKに発展する寸前のいざこざが発生したり、それを阻止しようとしたキリトにデュエルを仕掛けて殺そうとした輩がいたという。

もちろんそんなイカれた野郎を放置するわけもなく、アトラスはそのプレイヤーの情報を探っている。

尚、エルフクエは俺たちも遅れて始めた。理由？ 楽しそうだったからさ。

「そうだ、その件について」

「Shorelineじゃなくてそっち行っておけば、また展開も変わったんだろうかなあ」

「ああ。それに話を聞く限りだと、どっちのギルドにも工作員が潜んでいる可能性がある。疑心暗鬼からの対立を煽って、PKをさせよう

と今も画策しているはずだ。アトラスは大丈夫なのか？」

「割とこっちは一枚岩なもんでね」

アトラスは良くも悪くも、俺やリョーハの影響力でまとまっている。その上、メンバーもベータ時代からの気心知れた奴だったり、共にボス戦を切り抜けただけあって繋がりは強い。

そんな所に煽動野郎がいたところで、何言ってるんだお前と吊し上げられるのがオチだ。怨念マリモの刑にされるだろうさ。

「そっちが羨ましいよ。悪いけど、そっちでも警戒していて欲しい。情報があつたらまた伝えるから」

「任せろ。そんな時こそ俺たちの出番だ」

俺たちは本来異質な存在で、SAOの事やMMORPGプレイヤーの気質や事情も知らない。そして、それは逆も然りというわけだ。煽動野郎も涙目だろうさ。

「そんなレイジにお願い事があるんだ」

キリトが紙片を差し出してきた。それを見てみると、座標と時間だろうか、数字と文字の羅列しか書いていない。

「これをどこで？」

「地下のダンジョンでスライ・シュルーマンが持っていたんだ。何かの連絡用だけど、書き損じて捨てたらしい」

「あの泥棒ネズミか」

スライ・シュルーマンはネズミ型のMobで、プレイヤーのアイテムを盗む厄介な奴だ。そういうえば、指輪を盗まれたコハルが血眼になって追い回していたっけ。

結局は居合せたタチャンカの乱射に巻き込まれて死んでいて、コハルに感謝されたマリモがキョドってるのは中々レアな光景だった。

「ああ。フレンドメツセージがあるのに、わざわざこんな連絡方法を使うなんておかしいだろう？」

「調べる必要があるな。それで、俺について来てくれと」

「そうだ。アスナを巻き込みたくない」

「俺ならいいのかよ」

苦笑いを浮かべて冗談めかして言うが、心の中では行く決めてい

た。本当にPKを目論む輩がいるとして、そんなのが裏で蠢いているならば調査しなければならぬ。

特に、攻略組が潰し合うなんていう事態になるくらいならば。

きつとそれは、命を賭けるに相応しいことだろうから。

「昨日の21時半、ダンジョン入口に集合でいいか？」

「完全武装で行く。ただ、コハルは置いていくからな」

そういう俺の顔を見て、キリトはニヒルに笑ってみせた。

「結局、そこはレイジも同じじゃないか」

「まあな。置いていかないと約束したのに、俺はまた嘘つきになっちゃう」

一体、俺は何度コハルを泣かせれば気が済むのだろうか。また首輪とリードを着けられる羽目になりそうだ。

※

コハルたちの女子会が長引いているのをいいことに、俺とキリトはダンジョンへ潜っていた。夜中に家を抜け出すような気分だ。バレンいかヒヤヒヤした。

ちなみにだが、リヨーハは置いて来てしまった。奴まで来たら、俺が何か企んでいるのが丸わかりだからな。キリトとサシで飲みにくいと騙したことは後で謝ろう。

「で、連中はなんでわざわざ手紙を使ってるんだ？ メッセあるのに」

俺はAKに取り付けたライトで洞窟を照らしつつ、隣のキリトへ声をかける。この暗い洞窟は暗視スキルか、フラッシュライトが必要不可欠だ。

「履歴を残したくないのかも。後ろ暗いことをしているんだからな……ところで、あの暗視ゴーグルだっけ？ アレは使わないのか？」
「使えないんだ。暗視装置ってのは星明かりとかの僅かな光を増幅する装置だから、洞窟や密室みたいな完全な暗闇だと役に立たねえのさ」

そんな構造ゆえに、ライトなどを向けられると大変なことになる。

ダンジョンだから松明などがあり、完全な暗闇というわけでもないが、そういった灯りが眩しくて見辛くなる。どの道フラッシュライト

の方が目潰しにもなるから有利だろう。

道中のM o b共はキリトが始末して、S C A Vは俺が一撃で仕留めていく。サプレッサーと亜音速弾併用のおかげで、随分音は小さくなった。気付かれにくくなっているだろう。

俺たちが来ているのが露見すれば、きつと目的の人物は逃げる。それでは意味がないのだ。

こういう閉所戦、よくリョーハとやってたっけ。

コハルもリョーハもいなくて、あまり組んだことのないキリトとの作戦。一歩進むたびに、不安が俺の背中のにしかかる。

ブーツが岩を踏みしめる音がして、その反響音だけが周囲を包む。あまりにも寂しく、あまりにも不気味。キリトもまるで亡霊かのような雰囲気で、コハルが恋しくなっていた。

その秘めたる実力も何もを外には漏らさない。まるで暗闇のような男だ。だからこそ、底が見えない不気味さに俺は冷や汗をかいているのだろう。

「レイジ」

キリトの意思を汲み取り、ライトを消して壁に身を寄せる。何やら灯りが漏れているそこは、ダンジョン内の安全地帯らしい。目的の座標はここのはずだ。

「さーて、リズベット製のコレを試しますかね」

俺は静かに息を潜め、耳を澄ませる。ヘッドセットはリズベットに頼んで作ってもらった”C o m t a c 2”に変えてきた。

G S S hと違ってノイズキャンセリング機能付きで、雑音や環境音をカットしながらも足音や声を聞きやすくしてくれる。もう少しレベルを上げないとトレーダーが取り扱わない代物だから、ここで手に入るのは幸運だった。

おニユーのヘッドセットは壁の向こうの足音もよく拾ってくれる。誰かがその空間へと入ってきて、何やら話を始めた。

「どいもどいもおー」

軽薄な笑いと、あまりにも軽い口調の男。足音はそいつの仲間か。どうやらビンゴのようだ。キリトも頷いている。

「メッセでいいじゃん」

「ダメダメですよお！ 万一やりとりしてるのバレたら、苦勞が台無しですよお！」

やっぱり、キリトの読み通り後ろ暗いことをしてやがるようだな。言っていた通り、攻略組間の対立を煽っているのか？

「例の話、どうなりました？」

「上手くいったぜ。ウチの主力は合同カウントダウンブツチして、一気に迷宮区を狙う！」

「いい感じですね。3層4層ではちよつと日和っちゃいましたからねえー、リンちゃんとキバちゃん」

「アトラスの野郎がいなきや上手くいったのによ。まさか殺す気満々で脅して来るとは予想外だったぞ」

「アッチはPKがゲームの本質ですからねえ、タルコフ買えばよかつたかも」

キリトと顔を合わせると、彼も頷いた。こいつらで間違いない。それぞれのギルド奥深くに入り込んで、対立を煽ってやがる。

そういや、対立を煽るようなことを言ったバカに拳銃突きつけて脅したアトラス野郎って、俺のことじゃねえか。

『テメーみたいな思い違い野郎が一番迷惑なんだよ。お前1人のせいでは何人犠牲にするつもりだ？ そんならここで死にやがれ。それが全員のためだ』

うん、一言一句思い出せる。当たるギリギリに1発撃ってやったし（しかも曳光弾）、荒療治だけど対立と反ベータの論争を無理矢理抑え込んだな。

アトラスのPMC全員がそいつに銃口向けた時は流石に焦ったが、散々対立して足の引っ張り合いをみせられたらこっちも辟易してしまうというものだ。こいつらのせいか。

そんな思い出に浸りながら耳を傾けるが、あのヘラヘラ笑ってる野郎の喋り方が本当にムカつく。とりあえず、ギルド同士をぶつけようとしているのだけはわかった。

ALSとDKBしか話が出てないが、アトラスのことは諦めたか？

そうであつてくれると助かるんだがな。というか、こんなウザいのがいたら吊し上げてしまいそうだ。主にタチヤンカあたりが。ケツに銃口突っ込んで、弾切れまで撃ちまくるだろう。

その時、俺のヘッドセットが不審な音を捉えた。何か石にでも躓いたような音で、中の男もそれに気付いたらしい。

俺とキリトではない。ならば誰だ？

「ちよつと見てきますう〜」

俺は咄嗟に手榴弾を手にする。F-1ハンドグレネードの直撃ならば、SAOプレイヤーだろうと即死させられるはずだ。最悪の場合、コレで一網打尽にして逃げよう。

「うわっ、なんだこいつ!？」

なんだ、Mobだったか。ホツとした俺はグレネードをポーチへ戻し、再び銃を手取る。

相手はMobを倒したのだろう。死体をサーチする音が聞こえる。

「おおっ、マジかよー。バリレアっぽいレイピアじゃん!」

ピクリ、とキリトの体が震えた。レイピア、レア、そのふたつの単語が並んで、自分のパートナーを連想したのだろう。

それは俺も同じだ。コハルにはダガーを贈ったが、レイピアとの併用は変わらない。

もしもの事があつたなら……俺はピンを抜いた手榴弾を抱えて、奴らに飛び込む。だから、キリトの気持ちもよくわかった。

「シルバリック・レイピア! かけーじゃん! しかも+5まで強化済み!」

「よく見てくださいよおー、シバルリックですよ」

コハルのじゃない。だが、以前見せてもらったアスナと同じ名前のレイピアだな。

キリトに目を向けると、やはり縦に頷いた。そして、ハンドサインで『突入』と指示して来る。奴らがアスナを殺ったのか、はたまた事故でレイピアが失われたのかをハッキリさせたいのだろう。

俺だつてそうするさ。だからF-1グレネードの代わりに、”Zarya”スタングレネードを取り出し、キリトに見せる。

やってやろうじゃん。突入からの制圧は俺の十八番だ。
ピンを抜き、スタングレネードを投げ込む。安全レバーがバネに弾
き飛ばされた金属音が響き、遅れて爆音が轟いた。

5層―3 思惑

「突入、突入！」

ライトを点灯させながら突入し、まずキリトが手前の白い頭巾を被った男を組み伏せる。光で視界を、爆音で聴覚を奪われているせいか、あつさりと捕らえられていた。

俺は奥の黒い頭巾男。白と違って完全に視界を奪えたわけではないのか、反撃しようと思えば腰のダガーに手を伸ばしていた。

それを許すわけもなく、その腕に組みついて引きずり倒し、武器は奪って遠くへ投げ捨てる。制圧完了だ。

ちなみに俺のAKはスリングで体からぶら下げてあるので、落っこしたりルーターにパクられる心配はない。

「クリア！」

「こっちもだ、レイピアは？」

黒頭巾が持っていたシバルリック・レイピアを奪い取り、キリトへ投げ渡す。キリトならば、アスナの武器をよく覚えているだろう。

「アスナと同じ性能だ」

「いてて……ルーターからドロップしたんですよお。お友達のためだから返せ、と？」

白頭巾はこの期に及んでも口調が崩れない。黒頭巾の方は俺が組みついて拳銃を突きつけているし、何をしようにも動けまい。

「そんな難癖をつけるつもりはないけど、あんたが俺の相棒にデュエルPKを仕掛けて奪ったかもしれないだろ？」モルテ」

「自分が第3層であなたにやってみたいにですかあー？ キリトさん」

モルテはキリトを振り払い、追撃するかと思いきや俺の方に来た。発砲したが狙いがズレ、2発目を撃つ前に体当たりで吹き飛ばされる。

「おやおやあー？ 噂のレイジさんじゃないですかあー！ ちようど良いところに来ましたねえ！」

「飲み会ならお断りだ！ 酒飲めねーんだよ！」

「つれないですねえー！」

モルテが俺に馬乗りになり、拳を振り下ろす。そんなの簡単に食らってやる義理はないので、その腕を絡みつくようにして捕らえる。後はその腕を引っ張りながらブリッジの要領で腰を突き上げると、モルテはバランスを崩して引き倒される。

形勢逆転、今度は俺がぶん殴ろうとした横から黒頭巾の蹴りが来た。吹っ飛ばされ、転がって受け身を取りつつトマホークを抜く。こいつら、ここで殺す。

トマホークを握る手に力が入る。上手いこと初撃をかすらせて、奴らをオレンジにしてから心置きなくぶっ殺してやろうか。それならキリトも吹っ切れるだろう。

左足を一步前へ。後少しで間合いに入る。
今更恐れるな。PKなんて、慣れたもんだろう？

武器を弾いて組みついたら、後はやりたい放題。脚を破壊して動きを止め、急所を殴りまくれ。ただ冷徹に、機械となりて。

殺意だけ。今の俺には、理性も自律心も必要ない。

「わーっ！」

「わー！」

そんな俺の覚悟を、2つの黄色い声が吹き飛ばす。幽霊を恐れない俺が、ビクン！ と跳ねてしまったではないか。トマホークを落とさなくてよかった。

もう一つの入口に声の主がいた。アスナとコハルだ。どうしてここにいるんだ？ アスナがレイピアをパクられているからなんとなく想像はついていただけ。

「なるほど、そういうことか！ レイジ！」

キリトはアスナの方へ向けて走る。来いって事だろう。何を考えているか知らないが、何か秘策があるんだろう。コハルも早く来いと体の動きまで使って呼んでいるのだから。

「スーカ、どーなっても知らねえぞー！」

トマホークを仕舞い、全力で走る。すると、コハルは伸ばした手で俺の手首を掴んで引き寄せた。1層の時のリベンジかのように。

そのまま向きを入れ替えられ、壁に押し付けられる。俗に言う壁ドンってやつだ。思わずドキリとしてしまうし、コハルも顔を赤くしている。

そういえばキリトが見えないが、奴はどこへ行った？ それに、何やら地鳴りのような音も聞こえてきた。それはまるで山津波。黒頭巾の慌てた声も聞こえてきた。

「Mob呼び寄せて擦りつけるとかMPKかよ！ 汚えんだやり方が！」

いや、お前に言われたくはない。

「あはは、これはダメですねえー。いったん引きましょー」

2人はどこかへ逃げ去り、あたりには静寂が戻る。ようやく一息と思ったまさにその時、コハルが俺の胸に顔を埋めてきた。

「……また置いていった」

「よく気付いたな。リョーハでさえ置いてけぼりにしたのに」

「アスナがレイジとキリトがどこか行くのを見たから、こっそりついて来たの。落とし穴には落ちるし、アスナはレイピア取られて、幽霊は出るし……」

「散々な目に遭ったな」

もう、とコハルの拳が胸を叩く。アーマープレート殴って痛くないのか？ と思ったら、痺れたようで手を振り始めた。痛みは緩和されるが、痺れみたいなのが不快感はあるもんな。

「レイジがいなくなるからだよ。ケーキ奢りたくてわざとやってる？」

「そんな理由なら、今頃俺の財政が破綻してるぞ」

AKがそろそろ耐久値減少により、買い替えの時期なのだ。不労所得があるわけでもなしに、そんな豪勢なことは出来ない。やりたくてもな。

「私を連れて行きたくないのは分かるけど、せめて一言欲しかったな。パートナーに隠し事されるの、悲しいもん」

チクリと胸に刺さる。彼女がもう弱くないと分かっているのに、心のどこかで信じきれない俺がいる。俺の中のコハルは、始まりの

日のままで止まっているのかも知れない。

本当に、臆病な自分が嫌になる。

「……次は言うけど、連れて行くかは状況次第だぞ」

「それでもいいよ。レイジが急にいなくなるのが怖いんだもん。一言でもあれば、またどこかで戦ってるんだって分かるから」

”突然貴方が居なくなったら、お墓の場所も分からないんでしよう”

公式実写映画で見た、そんな一言が呼び起こされる。

アインクラッドで別れの挨拶が出来る方が珍しいけど、せめてどこで散ったのかは知りたいのだろうか。

※

それから時は過ぎ、年の瀬が迫り来る。こんな仮想の世界で年明けを迎えるとは、なかなか出来ない体験だ。まあ面白いだろうな。どうせリアルじゃぼっちだし。

結局、煽動PK連中は引き続き調査するしかないと言う結論になった。というか、それ以外に手が無い。

キリトもアトラスも、ALSやDKBにとっては外野でしかない。それが裏切り者がいると騒ぎ立てたところで、俺たちが疑われるだけだ。俺がスパイならそうなるよう持っていく。

「ねえレイジ、私たちはどうするの?」

「どうするって言うてもなあ」

コハルと2人、サンドイツチを食べながら高く聳え立つ塔を見つめる。それこそ迷宮区であり、次の層へと続く梯子だ。

ALSは単独でそこを突破し、ボスを仕留めると言う話は本当だったららしい。隠してるつもりだろうが、物資を買い漁ってたりしてるのが丸わかりだ。

俺が出品してた回復キットが結構売れてるし、そのログで買った奴がわかるんだよ。フリーマーケット機能はタルコフ由来だからな。

おまけに笑えないのが、ALSとDKB、アトラス合同のパーティをドタキャンしてやるつもりらしい。面目潰してくれるじゃないか。

ALS側の企画者からも、それを裏付けるメッセージが届いてい

る。詳細は機密もあるだろうから省かれているが、芳しくないという一言だけで大体理解は出来てしまった。

それに、俺が言ったところで止められるわけじゃない。いっそ、俺たちでボスを攻略できりや楽なだけだな。

「……しゃーなし、あの人に前線までご足労いただくか」

「あの人って、キリトのこと？」

俺は首を横に振る。このひび割れた関係を修復できるであろう、人望の厚いあの人を呼ぶしか手立てはない。

俺がやろうとしたら、絶対また銃をぶつ放すことになるからな。

「もつと大物さ。まあ、キリトとアスナも勘定には入れてるけど」

俺は立ち上がり、胸元のプレストークスイツチを押す。呼び出すのは副官のリョーハだ。そろそろこき使ってやろう。シノンとデートしていろいろ知るものか。

「リョーハ、メイベルに出撃命令を出せ。それと、ディアベルさんも呼び出せ」

『いいけど、お前何始めるつもりだ？』

「そりゃ、戦争しかないだろ」

『マジかよ』

「マジだ。メイベルには迷宮区でALSの動きを監視させろ。接触無用、気付かれたら即撤退」

『なんでそんなストーカーみてえな真似を……まあいい、ブラックバーンに指示を出すぜ』

勝算はこれから計算する。もししくじったらごめんさいだ。

でも、やらなければならぬ。今こそ、俺たちアトラスの存在意義が問われる時なのだから。

5層―4 騎士の帰還

「お前に任せたのは俺だが、なんで俺のハイドアウトを会議室代わりにしやがった？」

リヨーハはそっぽを向いて口笛を吹く。中々人口密度が高く、少し狭く感じてしまうのだ。

集まったのは俺とリヨーハにコハルとシノン、キリトとアスナ、あとはブラックバーン以下5名のレイドグループ”メイベル”と、アルゴの顔もある。

この人数を収容するとはやはり狭い。ギルドホーム買おうかなあ。

「そんなことより、ディアベルさんはどうした？ おいリヨーハ」

「ちゃんと連絡したさ。すぐに行くって言ってたが、どこで道草を食ってるんだか」

そんな時だ。ギイ、と鉄格子の扉が不快な音を立てる。ようやくお目当ての人物が来たらしい。見に行くまでもなかった。

「遅刻ですよ、ディアベルさん」

「ごめんごめん、Mobに絡まれてたからさ。状況を教えてくれるかい？」

遅刻しても爽やかな騎士、ディアベルが薄暗いハイドアウトに現れ、場が少し明るくなったような気がする。

「今から始めるところですよ。ブラックバーン、報告を」

場の空気が張り詰める。これから話される内容は、攻略組どこかアインクラッド全体に関わりかねない議題だ。一線級の連中がそれを理解できないわけもない。

「隊長殿の指示通り、迷宮区入口を交代で見張ってた。それこそストーカーみたいにな」

「得意だろ、タチャンカさえ隠しておけばな。それで、どうなった？」

「結論から言わせて貰えば、ALSの一線級部隊が交代で迷宮区へ侵入してるのを確認。詳細は報告書で頼む。説明が大変だからな」

「その事実さえ分かれば問題はない。ま、概ね予想通りってところだ。裏付けがどうしても欲しかったものでな」

そして、俺は伝えなければならぬ。あの日に掴んだ最悪の情報を。

「ここからは機密事項だ。他ギルドやプレイヤーはもちろん、アトラス内でもまだ話すな。余計な混乱を招く。特にアルゴ、秘匿が約束できないなら出てもらうが」

アトラスは随分人が増えた。だからこそ、まだ息を潜めているだけで煽動PKの一味が紛れている可能性は排除できない。信頼できる古参メンバーで、1層ボス攻略を共に戦い抜いたメンバーだからこそ話せる。

それに、まだわからない事だらけだ。アルゴは売ってはならない情報をしっかり見極めてくれるが、金に転ぶ危険は排除できない。

「レー坊がそこまで言うなら約束するヨ。この情報は売らない、正しいナ？」

「それでいい。下手するとアルゴが口封じされる危険もあるから、詮索も無用だ。情報収集は基本、こつちで請け負う」

場合によつては俺が口封じに動かねばならなくなるから、きつちり約束を守ってもらいたいところだ。そんな姑息な奴じやないだろうけど。

「本題に入ろう。攻略組の対立を煽って、意図的にPKを起こさせようとする勢力がある。俺とキリトは先日、そいつらの会合に潜入して情報を得た。今回の件もそいつらが糸を引いている」

途端にざわめきが巻き起こる。知っていた人間以外は勿論動揺するだろう。そんなことをして何になる。対策はどうすればいいのかと。

「で、その煽動PK連中をぶっ殺すのか？」

レッカーの言う通り、あいつらを殺せるならそれが一番楽だ。後顧の憂を無くせるからな。でも、そういかない時もある。

「残念ながら、奴らはまだグリーンだ。直接手を下さなかったり、デュエルシステムを使ってオレンジ化を免れてやがる。先にやれば俺たちがオレンジプレイヤーになるぞ」

意図的にプレイヤーを攻撃すれば、頭上のカーソルがオレンジに変

わる。つまり、犯罪者プレイヤーの烙印が押されるわけだ。

そうなれば圈内には入れず、カルマ回復クエストをやるまでは相当な不利を強いられる。圏内の転移門が使えず、別の層に行くにはわざわざボス部屋の階段を使わねばならなくなるからな。

ちなみにPMCに関してはその特性から誤射が起きやすいためか、やられた相手に意図的な誤射かを確認するメツセージが現れる。

タチャンカがやらかしたから検証済みだ。NOにしたから、奴はただオレンジになっていない。アーマーの修理費は払わせたけど。

「ではレイジ殿、その頭のおかしな奴らを殺さぬとあれば、某の役目は何でありましょう」

おおタチャンカよ、会議の時にもマリモを外さぬとはいい度胸だ。後で剥ぎ取って、ハイドアウト入口に晒し首としてやろう。

「まずは情報収集だ。そのためにアルゴも呼んでんだからな」

「呼出料はいくらもらうカナ。レー坊、どんな情報をお望みだい？」

「当面はボスの攻略情報を。メイベルを貸すから、危険のない程度で頼む。PK連中にはまだ触れるな。危険すぎる」

ブラックバース率いるメイベルならば、俺の代わりとして十分に信頼できる。全員がPMCで構成されているだけあって、高い機動力と偵察能力が売りだ。アルゴと行くにはもってこいのメンツだろう。

「丁度、新しいダンジョンとクエストを見つけたばかりだ。ベータではなかったところだから丁度いいヨ」

「ちなみにマップ名は？」

「”Customs” って言ってたナ。クエスト名は”Huntsmanship—The trophy”」

「リシヤラ狩りじゃねーか。イーガーおじじのボス狩りシリーズ、もう出たのか」

Customsは工場に隣接する大きな工場団地であり、税関倉庫や社員寮が併設されているマップだ。

最初のタスクはここに集中しているため、WoodsとShorelineが先に出てきたのには驚いていたところだ。

そして、ここにもボスはある。”Reshala”という茶色の

ジャケットを着たギャングで、警察のジャケットを着て、青と白のストライプ模様のズボンを履いた取り巻きを最大4人引き連れている。タスクはこのリシヤラを殺害し、彼のユニーク装備である”ゴールデントカレフ”を納品する事だ。

「レー坊が必要と思つてたところだから、隊を借りれるのはありがたいヨ」

「情報料つてことで。俺たちは別で調査だ。どうやってALSを暴走させたのか調査する。キリト、情報に心当たりはあるか？」

「ああ、DKBに知り合いがいる」

「よし、そつちと接触頼む。こつちはALSの方へ、コハルを連れて接触してくる。リヨーハ、お前はシノンと本部として情報の統括。ディアベルさんは待機とリヨーハの補佐を」

ディアベルは1層攻略以来、自身のレベリングや後進の育成で前線を離れていた。それでも1層突破の立役者であり、英雄と見ている人は多い。

PK連中にすれば格好の餌だ。まだ動きを見せるには早すぎる。

「それだけ準備してること、まさか俺たちだけでボスに挑むと？」

レッカーは察して、それを確認したいという感じで訊いてくる。丁度言うつもりだったのだ。全員の目が向いているなら都合はいい。

「そうだ。他にも協力者は募るが、ALSとDKBで喧嘩になるくらいならウチで管理する。持つのがディアベルさんならば、どっちも文句は言えないだろう」

「そのためにオレが呼ばれたのか」

「そうなる前に、説得して済めばいいんですけどね」

しかし今のALSが耳を貸すとは思えない。煽動PK野郎が中枢まで食い込んでるのだ。結局こじつけて俺たちとの対立を凶るはずだ。

だから、パーティの前にこの件は片付ける。それで合同パーティは平和に終わらせて、その後でゆっくりこの件について話し合う場を設ければいいさ。

「意見がなければこれで行くぞ。状況開始」

その一言で部隊は動き出す。特にメイベルは戦闘になるだろうかと、駆け足で自分のハイドアウトに移動していった。装備を整えるのだろう。

「みんなが動いてる中、待つてるだけというのももどかしいな」

「ここに来るまで、攻略組が進んでいくのをもどかしく思っていたように?」

俺は冷蔵庫からタルコーラを取り出し、ディアベルへ差し出す。任務中に酒を飲むわけにも行くまい。

「そうだね。ずっと後進の育成ついでにレベリングしていて、情報は入っていたさ。オレが抜けてから2大ギルドが対立して、その合間を暗躍するアトラス……オレが纏められていればって、ずっと思っていたよ」

「なら、今こそその時でしょう?」

俺には役不足だ。対立煽ったバカに至近弾を喰らわせて黙らせるしか出来なかった。だから、そのカリスマ性でプレイヤーたちを束ねられるディアベルが羨ましくてたまらない。

そして、早いところこの重荷を下ろしてしまいたかった。俺の肩は、こんな大勢を背負えるほど強くないのだから。

「……そうだな、オレは逃げすぎた。これがオレの置き土産というなら、後始末もしないと」

「そうしてもらえると助かります。俺が過労死しないで済む」

ラックからお気に入りのカスタムを施したAK-74Mを手にする。そろそろ行かなければ。

コハルが待ってくれているのだ。これ以上待たせるのは申し訳ないからな。

「行こう、レイジ」

「ああ。相手にメッセージは送ってるから、しばらく散歩しながら待とう」

コハルへ手を差し出すのも、その手をコハルが握るのももう当たり前になっていた。自然な流れでそうして、街へ繰り出す。

戦いにもそうだが、こっちの方にもそろそろ覚悟を決めるべきかな。特に、これから会う相手にはよく背中を押されているのだから。

幕間 武具屋の一コマ

「ふー、これでどうかしら?」

リズベットは金床から顔を上げ、出来たそれを俺に差し出す。SC AVのショットガンを喰らい、損傷してしまったM1プレートキャリアを修理してもらっていたのだ。

「サンキュー。元々直りはいい方だが、それでもトレーダーに頼むよりいいな。お代は?」

「これくらい。素材でもいいわよ?」

「んじゃ、アルミインゴットで」

アーマーが損傷した場合、耐久値がもちろん削れる。そして耐久値が削れるほど防護能力も低下し、より貫通されやすくなってしまいうのだ。

だから修理するわけだが、もちろん最大耐久値は元より低くなる。アーマーの防御力は本来の最大耐久値を基準に計算しているから、あまり最大耐久値が減ってしまうと、直しても本来の防御力を発揮できなくなっていくのだ。

俺のM1プレートキャリアも、あと2〜3回直したらお別れの時期だろう。気に入ってるんだけどな。

「レイジが色々教えてくれたおかげで、PMCに販路を広げられて大繁盛よ。感謝してるわ」

「こつちこそ、PMCと取引するミスが少ないもんだから助かっている。リズのアーマーか武器があれば生き残れるって、験担ぎしてるくらいさ」

「もう、そんなこと言ってもクーポンしか出さないわよ?」

「それだってありがてえよ」

ははは、と笑いながらコーラの缶を開け、一気に飲み干す。リズベットは仕事を頑張りたいということとHot Rodをグビグビ飲んでる。現実じゃないから、いくらエナドリを飲んでも健康を害することはないさ。

そんなリズベットはメッセージを開き、何か険しい顔をしている。

難しい依頼でも入ったのだろうか？

「レイジ、手伝ってくれたらアタッチメント作ってあげるけど、どうする？」

「依頼内容次第」

「ただの物運びよ。出来るだけ大きいバックパック持ってきてもらえる？」

物運び程度でリズベットが負けてくれるものか？ だけど俺にも懐事情というものはあるので、乗らない手はない。

そういうわけで、持つてる中でも一番大きいT r i z i pバックパックを背負い、念のために興奮剤注射器を持って現場へと向かうことになった。

※

「くそつたれ、まさかの肉体労働かよ」

「まーまー。これだけあるなら少し分けてもらって、新しいアタッチメント作ったら？」

「うう、ごめんなさい……まさかアトラスのリーダーさんが来るなんて……」

楽しそうに笑うリズベットと、申し訳なさそうに小さくなっている茶髪のロングで、茶色の瞳の少女リーテン。コハルのような感じで、小動物的な可愛らしさを感じる。撫で回したくなるな。ハムスターみたい。

でも俺にそんな余裕はない。バックパックいっぱい鉄鉱石を詰め込んだおかげで、見事に重量オーバー。デバフマシマシで、歩くのが辛い。

おかげさまで筋力スキルに経験値がガンガン入っていく。なんでここで筋トレしてるんだ俺は。

「おいリズ、クーポンどころか商品券くれ。じゃないと採算が合わねえ」

「何に予算取られてるのよ？ 歩くだけでしょ？」

「このバックパックと、各種注射器だ！ 高いんだぞこれ！」

俺は懐から取り出した赤の注射器 S J 1” を腕に打ち、続け様に

青の注射器“SJ6”を打つ。

SJ1はスタミナ最大値に関わるスキル”持久力”と、重量制限を緩和し、近接攻撃ダメージを増やす”筋力”を向上させ、SJ6はスタミナ最大値と回復速度を増す。

序盤だと入手に苦労するし、かなり貴重な興奮剤だ。後半だと楽に手に入るが、正直まだ使いたくなかった。高値で売るつもりだったし。

「レイジさんにもお裾分けします。元々、バグでこんなに出たわけですから……」

「やったね、タダでアルミ……ストックかグリップか、はたまたハンドガードか……Zenit製のパーツ……」

「ちよつとリーテン、帰ってからにしなさいよ。レイジが現実逃避を始めたじゃない」

リズベットに肩を叩かれ、意識が戻る。おい、せっかく辛いことを忘れようとしたのに。頼むからこの辛い現実からエスケープさせてくれ。

「にしても、よくこんなに引つ掻き集めたもんだな。大したもんだよ」「あー、それはね……」

リズベットはリーテンへ『どうする?』とでも言うように目配せしている。あ、なんか訳ありだなこれ。

「訳ありなら聞かないが」「いえ、実は……」

リーテンが語るところによると、どうも無限湧きバグだったらしい。掘っても掘っても鉄鉱石が枯れず、バグの利用に良心が痛んでリズベットに連絡したらしい。

で、当のリズベットは『バグでもなんでも利用して強くなさい!』と一喝して今に至るようだ。リズベットらしい答えだな。

「ま、これが普通のゲームだったら眉を顰めるところだが……こんな状況だ。バグさせた運営が悪い。なんでも利用してやりやいいじゃん。生き残りたいだろ?」

「ほら、アトラスのリーダーだってそう言ってるのよ? 妬みとか

やつかみはあると思うけど、強くなった者勝ちなんだから！」

「いいい！ と俺もリズベツトはハイタッチする。現実逃避と意見の一致により、おかしなテンションになっているが気にしない。

「リーテンも覚悟を決めたらしく、強く頷いていた。

「それならリズ、この鉄鉱石で私の鎧を作って！」

「え、私?!」

リズベツトはわかりやすく動揺している。NPCの方がいいものを作れると断るが、一步も引かないリーテンも流石だ。

俺は重量物のせいで耳を傾ける余裕がない。そろそろ脱水寸前だったから、水をがぶ飲みするのに大忙しでな。でも、そろそろ援護射撃くらいしてやるか。

「やつちまえよりズ。言い出しつぺの法則っていうだろ?」

「レイジまで……もう、どうなっても知らないからね！」

「やった！ ありがとうリズ！」

「ついでに俺の武器も作ってくれ。そろそろ耐久値がヤバイ」

感極まったリーテンがリズベツトに抱きついている。いいね、目の保養だ。この厳しい世界にも優しさがあった。お陰で目の霞みが治ったよ。

5層―5 協力者

裏道にある喫茶店は俺のお気に入りだ。遺跡の街というだけあって、建物は石積みで作られている。それも、薄い茶色の石であるために中東のような雰囲気醸し出している。

そんなエキゾチックな店内で、穏やかなBGMを聴きながらお茶を飲むのが楽しみだった。コハルもいるから楽しさ倍増だしな。

「ここで飲むお茶が美味しくてな」

「レイジったら、いつもフラフラ出かけると思ったら喫茶店巡りしてたの？」

「そんなところさ」

本当はリズベットの露店でグダを巻いていたら、目的の人物も巻き込んでお茶に行くことになったただけだがな。言うまい。ぶっ飛ばされる。

ドアのベルがカラカラと音を鳴らし、ベルとは違ってガチャガチャと重厚で耳障りな金属音が響いてくる。全身をフルプレートアーマーで包んだその不審者こそ、目的の人物だ。

「よう、時間通りだな」

「お久しぶりです、レイジさん。隣の方は？」

「いつも話してる相棒」

「コハルです」

ペコリと頭を下げるコハルだが、相棒って言われて嬉しそうにしてたのは見逃していないぞ。スクショは撮り損ねちまったけどな。

目的の人物は密閉型ヘルムで素顔を隠していたり、素の口調を隠していたりする。タッチャンカのように声が反響して少し不気味だ。

しかし、ここにいるのは俺とコハルのみ。それに安心したのか、そのヘルムを外した。

アスナより少し明るいであろう茶色のセミロングヘアに、同じく茶色のくりくりとした目。小動物的な可愛らしさの素顔を目の当たりにして、コハルは目を見開いた。

フルプレートアーマーに身を包んだALSのタンクが少女だなん

て、誰が予想するだろうか？

「リーテンです。お会いできて嬉しいです！」

リーテンはそう言っただけでコハルの手を握る。コハルは状況を読めていないらしく、リーテンと俺を交互に見て困惑していた。うん、困り顔も可愛いぞ。

「攻略組で頑張る女の子ってことで、コハルに憧れてたらしいぜ。ファンサービスしてあげなよ」

「サチも言っただけで、私の評判一人歩きし過ぎじゃない!？」

それは大体アルゴのせい。ついでだから言う俺の暴れぶりもアルゴが随分誇張してる。おかげで前線になだれ込むPMCが増えたものだ。

「いいじゃねえか。他のプレイヤーに勇気を与えてるんだ。俺よりずっと向いてると思うぜ」

「もう、私の身にもなってよ……この前も握手頼まれたんだからね？」

人気でいいじゃないか。とはいえそろそろ本題に入ろうか。リーテンだって暇じゃないだろうし、俺とコハルもやること山積みだ。

「リーテン、奢るから好きなもん頼んでくれ。そろそろ話を聞かせて欲しくてな」

「惚気話ですか？」

「ふざけるな、糖分摂り過ぎて死ぬとか嫌だぜ」

惚気話という単語にコハルが目を光らせた。女の子ってホントそういう話好きだよな。

「リーテンさん、もしかして……」

「コハル、後にしてくれ。先にパーティの件だ、ALSの状況はどうなってる？」

コハルは少し残念そうにしているが、解決さえすれば話す機会なんて幾らでも作れる。その可能性を潰さないために、少し我慢が必要なんだ。

この辺りさえ片付けば、後はディアベルに丸投げしてやる。

「そうでしたね。あ、私厚切りロールケーキで」

「私もそれにしようかな。レイジは？」

「特盛パフェ。今のうちに食ってやる」

重い話になるだろうし、甘い物で中和しないとな。それに、リーテンの惚気話が始まる前でないと食べられない。舌と胃が受け付けなくなるからな。

「あ、少し待ってください」

さて話を、というところでリーテンはメッセージを確認し始めた。丁度俺のタブレットにも、キリトからのメッセージが来た。

DKBのシヴァアタと接触して、今からALS側の企画者を呼んでもらうとの事だ。その企画者が俺の目の前にいるわけだがな。

「ごめんなさい、シバに呼ばれてしまって……」

「丁度いい。キリトが呼べってんだろ？」

「ご存知でしたか」

「奴も巻き込んで動いてるからな。すまんが、これを食べたら移動しよう」

NPCが皿を置いていく。ほんのり卵色の生地が濃厚なクリームを包み込むロールケーキと、バベルの塔が如く聳え立つパフェ。これを残していくなど、天が許しても俺の胃袋と舌が許すまい。

「そうだね、このお店初めてだから楽しみだよ！」

「レイジさん、コハルさんを連れて来たいって下見してましたもんね。攻略本に赤丸つけてたり……」

「黙れリーテン。自腹切らせるぞ」

「そんな！ こゝ高いんですよ!？」

コハルの視線が俺に突き刺さる。リーテンは財布の中身を確認しつつも、ロールケーキを口一杯に頬張って味わっていた。まあ、自腹は冗談だ。俺もそこまで鬼ではない。

そんな真似をしたら、俺がリーテンの彼氏にぶち殺されてしまうしな。

「そういうえばリーテンさん、惚気話って一体何を話してるんですか？」
リーテンは固まった。さっきの軽口の中でコハルに惚気の件を聞きつけられたのが運の尽き。

恥ずかしそうに顔を赤らめて目を泳がせるも、キラキラと輝くコハ

ルの眼差しからは逃げられまい。

「その……D K Bに付き合っている人がいるんです。それで、プレゼントとかの相談をレイジさんや友達に……」

「世間一般からズレ放題の俺には、荷が重すぎる相談だと言ったんだがな」

そもそも、チキンぶりを発揮して告白一つできない男に、デートやプレゼントの相談するのは間違っているのではないだろうか？

やめてくれコハル。そのジト目は俺に効く。

「そつかそつか、レイジはリーテンさんと楽しく恋バナかあ……」

やばい、逃げたい。パフエから血の味がする。リーテンはほわほわした笑みを浮かべて惚気始めるし、それを聞くコハルは笑顔だが、俺の名前が出た瞬間に背後に黒いモヤが現れる。

やつべー、死神どころか大魔神召喚した気分だ。リヨーハたちタルコフ仲間とク○ウルフのオンラインセッションやって、邪神が出てきたあの時を思い出す。リヨーハが食われたっけ。

「お陰で、この前のデートはすごく上手くいったんですよ！ ビーチで水遊びしたら、いつか私の水着が見たいって……」

「へえ、ビーチ……レイジ、それってWoods?」

笑顔の後ろに大魔神出すのやめてもらえないですかね？ 流石にコハルとの思い出が詰まったあの湖畔を紹介するわけなからうて。

「Shorelineのトンネル付近。たまにSCAVがいるけど、始末すれば安全だから……」

「私も連れて行って」
「うっす」

実はリズベツトも混じえて道案内がてらに走りました、とか口が裂けても言えねえ。頼むリーテン、その情報は空気を読んで秘匿してくれ。

トイレで中座しようにも、仮想世界に排泄などない。逃げる口実はなく、俺はお白洲へ引き出されて吟味を受ける罪人気分。自分の頭をピストルで吹っ飛ばすにも、ここは圈内だしな。

リーテンが普通に恋バナする分には、コハルも楽しそうなんだが

なあ。

「それで、コハルさんとレイジさんは付き合っているんですか!?!」
「ええっ!?!」

俺は思わずコーヒーを吹き出した。リーテンめ、特大の爆弾を落としてくれたな。やっぱり自腹切らせよう。

コハルは顔を真っ赤に染めてアワアワとして、俺は落ち着いてコーヒーを飲もうとして全てをこぼしてしまう。やべえ、クソ熱い!

「あっちうちー!」

「わっ、レイジ?! 拭く物……って、あるわけないよ!」

「クソ、どうしてこうなった!」

ペットボトルの水をぶっかけてようやく冷却。危ねえ、ダメージはないけど普通に熱い。

「レイジさん……それだけ動揺するってことはもしかして!」

やめろリーテン、そのキラキラした目を向けるな。

「も、もう! 早く行こう、呼ばれてるんでしょ?」

「あ、そうでした!」

ナイスだコハル。俺は心の中でグツジョブと褒め称えつつ、パフエを口に運ぶ。クリームの乗ったバニラアイスは擦り切れた俺のメンタルを癒してくれる。

「レイジ、少し頂戴」

「あ、おい!」

コハルは楽しみにしていたアイスを横から掬い取り、問答無用で口へ放り込んでしまった。

とうかこのおバカ、それは俺の食べかけだ。またリーテンが目をキラキラさせているだろうが。

「やっぱり付き合ってるんですよね?! 隠さなくていいんです、むしろ大々的に!」

「だーかーら、早とちりするな! まだだ!」

「レイジ、まだって何まだって!?!」

「つまり、レイジさんがようやく……!」

コハルよ、自分でやっておいて恥ずかしがるのはズルいぞ。赤い顔

も可愛いけどな。スクショ撮っておこう。

それにしても、リーテンが限界オタクのようになってるのは気のせいだろうか？

5層―6 旗

「ここか」

キリトが指定した店は俺が2番目くらいに目を付けていた店だ。裏道にある喫茶店だから、目に付きにくいと考えたのだろう。

いいじゃないか。こつちでも食い倒れと行こう。さっきのでかなり疲れてカロリーを使った気分だ。補給補給。

「そうですね、シバもこの店だつて書いてます」

「じゃ、お先にどうぞ」

リーテンは密閉型ヘルムを外したままドアを開ける。その先にはキリトとアスナがいて、その対面には目的の男がいた。

短く髪を刈り上げた彼こそ、俺が良くDKBの窓口に使っているシヴァだ。割と話を通じる人間だから重宝する。

「シバ、遅くなってごめん」

「いや、大丈夫だ。それよりこの2人がパーティに……」

どうやら俺に気付いたらしい。なんでここに、と驚いた顔で固まっていた。キリトめ、俺が来ること言っていなかったのか？

「よう、久しぶり。丁度彼女さんから聞き込みしてた所」

「れ、レイジ？ つてお前、そんな堂々と！」

「わわ、レイジさん！」

「リーテンがだいぶ茶化してくれたからな。その仕返しと思いな」

慌てふためく2人を見たら少し胸がスツとした。コハルがジト目を向けてくるのが痛いし、アスナからも射殺さんばかりの冷たい視線が向けられる。胸部壊死寸前のダメージだ。アーマー貫通しやがった。

キリトは初めて知ったらしく、なんでやねんと頭を抱えていた。シヴァとか、顔に出てわかりやすい部類だと思っただがなあ。

「キリト、どの辺まで話は進んだんだ？」

「パーティが芳しくない状況になってるだけ。理由はこれから聞くところだった」

「奇遇だな、俺らも聞き出そうとしたら呼び出された」

俺とコハルの仲をリーテンに根掘り葉掘りされたのは伏せておく。さっきの一撃でチャラだ。

そういうわけで、リーテンは知りうる情報を話してくれた。

3日前、古参メンバーの1人がベータからの情報を入力したそう。かなりセンシティブな内容故に幹部での会議が行われ、リーテンはその内容を班長から伝え聞いたにとどまるとの事だが、重要な情報に変わりはない。

その情報というのが、5層ボスはギルド間のパワーバランスを崩壊させるレアドロップをするとのことで、性質的に共同管理も不可能だという。

それで、DKBに取られて吸収合併される恐怖からか、パーティをすっぽかしての単独攻略案をキバオウも承認せざるを得なくなっただらしい。

「あのイガグリ、メチャクチャに見えて割と考えてる方だったからな。そういう理由なら合点がいく」

「レイジ、いつの間にキバオウさんと仲良くなってたの?」

「コハルが女子会行ってる間、俺のハイドアウトで飲み会してたんだよ。そしたらディアベルさんが連れてきて、まあ男同士腹を割って話したわけさ」

その際、休憩スペースLv3で追加されるセクシーなポスターを5000コルで売り渡す約束をしたのは別の話だ。

「リツちゃん、そのアイテムってなんなんだ?」

「ごめん、シバ。そこまでは聞き出せなかった。これ以上は極秘って」
「そうだったのか……なあ、ベータテスターだったあんたなら知ってるだろ?」
5層ボスの重要ドロップってなんなんだ?」

「え、ええ……!?!」

シヴァアタがだいぶ前のめりになってキリトへ詰め寄る。俺は優雅にお茶を啜るが、その耳はキリトへ向けていた。これはアトラスにも関わる重大事項に他ならない。

別にパワーバランスとかその辺はどうでもいい。俺たちPMCはいつの日か、SAOプレイヤーに追いつけなくなると共通認識を持つ

ている。だから、ALSかDKBが強くなることに文句はないし、むしろなつて欲しい。

問題視しているのは、そのギルド同士が対立してしまう事だ。健全な競争ならまだしも、こんな内輪揉めで死人を出されたら堪ったものではない。

「そりゃボス戦には参加したけど……目玉アイテムは両手剣だったな」

「それなら共同管理出来るはずだ。それに、そんなぶつ壊れ性能だったらギルド間どころかゲームのパワーバランスおかしくなるだろ？」

タルコフだって、ルートテーブルの関係でグレネードランチャーをLv1から持つことは可能ではある。でも、トレーダーが弾を取り扱っていなかったり、フリーマーケットでプレイヤー間取引も出来ないなど、バランスは取られている。

ボスの所持武器とて、PMCのフルカスタム武器に比べたらまあまあのカスタムだし。（部品が高額で取引されたりはするけど）

「そこなんだ。そんなぶつ壊れというわけじゃ……」

そんな時、キリトに電流が走ったようだ。急に目を見開き、ワナワナと震え始めたのだ。誰もがそんなキリトの変化に驚きを隠せない。

「キリトくん!? 記憶が戻ったの!?!」

「頑張れ、思い出すんだ!」

「キリトは記憶喪失じゃないからね!」

やりたくなるじゃないか。アスナだってノリノリなんだぞ。

「フラグだ……」

「フラグ? 所有者だけに特別なフラグが立つのかしら?」

「死亡フラグ? 縁起悪いな」

「おいバカやめろ」

シヴァアタよ、身に覚えがあるか? 後ろには気をつけることだな。マリモが生えてくるぞ。

「なら、旗の方かしら?」

「そう、それ!」

旗がそんなぶつ壊れアイテムだと? あまりイメージが付かない

んだがなあ。

「そんなに強いのか？」

コハルも俺と同じ考えのようで、首を傾げている。旗でどうやって戦えと言うのか。

「武器としてなら、攻撃力最低のロングスピアに過ぎないさ。アレの真価は”ギルドフラッグ”だ」

何じゃそりゃ。あんまりイメージがつかない。旗なんて持ったところで、撃つてくさいと言ってるようなもんだ。ナポレオンとか203高地じゃあるまいし、旗を掲げた旗手を先頭に突撃でもするか？

「装備者がこの旗を突き立てると、半径15m以内のギルドメンバー全員にATK、DEF、対デバフのバフが掛かるんだ」

「なんだと……？」

「あー、俺たちには無用の代物ってか」

驚くシヴァタたちとは裏腹に、俺は冷めていた。優雅に紅茶を啜り、スコーンを味わうくらいには落ち着いている。

SAOならともかく、俺たちPMCにはその辺のバフはあまり意味がない。対デバフだけは欲しいけど、食らったらそもそも死ぬから意味がないかもしれない。

だけど、SAOプレイヤー主体のDKBとALSにとってはそうではない。バランスブレイカーというかOPというか、ともかくぶっ壊れ性能だ。VectorとかMk47、グレポン実装時に近いかもしれないな。

さてどうしたものか。そんな最中に無線に呼び出しがかかる。リヨーハの声だ。あいつ、何を焦ってる？

「リヨーハ？ どうした」

『メイベルが退却すると連絡を入れてきた！』

「退却？ 弾切れか、どっか壊死しちまったか？」

『違う、全面敗走だ！ 生きてはいるが戦闘は論外、Customsから脱出するよー！』

「マジかよ、ブラックバーンが負けた？ リシヤラごときにか？」

『兎も角、本部に戻ってきてくれ!』

「すぐ行く」

何が起きた。確かにリシヤラは通常のSCAVに比べればめっぽう強い取り巻きを従えているが、経験豊富なブラックバーンたちならば難なく対処できるはずだったのに。

「そういうばアルゴは? ついて行ってたのか?」

『いや、流石に戦力には不適合って事で、残って情報収集してたらしい。おかげで無事だ』

「ならよかった。キリト、すまんが先に戻る。払っとくから残りの話聞いといてくれ」

「わかった」

「行こう、コハル」

「うん!」

俺はコハルを連れて、急ぎ足でハイドアウトへと戻る。あいつらが負けたというのが信じられないのもあるが、何よりも安否が心配でたまらなかつたのだ。

5層―7 助っ人

ハイドアウトのドアを開けると、ブラックバーンたちは適当なところに腰掛けていた。全員が疲弊した顔をしていて、タチヤンカはマスクヘルメットを外さないが、俯いている。

「ブラック、何があった？」

「すまねえ、不覚をとった」

「言い訳はいい。事実を教えてください。最大限尽くしたんだろ？」

「ああ……」

どうも歯切れが悪い。弟のレッカーでさえも、重く沈んで言葉を発しようとしなない。コハルはそんな雰囲気にお口お口として、言葉を失っていた。コーヒーを淹れてきてもらおう。その方が落ち着くだろうしな。

「ガソリンスタンドでリシャラ軍団と接敵した。気付かれてなかったから、一斉射撃で取り巻きを仕留めるつもりだったんだ」

あのあたりは岩場が近く、約50メートル位の距離から一方的に攻撃することができる。計画通りなら、発見される前に一方的な攻撃で半分は持っていけただろうな。

「定石だな。今の環境で突入したくはねえ。グレネードの雨が降ってくるし」

「問題はそこからだ。どっかのアホが俺らの頭越しにボスを撃ちやがったのさ。しかも足に」

「別のPMCがしくったのか？ それにしても、お前らの頭越しに何も言わずに撃つか普通？」

それでボスに発見されて、制圧射撃を喰らったのだろう。ボスの取り巻きは最大4人で、しかも一斉にグレネードまで投げってくるヤバい奴らだ。たまに空中爆発するから怖くてたまらない。

「だろう？ しかも、野郎1発撃って逃げやがったんだ。黒いローブを着て、スカルマスクでツラ隠してやがった。少なくともオレンジでないのは見たが、あの調子からするとMPKだろうさ」

MobをぶつけるMPKならば、直接攻撃でないからオレンジには

なり得ない。だとしても、やり口があまりにも手慣れすぎてはいないだろうか？

「奴ら、俺たちの妨害にも動いてきたか？」

「可能性はある。マニエクが胸、アイザックが頭やられて戦闘不能になった。上の鉄塔でボスを撒いて治療したが、状況が悪いしシヨックがデカくて、そのまま退却してきたんだ」

流石に死にかけたのだ。トラウマになってもおかしくないし、それで前線を離れる選択をしても俺に止める資格はない。せめて、彼らの生活の保障をするくらいだ。

だけど本音は、また元気に戻ってきて欲しい。1線級の連中はみんな、第1層のボスを共に戦った仲間なのだから。

「レッカーとタチャンカは無事なのか？」

「レッカーは最初にマニエクを連れて下がったから無傷。タチャンカは1人岩場に残って、迫り来るリシャラ軍団に制圧射撃してたぞ」

詳しく聞けば、タチャンカはブラックバースンとレッカーが負傷者を連れて下がるまでの間、無数の被弾をしながらも彼らを守り抜いたという。

しっかりと取り巻き2人をぶち殺しているのも流石と言えよう。そのR P K軽機関銃もマリモも飾りではないようだ。

「怨念マリモが神様に見えた。後にも先にも、アレが最後だろうな」

「某はヘビーガンナーの役目を果たしたまですぞ。バイザーに食らった時は肝が冷えましたがな。時にレイジ殿、アーマーとR P Kの耐久値が限界を迎えてしまったのですが……」

「腕のいいガンスミスを紹介してやる。アーマー修理ついでに作ってもらってこい。特別に代金は俺のポケットマネーで落とす」

「感謝いたしますぞー」

俺はリズベットに発注のメールを送り、ため息を吐いて天井を仰ぎ見る。やってくれたじゃないか。

たまたまアホがやらかしたのか、それとも煽動P Kの仲間だったのか……可能性はいくらでもあるし、考えていても仕方ない。なんとかしてタスクをこなし、ボスの情報を探らねばならないのだから。

そして、時間もそんなにない。焦ってやると今度こそ死人が出るが、悠長にもしてられない。

「メイベルはリョーハと交代して本部機能と休息を。攻略は俺たちが行く。呼び出し時はレイドグループ”リンデン”だ」

「気をつけるよ」

「分かってるさ。ブラックたちはこれで美味しいものでも食ってこい」

小銭入れを投げ渡し、俺はスタツシユへ移動する。結構な金を入れてあるから、メイベルの5人で好きに飲み食いするには十分すぎるだろう。

「気前のいい隊長だことで」

「そんなくらいしねえとな」

ボックスから弾薬を取り出し、マガジンへと詰め込む。そんな細々した作業を始めた俺の隣に、コハルがやって来た。

「ねえ、もしかしたらエルフクエストにも動きがあるんじゃないかな？」

「そういや、この層ではまだキズメルに会ってなかったな」

忘れるわけがない。3層から始まったエルフ戦争のキャンペーンクエストはここでもまだ続いているだろう。

キズメルはその中で出会った黒エルフの女騎士。キリト曰く「本来なら最初に森エルフと相討ちになる」そうだが、俺とコハルが暴れ回った結果、生存ルートに入ったわけだ。

誤射の危険があるからと、トマホーク片手に暴れ回るハメになるとは思わなかったけどな。

そして、そのエルフクエストは最後にボス攻略のヒントをくれる。お陰で3層と4層では随分助かった。

3層なんて毒ガス攻撃の範囲拡大と聞いて、全員ガスマスク装備で行ったらワンサイドゲームになってしまったくらいだ。

キバオウはトゲトゲ頭のせいでガスマスクが被れず、口周りを覆うタイプの防毒マスク使ってたけどな。

「アルゴに聞いてみよう。どっかにトリガーがあるはずだ」

「もしキズメルも来てくれるなら、すごく心強いからね」

「俺はコハルが背中守ってくれるから安心だぞ」

もう、とコハルは笑顔を浮かべる。パートナーだといつも言っているのはコハルの方だろうに。

長い付き合いのリョーハと組んだ時の安心感とは違って、何か暖かな気持ちになるのがコハルの特徴だ。

とりあえずキリトにもメッセージを飛ばしておく。俺たちが出撃するので、何かあったら本部に残っている連中に連絡してくれ。それだけ伝えておけば十分だ。

※

マップに表示されているクエストマークを辿ると、そこに目的の人物はいた。色黒の肌に尖った耳で、鋼色の鎧に身を包んだ女騎士こそ、目的の人物だ。

「キズメル」

「こんにちは、キズメルさん！」

「ああ、レイジにコハルではないか。久しいな」

クールな長身美女のキズメルは、俺とコハルを見るなり嬉しそうな顔をした。これには男として、惚れないわけがない。コハルに足を踏まれてもな。

しかし驚くべきは、話し方も仕草もプレイヤーのような彼女が実はNPCということだろう。俺も一緒に戦ううちに、彼女がNPCであるなんてすっかり忘れてしまっていた。

命を預けた相手だし、今更NPCかどうかなんて関係ない。1人の戦友だ。

「お久しぶりです。何か困り事ですか？」

「ああ……この層にある秘鍵の事だ」

秘鍵はこのエルフ戦争において重要なアイテム。なんでも、森エルフとダークエルフがそれぞれ崇める”聖大樹”とやらの封印を解くための鍵で、それを奪い合っているのだ。

森エルフは封印を解いて聖大樹の力を取り戻すため、ダークエルフは封印を守り、厄災を防ぐ目的を持つ。

それをまさに奪い合っている最中、俺たちが現れたわけだ。

「こちらの手のものが人族に襲われ、秘鍵を奪われたそう。密偵によると、人族の廃墟のどこかでカレス・オーと取引を行うらしい」

カレス・オーという呼び方にももう慣れた。森エルフの正式名称らしい。ちなみにダークエルフはリユースラだ。リユースラの方が呼びやすいし、響きが好きなんだよなあ。

「その人族ってどんな人なんですか？」

「ならず者、とだけしか知らない。だが、森に住む人族の老狩人がよく知っているそう。一緒に話を聞きに行こう」

ならず者、老狩人ときて、ピンと来るものがある。これ、リシヤラ狩りのタスクも複合で出てくるのか？

それに、森に住む老狩人って絶対イエーガーおじじだろ。ならば合点は行くんだけど。

「ああ、ピクニックを楽しみながら行くでしょう」

「遊びに行くんじゃないんだよ？」

「そんなくらい気楽に構えていいだろ」

そんな俺たちを見て、キズメルは笑った。定型文しか返さない店のNPCなんかとは全く違う。俺たちの話を理解して、それで笑っているのだ。

「2人は本当に仲が良いな」

「ええ。大切なパートナーなんです」

「私にもそう呼べる者がいればいいのだけどな」

「俺たちじゃ不足かい？」

そんな軽口に対し、キズメルは一瞬キョトンとした表情を浮かべて、笑い出した。

「気持ち嬉しいが、コハルに怒られてしまうぞ。レイジはコハルのパートナーだろう？」

「先約は入ってるけど、3人ならなお良いものさ」

「それは、そうだけど……」

コハルはどこか歯切れが悪く、口籠っている。すまん、後で埋め合わせはするから勘弁してくれ。

「確かに、2人と共に戦うのは心強いな。今後ともよろしく頼むよ」

「任せな」

コハルのご機嫌をどうやって直そうか考えつつ、リヨーハへとメツセージを飛ばしておく。

『おじじのタスクを受けに行くぞ、早く来やがれ』
それだけで十分だ。

5層―8 イエーガー

急がば回れ、とはよく言ったものだ。イエーガーは3層の森の中へいるため、俺たちはわざわざ3層の森へ足を運んできている。

鬱蒼と茂る森の中で、天へと伸びる焚き火の煙を追いかけて進む。その手前ではリヨーハとシノンが待ちぼうけしていた。

リヨーハは技の実験台にされていて、よくわからない関節技を喰らっていた。痛くはないのだろうが、仮想世界でも関節は動くようにしか動かない。完全に動きを封じられていた。

「何のプレイだ？」

「あら、レイジ。このおバカがボディタッチしてきたから、お仕置きしているところよ」

「葛に絡まってすっ転んだんだよ！ 木を掴んだと思ったらシノンのお胸で」

「死刑」

「隊長からの許可が出たわ。覚悟しなさい」

「やめ、シノン様ー！ パロスペシャルだけはご勘弁を！ パ口おおおおお！」

これが助っ人か？ とキズメルが微妙な目を俺に向けてくる。やめてくれ、あれはもう他人だ。クエストNPCの前でSMプレイをする変態なんて、俺は知らないぞ。

まあ、黒鉄宮の牢獄送りじゃないんだからマシだろうよ。

そんなシノンの気が済んで、ようやく俺たちは焚火の前に座る老人へ対面を果たした。

キャラクターとしてはいい人なのだが、タスクの難易度に多くのPMCがメンタルと時間と財布を犠牲にしてきた。俺もその1人だ。

その名はイエーガー。プリオゼルスキー自然保護区の管理人をしていた老ハンターだ。

「やあ、傭兵。森の妖精を連れて来るとは、ただならぬ事態のようだな」

イエーガーは焚火で温めたポットを手に取ると、湯をカップへ注

ぐ。こうして見ると、全てを諦めたような目をしているんだと気付く。

変わってしまったタルコフの現状や、SCAVの殺戮を前に助けられる人を助けられない自分へ嫌気がさして、それで隠遁生活をしているのだ。諦めなければやっていられなからう。

「あなたならば何かを知っていると聞きました。カレス・オーの民と取引をしようとする人族のならず者、この顔に覚えは？」

キズメルが取り出した人相書きは、よく知った顔だ。やはりCustomsのボス、Reshalaの顔なのだから。

イエーガーはそれを一瞥すると、棒で焚き火の薪を転がし始めた。火の粉が舞い、熱が辺りを包む。それなのに、イエーガーの心は冷え込んでいた。

「カレス・オーが何者かは分からないが、そのならず者は知っている。殺戮、強盗に略奪。タルコフで好き放題しているクズだ。その名はReshala。取り巻き連中を率いて、今も工場地帯を我が物顔で歩き回っているだろう」

吐き捨てるようなその言葉から、リシヤラへ対する嫌悪感が見て取れる。そして、それだけのことをする悪人に何もできない自分への嫌気さえもが伝わってきた。

何とも、その気持ちかわかるから苦しく思えてしまう。

「もしも、君たちの目的を果たす上で可能ならば、だ。このクズを葬ってきて欲しい。このタルコフへ再び平和をもたらすために」

俺たち前にウインドウが表示される。リシヤラの殺害及び、彼の持つユニークアイテム”Golden TT”の納品。パーティの場合は誰か1人達成すればいいという、良心設計になっていた。

「もし、この人を倒したとしたら……イエーガーさんはどうするんですか？」

コハルはイエーガーへ問いかける。相手はボスで、和解は不可能とはいえ、殺せという依頼にはやはり抵抗があるのだろうか。

「成り行きというものはある。それでも、タルコフを平和にするための一歩ではあるはずだ。そして、お前さんたちにもこの先へ進む切符

が得られるだろう」

それはつまり、ボスの情報を握っているということだろうか。

まさかエルフクエストにタルコフのトレーダーが絡んでくるとは思わなかったが、少なくとも単品で受けても変わりはないだろうな。

「ならば、ちやちやつと行っちまおうぜ。シノンが狙撃して、俺とレイジで仕留めに行く。それで終わりだろ」

「簡単に言ってくれるな。メイベルの件を忘れんな。邪魔が入るかもしれん」

「わかってる。けしかけてきたとしても、纏めて殲滅すりゃ済む話だろ」

「物騒なことだ」

殺しに来てる相手なんだ。捕まえようなんて甘い考えは捨てた方がいい。こっちも殺す気でいかなければ、殺されるのは自分か仲間だ。

俺はいいとしても、コハルやリョーハ、シノンがやられたら耐えられないだろうな。

「では、私は先に5層へ戻る。レイジたちは準備を済ませたら来てくれ。先程のところで待っているよ」

キズメルはそう言って立ち去る。俺たちもさっさと準備を済ませていかないとな。Customsにはタスクが山ほどある。今回はあくまで情報収集だが、終わったらしばらくこもってやる。

「またボスなんだね」

森から戻る間、コハルは不安そうな顔をしていた。シウトウルマンやサニターと戦って、無傷だったことはない。そろそろ死者が出るんじゃないかと不安なのだろう。

そして、その犠牲が俺になることを想像しているはずだ。

「まあな。取り巻き多いけど、ボス自身はチキン野郎だ。隠れてコソコソしてるし、たまりに取り巻きのグレネードに巻き込まれて死んでるぜ」

「ボスも仲間割れするの?」

「ただのドジだろ。そうなってくれりゃ楽なんだけどな」

手持ち無沙汰なのもあつたけど、コハルを安心させようと頭をわしゃわしゃ撫で回してみる。うん、手にすっぽり収まるいい大きさだな。

「ち、ちよつとレイジ！ 髪型崩れちゃうよー！」

「大丈夫大丈夫、SAOだから髪型崩れないって」

「もう、お返し……！」

コハルはやり返そうとしたのか、俺のヘッドセットごと帽子をもぎ取つたが……そこにあるのは坊主頭だ。崩れる髪があんまりない。

どうして残念そうにしているのかはさておいて、一方的にやり放題だ。おらおら、もつと撫で回してやる。

「もう、おしまいー！」

コハルは奪い取つた帽子とヘッドセットを装着して頭を守る。それ、俺のなんだけどなあ。

「なんかなあ、頭の装備と胴体がチグハグだぞ。頭だけ近代的だ」

「これで髪型直すんだもん。しばらく借りるからね」

「へーへー、じゃあ俺はこつち」

SCAVが被っていたベージュのフリースキャップを被ると、コハルが目を向けてきた。そつちの方がいいって言いたそうだ。見た目はニット帽だしな。

「こつちの方がいいか？」

「ううん、私はこの帽子がいい。レイジがずっと被ってたやつでしょ？」

「1層の頃からな。よくロストしなかつたよ」

ヘッドセットだけは取り返したが、帽子の方は返してくれそうにもない。ただのBEARキャップなんだけどな。

ただ、俺の帽子をかぶって微笑んでいるという姿には俺も思うところがある。いい加減、両想いって信じていいやつだよなこれ？

「おい、誰か来るぞ」

リョーハは耳聡い。何かの足音を探知したらしく、俺たちは一気に警戒を強める。ハイドしてたモンスターに襲われました、なんて死んでも死にきれない。

「誰だ、プレイヤーか!？」

リョーハが銃口を向けて怒鳴りつける。俺はその右後方、リョーハの肩越しに援護態勢を整えている。もしも敵ならば即座に射撃出来る位置。

何度も取ってきたポジション。どっちが前衛でも同じように出来るし、前衛は後衛を信じているからこそ突っ込める。

ずっと一緒に組んできた、コハルとはまた違う信頼関係。どっちについても守っているという使命感と、守られている安心感がある。だから俺は命知らずでいられるし、リョーハは死神でいられるのだ。

「待って、PMCだよ!」

相手の方が声を上げた。武器を持たず、両手を上げて出てきたことで漸く安堵の溜息が漏れる。

「脅かすな。足音殺しながら近寄ってくるから、レイダーかなんかが出たのかと思ったぞ」

忍び歩きの足音なんて、ほんの僅かにしか聞こえないだろうが。リョーハ、ヘッドセットの音域増幅あったとはいえよく気付いたな? 「こつちも、大人数でゾロゾロくるからボスか何かかと……」

俺たちより背の低い、中性的なUSERオペレーターは俺たちよりもその後ろ、シノンを見て驚いたような顔をしていた。知り合いなのか? 「あ、あき……シノン?」

「あら、シユピーゲル?」

「お? あんたら知り合いか?」

リョーハはやつと安心したようで、安全装置を掛けた。俺も撃たずに済みそうで喜ばしい限りだ。

「ええ、私をタルコフに誘った張本人。引退するって聞いていたけど……」

「成績が悪かったからね。それで最後にとログインしたらこれだよ」

おかげで成績も何も無くなったよ、とシユピーゲルは笑う。気楽でよかったじゃないか。後のことは考えたら負けだ。今は戦って生き残ることを考えればそれでいい。

「それで、シノンはどこか行くの？」

「リシヤラ狩りよ。猟犬引き連れてね」

「わんわんお！ キーカードをよこせー！」

猟犬と呼ばれて即座に犬の鳴き真似。リヨーハよ、とうとうシノンの下僕をすつ飛ばして犬になったのか？

「猟犬って、まさかアトラスの？」

「ええ。それで死神の方は私の下僕よ」

ありやりや、とうとう下僕にされてら。リヨーハがマゾヒストとは知らなかったぜ。コハルが微妙な顔をしてるぞ。

本人は否定しようとしてはシノンに黙らせられているし、まあ楽しそうならばいいか。

「その……いや、何でもないや。頑張つてね！」

「シユピーゲルもね」

シユピーゲルも行き先があるのだろうか、俺たちに気を使ったのか世間話を切り上げていってしまった。子犬みたいな奴だったな。

「パーティー入りやいいのに。まあ、行つちまったし今更か」

「……なんだか、苦しそうな顔してたね」

コハルは何かを感じ取ったらしいが、俺にはよくわからなかった。正直、人の気持ちを読み取るのは苦手だ。自分が裏で別の感情を抱いているように、相手の真意など読み取れない。

世間やら周りに合わせて自分の気持ちも誤魔化して、そんな事をしているから、俺は恐れて本音も出せないのだろうか。

5層―9 Customs

Level 17 BEAR Operator "Rage"
Aincrad layer5 "Customs"

俺たちがスポーンしたのは木々の茂る場所。目の前には赤い税関倉庫があるからして、"Trailer park" スポーンのようだ。

Customsは工業団地であり、様々な建物がある。ちなみに地図は上が南になっているから注意が必要だ。

まずは俺たちのスポーンした東側、川を挟んだこの一帯は"Trailer park"と"Cross load"の2つの脱出地点があり、トレーラーパーク方面とかクロスロード方面、または湧きと言われる。

この税関倉庫2階は鍵を開ければ金庫やPCケースがある他、特定のタスクで回収するアイテムがあるので、訪れるPMCは一定数いる。

その上、ここでもたついていると付近でスポーンしたPMCと大喧嘩するハメになるので、俺は大嫌いな湧き位置だったりする。

「ここから一番近いボスの湧き位置は、寮か新建築ね。どっちから行くの?」

「まずは新建築。いなければガソスタだな。シノンの狙撃を活かせる場所で戦いたい」

「そこに湧くのかはボス次第だけれどもね」

そう言いながらもSVDをいじっているあたり、ボスを撃ちたくてたまらないのだろうか。ちやっかり近代化カスタムまでしてあるし、結構気に入ってるだろ?

「コハル、今から行くところは開けた場所が多い。あまり物陰から身を出さないようにしろよ。但し、建物に入ったらガンガンやっちゃまえ」

「リゾートの時と同じだね」

まーたアスナが魔法陣巡りを始めたので、俺とコハルも連れて行かれたついでにリゾート漁りに勤しんだのは記憶に新しい。

大枚叩いてリゾートの鍵を揃えて、PMCと戦闘にならない環境でレアアイテム漁りをしたのは楽しかったな。

おまけに、ダガーを手に入れたコハルは室内戦に滅法強くなり、入り組んだ建物で射線を遮っては、詰めてきたところに奇襲の一撃を仕掛けるという方法でサニターを倒していた。

もうコハルだけでいいんじゃないか？ そうは思ったが、野外ではやはり俺の方が強かった。まだやれるはずだ。

ちなみにだが、リヨーハはVSSを貰って早速使おうとしたものの、肝心の弾薬が貴重で手に入らなかったようだ。

今は泣く泣くAKを使い、VSSはスタッシユの肥やしとなつている。涙拭けよ相棒。音速弾はいいぞ。

「それじゃ、俺はシノンの直掩につく。レイジはコハルとキズメル率いて前頼むぜ」

「改めて言わなくてもいいだろ」

「じゃねーと、いつの間にか俺が前衛に出てるからな」

「お前がバトルジャンキーなだけだ。俺もだけどき」

そうだ、俺もリヨーハも戦いが好きなんだ。ギリギリの戦場を生き残り、時に出し抜いて敵を仕留め、その達成感に酔いしれていた。

お陰様で、いつも戦術は攻撃的だ。ソロだところもいかないのにな。

「レイジは、この場所を知っているのか？」

キズメルは不思議そうに俺を見る。ベータでここを走り回った、なんて言っても通じるわけがない。

「かつて契約戦争っていう争いがあった、その時にここで戦ったのさ」
「そうか、そうだったんだな」

契約戦争自体は姉妹作である”コントラクト・ウォー”の話だが、タルコフと世界観は共通。というか前日譚みたいな感じのゲームだ。あっちもやりたかったなあ。

そんな風に、かつての戦争でここに来たって言う方が通じやすから

う。

「ほら、早く行こうぜ。シノンが暇で寝ちまうよ」

「分かっている。コハル、キズメル、離れるなよ。迷子になるからな」

「分かった。道案内は任せたぞ」

「またベルト掴む?」

「はは、それは室内戦の時にしてくれ」

しっかりと鍵の類は持ってきてきているので、税関倉庫（通称”赤倉庫”）のオフィスを漁ってみたが、金庫にはわずかな金しか入っていない。金目のものが出る時は出るんだけどな。

そんなわけできつさと移動する。税関エリアと工場地帯は川に隔てられており、中央には橋、南北にそれぞれ瓦礫の橋や浅瀬があつて渡れるようになってる。

その中でも北側、道路を封鎖する壁や放置された戦車がある”RU AF Roadblock”を川向こうから観察する。あそこは逆サイドスポン時の脱出地点である他に、SCAVのスポンポイントでもあるのだ。

「リョーハ、スポットよろしく」

「あいあい。早速装甲車から左に10メートル道路上、オリンピックジャケットのSCAV」

「見えたわ」

肩が赤いオリンピックジャケットを着たSCAVは比較的に見つけやすい。たまに迷彩服のようなツナギを着た奴がいて、そいつは恐ろしく見つけにくいことがある。SCAVもそれぞれというわけだ。

「距離100メートル」

「了解」

シノンはしゃがむと僅かに息を吐き、それを止める。次の瞬間には甲高い銃声が響き、道路上でジャケットとは違う赤が見えた。頭に命中したのだろう。

「キル確認。続いて右5メートルの土手中腹、茶色のがいる」

「アレね」

よく見つけたな。あんまりにも目立たないから見逃してたぞ。

何がどうあれ、シノンに見つかったからにはもう終わりだ。探知範囲外から必殺の一撃を頭にぶち込まれ、SCAVは土手を転げ落ちていった。

「ナイススキル。道路上はクリアで、茶色工場屋根にスナイパーSCAV。距離250メートル」

「あら、今日は湧いてたのね」

Customsは特定の位置にスナイパーSCAV（エリートSCAVとも）がスポンする。WoodsやShorelineにもいるにはいるが、こつちの方がスポン位置が多い上に、必ず目につくような位置にいるから分かりやすい。

「当てれるか？」

「誰に言ってるの？」

静かに一言を告げ終えて、その刹那にSCAVは崩れ落ちた。言葉を掻き消すような銃声だけが場を支配する。

一方的な殺意に、SCAVは手も足も出ない。

タルコフでの交戦距離は50メートル以内の至近距離が殆どだ。建物や木々などの入り組むマップで、キロ単位の長距離狙撃はなかなか起こり得ない。そして、目標は動き回るから中々当たるものではない。

だからこそSCAVもPMCも、長距離からの狙撃に対しては無力なのだ。

「レイジ、今日は出番なしだね」

「いつもこれならいいのにな。ま、リゾートでは活躍出来なかったから鬱憤溜まって……うおっと!」

シノンが緑茶の空き缶を投げつけてきた。咄嗟にそれをストックで弾き飛ばした後には、何食わぬ顔でそっぽを向かっていたけど。

やっぱリゾート内で本領出せなかったの気にしてるだろ。

それにしても、高倍率スコープ付きとはいえこの距離を全弾ヘッドとは大した腕前だ。どんな腕前してるんだよ。オートエイムよりも強くないか？

「対岸クリア。レイジ、渡河しろ。援護する!」

「お前この距離当てられねーだろ！ まあいい、コハル、キズメル、着いてこい！」

リヨーハはAK-74Mに等倍率のホログラフィックサイトしか載せていない。この距離を撃つのは厳しいだろうし、高倍率スコープがあってもアサルトライフルの精度でこの距離の精密射撃は難しすぎる。

実際、それをサポートするために作られたのがドラグノフ含むマクスマンライフルなのだ。この運用は正解といえよう。

『今のところは大丈夫だけど、倉庫周り気を付けなさいよ。私からは死角だからね』

「わーってる。コハル、キズメル、離れるなよ」

「うん、背中は何に任せて」

「心得た」

浅瀬を駆け抜け、一気に道路へ上がる。周辺を見ても敵影はないので、道路脇の小さな倉庫裏まで進んでみる。

すると、聞き慣れたロシア語の罵声が飛んできた。もちろん答えるのは銃弾だ。声の方に数発発砲すると、悲鳴と共にSCAVが倒れる。一丁上がりだ。

「倉庫裏でワンキル。上がってきいていぞ」

『オーライ、そっちに向かう』

付近を制圧し、安全を確保してようやくリヨーハとシノンがやってくる。ここらのSCAVの湧きはこのくらいだ。少し一息入れられるだろう。

「レイジは随分と手際がいいな。敵に出会っても落ち着いて対処する、いい戦士だ」

「よせやい、慣れてるだけさ」

「やったのはほとんど私じゃない。次は一人で捌いてみなさいよ」

やってきたシノンは氷のような目線で俺を貫いている。クラス4さえブチ抜く貫通力で、中々ダメージがでかい。胸部が痛むような感じがする。

リヨーハの野郎は楽しそうに見つめていやがる。この野郎、助け舟

の一つ出してくれよな。

「次はソロでも暴れてやるさ」

「もう、シノンにはレイジを煽らないでよ。本当に1人で行っちゃうからー！」

「レイジなら死なないでしょ」

「死んでないだけで、何度も死にかけてるの！」

コハルは心配性だな。その原因の俺に言えた義理ではないんだけど。

「まーまー、シノンは俺が褒めるからヤキモチ妬くなよ」

「妬いてないし、リヨーハに褒められても何だか微妙」

「ひでえー！」

うん、シノンはリヨーハをイジって楽しんでるだけだな。だって、肩を落としている姿を見て楽しそうに笑ってるんだ。お前らもう付き合ってるだろ？

「ほら、痴話喧嘩はそこまでだ。そのこのインテリ棟を經由して新建築に向かうぞ」

「痴話喧嘩じゃない！」

シノンの蹴りが俺の膝裏を襲う。急な膝カックンに、俺は力なく崩れ落ちた。それに倒れ方が悪かったな。体を捻ったせいでコハルを見上げるような感じになって……うん、中が少し見えてしまった。

「ちよっと、レイジのエッチ！」

コハルは咄嗟にスカートを両手で押さええて飛び退く。顔は真っ赤で、混乱のあまりオロオロしていた。かくいう俺も不可抗力とは言え、混乱状態だ。

「すまねえ、事故事故事故！」

「事故で済まないよー！」

シノンとリヨーハが爆笑してやがる。後できつちりお礼参りするとして、コハルに許してもうために5分ほどの時間とスイーツ巡りの約束を要する事となった。

5層―10 悪意の一撃

道路を超えてすぐ、コンクリート壁の崩れた部分を越えると、2階建ての建物がある。”インテリ棟”と呼ばれるそこを制圧した俺たちは、ひとまず略奪タイムを楽しんでいた。PMCの横槍がないって幸せなことだ。

1階には医薬品ケースやダツフルバッグ、SCAVの死体があり、2階には医薬品のスポンする医務室と、本棚が並ぶ事務室がある。その事務室に機密情報フォルダ（通称”インテリ”）がスポンするから、ここはインテリ棟と呼ばれているわけだ。

「ラツキー、モルヒネあった」

青い注射器を3本ほどバッグへ詰め込み、俺はホクホク顔をしていただろう。コハルは微妙な顔をしているけど。

「レイジ、まさか薬物乱用を!?!」

「ちげーわ!、こいつ1マスあたりの単価が店売り1万ルーブル下らない代物なんだよ!」

コルで取引している今、いくらぐらいの値段になるのかはわからないが、高値で売れるのは間違いあるまい。鎮痛剤として使ってもいいが、デバフがデカイしなあ。

ただ、鎮痛効果が長い上に2秒で使えるのはデカイ。俺が愛用するイブプロフェンやワセリンよりも1秒だけ使用時間が短い。時にそれが生死を分けるのだ。

とうかこれをを使うのが薬物乱用と言うならば、ラムネ菓子感覚で鎮痛剤飲んでる方がヤバい気がする。

タルコフでは不意打ちで脚を破壊されても逃げられるようにと、こまめに鎮痛剤を飲むPMCが多い。鎮痛剤って、痛みが出てから飲むものじゃないだろうか。

「結構貴重なアイテムなんだね」

「紛争地帯で医薬品は貴重だからな。タスクでの納品もあるぞ。避難民の治療用にとって」

取っておくか迷ったが、今は金が欲しい。納品分は必要になってか

ら集めようかな。

「シノン、動きはあるか？」

医務室の窓ガラスは分厚く、銃弾のダメージを大きく減衰させる。その例外は割れている部分で、シノンは大きく割れた穴から向かいの建物を監視している。

”新建築”と呼ばれるそれは建築中か解体中の2階建て倉庫で、インテリ棟からは約100メートル。2階には機関銃やグレネードランチャーが据え付けられている。

マップリワークによって追加された場所であるが故に新建築と呼ばれているのだ。そして、ここにはボスがスポーンする。

「……何か動いた。複数」

「ボスじゃねえか？ あそこ、SCAVいるけど多くて2人だろ。ズボン見えねえか？」

リヨールもボスのズボンを確認しようとスコープを覗くが、渋面を浮かべていた。暗くてよく見えなかったのだろう。

取り巻きは青と白の迷彩ズボンを履いていて、リシヤラ本人は茶色のジャケットを着ている。それさえ見えれば確信が得られるのだが、シノンは首を横に振った。

「まだ確証はないわ。でも、3人くらい動いているのが見えた」

「俺が威力偵察に行こうか？」
「待って、2階に人影。左の機関銃についているわ。取り巻きだと思う」

2階ならば日が差すからよく見える。ズボンはわからずとも、袖に白の2本線が入った警察ジャケットで見分けたのだろう。あとはやけに装備がいいとか、そんなところか。

「お手柄だ。リヨール、シノンとここから狙撃しろ。俺はコハルとキズメルを連れて殴り込んでくる」

「俺も突っ込みてえよ」

リヨールはボヤクが、近接戦能力のないシノンを1人にはできない。それに、お前は飼い主といられるんだから嬉しかろう？

ボスキルが経験値とかアイテム的に美味しいのはわかるが、アイテム

なら後で山分けしてやるよ。

「ゴハル、キズメル、中の廊下は長いから、そこから攻めるのはやめておけ。壁や角、小部屋を使って奇襲するんだ」

「わかった。他に気をつけるべきことはあるか？」

「何か投げてきたと思つたら、ソレから全力で離れろ。3メートル以内にはいたら死ぬぞ。それ以上離れても破片が来るから気をつけろ」

「魔法のようなものか？」

「それより厄介なものさ」

リシヤラ軍団のグレネード一斉投擲程怖いものはない。たまーに取り巻きとかりシヤラ本人が巻き込まれて死んでいたりもするけどな。

「レイジはどう動くの？」

「2人と正面からお邪魔するのさ」

新建築の側面は南北に2つの大きな搬入口があり、反対サイドも似たような作りだ。後は南側が大きく開いていることと、北側にドア程度の入り口がある。

どう動くかというところのまま正面、建物側面の搬入口から突っ込んで大暴れだ。

※

「シノン、俺たちは新建築手前50メートルの位置についた。盛り土の後ろだ」

『見えてる。相手はまだ気付いてない』

この辺りは工事現場であり、さまざまな重機が放置されている。やけに盛り上がった土とか変な溝とか起伏があり、地形隠れて進むには都合がいい。

もう少し近寄れるだろうか。その前にまずは偵察だと盛り土から顔を出し、ライフルスコップを単眼鏡の代わりにして偵察してみる。

取り巻きに守られ、リシヤラがそこに立っていた。対面には肌が緑色のエルフがいる。

情報と違う。あれは森エルフではなくフォールンエルフと呼ばれる奴で、キズメル曰く『堕ちたエルフ』だ。前の層からここそそと、何

かを企んで暗躍しているらしい。

「キズメル、敵の中にフォールンがいる。森エルフはいない」

「なんだと?」

キズメルにスコープを投げ渡すと、信じられないとばかりに覗き、顔を驚愕に歪ませた。

何かしらの理由で追放されたフォールンは何故か秘鍵を狙っていて、何かを企んでいることは確かだ。森エルフと黒エルフがPMCだとすれば、あいつらフォールンはSCAVみたいなもんだろう。

「リヨーハ、問題発生。情報と違ってフォールンがいる」

『どーすんだ』

「皆殺しにすればいい話だ。リシヤラを先に始末すればコハルとキズメルが暴れやすくなる。そつちも狙撃態勢を整えて、こつちの合図を」

パシユ、銃声にしては軽すぎる音が聞こえた。銃弾はリシヤラの取り巻きに当たり、血飛沫が舞い散る。

その瞬間、敵の動きが慌ただしくなった。襲撃とあればもちろん警戒体制に移行するわけで、フォールンエルフ共も散り散りになって辺りを警戒してしまった。

「リヨーハ、撃つたのは誰だ!?!」

『俺らじゃない、さらに後ろのコンクリ壁から銃声!』

咄嗟に振り向き、サイトを覗く。ブースターが拡大したその景色の中、髑髏の面をつけた黒フードのPMCが緑色のライフルを手に佇んでいた。

DVLI10、サブレッサー一体型のバレルを使ったのだろう。あれほど静かな銃声はそれ以外にない。

「リヨーハ、後ろのコンクリ壁に敵性! 例の黒フードだ!」

『メイベルをやった奴か!?!』

「恐らく! こつちからは距離100!」

更に撃とうとしている黒フードに、俺は咄嗟に射撃した。相手がグリーンだろうが知ったことか。奴を殺さなければ殺されるのはこつちだ。奴もPK連中とグルかも知れないしな!

しかし悲しいかな。しゃがんで撃つたものの、弾丸は僅かに外れた。足回りが若干不安定なせいで、撃つたびにブレて狙いがズレている。

「奴が逃げるぞー！」

『待て、リシヤラがお前に食いついた！』

『頭下げなさい！ 上の重機関銃^H_M^Gが狙ってるわよ！』

シノンの警告と共に俺は伏せる。まるで地面にダイブするような勢いだったが、お陰様で命拾いした。頭の上を重い銃声と共に機関銃弾が貫いていったのだ。あんなの当たったら即死してもおかしくないぞ。

クソが、そんなのをドンドコ景気よく撃ちやがって。NPCがたまーに使う重機関銃はやけに当たるから嫌なんだよな！

「コハル、頭上げんなよ！ キズメルも絶対動くな！」

「言われなくても上げたくないよ！」

「人の作る兵器とは、中々に面妖だな！」

厚く盛った土は意外なことに、襲いくる銃弾を受け止めてくれる。砂や土の密度が弾丸を阻むのだ。その辺の壁より土囊の方が硬いなんてことも十分にあり得る。

それに、この土が高く盛られていたのが幸いだ。上から撃ち下されているが、ギリギリ死角に入っている。だが、下がることも進むことも出来ない。

「リヨーハ、シノン！ てめーらどこにいやがる!? こっちは新建築で制圧くらって動けない！」

銃声が響き、機関銃の轟音が止まる。シノンがやったのだろうか。俺も咄嗟に身を乗り出して射撃し、突っ込んでこようとしたフォールンエルフヘダメージを与えて下がらせる。

『旧建築迂回して、側面に回る！』

「早くしてくれ、奴ら詰めてくるぞー！ 頭あげらんねえー！」

再び機関銃の轟音が鳴り響く。スーカ、機関銃手を倒したんじゃないかと、下がらせただけか！

『ごめんなさい、アルティンに弾かれたわ』

「SNBならブチ抜けるんじゃないかねえのかよ！」

SNB弾自体の跳弾率は高めに設定されており、アルティンヘルメットの堅牢さも相まって跳弾したらしい。

なんだって、俺に起きた奇跡が敵にまで起きるんだよ！

『レイジ、しばらく自力対処頼む！ 旧建築側から機関銃排除してやる！』

「俺たちが死ぬ前に頼むぜ！」

隣でコハルが小さくなって怯えている。その姿はまるでハムスターだ。可愛いなんて思う余裕がない。それだけ事態は逼迫しているのだ。

「クソが！」

僅かに身を乗り出し、機関銃手へ向けて数発射撃する。すると、どうやら怯んだのか機関銃手が土嚢に身を隠した。

ベータの時は被弾でもしない限り引かなかったのに、ここへきて至近弾にビビってくれるようになったか。制圧射撃が有効というなら話は早い。

「コハル、キズメル！ 俺が援護する間に突っ込めるか？ 突入して乱戦に持ち込むしかねえ！」

「先にフォールンの方が突っ込んできてるよ！」

「ブリーチャー！ 上の機関銃を抑えるから、その間にやってくれ、30秒だ！」

「わかった。キズメル！」

「こっちは行けるぞ。レイジ、合図を頼む！」

マガジンには弾が残っているが、新しいものと交換する。とっておきの60連マガジン。これならばしばらく機関銃を黙らせて置けるはずだ。

身を乗り出し、2発ずつ撃ち込んでやると機関銃の敵は頭を下げた。そのまま大人しくしてやがれ。そうすれば死ぬのは後になるぞ。

「抑えてる、行け行け行け！」

2発ずつとはいえ、制圧射撃をしていればすぐに空になるだろう。その前に2人が仕留めてくれるか。それに懸かっていた。

もう敵の足音が聞こえてくるような距離。そんな距離で飛び出したコハルとキズメルは眩い光を放ち、ソードスキルを発動する。

風切り音に遅れ、フォールンエルフの悲鳴が聞こえる。あいつら、攻撃力は高いのに体力少ないもんな。

「やったよー！」

「弾が無くなる！一回下がれ！」

入口の方から別の取り巻きが射撃してきた。コハルとキズメルなら数発耐えられるだろうが、入口に取り付く前に相当削られるはずだ。突っ込むのは得策じゃない。

2人が最寄りの盛り土に身を隠してすぐ、AKは弾切れで沈黙した。遅れて機関銃の掃射が始まり、俺はその射撃を背に感じながらロードする。

頼むりヨーハ、早くきてくれ。

5層—11 トカレフ

Level 17 BEAR Operator ” Ryoha

“ Aincrad layer5 ” Customs ”

「シノン、こつちだ！ この青トタンなら機銃をやれるぜ！」

新建築よりやや北寄り、リワーク前から存在するエリアを突き進む。

この辺りには燃料タンクが多く、さらには新建築より北に100メートル程度の位置には似たような作り途中の建物”旧建築”がある。

そして、新建築エリアと旧建築エリアを隔てる青いトタンは一部が倒れていて、そこからならばレイジたちを抑える機関銃を狙撃できるはずだ。

「見えたわ、やれる」

「後ろは任せろ、気にせず集中してくれ！」

スーカスーカとうるさいSCAVを撃ち殺して黙らせ、シノンの背中を守る。それが俺の役目、俺の誇り。レイジと組んでいた時と同じだ。

それに、こんな可愛い少女の背中を守って戦えるなら悪くないだろうよ。きつと俺が死んでも、この戦乙女がヴァルハラに連れて行ってくれるさ。

甲高い銃声が響き、溶けていく。俺のSordinヘッドセットはそれを増幅して、やけに近くに感じさせた。シノンとの距離はそんなに近かったのだろうか。

「やったわ、機関銃のアルティンを仕留めた」

「グッドキル。レイジ、上は仕留めた！ 突っ込め、俺も側面から行く！」

『誤射すんなよ！』

後は俺の出番だ。この身を盾に、剣として、奴らの横っ腹を食い

破ってやる。

「シノン、先行くぜ！」

「了解、カバーする」

シノンを追い越し、側面入口を狙って突っ込む。その少し斜め後ろ、シノンが肩越しに守ってくれている。

守り守られる、そんな関係。デスゲームになってからというもの、こうして背中を預ける相手のことが何よりも特別に思える。

「レイジ、ライトつけて突入するぞ！」

『インテリ側で交戦中！ フォールン共の抵抗が激しい！』

ひっきりなしに響く銃声と、BT弾の赤い光。レイジの野郎がコハルとキズメルをカバーしながらやり合っているのだ。きつとフォールンだけでなく、リシヤラの取り巻き軍団ともやり合ってるだろうな。

待つてろよ、今助けるぜ相棒。

「シノン、このまま突っ込んで下を押さえる！」

「行つて！」

突入すると、目の前には2人の取り巻きがいた。レイジの方を向いていて、俺には無防備な側面を晒している。

「もらったぞバカめ！」

まず1人、頭に2発撃ち込んでキル。隣の奴は俺に気づいたが、シノンの射撃を喰らってもんどり打ちながら倒れた。

「2人やったぞ！」

「2階にもいるぞ、気をつけろ！」

無線を使わずともレイジの声が聞こえる。上からは足音が聞こえて、きつと敵が走り回っているのだろう。

入つてすぐ左には階段がある。正面はクリアだし、そこから上がつてきつさと仕留めてくれようか。

「先行くわ！」

「あ、待てシノン！」

シノンが階段を駆け上がり、逆に降りてきた人影と激突した。茶色のジャケットに髭面の坊主頭。間違いない。アレはリシヤラ本人だ

！

「この、離さない……！」

「シノン、振り解け！ それじゃ撃てねえ！」

シノンはのしかかるリシヤラに膝蹴りや拳をぶつけて振り解こうとするが、上手くいっていない。近すぎるせいで俺も射撃出来やしない。

そんな中でリシヤラが拳銃を抜いた。金色の成金趣味丸出しなトカレフは奴のユニークアイテムだ。スペックはトカレフのままだから、タスクとかアイテム交換にしか使い道はない。

脅威的ってわけでもない。メインで持つてるAK—102の方がだいぶ厄介だ。それなのに、シノンはそのトカレフを突きつけられて動けなくなっていた。あからさまに瞳孔が見開いている。

らしくない。そう思った刹那に悲鳴が響く。コハルでもキズメルでもなく、あのシノンが悲鳴をあげ、SVDも放り投げてやたらめつたらに暴れまわっていた。一体何だっつんだ！

「こんな時にS A N チェックミスるなよ！」

トカレフとて、頭に食らえば1発で壊死するのは間違いない。こんなところで戦闘不能になられるのは困る。死なせるわけにはいかないんだよ！

「どけよクソ野郎！」

階段を駆け上がり、リシヤラの顔面にドロップキックをお見舞いしてやる。お陰で奴の銃弾はあらぬ方向に吹っ飛んでいった。よし、間に合った！

リシヤラは階段横から地面に転がり落ちる。シノンはまだ怯えていて、現実なら過呼吸間違いなしだろう。しばらく動けないなこりゃ。

「おいリヨーハ、リシヤラはどうした!?!」

「下に転がり落ちてる！ ぶち殺せ！」

「クソが、邪魔すんな！」

リシヤラはレイジの激しい弾幕を浴びて逃げ出す。更には残っていたフオールンや取り巻きの妨害を受け、思うように追撃ができずに

いた。

ボスはスポーンしたあたりから離れないんだが、やっぱり仕様が変わってるんだな。俺も不安定な姿勢から撃ちまくったけど、致命傷を与えられずに逃げられてしまった。

「リヨーハ！ 上からシノンに狙撃させろ！」

「無理だ！ ブルっちまって動けねえ！」

「スーカ！」

「シノンを連れてセクシー部屋に待避するぜ！」

「行け！ 上は俺がクリアする！」

俺はシノンを担ぎ、近くの小部屋に運ぶのが精一杯だった。レイジとだったら、今頃血眼で追撃に向かってたんだろうな。

シノンといるのは楽しいが、思うように突っ込めないのがどこか寂しい。奴と猟犬コンビとか呼ばれて、正面切って戦ってたあの時をどうしても懐かしく思ってしまった。

鬼の形相で階段を駆け上がり、特殊部隊かのようなクリアリングで上を制圧していくレイジの後ろ姿が、どうしてか羨ましく思えた。

※

折り畳みベッドが並べられた小部屋でシノンを寝かせている。壁にはセクシーなねーちゃんのポスターが貼ってあるから、俺たちは”セクシー部屋”って呼んでる場所だ。

ようやく落ち着いたシノンは天井を見つめ、ゆっくりと呼吸を整える。仮想世界で呼吸に意味はないのだが、心を落ち着けるには必要かもな。

「落ち着いたか？」

「ええ……ごめんなさい」

「気にすんな。水飲んで少し休め」

この部屋で拾った水のボトルを差し出すと、シノンはそれを一気に飲み干す。そうだ、休んで怖かったことなんて忘れちまえ。

「……リシヤラは？」

「レイジが追撃してる。ガソスタ方面に逃げたらしい」

無理に起きようとするシノンの肩を掴み、もう一度寝かせる。俺は

そのそばで寄り添うだけだ。これじゃあ、猟犬じゃなくて番犬だな。

「怒ってないの？」

「どうしてだ？」

「ボスを取り逃したのよ」

「死ぬよりはいい。仲間を死なせるくらいなら仕切り直すさ」

そつと頭に手を添えてみる。いつものシノンならつねるか捻るかしてくるのに、今日はやけに素直だ。何もせず、ただ撫でられている。随分弱っちまったな。

ただ、生きてくれればそれでいいさ。スナイパーは壊れやすいって言うし、シノンも限界が来たのかもしれないからな。

「……私は強くなりたい。数多の敵を斃して、それで私は私を取り戻せるって、そう思ってたのに、どうしても……」

シノンは拳を握りしめる。トカレフはマカロフと並んで日本に密輸されてたりする。だから、何かしらトラウマになるような事があったのだろう。

それを掘り下げるつもりはないけどな。俺はカウンセラーじゃない。情報系の大学に通うしがない学生で、ただのサバゲーマーだったんだ。彼女の人生に責任を負えるような人間じゃない。

「無茶苦茶するくらいならば本部勤務してくれ。俺は相方を死なせるつもりはない。レイジも、お前も」

それは自分の為だ。俺が飄々とレイジの副官をやってられるのも、まだ仲間を死なせていないからに他ならない。

俺もレイジも強い人間じゃないから、仲間を死なせる決断なんてできやしない。もし死なせようものなら、その時はきつと壊れてしまうだろう。

それが怖い。俺の手の届かないところで見知った人が死んでいく。別れの言葉も無く、リアルに帰っても墓場の場所すらわからない。

それに俺は耐えられない。それはレイジも仲間達も同じだから、俺は死んでも構わないとか思いながら死ねずにいる。それだけだ。自分の為だけだ。

「勝手な……」

シノン は俺の胸ぐらを掴んで壁に押し付ける。その力は弱々しく、振り解くのは容易い。

だけど、振り解いたらそれっきりになるような気がした。彼女と繋いだ縁さえもが振り解かれて、もう紡ぐことは叶わなくなる。それが怖くて、俺は振り解かなかった。

「勝手に。お前やレイジに死なれたら俺は立ち直れねえ。そんな自分の勝手に死なせる気はねえって言ってんだ」

「そんなこと言うなら……なら！　あなたが私を一生守ってよ！」

そんなの、組んでまだ2ヶ月やそこの男に言うようなものではないだろう。

そう答えるのは容易いが、そうしたが最後この手は振り解かれる。シノンはこの下にある出口から脱出して、きつと会うことはなくなる。

何に怯えているのかもわからない。傷ついた野良猫が精一杯の威嚇をしているようにしか見えない。そんな哀れな姿に、俺の心が傷んでいるのも確かな事実だ。放って置けない。

「出来ないでしょう？　なら、そんなに軽々しく守るだなんて「いいぜ」

シノンの言葉に被せて、たった一言だけ言い放つ。多分、俺は冷徹な目をしていたと思う。

本来の自分と同じ黒の髪と瞳のままにしている。そんな漆黒な瞳をシノンの茶色の瞳が映していて、底知れぬ闇に見えた。俺って、こんな目ができるんだな。

「……何言ってるか、わかってるの？」

「ああ、分かって言ってる」

静かに告げると、シノンの足から力が失われていく。俺の胸ぐらを掴む手もだらりと垂れて、その身を預けてきた。

かけるべき言葉は見つからず、探すつもりもない。俺はただ、泣き喚く子猫にこの胸を貸しておくだけだ。

5層―12 守りたいもの

「落ち着いたか?」

何分くらい泣いていただろう。ようやくスッキリしたのか、シノン
はそつと俺から離れていく。泣くのはストレス解消になるって言う
し、何がともあれ回復したならヨシ!

「ええ……ごめんなさい、八つ当たりして」

「そういうのも俺の役目ってわけさ。どうする、帰るか?」

レイジたちが追跡ついでに電源を再起動してくれたらしい。お陰
でこの脱出ポイント”ZB―1013”が使用可能になっている。
後は俺が工場出口の鍵で地下の扉を開ければ脱出可能だ。

それでも、シノンは首を横に振った。傍らのSVDsを手に、その
目を再び凍りつかせて。

「やるわ。守ってくれるんでしよう?」

「お前が突っ込まなきゃ守れる。レイジたちはガソスタでリシヤラを
捕捉してるようだから、俺たちは山上からの狙撃で支援する。いいな
?」

「ええ」

レイジにも攻撃を待つような言わないとな。奴ならたった1人で暴
れ回る。そんな風にしちまったのが俺なわけだし、死なれたら寝覚が
悪すぎる。

善は急げとAKを手に、俺はシノンの前に行く。進路上のSCAV
は既にレイジが轢き殺した後のようで、持ち物も漁らずにさっさと進
んだようだ。

「相変わらず、リヨーハの相棒はすごい暴れぶりね」

「アイツ、元々はマークスマンだったんだぜ? シノンほどじゃない
が、中々腕が良かった」

シノンの表情が少し動く。意外だと言わんばかりで、猫がフレーメ
ン反応起こしたみたいな顔だな。

「今じゃ突撃役じゃない」

「俺がそうさせた。アイツがいつも死にかけるのは俺のせいだ」

シノンはさらに驚いたような顔をする。俺にはその視線が痛い。まるで罪を糾弾されているかのような、そんな気分だ。

「どうして、そうなるのよ」

「ベータの時だ。いつも俺が突っ込んでやられて、レイジが狙撃で敵を始末してた。それで段々、俺ばかりこんな負担をするのが嫌だっと思うようになって……」

元のタルコフは死ねばアイテムをロストする。保険をかけていれば返ってくる可能性もあるが、現実ではない。それに、戦利品をロストしてしまうし、弾薬などの消耗品に保険はかけられない。死ねば必ずマイナスだ。

だから、突っ込む俺が悪いのだが、レイジを妬むようになっていった。最高の友でありながらも。

「それで、レイジにも突撃させた？」

「最初は軽く、前衛を代わってもらった感じだった。信じられるか？ アイツ単発武器なのに突撃して、しかも敵を食い殺して帰ってきやがった」

アレはマジでおかしい。肝が据わっているなんてレベルじゃない。ゲームとはいえ、死ぬことのリスクが大き過ぎて怯える奴は多い。それなのに、アイツはいつも勇気というにはまた違うような胆力を見せ、生きて帰ってくる。

「それで味を占めたんだろうな。DMRからアサルトライフルに持ち替えたかと思うと、いつの間にか連携が出来てきた。俺が正面、奴がサイド。まるで狼の狩りさ」

「いいじゃない。それでレイジは文句言っていないでしょう？」

「デスゲームにならなければ、気楽に思えたのにな」

アイツの突っ込み方には俺が一番ヒヤヒヤしてる。きつと、コハル以上にだ。アイツがそれで撃破されたところを何度も見ている、それがフラッシュバックする。

「なら、死なないようにリョーハが守ればいいじゃない。私のことも、守ってくれるんでしょ？」

「幻滅しないのな」

意外だった。自分の欲とか嫉妬とか、そういうもののためにレイジを危険なポジションに転向させて、普通なら幻滅されてもおかしくないのに。

シノンはどうして、とでも言いたいように首を傾げていた。

「だって、凄く楽しそうじゃない。コハルと一緒に突っ込んだり、リヨーハと暴れまわって笑ってるのよ？ 元々性に合ってたんでしよう。遅かれ早かれ、ああなってたわ」

「そう言ってもらえると気が楽だ」

後で本人に聞いてみようか。それで、楽しいって言ってくれればもう悩まなくて済むんだろうな。

「そういうリヨーハは怖くないの？ 今も私の前にいて、敵がいたら撃たれる位置よ」

「全然。ソロじゃねえからな」

例え負傷してもカバーしてくれる味方がいる。それが何よりも心強い。だから、俺はどれだけでも前に出て戦える。

そう答えると、シノンは笑っていた。俺、何か変なこと言ったかな。

「やっぱり、あんたもレイジも似た者同士ね」

「どういう事だよ」

「そのままよ。2人とも前衛で戦うのが楽しそうで、よく仲間を信頼してるじゃない」

ああ、そうか。俺もレイジも、なんだかんだこのデスゲームを楽しんでるのか。

リアルで手に入らないものがなんでも手に入るから、俺もすっかりこの世界に馴染んでいるのかもしれないな。

※

工場地帯を抜けて軍事検問所のSCAVどもを蹴散らし、ガソリンスタンドを見下ろす岩場に着いた。工場地帯と並行して伸びる道路、その途中にあるこのガソリンスタンドはボスのスポーン場所の一つだ。

そのガソリンスタンド裏手に目標のリシヤラはいた。生き残りの取り巻き1人を連れて、何かを待つように。

俺はシノンの傍に腰掛け、後方警戒。シノンはテラス状に迫り出した岩の上で狙撃態勢を整え、レイジの指示を待っていた。

「後方クリア。シノン、そっちは？」

「リシヤラのところに誰か……フォールンね」

『シノン、リシヤラが秘鍵を渡そうとしたら狙撃しろ。で、フォールンに奪わせるなよ。奴をやったら、俺たちもすぐに突入する』

「分かってる」

決戦みたいな雰囲気だけど、これもボス討伐のための情報収集ではないんだよな。フロアボス相手にしたくらいの疲労感だぞ。

『奴ら話し始めたな。フォールンが1人いないのが引つかかるが……』

確かに、あの悪知恵の働くネズミはもつといたはずだ。後の奴らはどこに行った？

『秘鍵が渡れば取り返す術がない。レイジ、やってしまおう』

キズメルは突入してフォールンを仕留める自信があるのだろう。リシヤラさえ始末すればどうにでもなる。後はシノン次第というわけだ。

青いトタンの上から顔だけが見えている。距離は75メートルと言ったところか。100メートルはないが、少しズレただけでも外れる距離。

『シノン、そっちのタイミングでやれ』

「射撃許可だ。シノン、任せた」

微かに葉擦れの音がした。斜面の上に銃口を向けるが、何もいない。

そんなわけあるか。俺のSordinヘッドセットがバグったわけがない。低音を聴きやすくしたこいつは足音がよく聞こえるんだ。

何かが忍び歩きをしてやがる。来る！

「そこかー」

咄嗟に飛びついてきた影に銃撃をするが、近過ぎた。だから銃を槍か杖のようにして、片手剣を防ぐので精一杯だ。

鈍い金属音がして、AKは耐久値と引き換えに俺の身を守ってくれ

た。目の前にいるのは緑の肌をしたエルフ。フォールンめ、こんな所に隠れていやがったのか！

「人族の武器なら、ここから狙うと思ったぞ！」

「洒落せえ、大人しくくたばれ！」

前蹴りを腹にぶち込み、距離を取る。腰だめでトリガーを引くけど不発。1発目から作動不良とか運がねーな！

「リヨーハー！」

シノンが振り向いている。このままだと、狙撃そっちのけで俺の援護に来るだろう。そうなれば、また奴を逃してしまう。

そうなるものか。

「こいつは俺が仕留める！ 振り向いてねえで狙撃しろ！」

撃てないのをいいことにフォールンが突っ込んでくる。

何も銃だけが武器じゃない。タクティカルトマホークを抜き放ち、その片手剣を弾いて左手で拳を叩き込む。碌なダメージにはならないが、怯ませられれば御の字だ。

蹴り、体当たりと絶え間なく攻撃を仕掛けると、奴は俺に組み付いてきた。なら、地獄までお供願おうか。

『リヨーハ、フォールンに絡まれて動けねえ！ お前らでリシヤラを仕留めろ！』

プレストークスイッチも押せない。だから、俺には叫ぶしか残されていなかった。全ての希望を託して。

「撃て、シノン！」

それだけ言い残し、俺はフォールンごと岩場から転がり落ちた。骨折とか大ダメージを受ける高さじゃない。あとは、運に身を任せよう。

響き渡る銃声を聴いて、満たされた気持ちだ。嗚呼、いい銃声だよ。

5層―13 死闘の果てに

俺の半身を衝撃が襲う。横向きに落下したせいも、左腕を骨折してしまった。痛みがデバフが起きるけど、そんなの知るか。トマホークを握ってるのは右手だ。

「くたばれ！」

フォールンの脳天をかち割るべく、右手のトマホークを振り下ろす。視界が霞んでいようが、こんな至近距離なら関係ねえ。

ここで殺す。そうしなければ、俺たちが死ぬからな。

でも、フォールンはそれを腕で防ぎやがった。柄の部分は刃がないから、腕で防げば痛いだけで済む。

こうなりやしようながない。奴を蹴飛ばして距離を取って身を起さす。

フォールンは変な色の液体付きナイフを空ぶって悔しそうにしてた。おい、今逃げなきゃそれ刺してただろ？ どう見ても毒付きです本当に以下略。

「解毒剤ねえんだぞクソ野郎が！」

「死ぬがいい！ 我々の使命を邪魔はさせん！」

何を企んでるかは知らないが、邪魔させてもらうぜ。

トマホークを振りまわし、フォールンのナイフは左腕を使って上手くいわず。刃に当たらぬよう、手首を弾くのってヒヤヒヤするな。ミスったら切られるんだから。

「死ぬ！」

トマホークを引く。フォールンは俺が振り下ろしてくると読んだだろう。突進の構えを見せた。事実、地面を踏みしめて一気に突っ込んできやがった。

「貫った！」

「バカが！」

誰がトマホークを使うと言った？ 代わりに前蹴りを奴の腹にぶち込んでやると、体をくの字に折って後ろへ飛んでいった。

悪く思うなよ。俺はお上品な戦いをするような人間じゃないもん

でな。一騎討ちとか願い下げだ。

「やれ、シノン！」

今の上にいる相手は期待を裏切らない。きつと今回もそうだろう。これで何もなかったら、壮大なハツタリ芸だ。

でも、俺の肩越しに突き抜けていった衝撃波が教えてくれた。彼女は俺の期待を裏切らなかったという事実を。

血飛沫が飛び散り、フォールンは片膝をつく。俺は騎士じゃないし、勝利することこそが誇りだからな。数でも装備でも、相手の上を行って勝てればそれでいいのさ。

「じゃあな」

振り下ろしたトマホークが肩口へ深く突き刺さる。ガラスでも砕いたような感触に遅れて、フォールンはその場に倒れた。死体としてインタラクティブ出来るようになったし、間違いなく死んだようだ。

「助かったぜシノン」

「これで貸し借りなしよ」

「残念だな。膝枕してもらおうと思っただのに」

「あら、してあげてもいいわよ？ 2度と目覚めないというだけで」

「辛辣だなおい」

ははは、と苦笑いを浮かべ、俺は岩に身を寄せる。久しぶりに命の危険を味わって、今更腰が抜けやがった。三途の川を反復横跳びした気分だ。

でもこれって、ボスの情報を得るための前段階なんだよなあ。先が思いやられる。誰だか知らねーけど、ALS煽った奴マジで殺す。

「それに、ここだとSCAVが来るでしょう？」

いつの間にか隣にシノンが降りてきていた。しゃがみ込む俺に手を伸ばして、クールな笑顔が眩しい。

「なら、帰ってから」

「調子に乗らないで。ボス戦を生き残れたら、ご褒美くらい考えてあげるわ」

「はは、死ねねえなあ」

シノンの手を握ると、俺を引っ張り起こしてくれた。筋力がどうだ

のと考えるつもりはない。ただ、こうして手を握ってくれるだけでも嬉しい。

仮想世界の中、この体も何もが電子の海を漂う僅かなノイズに過ぎないというのに、どうしてこの手は暖かいんだろうな。

※

BEAR Operator “Rage”

「やれやれ、ようやく仕留めたか」

カイサラとかいうフォールンに押し倒された時はやばかった。もう少しで首をぶち抜かれる刹那、鬼の形相のコハルがソードスキルをぶちかまして助けてくれたのだ。

まあ、仕留める前に霞になって消えてしまったから、殺し損ねたけどな。

「それよりも秘鍵だ。まだあの人族が持っているといいのだが」

少なくとも、シノンが狙撃してからリシャラは放置されたままだ。それでも、フォールンどもは俺たちにかかりきりで死体を漁る余裕はなかったと思う。シノンが狙撃してたしな。

「秘鍵はちゃんと取り返せたぞ」

キズメルは目的を忘れておらず、リシャラの死体から目的のものを回収していた。カイサラとかいうフォールンに逃げられた時は焦ったが、鍵を奪われる前で良かった。

「レイジたちには助けられた。私1人では太刀打ちできなかつただろう。あのような武器を前にしては、剣は無力だからな」

「礼ならばシノンの方に言ってくれ。今日のMVPだ」

シノンはリョーハとこつちへ歩いてくる。なんだか2人とも近くないか？ 肩が当たってるぞ。なんかコハルが羨ましそうな目で見てるし。

「ちゃんと取り分残ってるでしょうね？」

「まだ漁ってないぞ。早く取り分取ってくれ」

俺は新建築で取り巻き3人倒してるし、そっちを漁ってやろう。少なくとも、損にはならないはずだ。

「ようやく、仲間の仇を討ってやれた。秘鍵も取り返せて、なんと礼を

言ったらいいものか」

「いいのさ。俺たちにも目的があつてやってるんだ」

「うん、これで一件落着だね！」

まだ脱出していないのに呑気なものだ。頭を撫で回してやろう。

「わわ、急にやめてよ！ みんな見てるから！」

「本当に仲がいいのだな」

そう言つて微笑むキズメルだが、どこか寂しそうに見えた。だから、空いたもう片方の手をキズメルの頭へと乗せ、包み込むように撫でてみる。

キズメルは背が高いとはいえ、それは女性の中での話だ。俺よりは若干低いし、撫でるのに苦労はしない。長身の女性もいいと思うぞ。

「ん……随分手慣れているのだな」

「まー、俺も色々あつたものでね。変なスキルが無駄に身についた」

猫を撫でているような気分だ。コハルがパン生地みたいに膨れ始めたので、こっちは頭でなく顎のあたりを撫でてやる。ゴロゴロ喉を鳴らしそうな、嬉しそうな表情が可愛いなおい。実家の猫を思い出す。

「レイジ、お楽しみのところ悪いが撤収しようぜ。さっさと戦利品を回収してから、な」

リョーハめ、いつだつていいところで邪魔しにきやがるんだから。とはいえ、そろそろ行かなければ。俺たちの目的は情報収集であつて、まだまだ前哨戦なのだから。

※

BEAR Operator “Ryoha”

戦利品は一旦ハイドアウトのスタツシュに格納し、再び3層の森の中。焚き火の前には変わらさずイエーガーが佇んでいて、俺たちの足音に気付くとその顔を上げた。

「リシヤラは始末したわ」

シノンの言葉に合わせて、俺はホルスターからゴールデントカレフを取り出す。横取りじゃないぞ。シノンがトカレフを手にすると発作を起こしちまうから預かつてるだけだ。

イエーガーはトカレフを手にする、僅かに頷いた。少しだけ胸の内がすくような気分がしたんだろうな。

「メカニックのコレクションになるだろうな。あのクズがいなくなれば、あのあたりも少し平和になるはずだ」

だが、とイエーガーは空を見上げる。そこにあるのは天へと延びる迷宮区で、その先にある100層を見つめているのだろう。

「この塔の果てを踏み越えた時、この争いに終止符が打たれるはずだ。傭兵、お前が求める5層の敵は強大だ。それでも戦うか？」

「当たり前だ。俺たちは止まらねえぞ」

シノンも頷く。そんな俺の目を見て、イエーガーは静かに笑った。諦めていたような目に、僅かに火を灯して。

「この塔を守るのはゴーレムだ。かつてこの地の工場地帯で作り出された防衛機構で、光を使って敵を探し、壁から攻撃してくるとい。防ぐのは論外。避けるんだ」

「任せろ。当たったら終わりなのは前からだ」

イエーガーの言い方からして、まるでレーザートラップの類だな。RPGは一応経験あるけど、トラップ複合型なんて聞いたことはない。

「奴の装甲は硬く、銃弾は通らん。だが、何かしらの隙間は必ずある。そこを高貫通力の弾丸で撃ち抜けば、必ず仕留められるだろう。奴の攻撃を止めることもできるかも知れん。傭兵、後はお前に任せた。これを持っていけ」

イエーガーは何かの鍵を俺へ渡すと、再び焚火に向き合った。これで話は終わりということだろうか。イエーガーの話はタブレットで録音していた。これで、レイジヤキリトたちに誤ることなく伝えられる。

そつと、左肩のワッペンに手を添える。BEARのオペレーターで、アトラスの一員。その肩書きの以前に、俺はリョーハとしてやることをやるだけだ。

「リョーハ」

シノンが俺の手を後ろから掴んでくる。なんだと言う俺は、きつと

冷めた目で振り向いただろうな。今は頭が冷めている。戦うためだけに研ぎ澄まされた刃のように。

懐かしいな。MMOトウデイライバルズにレイジと出場した時もこんな気分だったっけ。

「疲れてるんじゃない？」

「大丈夫だ。まだやらねえとならないこともあるしな」

そう言っただけでまた歩こうとする俺の手をシノンが引く。もう片方の手も俺の腰に回されて、捕まってしまった。

「死んだら許さないから。約束、守りなさいよ」

「……ああ、任せろ。こんなところで終わるつもりはねえからな」

そうだ。あのバカどもを死なせねえためにも、俺は生き残らないとな。このままPK野郎どもの思う壺も面白くねえ。どんでん返しをかましてこそ、楽しいってもんだらう。

5層―14 塔へ！

BEAR Operator “Rage”
Aincclad “Hide out”

バンカードアを押し開けて白熱電球の灯るハイドアウトに足を踏み入れると、見慣れない顔が増えていた。ただでさえ狭いのに、更に狭くなったな。密です。

「ブラック！ こりやどういうことだ？」

本部を任せたブラックバーンを呼ぶと、インテリジェンスセンターの椅子から奴が立ち上がる。どうやら、しっかりと本部機能は維持してくれていたらしいな。

「キリトとディアベルさんが有志を募ってきたらしい。DKBとかALS、アトラス一線級部隊に中小パーティの統合任務部隊つてわけだ」

なるほど、それでこの人数つてわけか。フルレイドには及ばないが、十分な人数がいる。見知った顔もいくつあった。

歩み寄ってきたのはDKBのサブリーダーで、ハフナーとか言う人だったような。その後ろにはシヴァアタもいる。重鎮のお出まじつてわけか。

「よう、デアデビルさんよ。ディアベルさんの頼みだから来たが、今回の件に嘘はないんだな？」

ああ、つまりはアトラスでフラッグを独り占めしようとか、その他何かの陰謀を疑ってるわけか。

自分の仲間を連れているんだ。危ない橋を渡らせるわけにはいかないのだろう。いいリーダーだ。

「もちろんだ。アトラスとしてもギルドフラッグを手に入れることに興味はない。攻略組の分裂を防ぐ、それだけが目的であり、俺たちの役割だと考えてる」

「第3勢力だから、か？」

「そんなところさ。余所者の俺らだからこそ、争いの外から立ち回れるってわけ」

「全く、お前もブラツキーもめちやくちややつてくれるな」

そういう性分なもので、と軽口を叩きながら拳を打ち合わせる。ハフナーにせよシヴァタにせよ、割と理性的なんだよな。あ、シヴァタはリーテンのためか。

「とうか、サブリーダー直々に来てよかつたのか？」

下手をすればギルドの裏切り者だ。最悪、追放もあり得るだろう。その時はアトラスに引き抜かせてもらっただけだがな。

「俺も不本意だが、このゲームをクリアするのにALSとDKB……あとはアトラスも必要だ。リンドさんを裏切る事になっても、攻略を待ってるプレイヤーを裏切るわけにはいかねえ」

本当、ちゃんと目的を見失わずにいる人がいるというのに、どうして対立は続くんだか。煽動連中を粛清できれば楽なだけだな。

「ああ、あなたがレイジさんでしたか」

振り向いてみると、口髭をわずかばかり生やしたダンディな男がいた。確か、ALSの班長クラスの人じゃなかったか？ 会議で遠目に見ただけで、名前はよく知らんけど。

「ええ、そうです」

「ALSリクルート班班長、オコタンです」

「よろしくお願いします。そっちも重役を出してくるとは」

「今回ばかりはALSの落ち度です。一部の強硬派が不安を煽った結果の暴走です」

「キバさんも苦労してるでしょうよ。下手に抑え込めばギルドが真っ二つでしようし」

ぶつちやけ、キバオウの困り顔も見みたい気がする。尻拭いするんだから、今度会ったら奢ってもらうぜ。

「全く、1層の時も無茶苦茶だったが、5層へ来て磨きがかかったか？」

このバリトンボイスはエギルか。1層で怨念マリモ乱射事件の後、キバオウを諭していたプレイヤーだ。今は商人目指してるんだっけ。

この色黒の肌に禿頭、両手斧という組み合わせはかなりの威圧感を放つが、気さくない人なんだよな。あと、ちよつとUS E C 装備で

写真を撮らせて欲しい。絶対似合うだろうからな。

「キリトと俺で化学反応が起きたのさ。宇宙だって生み出せる」

「ビッグバンを起こしてどうする。アインクラッドが吹っ飛ぶぜ」

そりゃ困るな、と肩をすくめて笑う。

「ねえ！ ボクを忘れないでよ！」

声の主はエギルの後ろでぴよこぴよこ跳ねていた。紫の髪を振り乱す小柄な少女は、エルフクエストの最中に出会った凄腕剣士だ。

「よう、ユウキも来てくれたのか」

「当たり前だよ！ ボスなんてささつと倒してみせるからね！」

「よしよし、その心意気だ」

ちようどいい高さに頭があるものだから、ついつい撫でたくなってしまう。撫でてすぐは心地良さそうにするのだが、すぐに我に帰って怒り出す。

「もう、子供扱いしないでよ！」

「いい高さに頭があるのが悪い」

まあ、怒ってもぴよこぴよこ跳ねながら胸を叩いてくるくらいだ。ぶつちやけ可愛らしい。

おっと、コハルが服の裾を引っ張ってきたぞ。こっちも撫でてやらねば。

「おいおい、俺を忘れないでくれよ！」

振り向くと、赤っぽい髪の侍がいた。おっと、お前さんもいたのか。「久しぶりだな、クライン。マジで来るとは思わなかった」

「どーいうことだよ。そんなにチキンじゃねえし、大舞台にこなきや男が廃るぜ！」

「だと思った。先走りすぎてくたばるなよ？」

「お前こそな！」

拳を打ち合わせると、ゴンと鈍い音が響き渡る。クラインはなんだかんだお人好しで信頼も出来る相手だ。出来れば死なせたくないな。

「よし、総員傾注！」

その一声で全員が俺に目を向ける。ああ、こういうの夢だったよ

な。何万とかいう単位じゃないけど、こういう軍団長つて憧れたなあ。

「これより、5層ボス攻略を開始する。偵察部隊の報告によればA L S主力は2時間後、日の出とともに出発の模様。俺たちはそれに先んじて迷宮区へ突入し、ボスを討伐。後は合同パーティに何食わぬ顔で参加して、攻略組分裂を阻止する」

いよいよ始まる。肩が重く、口が乾くような感じがした。ちゃんと声が出るのは、コハルが最前列で俺を見ていてくれるからだろう。

その手を握りたいが、今は我慢しよう。俺の力で切り抜けなければ。

「総指揮はディアベルさん、お願いします」

青髪の騎士に目を向けるが、彼は首を横に振る。どうしてだ。彼の下であればみんな纏まるんだぞ。それを自覚しているだろうに。

「確かにオレがみんなを集めてきた。でも、ずっと前線を離れていたオレよりも、攻略に参加して実力を示してきたレイジの方が適任だよ」

アトラスの連中がそうだと声を上げ、S A Oプレイヤーは俺とディアベルさんを交互に見る。キリトは……クソが、お前がやれって目をしやがって。お前にもしっかり役職をくれてやる。

「なら、総指揮兼P M C側指揮は俺。S A O側はディアベルさんが指揮してください。キリト、お前は俺の直属で参謀をやってもらうぞ」
「え、マジか……」

逃げようとしたキリトの背中をアスナが突き飛ばし、列外へ押し出す。グツジョブ。逃がさないぞこの野郎。きっちり働け。

「ボスクエストはある程度攻略し、アルゴが情報を精査してくれている。そうだな？」

「ああ、レー坊たちのおかげで出揃ったヨ。迷宮区もすぐに突破できるナ」

「なら、道案内を頼む。P M Cはナイトビジョンを用意しろ。夜陰に乗じて進軍するから、フィールドでは俺たちが前衛だ」

攻略まで見つかつてはならない。見つかったらその場で揉め事に

なること間違いなしだ。それを避けるためにも、危険だが夜に進むしかない。

だからこそ、哨戒を俺たちPMCが担う必要があるわけだ。

※

「メイベル、そっちはどうだ?」

『何も見えない。タチャンカのサーマルスコープにも反応なし』

ブラックバーンからの報告が返ってくる。休んでもいいと言ったのに、このまま泣き寝入りは嫌だとメイベル全員が参加を志願してきたのだ。

死にかけてマニエクとアイザックに真っ直ぐな目で言われて仕舞えば、NOを突きつけるなんて出来ないしな。

「了解、後続は前進するぞ」

緑の世界を俺は歩む。先に進むメイベルが進路の安全を確保し、SAO隊はそれに続いて進む。流石にナイトビジョンをSAO組の分まで揃えるのは無理だった。

「でも、あんまりよく見えないね」

コハルは特別に俺の予備を渡したが、思っていたのと違うようだ。

「安物の2世代だしな。3世代のはもっと綺麗に見えるぞ」

俺の単眼式ナイトビジョン”PVS-14”は3世代だからくつきり見えるものの、視野が狭い。それでも、くつきり見えることを優先したわけだ。解像度は索敵に直結するからな。

『こちらメイベル、目標到達。今のところ周囲はクリア。ALS連中はお眠の時間らしいな』

「上出来だ」

先行するブラックバーンたちが迷宮区入口付近を確保してくれた。よしよし、ALSに出し抜かれたわけじゃなくてよかった。

1分遅れて合流すると、散らばって警戒する彼らが浮かび上がって見える。

タチャンカは相変わらずマスカヘルメットを被っており、ナイトビジョンが装着できない。だから、銃の方にサーマルスコープを搭載していた。

お前、そこまでしてマスクヘルメット被りたいのか？

「動きは？」

「俺たち以外誰も来ていない。しっかり寝て、背を伸ばしたいらしいな」

「俺ももう少し欲しいんだけどな」

軽口はその辺にしておいて、壁際にアルゴを呼ぶ。

5層の迷宮区入口は迷路になっており、そこを突破してようやく塔の中、迷宮区本体に入れる仕様だと言う。でも、アルゴはそれをショートカットする術を知っているらしい。

「レー坊、ここ照らせるか？ あと、リヨー坊はあの鍵出してヨ」

「おっと、ここで出番か」

リヨーハは鍵を取り出す。なんかイエーガーおじじがくれたんだっけ。

どこか鍵穴があるのだろうか。俺はナイトビジョンを外して、銃のライトで壁を照らす。すると、そこには小さな鍵穴があった。分かりづらいなこれ。

早速リヨーハが鍵を差し込むと、壁の一部が迫り出してきて、いい感じの足場になった。要は、クライミングしろと言うことらしい。

「アルゴさん、これを登るの？」

「そうだヨ。コーちゃんは高いところが苦手カナ？」

「苦手というより、暗くて怖いというか……」

「そんなあなたにこれ一つ」

俺は銃を上へ向ける。フラッシュライトが壁を照らし、天辺までを浮かび上がらせた。遠くからでも見られてしまうだろうが、攻略前に転落死されるよりは絶対がいい。

「では、某から登りますぞ。レディファーストとは暗殺を恐れた男が女を囮に使ったのが発祥という。やはり大和男として、そのような真似はできませんな」

いい心がけだが、それなら名前をロシア語じゃなくて、日本語由来で付けるべきだったな。

「遠慮なく行け。お前の重装甲ならまあなんとかなるだろ」

レッカーが呆れ気味に言い放つ。タチヤンカの表情はわからないが、嬉々として登っているのはよくわかった。バカと煙はなんとやら、だ。

「アレが噂の怨念マリモですか？」

「ええ、そっちのリーダーに乱射したタルコフの悪夢ですよ」

オコタンは奴の姿に苦笑いを浮かべる。リーテンのフルプレートアーマーと違って、奴のずんぐりむっくりした装備はどこか不気味さを醸し出している。

あいつ、絶対重量オーバーのはずなのに動きが早いなあ。

「メイベル、先に上がれ。その後はSAO隊、最後にリンデンが上がる」

5層―15 戦いの前に

迷宮区はゴーレムだらけだったが、人より少しデカイくらいのものだ。ここではSAO組が前衛を担当し、次々に雑魚を始末してくれた。

頭にある紋章が弱点で、雑魚クラスなら剣でも届く。だから、俺たちPMCは弾薬を温存させてもらう形になった。

「流石にずつと前衛はストレスがな」

「俺だって嫌さ。むしろ、フィールドでずつと前衛やれただけでも凄いいと思うぜ」

そういうキリトだが、ボス戦になったらお前にもバリバリ前に出てもらうからな。

「慣れてんだよ。いきなりスナイパーに頭抜かれただけでも幸せなもんさ」

「シノンみたいなのがあちこちいるのか」

「ああ、シノンには何度も頭抜かれたよ」

なにが起きたかを理解することもできず、倒れて視界がブラックアウトしていく。あの擬似的な死を何度も味わった。

今度は本当に死ぬことになる。でも、怖いとは思えなかった。何度も擬似的に死んで来たから、慣れてしまったのだろう。また、あんな風に視界が霞んで倒れて、そして何も見えなくなるのだ。

あとは眠ったまま。そうなれば俺の魂は何処へ還っていくのだろう。

そんな考え事をしていくうちにボス部屋前の安全地帯に着いた。適当なところにしゃがみ込み、腹拵えに飯を食う。エネルギー切れで餓死したら死んでも死にきれないからな。

「みなさん、よかつたらどうぞー！」

そんな声に顔をあげると、アスナがロールケーキを配っていた。そういうや、俺がチェックしていた店の一つにロールケーキが美味しいところがあったな。

コハルとシノンも配るのを手伝っており、貰った者はその甘味に歓

喜の声を漏らす。全く、羨ましいものだ。

「やった！ このロールケーキ高いんだよね！ でも美味しいから、金欠覚悟で食べに行っちゃおうよ！」

「もう、ちゃんどご飯も食べなきゃダメだよ？」

そんなコハルとユウキのやり取りに思わず笑みが溢れる。お陰でレーシヨンの袋を開けるつもりが、手が止まってしまったよ。

「レイジ」

再びレーシヨンの袋を破ろうとしたら、目の前にコハルが立った。これはつまり、俺の分もあるのか？

「これ、食べたかったでしょ？」

「おう、頂くよ」

コハルが差し出す皿を受け取ると、彼女はそのまま俺の隣へ座った。ここが特等席だと言わんばかりに。シヴァタとリーテンの真似でもしたか？

ロールケーキを齧り、息を一つ。周りに目を向ければ、仲間同士で談笑しているのが殆どだ。悲壮感なんてどこにもない。やる気も実力も十分というわけか。

ここまで妨害はなし。少なくとも、モルテ共は俺たちの動きを察知できていないか追いつけていないのだろう。油断はできないが、前だけ見ていられるなら楽な話だ。

「レイジ、やっぱり不安？」

コハルは心配そうに俺の顔を覗き込む。やめてくれ、そんなに近くで見られたら不整脈が起きるじゃないか。

「いつだって不安さ。キリトとかディアベルさんに押し付けるはずの総大将にされちゃって、また仲間の命を背負ってるんだから」

自嘲的に笑いつつ、マガジンへ弾薬を込めていく。とっておきの60連マガジンは継戦能力こそ高いが、弾込めはバカみたい遅いのが難点だ。

そんな俺の手にコハルが手を重ねる。作業の手は止まるが、弾込めなんかよりも大事なことだ。

「1人で抱え込まないで。私がいるから」

「パートナーだから、だな」

「うん、そうだよ。どうしたらレイジの不安は消せる?」

「……背中を頼む」

絞り出すような一言だったが、コハルは微笑む。最も無防備になる背中を預けるのは信頼の証。それは彼女にも伝わっただろう。

「わかった。私に任せて」

コハルは笑顔を見せてくれる。この笑顔に何度救われたことだろうか。この優しさがバフのように俺を強くしてくれることだろう。

誰かの命を背負う重さに潰されそうになって、その度に助けられてきた。今回も、きつと守ってくれるだろう。

「今度はキバオウの奢りでスイーツ食い倒れに行こうぜ」

「領収書もらっておかないとね」

はは、言うようになったじゃないか。弱気だった少女は何処へやら、頼もしい相棒になったものだ。

「そうだな。じゃ、行くとしよう」

そう静かに告げて立ち上がると、攻略隊全員が立ち上がる。まるで將軍にでもなった気分だ。悪くないな。

「今回は区切りのボスだけあって強力だ。範囲攻撃こそないけど一発が重い。受けるくらいなら回避に徹してくれ」

キリトがボスについて説明する。これは裏が取れた情報で、もう伝達はしたが念押しだ。この情報力こそがベータテスターの強みであり、果たすべき役割だろう。

着いてきたアルゴも追加情報はないようで、ニヤニヤと笑いながら頷くだけだ。

「よし、前にも言ったかな。みんな、生き残ろうぜ!」

ディアベルが剣を掲げると、ほとんどのプレイヤーがおうと一言、それぞれの武器を高く掲げる。1層の頃から攻略組として走ってる奴からの信頼は桁違いだからな。

行こう。そう思って振り向くと、ディアベルに肩を掴まれた。彼が顎をしゃくると、その先にはPMC連中やシヴァタにリーテン、キリトとアスナ、ユウキ、エギル、クライン……それと、コハルが俺に目

を向けて、言葉を待っている。

全部ディアベルに押し付けるつもりだったのに、どうして俺がこのポジションにいるんだろうな。

「さっさと終わらせて、定刻通りパーティに参加するぞ。ALSの奢りで、好き放題飲み食いしてやれ！」

巻き起こるのは笑いで、オコタンをはじめとしたALSのプレイヤーは苦笑いを浮かべる。リョーハは俺の背中を叩くと、いつもみたいにニヤニヤと笑っていた。

「お前らしいな」

「堅苦しいのは苦手だ。少しくらいふざけた方がいいだろ」

「程々にしてやれ。ALSの奴らが今から支払いに頭を悩ませることになる」

確かにそうだな。余計な頭痛の種を増やすこともないか……つて、火種は奴らじゃねえか。ただの自業自得だろ。

「おしゃべりもこの辺にしよう」

ボス部屋の扉に手を当てると、コハルが手を重ねてきた。少しだけ照れくさいが、それだけ心強い。踏み出す勇気を貰えて、背負う責任を一緒に負ってもらって、俺はようやく立っていられる。

きつとこの先に、青髪のナイトが旗を翻して敵へ立ち向かい、仲間を鼓舞する英雄譚を夢見ていたのかもしれないな。

その場に俺が、俺たちPMCがいなかったとしても。

5層―16 混迷の戦場

突入した俺たちは愕然とした。中には何もいなくて、ただ虚空が広がるのみだったからだ。ライトを使って照らしても、壁や床に幾何学模様が描かれているだけで何も無い。

「おい、ボスってどこにいるんだ？ モグラ叩きなんて聞いてねーぞ」
リヨーハは軽口を叩くものの、その顔は笑っていない。いつの間にか俺とリヨーハで背中合わせになって辺りを警戒する。

その間にもリーテンとアルゴが前に出て、周辺を確認していた。
「ボスがまだポップしてないのか……？」

キリトも警戒を強める。まさにその時、床の様子が何か光ったように見えた。

ぞわりと寒気が背中を伝う。この手のものが何を意味するのか、FPSとかRPGとか関係なしに思い浮かぶだろう。これはトラップだ！

「下がれ、罠だ！」

先にキリトが叫び、俺はAKを構える。途端に周辺からアラームが鳴り響き、道中にいたようなゴーレムがスポーンした。まずは前菜か。

「うおっ、壁からなんか出て来やがった！」

クラインが叫んで飛び退くと、その先から拳が伸びて来た。ロケットパンチとか聞いてないぞ！ いや、ゴムゴムか!?

ふざけやがって、この部屋そのものがボスの体ってことかよ！

「クソが、躲せ！ タチヤンカ、お前の方に行ったぞ！」

「スーカアアアアアアア！」

タチヤンカの逃げ足では逃げきれない。ホーミングしてくる拳に、果たしてマスカヘルメットが耐えられるのか。

あいつ死んだ、誰もがそう思った。それを覆したのはクロームメタルの甲冑だった。

タチヤンカと拳の間に割り込んだリーテンは盾を構え、重い一撃を受け止める。ノックバックで後退り、鈍い金属音がフロアにこだます

るが、大したダメージは入っていないかった。

「助かりましたぞ！」

「早く下がって！」

「いや、ここは仕返しあるのみ。肩越しに撃ちますぞ！」

現れたボス、ゴーレムの頭部へタチャンカが怒りの弾幕を放つ。硬い石に弾かれて鈍い音が響くが、それと合わせて弱点の紋章に当たって違う音がする。

どうやら効いたらしい。更には壁から伸びていたボスの腕も跳ね上がり、攻撃の手を止めた。

「イエーガーが言ってた、弱点撃てば止まるってこれか!？」

リヨーハの中で点と点が繋がったらしい。2層の牛野郎と同じだな。弱点部位へのダメージ蓄積で攻撃キャンセル。いいことを知った。

「だが取り巻きがウザすぎる！ 同時対処はキツイぞ！」

ディアベルに目を向けるが、首を横に振るばかりだ。ただでさえ少ないリソースを本体と取り巻きに分配せねばならない以上、かなりの不利を強いられるのは当然か。

その時、タンクの集団から悲鳴が上がった。よく見れば壁から伸びてきたボスの手が片手に1人ずつ掴んでいるではないか。拘束攻撃持ちか！

「クソが！ アトラス、ボスの弱点に火力を集中しろ！ 取り巻きは捨ておけ、タンクの救出が最優先だ！」

「ふざけやがって！ 足元がトラップだらけで、まともに動けやしねえ！」

マニエクはそう文句を言いながらも、足元に走る光の線を飛び越えてボスの頭目掛けて突進すると、至近距離からご自慢のショットガンMP―155をぶっ放す。

近代化カスタムを施された、アルミシルバーのショットガンが吐き出す一粒弾はAP―20。強力な貫通力と威力を誇るそれがボスの弱点を捉え、怯ませた。

おかげでボスはタンク2名を手放し、マニエクが代わりにヘイトを

受け持つ。

奴は防御を捨てており、軽量ながらも防御力の低いPACAソフトアーマーしか着ていない。そこにS J 1だのS J 6、ついでにアドレナリンなどなど、興奮剤でドーピングしまくっているから、PMCにあるまじき瞬足でボスを翻弄してみせた。

「助かった。恩に着る！」

「なら下がって回復しな！ いつまでもは逃げれないからよ！」

「マニエク、死んだら承知しねえからな！」

「心配してくれて嬉しいぞアイザック！」

「てめーが死んだら、貸した金返って来ねえだろ！」

軽口を叩くならまだ余裕がありそうだな。だがマニエクよ、貴様が足元の光を踏んだせいで、またロケットパンチが飛んできているぞ。あとで一杯奢れクソ野郎が。

「アルゴさん、壁のレバーはベータの時になかった！」

「あ……迷宮区やダンジョンにあんなトラップがあったナ！」

どんなトラップだ。ディアベルが何に気付いたのかは分からないが、今の俺は指揮で一杯一杯だ。参謀に据えたキリトも前に出て、ボスの攻撃を捌くので手一杯。

クソが、せめて取り巻きからでも潰さないと。

「レイジ、トラップを利用する！ 別の場所が続く落とし穴だ、ここに取り卷きを誘い込む！」

「やってくださいー！」

ディアベルがレバーを引くと、フロアにアラームが鳴り響いた。それと同時に聞こえる女性の声は何と言っているのかは分からない。

ただ、そのロシア語の響きはやけに聞き覚えがある。少なくとも、ここにいるPMC全員は射撃をやめて辺りを忙しなく見回す。

プリマーニエ、ペルサナオと聞こえた。俺たちは知っている。この放送の意味を。ロシア語そのものの意味ではなく、この放送が鳴り響くギミックの意味だ。

「ヤバい、総員警戒！ ゴーレムは捨ておけ！」

「そこだ、あの床だ！」

リョーハが指差す先で、床の一部がスロープ状に開いていく。このギミック、この放送。まるでラボだ。そうであれば、必ず奴らは来る。

「Contact!」

「Enemy spotted!」

SCAVとは違う、英語のボイスラインと複数の足音。最悪の予想だっていつも当たるんだな。

「レイダーが出やがった! アトラス総員、ボスと取り巻きはSAO隊に任せてレイダーをやれ! 厄介だ!」

レイダーを知らないコハルだけは困惑していた。どう見てもSCAVなんかより装備のいいNPCが現れて、俺たちが焦っているのだから、マズい相手だと察したのだろうか。

「コハル、俺の後ろに! 奴らの弾は痛いぞ!」

「でも、ボスは!?」

「あっちに任せる! キリト! 俺たちがレイダーを始末するまで、ボス軍団を押しえ込め!」

「もうやってる!」

キリトとアスナはボスや取り巻きを相手に奮戦しているが、いかにせんボスの弱点に攻撃が届いていない。早いところレイダーを黙らせないと、まずい事になりそうだ。

そんな中で、シノンの狙撃が1人仕留めた。MP5持ちということ、中の弾はルガーCCIかRIPだろう。アーマーは抜けないが、肉体へのダメージが高い弾だ。厄介なのをやってくれたな。

アレを足に4〜5発ももらえば体力全損だ。ダウンじゃなくて全損による死亡だから助けようがない。最も厄介な相手と言えよう。

俺も負けじとレイダーへ射撃を始めるが、フラッシュライトの目潰しを喰らって狙いが定まらない。

そんな中で1発もらってしまった。一撃で左腕を破壊され、重度出血のアイコンまで現れた。

「ブリーチャー! 痛えなクソが!」

かなり体力を持っていかれた。1発腕に貫っただけで100近いダメージを貰うとは、最悪の一言に尽きる。銃声はM4っぽいし、

ウォーメイジ積んでやがるな？

「滅べ西側のP M C崩れよ！ R P Kの裁きを受けるが良い！ 祖国よ、ヴォトカよ、同志カラシニコフよ！ 我に力を与え給え！」

タチャンカの弾幕がレイダーを襲い、被弾した個体は後退を開始する。なんでもいいけどタチャンカよ、貴様の祖国はソビエトじゃなくて日本だろうが。ただの共産趣味者が何を言うか。しかも、ここに来る時大和男とか名乗ったの忘れてねえからな？

そんなことよりレイダーだ。アイザックがM I Aをタチャンカの肩越しに構えて、背中を向ける瞬間を虎視眈々と狙っていた。

レイダーの耐久値はP M Cより多いが、手負の個体だ。アイザックがレイダーの胸部に大口径弾を叩き込むと、奴はもんどり打ってその場に倒れた。

「やったぞ、1人仕留めた！」

「後はどこ……」

カキン、と甲高い金属音が響く。戦いの喧騒の中で、それはやけに響いていた。

何が起きた。そう問うよりも先にタチャンカの体がぐらりと揺れ、うつ伏せに倒れ伏してしまう。

「やられた、タチャンカが頭抜かれたぞ！」

アイザックが叫ぶ。よく見ると、最後のレイダーはスロープで伏せて狙撃している。武器はS R—25か。

レイダーのS R—25にはM 80かM 993のうち、どちらかの弾薬が使われる。そのどちらも、マスカヘルメットを貫く可能性はある。特に、M 993ならば最も堅牢なバイザーさえ貫く。

「タチャンカを連れて下がれ！ マニエク、フラッシュバンを投げろ！」

すかさずブラックバーンたちがタチャンカの救出にあたるが、その動きはどこか違和感がある。

当然か。タチャンカすら防げない弾を使う奴が相手なのだ。覚悟していると口で言っても、実際に死ぬのは怖かろう。

「リョーハ、奴を仕留める！」

「援護しな、お前のぶっ壊れた腕じゃ無理だ！」

コハルに止血して貰ったおかげで、出血は治った。でも、腕を破壊されたせいで震えが治まらない。正確に狙うなんて無理だ。

「くそ、死ぬなよー」

俺にできるのは弾幕でレイダーを怯ませること。あわよくばどこかに当たって逃げてくれればいい。

でもそんな願いとは裏腹に、レイダーの銃撃が俺の胸を貫いた。クラス4のM1プレートキャリアを貫かれ、左腕からの伝播ダメージで若干減っていた胸部耐久値が削り切られる。

視界が霞み、脚の力が抜けた。俺は仰向けに倒れて銃を取り落とし、コハルの悲鳴でさえも遠くに聞こえた。

「レイジー！」

バカ、集中しろ。そんな叫びも届かず、レイダーはさらにリョーハの脚を、胸を撃ち抜く。奴もやられたようで、その場に崩れ落ち、正座するかのような姿勢で止まってしまった。

瞬く間に俺たちがやられて、ブラックバーンたちが浮き足立っている。幸いなのは、レイダーはトドメを刺すより戦えるPMCを優先して狙っていることだ。

「シノン……」

苦しそうにリョーハが呻く。俺はそばにコハルがいて、なんとか治療してくれているが奴は1人。助けてくれ、そう言うと思っていた。

「俺を、盾にしろ」

5層―17 コラテラル・ダメージ

「俺を、盾にしろ」

野郎、今なんて言いやがった。

シノン は目を見開き、その首を横に振る。当然だろう。もしシノンを狙ってレイダーが撃ってきたとして、それはリヨーハの体が防ぐ。それは、彼の死を意味することだろう。

嗚呼、奴は覚悟を決めた漢の顔をしてやがる。逝くな、そう言うのは覚悟を決めたリヨーハへの侮辱と思える。きつと、戦記物ならばそうだったろうな。

「ダメよ、早く伏せなさい！」

「……このままじゃみんな死ぬ。わかってるだろ？」

既にゴーレムとやりあうS A O隊は手一杯で、タチャンカはアイザックから手当てを受けている最中。ブラックバースとレッカーは中途半端な距離にいたせいで、レイダーとゴーレムの攻撃で板挟み。マニエクはボス本体とやり合っている。

崩壊の足音が聞こえる。リヨーハは自分の命すら賭け金にして、この場をひっくり返すつもりか。少し前の俺と同じだ。

奴も天秤にかけたのだ。自分の命と、全体を。1層の時の俺と同じだ。

やめろ、そう叫びたかった。それでも、奴は止めてくれるなど俺を睨む。指揮官としての責務を果たせ。情を捨てて理に従え、より多くの人を助けるために。そう訴えている。

目を逸らした。これ以上見ていられなかったから。せめて、早くこの地獄を終わらせてくれ。

「シノン、やれ。そのバカの望みを叶えろ」

シノンが驚いた顔をするのも当然だろう。下手をすればリヨーハは死ぬ。相棒に死ねと言うのと同じだ。それなのに、俺は命じた。

奴の口が動く。聞き取れないが、動きで何言ってるのかは分かった。いつもみたいにクソ野郎とか、死ねクズとか罵倒すりゃいいものを。

なんで、ありがとうなんだよ。

U S E C O p e r a t o r „ S i n o n “

しやがみ込むリョーハは確かに最高の盾だった。肩に銃を乗せれば安定するし、顔を半分晒すだけで、あとはすつぽりと彼の体が隠してくれる。

でも、それは私が受けるダメージをリョーハに肩代わりさせるということ。あとどれだけ耐えられるのかも分からない。もしかすれば、死んでしまうかもしれないのに。

「この馬鹿」

覚悟は決まった。リョーハの前でしやがみ、その肩へ銃を乗せる。まるで抱きついていているようね。このスケベはやりそうだけど、今はそんな余裕もない。

「一撃で決めろ。生き残ってくれ」

「一生守るって、言ったくせに」

「……許せ」

目を閉じて、掠れた声で答える。そんな声は聞きたくない。いつもみたいに喧しく、ゲラゲラと笑ってお馬鹿なことを言っ、私を笑わせようとしては滑って首を傾げる……そんなリョーハを見ていたいの。

スコープの中にリョーハはいない。まるで、この少し先の未来みたい。

「私以外に殺されたら、絶対に許さないから」

「ならば外すな。信じてるから」

言われなくても。逆V字型のレティクルがレイダーの頭に重なる。ヘルメットを被っているから少し下。そこなら弾かれない。

S N B弾ならばどんなヘルメットも貫通できる。いけると踏んだ。心を氷に。悲しむのも嘆くのも後回しにして、私はただ敵を狙う。いつも襲ってくる罪悪感も、今はどこか遠くにいた。

きつと、リョーハが盾になってくれているからだ。私の前でいつも、罪を代わりに背負うように戦ってくれていた。そんな思いが、い

つも支えてくれていたのね。

「いける」

先にレイダーが撃った。リヨーハは呻くけど、その体は動かない。まるで聳え立つ城砦のように、私のことを守ってくれた。

ごめんなさい、私は後ろで見ていることしかできない。せめて、この1発は必ず当てるから。

トリガーの遊びを引き絞り、指先に掛かる抵抗を感じる。撃ちたくない、そう言う私がまだどこかにいるのかも。

でも、引かなければならない。相手は人の形だけどNPC。ならば撃てるじゃない。引かなければ、大切な人が死んでしまうのよ。

スコープの揺れが止まって、レイダーの頭に狙いを合わせる。対するレイダーは、まだ私を狙っていた。

まるで西部劇の早撃ち勝負。レイダーが撃つ前に私がトリガーを引く。ガク引きしないように慎重に、それでいて大胆に。

甲高い銃声が鳴り響いた。7・62×54R弾、特にSVDSの独特な銃声がフロアを支配する。戦いの喧騒やプレイヤーたちの怒号よりも大きく、誰かの死を告げる。

その死はレイダーに降り注いだ。赤い飛沫がスコープを埋め尽くし、のけ反り倒れる姿がやけにゆっくりと見える。

たった一撃、それで頭を貫いた。同時に視界が揺らぐ。

リヨーハが倒れ込んだせいで、銃が揺れた。まるで抱きつくかのよう倒れ込むけれども、死体として漁ることはできない。出血のフェクトはあるけれども、まだ生きていた。

「……すぐ、助けてあげるわ。私の死神さん」

SVDSを背中に担ぎ、まずはリヨーハの出血部位に包帯を巻く。あとは壁際に運んで壊死部位を治して、やることが盛り沢山ね。

「レイジ、私は下がるわ!」

BEAR Operator “Rage”

「下がれ! リヨーハは!?!」

「ギリギリ生きてるわ！」

「なら、リョーハを頼む！ ディアベルさん！」

振り向いたディアベルは一つ頷く。これで取り巻きをどうにかする作戦とやらを実行に移せるだろう。

俺ももう少しで回復が終わる。少し手間取ったが、コハルに手伝わしてもらったおかげで予想より早く復帰できそうだ。アーマーがズタボロだから、無理は出来ないけども。

「ブラックバーン！ 状況知らせ！」

「不味い状況だぞ！ レッカー負傷、マニエクはギリギリ無傷。一回下がらせてくれ！」

「俺が代わる。タチャンカ、アイザック、動けるか!？」

「行けますぞ！」

「こつちもだ！」

使える戦力は4人。リョーハとシノンは下がって、ブラックバーンたちは疲弊している。このままではいずれミスが致命傷に繋がるだろう。

「臨時編成で行く。コハル、悪いがついてきてもらおうぞ」

「もちろん、一緒だからね」

コハルの微笑みに力が湧いてくる。彼女を死なせてなるものか。リーダーの身でありながら、俺はたった1人のために戦う。

それが戦う理由だから。誰にも邪魔などさせるものか。

「突撃しろ、ディアベルを援護する！」

ウラー！ そんな叫びがフロアに木霊する。頭に来ていたらしいタチャンカはすぐさまボスの額目掛けて弾幕を浴びせ、アイザックの精密射撃がダメ押しする。

ボスの攻撃がキャンセルされ、タンクにスイッチの余裕ができた。みんなHPバーがイエローゾーンに突っ込んでいたし、これで窮地を脱したことだろう。

「キリト、そっちの状況は!？」

「ディアベルのお陰で、なんとか余裕ができた！ アスナ、仕掛けるぞ！」

「了解！」

戦況は好転しつつあり。ディアベルが取り巻きの囿になつてくれたおかげで、取り巻きに割いていたリソースをボスに向けられるようになってきた。

あとは、取り巻きをどう始末するかだな。みんなでグレネードの雨降らせるか？

『レイジ、聞こえるか？』

ディアベルの声が聞こえる。無線を使っているのか。こんな喧騒の中じや叫んでも聞こえないだろうし、手間かけてもこうした方が確実だよな。

「ハツキリと。で、どうやって取り巻きを始末するんです？」

『……すまない。みんなのことを頼んだ』

「待て、何をするつもりだ！」

『レー坊、あのトラップは内側にしかレバーがないんだ！』

アルゴが答えを出した。ふざけるな。そんな事をさせるために、1層や今ここで命張ったんじやねえんだぞ！

「待て！」

視界の先ではゴーレムの群れが穴に飲まれていた。俺やリョーハ、タチャンカを倒したレイダーの死体を踏み潰し、きつとその先にはディアベルがいるのだろう。

やりようなんていくらでもある。誘い込んで、PMC全員でグレネードを放り込めばいいじゃないか。それが、どうしてこうなると言うんだ。

『君にはいつも背負わせてばかりだな』

「そう思うなら、さっさとこっちきて肩代わりしてくださいよ。肩が凝りすぎて痛え。腰痛まで追加されそうだ」

ディアベルの方に行きたいが、ボスがそうさせてはくれない。今は1人分の火力すらも惜しい状態だ。

それでも、駆け寄りたかった。誰一人欠けずにここを切り抜ける。それが俺の目標だっただろう。

『少しくらい、楽にしていくなよ』

「この野郎！」

重い音が響く。石が擦れる不快な音をComTac2が軽減しているはずなのに、やけに大きく響いて聞こえる。

最後の声は、聴こえ辛かったと言うのに。どうして、いつもこんな結末になるんだろうな。

両足の力が抜けて、膝をつく。頭の中は何もなく、虚空を漂うような感じがした。

「レイジ、立って！」

コハルの声さえも遠い。スイッチが切れたみたいだ。頭が急速に冷えていくのを感じる。

ALSもDKBも毎度毎度ふぎげやがって。どれだけアトラスに尻拭いさせてやがる。おかげで死人が出るぞ。あのジョーとか言うクソ野郎も何だ、何がオレ知ってるだ。ブチ殺しておけばよかった。それにディアベルめ、旗頭にされるってわかってきたんじゃねえか。何で真っ先にいなくなる。それは俺の役目だろう。

胸の内からはマグマのような何かが湧き上がり、口から噴き出そうとする。これは何だ、何が起きているんだ。

嗚呼、これが憤怒^{レイジ}だというのか？

「おいレイジ！　しっかりしろよ！　どうしちまったんだ!？」

「レイジ！　おい！」

「クライン、来るよ！」

クラインが、エギルが、ユウキが叫ぶ。余計な情報はどうでもいい。「おい、早く指示をよこせ！　ああもう、シノン、援護くれ！　ブラツクバーンは戦線復帰次第スイッチ、こつちを下がらせろ！」

リヨーハ、そんなに焦るな。

「レイジ、しっかりしろ！」

うるせえよキリト。さっさと前の岩野郎を殺しやがれ。

どうでもいい。ただ、どうしたらあのゴーレムを殺せる？　どう行くのが一番近い？

この怒りは、奴にぶつければいいのか？

ならば殺そう。全てを壊せば、全部終わるならば。

「アトラス全軍、弾薬再装填。これより統制射撃を行う」

5層―18 怒りのままに

「クソ、イカレたか？ いや、元からか！」

「動き回ってんだぞ、各個射撃でいいんじゃないのか!？」

嗚呼、煩い。勝手に祭り上げたのはお前らだろ。なら従いやがれ。さもなきやまとめて死ぬぞ。

「レイジ……」

コハルにはただ手を差し出し、言葉を制する。

「キリトの方に行ってやってくれ。人手がいる。確実にボスを止めてやるから、必ず仕留めてくれよ」

振り返らない。もしコハルの顔を見たら、この怒りが収まってしまいそうだから。今でなければ、俺は戦えない。そんな気さえしている。

「……死なないで」

「ああ」

コハルの足音を聞きながら、俺は思考を巡らせる。60秒後に統制射撃。それがいい頃合いか。

思考が加速する。目まぐるしく変わる状況に対応しようと、俺自身が適応しているのか。今ならば、ボスの攻撃さえも全て見えているような気がする。

「バラバラに撃つても効率が悪い。ならば一気に火力投射でスタンさせて、間伐入れずにアタツカーを突っ込ませる。異論ある奴は出てこい。俺に喧嘩売る実力あるならな」

「……何が命知らずだ。ただの悪魔^{デビル}じゃねーか。いいぜ、メイベル！ 再装填完了次第ボスを狙え！ レイジのタイミングに合わせろ！」

ブラックバーンの号令でメイベルは動く。それでいい。扇動PKのスパイがアトラスに入り込む余地がないのはひとえに俺やリョーハの影響力だ。

共に戦い、時に殺し合い、その実力を知っている。だからこそ、任せてくれる。最後は俺の決断一つで動く。だから、煽つても俺が一蹴すればそれまで。

行くと決めたなら、どこまでも行くだけだ。

「射撃用意！ キリト！」

「聞こえてたぜ！ こっちのアタッカーはいつでも行ける！」

「15秒後に行くぞ」

ボスの攻撃パターンももう見慣れた。次に最後の拳がすつ飛んできて、それをタンクが抑える。その瞬間、ボスの動きがわずかに止まるタイミングがある。

それは、鈍い金属音と共にやってきた。動いていたボスの額が僅かに止まり、いくつかのレーザーサイトがその紋章を捉えた。

「撃てー！」

たった一言。それだけで無数の銃声が響き、曳光弾が空間を切り裂く。その曳光弾の数倍の弾丸がボスの弱点へ殺到して火花を散らす。外れるのは想定内。そのための火力だ。これだけ撃てば数発は当たる。

いい感じに有効打が入った。ボスが怯んで攻撃が止まる。ならば次だ。

「やれ、キリト！ アトラスはリロード、次の統制射撃に備えろ！」

「タンク、スイツチだ！」

ソードスキルが放つ光、それはまるで流星のように降り注ぎ、ボスから赤いガラス片のようなエフェクトが飛び散る。

その中でも一際目立つのがキリトとアスナ、ユウキ、そしてコハルだ。緑の流星がボスの腕を駆け上がり、放たれた矢のように鋭く額を貫く。

「射撃用意！ 1発カマして、アタッカーの離脱を援護する！」

ボコボコに殴られたボスのヘイトがアタッカーへ向かう。だが、判断を誤ったな。

「撃てー！」

一斉射撃がボスを怯ませる。その僅かな時間でも、アタッカーを離脱させるには十分だった。そうならば今度はヘイトがこっちへ向く。最初からそうすれば、1人2人持って行けたかもな。

「レイジ、下がってくれ！」

「後退しろ！ 残弾が少ない奴はさっさと予備弾薬取ってこい！」

シヴァタが間に割り込み、ボスの攻撃を受け止める。後は最初と同じだ。タンクがヤバくなる前に俺たちが一斉射撃でボスをダウンさせ、アタツカーを突入させる。

上手くハマった。このサイクルでボスの体力をどんどん削っている。弱点へのボーナスダメージがあっても、銃弾のダメージなどたかが知れている。1番の強みは高いところの弱点を狙えることだ。

そんなサイクルで戦い続けて、ボスのHPバーは後僅かにまで削れていた。そろそろトドメと行こうじゃないか。

「レイジ、来るよ！」

まっすぐ拳が飛んできた。そろそろヘイトがこつちに向く頃だったし丁度いい。

来やがれ、最期を飾ってやる。

「わっ、レイジが突っ込んだ！」

ユウキの声を置き去りにして、PMC共の声も聞き流し、俺は拳に向かって突っ込む。

接触の瞬間、横に跳ねる。PC版の頃には出来なかった動きだが、VRになった今はできる。重力とか物理法則には縛られるけども、基本的に人間に出来る動きは大体できるわけだ。

「やられたぞー！」

「いや、ギリギリですれ違った！ なんつー度胸だ！」

ああ、角度次第では直撃に見えただろうな。こんな程度じゃやらねえよ。

もう少し踏み込む。死にギリギリまで近付け。そして、その刹那に活路はある。

ここだ。腕との僅かな隙間、顎をカチ上げるように撃ち上げれば当たる。

「死ねクソ野郎が！」

AKが吠える。ハイダーからマズルフラッシュが噴き出し、高い貫通力を誇るイゴルニクがボスの弱点を穿つ。60連マガジンだ。たっぷり喰らえ！

後少し、後少しで奴はスタンする。そんな時に射撃が止まった。弾切れには早すぎる。となれば答えはひとつ。故障だ。

「クソが、ジャムった！ この役立たずが！」

チャージングハンドルを引けばまた射撃できるようになるが、その前に拳が降り注ぐ。

走って逃げられるか？ ダメだ、咄嗟のことで足が動かない。

ピストルにスイッチ……間に合わない。ナイフかトマホークは当たるわけがない。

詰んだ。怒りのあまり冷静さを失った。せめて相討ちにでも持ち込めればよかつたのに。

「レイジ、しゃがんで！」

疑問を持つよりも早く、何をするのかと聞くよりも早くその場にしゃがむ。膝を曲げるだけ。それだけならば走り出すよりも簡単に出来た。

背中に重みと衝撃が加わる。ボスの拳よりは軽く、それでいて小さな設置面。コハルの足か。

俺を踏み台にしたらしい。それでもボスの頭はまだ遠いぞ、どうするつもりなのだろうか。そう思って少し顔を上げると、その手にはダガーではなくレイピアが握られていた。

緑の光を纏い、ジャンプの頂点で更に加速する。リニアとかいうソードスキルだったか。前方へ加速して一撃を繰り出す初期の技だが、システムアシストで物理法則を捻じ曲げる事さえ出来る。アスナから習ったかな？

「これで、倒れて！」

ガラスの碎ける音がした。レイピアの先端がボスの弱点を突き、大きいのけぞらせたのだ。倒し切れはしなかったが、おかげで助かった。

コハルはゆっくり落ちてくる。対してボスはノックバックしてコハルと距離が空いた。

チャンスを逃すものか。ポケットのF1グレネードを取り出し、それを投げつける。狙うはうめくボスの口。SAOプレイヤーさえ

即死させるこれを食らって、耐えられるような体力じゃなさそうだ。
「パイナップルを召し上がれ！」

口の中でグレネードが炸裂する。あまりの大ダメージにボスが大きく仰け反り、誰もが撃破を期待した。俺だっけそうだ。

でも、ほんの僅かに耐えやがった。あとドット一つ分、そんな僅かに残ったHPで、奴はその拳を振り下ろす。

その攻撃範囲にいるのは俺とコハル。俺に到達する前にコハルを跳ね飛ばし、その次に俺を殺すだろう。

故障は直した。それでも射線にコハルが被って射撃不能。あと少しだったのに、今度こそやられたな。

コハルは耐えられるだろうか。彼女が生きていてくれればそれでいい。きつと終わってから泣くだろう。戦う意思を失うかもしれないけれども、後のことはリョーハたちが何とかしてくれるだろうか。

「距離50、修正不要だど真ん中で撃て！」

甲高い銃声が石で出来たフロアに響き渡る。俺とコハルを殴りつけるはずだった腕の動きが止まり、ボスが叫び声を上げた。

それは頭が割れそうなほどの断末魔で、聴覚が破壊されそうなほどに響き渡る。誰もがよろめき、ボスに目を向けた。

あれだけ暴れ回ったボスの断末魔は次第に小さくなり、浮かんでいた頭部が床に転がり落ちる。ズシンと大きな音とともに、立っていないほどの振動が起きた。

転倒したけれども、もう焦って立ち上がるうとする奴はいない。ボスは斃れたのだ。宙に浮かぶ「Congratulations!」の文字が俺たちの勝利を教えてくれていた。

ボスの断末魔が変わって響き渡る、割れんばかりの歓声。感極まったコハルが抱きついてきて、俺はようやく我に返った。憤怒に身を任せ、冷たく冷えていた心に熱が戻ったような気がする。

「レイジ！ よかった……！」

「すまん、心配かけた。おかげで助かったよ。あと、シノンもな」

俺とコハルが目を向けた先では、シノンが構えを解いていた。しや

がむりヨーハはまたしても台座になっていたのだろう。

ボスは攻撃のために動いていた。その動きを読んで、弱点に立った一撃。針の穴を通すような狙撃を繰り出し、トドメを刺してみせたのだ。今日の大金星だろう。

「当たり前じゃない。私が外したことあるかしら？」

「俺は見たことねーな。ずっとスポットターやってる俺でそうなんだ。レイジが見たことあるわけねーだろ？」

「ははは、と笑うりヨーハに釣られて笑ってしまふ。どうやら、俺たちは今回も死神に見放されたらしいな。」

「レイジ」

今度はキリトだ。神妙な顔をしているあたり、俺と同じことを考えているのだろう。

「PMCの損耗はなし。SAO隊は？」

「1名行方不明。死者はなし」

「ディアベル……こっちの部隊を出して搜索、救難に当たる。あの人は死なせちゃならないからな」

あの落とし穴があった場所は跡形もなく消えてしまった。転がるレイダーの死体にはPMCが群がり、山分けが始まっていた。俺は、あの中に混ざる気にはなれずにいる。

「そうだな……それと、フラッグはどうする？」

「考えがある。他の連中は先に戻らせて、俺とキリトだけ残ろう。上の層の転移碑から5層に戻らせれば、ALSとは鉢合わせずに済むはずだ」

「さーて、ここからは苦手な政治の時間と行こうじゃないか。一応、考えはあるからな。」

5層―19 それぞれの戦後

「それにしても、もう少し穏便にいかなかったのか？」

「それキリトが言うか？ おまけに、最後アスナに慰められてたじゃねーか」

「な、見てたのかよ!？」

「いや、とつとと階段上がったが、声が響いてたぜ」

パーティ会場へ向かう俺の隣には、残念ながらコハルではなくキリトがいる。野郎の2人組とか罰ゲームか飲み会の帰りだろうか。リョーハならまだマシだったかもな。

キリトが苦笑いしながら言う穏便に、とは俺が威嚇射撃未遂をやらかしたことだろう。ジョーとか言うアホがまた煽るのが悪い。何が「オレ知ってる!」だ。

モルテもそうだが、なんだか喋り方がムカつくんだよ。掲示板荒らしか。

結局、フラッグはキリトが一時預かり。同等のアイテムが出るか両ギルド統合の際に引き渡すと言うことでキバオウを納得させたので、パーティの後でリンドも呼んで会議になることだろう。またアトラス代表アンド当事者としての参加か。気が滅入る。

クソ、パーティでたつぷり飲み食いしてやる。攻略参加した奴らもアトラスの招待枠で呼んでやったし、覚悟しておけよ。

店のドアを開けると、途端に喧騒が押し寄せてきた。システムのなものでドアを閉めている限りはその音が外に漏れることがない。

だから、ドアを開けた瞬間に波が押し寄せるように音が襲ってきたのだ。

「おう、我らが隊長のお帰りだぜー!」

ジョッキ片手に声を上げるのはブラックバーンだ。こいつ、もう出上がってるのか。

「待ってたぜレイジ!」

リョーハが肩をバンバン叩いて来やがるので、拳骨を落としておく。圈内だからダメージはないけど、衝撃は来るんだよ馬鹿野郎が。

そんな事よりも、こいつを先に帰したのはパーティーのまとめ役というか、遅刻してくる俺の代行をしてもらうためだ。

その結果を報告するため、リョーハは酔っ払ってハグするフリして俺に耳打ちする。ブリヤー、一部女性プレイヤーから熱視線を注がれてるぞ。

「キバオウたちは遅刻せずに参加、表面上は平穩なパーティーだ。お前はキリトとダンジョンで迷子になったことになってる」

「よくやった。後は好きに飲み食いしとけ」

「もうしてるよ。コハルが待ってるから、挨拶回りしたらさっさと行ってやれ」

背中を強めに叩かれた。終わりだと言う合図だろう。リョーハのハグが終わったことに残念そうにする女性プレイヤーは本当になんなんだよ。ナマモノBL本とか作るなよ？

「あ、レイジにキリト！」

ぶんぶんと手を振っているのはユウキじゃないか。その振っている手にフライドチキンが握られているのは気のせいかな？ 脂が目に入って、クラインが悶絶してるぞ。ライスシャワーはめでたいが、オイルシャワーは洗濯がだるいからやめてくれ。

「遅くなったよ。ユウキも来てたのか」

キリトが声をかけると、ユウキはチキンをペロリと平らげて駆け寄ってくる。小柄なのによく食うなあ。

「アトラスの招待枠で呼ばれたんだ！ すごくおいしいよー！」

「全部食い尽くしてやれ。というか残したら俺が許さねえ」

「お残しは許しまへんで！ だっけ？」

「そうだ。肉の一欠片残すな」

「イエスサー！ 隊長！」

「はは、ならば俺も腹一杯食べようかな」

むしろそれがALSへの仕返しなんだから、たっぷりやって欲しいものだ。

「ほら、食べなさい」

「おいシノン、そんなことしなくても食えるから」

「いいから。病み上がりでしょう」

「仮想世界なんだから病み上がりも何も」

リヨーハはシノンに唐揚げを口に突っ込まれていて、反論も何もを封じられていた。あーんしてもらえていいじゃねえか。周りが囁し立てるから羞恥プレイにも近いが、まあご褒美と思うが良い英雄よ。そして、俺の向かう先はリンドとキバオウの座る席だ。気が重くてたまらねえ。マジで講和条約のテーブルみたいなことになりそうで胃痛がするぜ。

「遅刻して申し訳ない。アトラス、レイジ。ただいま到着しました」

そう一言言うと、青髪の騎士がジョッキを掲げて挨拶してくる。その髪を見ると、どうしてもディアベルの姿と重なってしまっていて気分が重い。

だから、俺は目を背けてウオツカの瓶を重ねる。そのまま席に着くが、声はよく聞こえない。ヘッドセットも外しているのに、どうしてもディアベルの声がリンドに重なることやら。

「レイジはん、シケた顔しとるのう。少しシャキッとせんかい。アトラスの連中までシケた気分になるで」

誰のせいだと思ってるんだ。お前らのせいで、死ぬべきでない人間が死んでるんだぞ。

怒鳴り散らかしたい。今すぐにこいつの頭をトマホークでかち割りたい。そんな憤怒が湧き上がり、理性が必死に抑え込む。

「迷子になるくらいだったから、疲れているんだろうな。少し何か食べて休んでくれ」

そう言っつてグラスを差し出してくるリンドと瓶を重ね、そこで俺は目が覚めたような気がした。

おい、青髪の騎士とはもう乾杯したぞ。まさか忘れてもう一度したわけじゃあるまいし、キバオウもニヤニヤしてやがる。

「キリトさん共々迷子ってことは、よっぽど厄介なダンジョンを見つけたか、トラップに引っかかったかな？」

そうして、最初に乾杯をした相手が本人だと知る。あの時、取り巻きの引き連れてトラップの向こうに消えた、ディアベルその人だっ

た。

「……ディアベルさん!？」

「ああ、そう言えばそうだ。レイジさんの目の前でトラップにかかって、それから連絡してなかったね。どうも、入口へ強制帰還させる類のトラップだったみたいだ」

「ディアベルさんも人が悪いですよ。すぐに連絡すればよかったものを」

「メッセが届かなくてね。無線機もルーターに盗られちゃってたからさ」

そりゃ酷い、とリンドは笑う。俺の手は震えていて、キバオウはどこか安心したように笑っていた。

誰も死ななかつたことを嬉しく思うと同時に、まだ自分が壊れずにいられたと感じていた。あんなに俺の心にのしかかっていた重みが消えて、穴が空いた気分になっていく。

怒りが消え、残るは空虚な気分のみ。いいさ。この空いた空虚はこれから埋めていくんだ。容量が増えたなら、これから先の楽しいことを覚えていられるだろうから。

※

会場を出て夜空を見上げる。挨拶回りとか諸々で疲れてしまった。夜風にあたりながらコーラを呷ると、少しだけ落ち着いたような気がする。

「レイジ」

呼び声に振り向く。振り向かなくても誰かはわかるけども、その顔が見たかった。

「お疲れ、コハル。何かと苦労かけたな」

そう一言うと、コハルは何も言わずに俺の胸に飛び込んできた。俺はアーマーを着ておらず、コンバットシャツ一枚と言う姿。コハルはそんな俺の胸に顔を押し付けて震えている。

どうしてかは心当たりがある。撃ち抜かれたこの胸には傷痕一つ残っていないが、記憶には残っている。シウトウルマンに撃ち抜かれた時のように、俺は死にかけたのだ。

俺を手当てするコハルが青ざめていたのを覚えている。またやってしまった。そんな後悔が胸を締め付ける。

「ごめんな。久しぶりにやらかした」

「いつもやらかしてるでしょ。怖かったんだからね」

そこに否定はできない。少しでも落ち着かせようと、そつとコハルを抱きしめる。目の前でコハルが死にかけたら、俺だつて取り乱すだろう。こればかりは本当に申し訳ない気分だ。

それでも、俺は戦いたかった。自分が自分でいたかったから。リアルで得ることのできない敬意が受け取れた。賞賛されることもあった。

報われないリアルよりも、必要とされて、報われるバーチャルの世界で戦い抜いて、最期を迎えたいとさえ思っていた。帰つても空虚しか残らないと言うのなら、この優しい夢の中で眠りたい。

「今度はどこのスーツがご所望だ？」

いつも泣かせてはスーツ巡りの旅に同行する羽目になっていたのだ。きつと、今回もそうだろうと思っていた。

でも、コハルは首を横に振る。今回ばかりは別問題ということか。「離れないでいて。ずっとレイジと一緒にいたんだから、今更お別れなんて嫌だよ。私は、ずっとレイジと一緒にいたい」

真つ直ぐな想いをぶつつけられて、嬉しくないわけがない。それでも俺には勇気がなくて、どうしても躊躇してしまう。

5層でさえ死にかけて、ようやくここにいるのだ。この先も生きて、コハルのそばにいられる自信がない。

でも、隠したままで生きていけるほど我慢強くもない。せめて生きている限りはコハルのそばに、パートナーなんかよりも近い存在になりたいと思っている。

戦う時ほどの勇気が、今は欲しかった。例え蛮勇でも構わないから、一步踏み出す力が欲しい。ただ一言、コハルに好きだといえればそれでいいのに。

何かモヤモヤとした、塊のようなものが胸につかえていて、溜め込むのが堪らなく気持ち悪い。吐き出したくて堪らないのに。

たった一言、元々言おうと思っていたその一言を言おうと、えずくように口を開く。

「なあ、コハル」

「ねえ、レイジ」

見事に声が重なる。これでもかと気まずい状況になってしまった。まるで、道を譲ろうとして同じ方に行ってしまったかのようだ。

「……レイジからいいよ」

「コハルからでもいいんだぞ」

「こういう時は、男の人からでしょ」

全く、そう言われたらどうしようもない。覚悟を決めるしかないんだろうな。

「俺は、コハルが……」

「おおー！ レイジ殿、こんなところにいらつしやったのですか！」

タチヤンカの野郎、よくも乱入してくれたな。マスクヘルメットに声が反響して不気味なんだよ。コハルが顔を真っ赤にしてるぞ、このバカめ。

「うるせえ、さっさと戻って飲んでこい酔っ払いが。酔いを覚ましたら戻る」

「何を言われますか、レイジ殿もコハル殿もまだ2人ずつにしか見えませんぞ。それ即ち、某が酔ってないことの証左ですよ！」

なんかロシアンジョークであったなこんなの。というか、俺もコハルも1人ずつだ。酔ってるだろてめー。というか、アインクラッドじゃ酔わねえだろ。プラシーボなのか？

ぶん殴ろうかと思つた瞬間、タチヤンカが暗闇に消えた。まるでトイレの花子さんに引き摺り込まれたかのようなだが、まあいい。

「この野郎！ あのヘタレのレイジがようやく勇気を出したのに！」

「そのふざけたマリモを外しなさい！」

「人の恋路を邪魔するのは最低です！ 阿寒湖に沈めますよ！」

「なんでいい雰囲気壊すんですか！ 折角、リズと一緒に惚気話を根掘り葉掘りしようと思つていたのに！」

「キバオウを撃つた辺りから思つてたけど、お前本当にやばいだろ！」

タルコフの恥つて言われる理由がわかったぞ！」

「やめてください！ 某はこれがないと、まともに喋れないのです！」

「」「喋るな！」「」

……聞き覚えのある声と金属音、悲鳴が聞こえたのは気のせいだ。ComTacがそんな雑音は消してくれているはずだ。

「……戻ろうか。みんな待ってるし」

「そうだね。明日から6層攻略、一緒に頑張ろう」

「それと、だ」

言葉を遮るように、夜空を眩い光が切り裂く。遅れて響く爆音で、それが花火だとうやく認識できた。

腕時計は天頂を指し示し、今がそうだと告げている。

「あけましておめでとう。今年もよろしくな」

「うん、私の方こそよろしくね！」

コハルはそつと腕を絡めて寄り添ってきた。そんな歩きにくさも、今は心地がいい。

店までの道は短いけども、願わくばもう少し、あと少しだけ、この時間が続きますように。

今度こそ、死神が俺を捕まえるまで。

5層―20 守りたかったもの

BEAR Operator "Ryoha"
Aincrad "Hide out"

ようやくパーティも終わり、帰ってきたハイドアウトが懐かしくも思える。ベッドに転がると、マットレス直引きよりはマシな寝心地だった。

年越しをこの地で迎えるというのはまた感慨深い。始まってまだ2ヶ月とかだし、かなりハイペースで進んでいるようにも思えるしな。俺はもーちよいここで生きていてもいいんだけどよ。みんな生き急ぎ過ぎだ。

寝る前にもう一杯飲んでおこうか。どうせ酔わねえし。そう思っ
てウオツカに手を伸ばすと、ハイドアウトのドアが耳障りな金属音を響かせた。

はて、レイジの野郎はコハルとイチヤついでる頃合いだし、わざわざ俺を訪ねる物好きもおるまい。誰が来た？

「リョーハ、起きてる？」

「シノンか？」

この気まぐれ猫は何をしに来たのだろうかと思えば、プレートキャリアを脱ぎ捨ててソファアに腰掛けた。俺のハイドアウトなのに、自分の家のようにくつろいでるな。あんま無防備なところを見せるな。コンバットシャツが体にびっちり貼り付いてるぞ。

こんな時間に何をしに来たんだろう。ボス攻略直後のパーティだし、いい加減疲れて寝てると思ったのだが。

「ええ。まだ言っ
てなかったでしょう」

何をだ、そういう前にウイスキーの瓶が差し出され、俺はそれを受け取る。はて、どういう意味かと理解するより先に、彼女はテーブルのウオツカを手に取った。嗚呼、そういうことか。

「明けておめでとう」

「おめでとう。あと乾杯」

キン、と軽く瓶を重ね、一気に呷る。どうせ酔わないのだからいくら飲んでも問題あるまい。現実なら、少なくともシノンにはアウトな年齢だろうけど。

「圈内ならデバフも気にならなくていいわね」

「そもそも、圏外で飲む奴いるか？ 鎮痛剤代わりに使うのも稀だろ」

鎮痛効果があるとはいえ、デバフが酷すぎる。フィールドで飲む奴なんて見たことない。あ、ウォツカに即死効果がつくイベントの時、飲んで遊んだ仲間がいたな。5%のはずの即死確率を引き当ててたっけ。

「だから、こういう息抜き用ってわけね」

「まともにタルコフだった頃は考えもつかねーような使い道だな」

「本当よ。どうしてこうなったのかしらね」

シノンはクスリと笑って俺を見ている。いつもはクールに無表情を貫いているのに、今日はどうしたって言うんだ。

そう思っていたら、シノンはさりげなく俺の隣に移動してきた。おい、本当にどうしちまつたんだ。酔っ払ってるのか？

「これはこれで楽しいけどな。ずっとここにいてもいいかも、なんて思ってるくらいだぜ？」

「そんなこと言ってるの？ リアルの時間が少しずつ削れてるのよ」

「ゲーマーとしては願ったり叶ったりだろ。それに、ドーセクリアしても学業は遅れ、社会に出れば腫れ物扱いになるだろうさ。そんならいならここで死ぬまで生きていたいね」

どうせ大学は休学扱いか退学だろうし、もういつペン受験戦争に飛び込むのはごめんだぜ。レイジの野郎もそう言っていたしな。

そんな事をボヤいてみたら、シノンがキョトンとした顔で俺を見ていた。本当に今日は表情がよく変わるな。可愛いところあるじゃねーか。

「大学生だったの……って、リアルの詮索はマナー違反よね。忘れて」
「構わねえよ。たまにはそんな昔話もいいだろ？」

正直、キャラネームが本名のアナグラムじゃなければ、今頃自分の

名前もわからなくなっていた頃だろうか。俺はBEAR所属のPMCオペレーターで、ずっと昔からこの地に生きてきたとさえ思っていたかもしれない。

「……ねえ、リョーハはどんな風に生きてきたの？」

「どうもこうも、平々凡々な大学生だよ。親の言うまま勉強して受験を受けて、時折ゲームとかサバゲーやってたよ。鬱憤払しにちょうど良かったし、非日常が味わえたからな」

「人を撃つことに抵抗はないの？」

「実弾じゃないし」

正直、タルコフをやっているうちに人を撃つことへの抵抗をなくしていったような気がする。俺がトリガーを引くと血飛沫が舞い散り、人が倒れていく。

リアルな殺しとなんら変わらない。それを繰り返して、俺はきつと麻痺してしまったのかもしれない。もしかしたら、オレンジプレイヤーくらい躊躇なく撃てるのかもな。

すると、シノンが俺の肩に頭を乗せてきた。本当にどうしたんだか。随分可愛らしくなったじゃないか。

「……気をつけなさい。人を一度撃つたら最後、戻れなくなるわ。後悔するわよ」

「ああ。でもその時は撃つぞ」

「苦しむわよ。人を殺すのは、思ってる以上に辛いことだから」

まるで、知っているとしても言わんばかりだな。トカレフの件といい、点が繋がるような感じがする。でも、詮索はしなくていい。彼女の心配は受け取っておくでしょう。

「ありがとよ。でもさ、仲間が殺されるくらいなら俺は殺す。きっと、それはそれで苦しむだろうさ。だから」

言葉を切った。少しだけシノンの顔を見ると、次の言葉を待つように、覚悟を決めた目で俺を見ていた。

「その時は、俺の手を握ってくれるか？」

「……ええ。リョーハは私のスポッターでしょう？ 最後まで一緒に」

スナイパーとペアであるスポッターは、スナイパーの罪悪感を共に担うという。俺が背負わなきゃならないのに、シノンに背負わせちゃうのは心苦しいもんだ。

でも、どこか安心できる。レイジと背中合わせに戦うのとは違って、戻ってくる場所があると言うような、そんな感覚だった。

「明日から、ここに引越すわ。危なっかしいからそばで見ているあげる」

「おいマジかよ、俺のプライバシーはどこ行つた？」

「風に吹かれて飛んでいったわよ。弾って意外と横風で逸れるんだから」

「俺のプライバシーは10グラムしかねえのかよ」

まあでも、シノンが側にいる生活も悪くないような気がする。この気まぐれ猫みたいな彼女がいるだけで、少し楽しくなるだろう。

コハルと共同生活しているレイジも、そんな気分なのかななんて思ってみる。あの野郎、どうしてまだ正式に付き合ってるねえんだ。あ、さつきタチャンカが邪魔したからか。

「ほら、これあげるから機嫌直しなさい」

「機嫌悪くねえ……っておい、これまさか」

シノンが差し出してきたのは銃。やけにぶつとい銃身に、全体がほつそりというかなんだか歪な印象がする。AKに似たようでなんか違うと違和感さえ覚えるそれは、俺が探し求めていた代物だった。

「AS—VALじゃねーか!? どこで拾った!？」

「ラストアタックボーナスの一つよ。使わないからあげるわ。ベータの時、それ使っていたでしょう?」

覚えていてくれたのかよ。シノンさんマジ女神。

「マジかよ、新品価格10万コルは下らねえと思うぜ……何かお礼したいんだけど」

AS—VALを受け取ろうと手を伸ばすけども、シノンはヒョイとそれを高く掲げてしまった。無理矢理取るには取れるけれども、そんな真似ができるわけがないだろう。

「ならば、約束して」

一体どんなお願いをされるんだ。シノンのことだから無茶振りをかまされるのも覚悟の上だ。

「この銃を撃つたび、私の事を思い出して」

差し出された銃と、真剣なシノンの顔に気圧された。まるで告白のような言い方だが、原因は俺が死にかけたことにあるのだろうか。

私を思い出せ、死んで欲しくないと思う人間がいる事を忘れるな、そう言われているように感じたのは俺の思い上がりだろうか。

銃を握る。すると、シノンは一度手を離して、包み込むように手を重ねる。俺の手よりも小さい手なのに、どうしてこんなにも大きく感じるのか。

「約束する。このゲームが終わるまで、俺は忘れないさ」

もし壊れて使えなくなつたとしても、パーツを移植して使い続けるだろう。銃のスペックは変わらない。やろうと思えば、こいつで最後まで戦い抜けるだろう。

微笑むシノンを前にして、俺は頷いた。

幕間 風邪の日

夢を見ていた時もあった。優しい夢を。ボスとの死闘さえも生き残って、現実で再び会う夢を。あと少し、あと少しで夢が叶う。そう信じていた。信じていたかった。

「……ねえ、起きてよ」

現実に戻ったらPMCでも何でもない、ただのありふれた学生。そんな存在でもいいか？　なんて言っていた彼の、ありのままの姿を見てみたかった。

命知らず
デアデビルじゃない、1人の人間として、そんな彼ともっと先の未来を旅したかったのに。

「答えてよ……」

それなのに、彼は答えない。冷たい石畳の上に倒れて、眠るように目を閉じた彼は微笑んでいた。満足そうに、やり切ったとでもいうように。

白地に緑の線と、落書きの挟まれた注射器が足元に転がっている。彼の隣には、最強の相棒も同じように倒れていた。

「ねえ……ねえ！」

夢の続きを、現実で見たかった。彼は優しいから、私が風邪をひいたら真っ先に駆けつけてくれるだろうし、心細くなればずっと側にいてくれるのに。

ずっと一緒にいようって、この先の未来を一緒に旅しようって約束したのに。

そんな約束も未来も、幸せさえも投げ捨てた。顔も知らない誰かのために。臆病だから、誰かが傷つくところを、私が泣くの見ないように、彼は逝ってしまった。

わざと命を削って、強敵に不利な戦いを挑んで、友の一撃に身を切り裂かれて勝利を勝ち取った、悲劇の英雄。だけど……

「こんな結末なんて、望んでなかったのに！」

ボス部屋は歓声に包まれることもなく、葬送式のように静寂が包んでいる。私の慟哭と悲鳴だけが、葬送曲のように響き渡っていた。

英雄なんかじゃなくてよかった。ただ1人の優しい青年として、私のそばに居てくれればそれでよかったのに。

※

これは夢だっけすぐにはわかった。ここがアインクラッドじゃなくて私の部屋で、これでもかかってくるい具合が悪いんだもん。SAOで病気になんてならないから、夢で間違いないよ。

身体はだるくて、頭も割れそうに痛い。寝て意識を失えば、こんな苦しみも味わわないで済むのに、結局苦しみのせいで寝付けない。

もしかしたら、SAOのこと自体が熱にうなされながら見た夢なのかも。悪夢というにふさわしいし、それで物語を書いたら売れるかもね。

でも、夢じゃなかったんだなって思う。だって、目の前には彼がいるから。

相変わらずBEARの刺繍がされた緑の帽子に、黒のジャケット。現実なのにそんなミリタリー룩を好む彼は、そっと私の頭を撫でていた。その優しい微笑みも、あの時のままに。

鋭く敵を睨みつけていたあの瞳が、優しく私を見下ろしている。

「目が覚めたか？」

「うん……」

「シートを変えよう。随分ぬるくなってやがる」

彼は私の額の熱冷ましシートを剥がして、立ち上がろうとする。そんな彼の裾を、私は無意識に掴んでしまう。

離れたらどこかへ行ってしまう。いつもそうだった。私に何も言わず消えてしまつて、お墓どころか死んだことさえも知らないまま、現実に戻るようになるんじゃないかって思っていた。

ずっと一緒、そばにいて欲しいって願って努力もした。私が死ななきゃって覚悟を決めた時もあったけど、彼は抗って覆してくれて、ようやく今がある。

だから離したくない。やっと命の危険もなく、そばに居続けるって誓いあったから。熱の苦しみに耐えてでも、離したくないの。

「全く、この甘えん坊が。少しだけ我慢しろ、お守りを置いておくか

ら」

彼は帽子を私に被せる。少しぶかぶかだけど、さつきまで被っていたからか少しだけ温もりがある。不快な熱の熱さじゃなくて、優しく包み込む心地よい暖かさ。頭を撫でられているみたい。

「そら、冷たいぞ」

そんな帽子が取り払われて、代わりに冷たいシートが額に貼り付けられた。

「……手、大きいね」

「当たり前だろ。ま、AK握るにはちと小さかったかもな。ロシア人みたいにはデカくねえし」

「私はこの手が好きだよ」

そつと指を絡めると、彼は恥ずかしそうにする。女慣れしていないのか、反応が初々しくて可愛いと思うことがよくある。

強くて優しく、その裏返しで臆病な、そんな私の英雄。誰にも讃えられなくても、特別視されるような存在じゃなかったとしても、私だけのヒーローは確かにここにいる。

この手を握りながら、あの鋼鉄の城と一緒に戦って、隣で生き残ってきたんだもん。

「なんか食うか？」

「……あんまり食べられなさそう」

「少しでも食った方がいい。プリンならあるぞ」

彼はそう言ってプラスチックでプリンを掬うと、私の口にそれを運ぶ。あーんしてもらおうのつて、もつとドキドキするものだと思つたのに、今は風邪のせいでそんな気分になれない。

ただ、胸の内が暖かく感じる。好きな人に食べさせてもらって、看病してもらおうのつて幸せなことなんだね。

「美味いか？」

「うん……」

本当は味なんてわからない。きっと熱のせい。それでも、彼が食べさせてくれたのが嬉しくて、億劫さや食欲のなさを押し殺してでも口を開け、次をおねだりする。

そんな私を見て、彼はやっぱり笑っていた。

「彼女にあーんしてるといふより、雛鳥に餌やってる気分だな」

「もう、少しはキュンとさせること言えないの？」

「言おうと思えば言えるけど、笑いの方がお望みだろ？」

そうやって、いつも私を笑わせようとするんだ。そんな彼が、私は大好き。

「私が初めての彼女なのに、そんなに言えるの？」

「レパトリーだけは豊富なのさ。恥ずかしいだけで」

「いつもそうやってふざけるんだから」

でも、それが楽しい時間をくれる。熱が出て苦しくて、心細くても彼がいる。優しく包まれるようで、安心感が睡魔を運んできた。

いつの間にか、彼が子守唄を口ずさんでいる。相変わらずロシア語はわからないけれども、優しい旋律と撫でる右手が心地よくて、いつしか私の意識は闇に落ちていた。

※

目が覚めると、そこは薄暗いハイドアウトだった。どれが夢なのかもうわからない。試しに虚空に指を振ってみると、メニューウィンドウが開いた。

ここが現実か。そう意識した私は落胆して、ベッドに身を沈める。そんな時に、ふと思った。彼の姿がない。

隣のベッドはもぬけの殻で、背中に寒気が伝う。どれが夢で、どれが現実か分からない。もしかしたら、本当にいなくなってしまったのではないか。そんな恐怖心が私を支配する。

「嫌……イヤ！ レイジ、ねえ……！」

私は飛び起き、走り出した。狭いハイドアウトの中で前も見ずに駆け出して、角を曲がったらぶつかかった。その悲鳴は私の求めていた声で、弾き飛ばされた彼に私は縋り付いてしまう。

「レイジ……！ よかった、生きてた！」

「ったく、急に悲鳴上げたからびっくりしたぞ。シャワー浴びてたのに」

我に返って、今の様子を見してみる。私は寝巻きで、レイジはシャ

ワ―の途中で悲鳴を聞きつけて飛び出したらしく、ズボンを履いただけ。それを、私が押し倒して縋り付いている。

顔が熱を帯びるのがわかる。こんなところを見られたら恥ずかしいし、そもそも、半裸のレイジを押し倒していること自体が異常事態なんだよね。

申し訳ないことをしたのに、彼は笑っている。そして、優しく私の頭を撫でてくれた。

「なんか怖い夢でも見たか？」

「……うん。レイジが死んじゃう夢とか、レイジが風邪を引いた私を看病してくれた夢とか。それで、起きたらいなくなってたから怖かったの」

「うなされてたもんな。しばらく撫でたら落ち着いたし、それでシャワー浴びに行ってたんだが」

あれは夢じゃなくて、本当に撫でてくれていたみたい。そんな優しさが暖かくて、好きになったんだらうなって思う。

ここが仮想空間だとしても、この温もりを確かに感じている。鼓動さえも再現されていて、それが耳に心地いい。

もう少しだけ、あと少しだけ、味わっていてもいいかな。

これをリヨ―ハとシノンに見られて、アトラスの人たちにしばらく椰揄われたのは別の話。

11層―0 憤怒の目覚め

俺は言われるままに生きてきた。それが正しいのだと、親の言う道が正解の道で、自らの意思は必要ないのだと信じ込まされてきた。

全てを切り捨てて、そして辿り着いた先に待つは空虚だった。自分は何が好きで、何をして喜ぶのかさえ分からなくなってしまうていた。

あれだけ好きだったものがそう思えなくなった。まるで、自分を後ろから見つめているかのように思えた。

そこで笑っている人たちを、ガラスの壁を隔てて眺めているかのような気さえした。

そんな空虚を、欠落を埋め合わせようとした。自分を壊して、空虚ごと消し去ろうとした。少し過激な思想に傾倒しかけて、それでも埋められなかった。

何も残らない、何も感じない。何も無い。

進学校は周りみんな敵で、塾だなんだとバイトも禁止で、思い描いていた高校生活なんて夢のようだった。友情なんてなかった。

勉強はみんなやっている、やって当然だ。点が取れないで、お前は何になれるんだと怒鳴られた。

やつてもやらなくても罵声が待つ。いい点を取ったと言ったら、周りからは何の自慢だと白い目を向けられる。敬意なんて誰からも得られなかった。

そして、恋人なんているわけもなかった。両親さえ、見ていたのは俺じゃなくて俺の点数とか、将来の身分だったんだろう。俺のためじゃない、自分のためだったのだろう。そんな中に、愛情なんてなかった。

そんな世界に生きていたからこそ、この世界が心地よく感じるんだ。死ぬ事がなんだ、体が死ぬか心が死ぬかの差でしかないんだから構うものか。

何度も繰り返し返してきた生と死。撃たれ、爆発に身を引き裂かれ、血を失ってゆっくりと緩慢な死を迎えるのでさえも、俺には心地よかつ

た。

そうして死をくぐり抜けて戦い抜いた果て、そこに俺の欲しかったものがあつた。

確か、R e s e r vだつたな。ソロでキルムーブしに行った時に出会つた。激しい銃撃戦の果てに、乱入してきたボス集団を相手に共に戦うことになつた。

さつきまで殺し合つていたのに、その時は背中合わせになつて、一緒に戦利品を担いで脱出したつけな。

その時に名前を知つた。それこそリョーハだつた。今でこそ組む事が減つてしまつたが、俺の最高の相棒。

他の誰かをパートナーと呼ぶことはあつても、相棒と呼ぶのはこいつだけだ。気心知れた友達というのが、初めて出来た気がした。

それからは奴と一緒に暴れ回つた。チーターを疑われたこともあつたけど、ただ作戦勝ちしただけだ。

S N Sを通じて、タルコフのプレイヤーたちに名前が知れていつた。いつしかデアデビルの名と共に、多くの人たちからの敬意をこの身に受けた。

愛情は……そうだと信じていいのだろうか。戦いの中で死んでいきたいと、最前線へと走つていこうとする俺の手を握つて、あるいは側で守ろうとする少女が俺に向ける感情をそうだと思つていいのだろうか。

結局言えずにきてしまつたこの場所で、信じてもいいのかいまだに迷っている。

「レイジ」

ふと、聞こえた呼び声に目を覚ます。暗い洞窟を照らすランタンが、ぼんやりと彼女の顔を浮かび上がらせた。

優しく微笑むコハルは、俺の寝顔をずっと見つめていたのだろうか。それに、コハルの笑顔がすぐそこにあるだけで嬉しい。いてくれるだけでいいとさえ思える。

「交代の時間か？」

「うん。起こしちやつてごめんね」

「そういう約束だからな。2時間後に起こすから、ゆつくり休んでくれ」

11層は砂漠で、砂嵐がひどい。そんな砂嵐に阻まれて、俺たちは主街区に辿り着けなかった。だからこうして、洞窟の中で一夜を明かすことになったのだ。

安全地帯だが、念のために交代で見張りにつくわけだが、話し相手がいないとやはり暇だ。俺の横で無防備にもスヤスヤ眠るコハルの顔を見たり、銃をガチャガチャ弄るしかやる事がない。

グローブを外してそつと頭を撫でると、コハルは心地良さそうに微笑んだ。ずっと一緒に戦ってきたパートナー。最初は依存のようにも思えたが、今は彼女も対等か、それ以上に戦っている。

もう、俺なんて必要ないよね。そう思ったことは何度もあった。だからこそ、俺は俺らしく戦いたくてボスに斬り込みを仕掛けていた。それなのに、彼女は俺の生還を願いつける。

走りたいのに、重りでも括り付けられたような気分がする。思うように動けないことへ不満は募るけれども、それ以上に心地よくさえ思っていた。いつしか、コハルと行き着く先まで生きていたいと思える程に。

コハルとならば、あの地獄のように思えたりリアルさえもが楽しくなるのだろうか。色の消えたあの世界に再び色が戻るのだろうか。

そう考えながら暗闇に目をやると、その向こうに人影が浮かび上がって見えた。PMCでも何でも無い、何の変哲もない大学生。リアルでの俺が、悲しそうな顔で立っている。

俺は静かに、それで確実に銃口を自分へ向ける。安全装置はまだ解かないが、俺にその意思があるとだけ理解したらしい。俺が少しだけ笑っているように見えた。

安心しろ。何がどう転ぼうと、いつかお前を殺してやるからな。

11層―1 旅は道連れ

11層はアラビアというか古代エジプトというか、砂漠と遺跡がモチーフの層だ。

どうやらここにタルコフのマップがあるらしく、クエストついでにそれを探してくれとアルゴから頼まれているのだ。折角、部隊一つアルゴにレンタルしたのにどうしてこうなった。

まあそれはさておき、とつておきのクラス5を誇るアーマーリグ”AACPCプレートキャリア”を着てきた。新しい層に対する準備はバッチリ。防御力が上がったし、ちよつとやそつとじゃやられはしない。多分。

「わつ、砂嵐だよー！」

「クソが、何も見えねえ！ 銃に砂が詰まる！」

コハルも俺も、トレーダーから購入したシユマグで顔を覆い、隙間なく顔に密着するタイプのゴーグルを装備している。にしても、このエリアは水分消費が倍増するのが厄介だな。

とまあ、こんな調子で街へ行くのも一苦労しているわけだ。前は、砂嵐を避けて入った洞窟で盗掘者のNPCに出会ったな。何やら、金貨をお供えしてくれとか言ってたつけ。あれが昨日の出来事か。

全く、Triizipバックバックにたつぷり水と食料詰めてこなかったら、今頃砂漠に転がる骨だっただろう。

そんな道のりを踏破して街にたどり着き、ゴーグルとシユマグを外して顔を見合わせる。久しぶりに素顔を見たような気がして、思わず笑ってしまった。

「その顔見るの、いつぶりかな」

「昨日見たばかりだよ。忘れちゃった？」

「ほとんど顔隠してたからな。珍しくも」

こんなにコハルの顔を見ない日も珍しいから、どうしても新鮮というかおかしいというか、そんな気分なのだ。

さてさて、コハルと街の散策もいいが、目的の人物を探しに行かないとな。アルゴに頼まれてるし。

「そういえば、これから会いに行くトレーダーって、やっぱりタルコフの人なの？」

「正解。ラグマンっていう装備品関係を取り扱うトレーダーでな。まあキザな言い回しが好きなやつだ。キャラ的には好感を持てるけど」
「アブラミアン・アルシヤビル・サルキシヴィツチ。通称”Ragman”は服飾関係やアーマーを取り扱っており、買取も彼が最も高値になるため、お世話になるPMCが多い。」

「タスクは”Interchange”に集中しており、殆どがアイテムの納品や設置で報酬がいい。トラウマレベルのタスクを与えるイエーガーと違って、彼を好むPMCは多いことだろう。」

「そんなコーカサス地方生まれの彼が砂漠で商売してるとは意外だ。アラビア商人にでも転向したのだろうか？」

「……レイジ、アレってNPCだよな？」

「コハルが訝しげに指し示す人物は、何やら女性を口説いているかのように見えた。」

「口説かれているのは俺より背のでかいセミロングと、茶髪ふわふわしたロングの2人組。そしてまさかまさかのUSECオペレーター。タルコフの女性プレイヤーとは、珍しいものもいたものだ。」

「なんで勿体無いんだ！ ULTRAさえ無事ならば、君たちのような、麗しき女性に似合う服をプロデュース出来たというのに！」

「……うん、間違いない。ありやラグマンだ」

「ラグマンは小説やオペラから台詞を引用したり、キザな言い回しを好む。そしてファッションにも一家言あるようで、時折プレイヤーの服装に言及してくる。きつと、衣装入手のタスクなんだろうな。」

「進んでねえみたいだし、助け舟出すか」

「割り込んで大丈夫なの？」

「ああ、ラグマンの扱いなら任せろ」

「という訳で、話の進まず困る2人を助けるため、俺はズカズカとラグマンの前に出て行く。さあ、腹括ろうじゃねーか。」

「サラーム、兄弟！ 調子はどうだ、何かお困りかい？」

「ああ、兄弟！ いいところに来てくれたな！」

「ははは、と笑いながらラグマンと握手する俺を見て、コハルや2人組は驚いていた。多分、俺をイベントNPCと思われたろうな。」

「ラグマンの話を進めるなら、こっちのペースに持っていくしかない。こいつに話させると長くなるぞ。情熱あるキャラなんだろうけどな。」

「見てくれ、麗しの女性と……お前の連れかな？ もつと然るべき服装をすべきだと思わないか？」

「全く同感だよ。ならば俺たちはどうすればいい？ 生地を集めて服を作るか？ それとも、どこか仕入れのアテでもあるか？」

よし、頭の上にクエストマークが出た。これでトドメだ。

「ああ、それならばあるぞ。昔滅びた国があるんだが、そこは交通の要衝だったようなんだ。そこからさらに続く先に、ULTRAショッピングモールがあるとされているんだ。大地切断で取り込まれたそうだが、そこにまだ見ぬ宝があると思うんだ」

そして出てきた受注画面。タスク名は“Big sale”。激戦区に飛び込むハメになるから、苦手な回収タスクだったな。

「きつと、今もブランドのアウトレットが眠ってるはずだ。素早く忍び込んで、確かめて欲しい。ゴミ漁りはいらぬぞ。あくまで欲しいのはブランド物だけだ」

内容はショッピングモール内の服屋を確認して生還すること。よくPMCと鉢合わせる位置にあるから、結構神経を使った覚えがある。

「わかった。確認してくる」

「頼りにしてるよ。さあ、出かける前に必要なものを買って行ってくれ」

苦勞して受注して振り向くと、苦笑いが俺を出迎えた。なんだよ、俺は頑張ったじゃねーか。

「レイジ、キャラ違うくない？」

「うるせー、ラグマンに合わせなきゃ長くなるんだよ！ コハルがやってみるか？」

「遠慮するね」

「バツサリだな!？」

やれやれ、と2人組に目を向けると、やはりこちらも苦笑い。どう反応すればいいか困っているようだ。コハルに目配せすると頷いて返してきたし、察するとしよう。

「もし良ければ、一緒にタスク行かないか？」

「ええと……あなたは？」

長身の方は引いていると言うか警戒している。もう片方は何やら目をキラキラさせているし、なんだこの反応の差は？

「俺はレイジ。で、こっちは俺のパートナー」

「コハルです」

コハルが笑顔で挨拶すると、ようやく警戒を解いてくれたらしい。肩の力が抜けるのが見えた。

にしても、パートナーって紹介されたのが嬉しかったか？ コハルが花が咲いたような笑顔になっている。可愛いからスクショしておこう。

「私はレン」

「レンの相棒、フカ次郎だ！ 時にお二方、人違いじゃないなら、アトラスのレイジとコハルだったりするかい？」

おや、フカ次郎とやらは中々鋭いじゃないか。レンは驚いているし、そんなに俺たちは有名なのだろうか？

「あの……どこで知ったんですか？」

情報の出所を気にしているのか、コハルがおっかなびっくりに訊いている。趣味で新聞出してる物好きがいるから、その辺から伝わったんだろうさ。高値で売れるって、攻略組の誰かが記録結晶で撮影した写真を添えてな。

「これこれ、この号外だよ。デアデビルのレイジと烈華のコハル、攻略組一精強なコンビがボス撃破！ って見出しでさー！」

「なんじゃこりゃ、相当誇張入ってねえか？」

俺の銃撃でボスを黙らせ、弾切れになった俺を踏み台にコハルが飛びかかったのは認めよう。だがその他。俺こんな無茶苦茶な突撃はしてないし、俺1人というかアトラスでやったことまで俺の功績にさ

れてるんだが。

「れ、レイジ……これ、写真付き」

「見てる。切り抜き欲しいな」

落ちてきたコハルを俺が受け止めた瞬間の写真じゃないか。見方によつてはお姫様抱っこつてやつだ。それをアインクラッド中には撒かれるとは、笑うしかない。

「うう、恥ずかしいよ……」

「お2人さん、仲良いねえ。付き合ってるの？ そうじゃないなら

彼、私に出来ない？ ね？」

「フカ、レイジさん困ってるから！」

俺はそんなに困っていないしむしろ満更でもない。だがコハルは困っているというか、もう顔真っ赤だ。可愛いからスクショしておくか。

11層―2 ULTRAでお買い物

Level 40 BEAR Operator” Rage”
Aincrad layer11” Interchange”

暗闇が晴れていく。俺たちは高速道路にいて、目の前にはでかいショッピングモールが聳え立っている。これこそ”ULTRA”であり、サントペテルブルクに元ネタのショッピングモールがあるらしい。

さて、目的は目の前のショッピングモール。一階が駐車場になっており、何故だかここが地下。2階フロアが1階、3階フロアが2階として扱われている。

「して、どう進もうかね。お上品に正面からお邪魔するか？」

「そうは言うけど、他に入る所あるの？」

「幾つかね」

バックヤードの搬入用スロープとか、正面入って右側には天井が崩落してスロープ状になっている部分がある。他にもあちこちにエスカレーターがあり、侵入路はどこにでもあるわけだ。

「まー、難しく考えなくていいんじゃない？ PMCとは喧嘩にならないんだしさ」

実際問題、フカ次郎の言うとおりだ。元のタルコフならば、他のPMCと侵入路が被るのは避けたい所だが、今は鉢合わせても殺し合いにはならないで済む。正面から行っても問題はないわけだ。

「だとすれば、IDEAのエスカレーターを上げるのが1番近いかな。レイジさん、それでいい？」

レンのいうIDEAはモールの正面左にある大きなテナントで、アンティーク品などがスポーンする家具屋だ。元ネタはどこぞの青い家具屋なんだろうけど、そこは大人の事情というわけだ。

ちなみに、そんなIDEAの買い物バッグから作られたチェストリグが存在する。手作り感あふれるそれを装備したSCAVは、遠くからでも結構目立つんだよな。

「ああ、オフィス漁ってから店巡りで行こう」

Big saleで行くテナントは7つほどだが、どれも1階フロアに存在する。買い物気分と行きたいが、他の客が物騒すぎるので気は抜けない。SCAVはどいつもこいつもお行儀が悪すぎるんだ。

もう一つ、Make ULTRA great gainというタスクはInterchange全域でSCAV25キルなので、地道に進めるとしよう。

「シヨップピングかあ。VRシヨップピングを思い出すよ」

「そういや、コハルはそのアバターをコンバートしたんだったな。顔変わってなかったから驚いたぞ」

「レイジは厳つい中年だったのに、気さくなお兄さんに早変わりだったね」

少しドキッとしてしまった。笑顔で気さくなお兄さんと言われて悪い気はしない。クリーンヒットだ。出撃前から胸部壊死しそう。

「茶化すなよ。レン、フカ、IDEAのレジ周りはSCAVが隠れてるから気をつけろよ。シヨットガンで頭飛ばされるからな」

「おやおや、照れ隠しかい？」

フカ次郎め、ニヤニヤしやがって。分からせてやろうか？

「うるさい。キラ店長に万引き犯だと突き出すぞ」

このInterchangeにももちろんボスはいる。黒地に白3本線のジャージと、同じカラーリングのマスカヘルメット、後はクラス5アーマーで身を固め、RPK軽機関銃を持つ“Killla”だ。PMCからは店長と呼び恐れられている。

こいつに追いかけて回された時、リョーハの野郎が『なんてこった、もう助からないゾ』とか抜かしたのは忘れられねえ。

重量の嵩む装備をしている店長だが、元々アスリートだったとかでかなりの俊足だ。おまけに目が良くて、俊足で距離を詰めて的確に撃ち抜いてくる危険な相手である。

どこぞのスペツナズ隊員が元ネタという話だし、ウチの怨念マリモはこのいつの劣化版とでもいうべきだろう。元ネタの方は鈍足だけだな。

「ち、ちよっと！ 私逃げ切れないじゃん！ レンでも怪しいのにー！」

「私だってキラ店長から逃げ切るのは無理だよ。フカが何とかしてね」

レンの武器はMP5。装填している“QuakeMaker”では店長のアーマーを貫通するのは不可能だが、威力が高いので足や腕を滅多撃ちにすればHPを削り殺せるだろう。

それに対して店長はイゴルニクとかBSなどの高貫通力を誇る弾を使っているから、一番硬いクラス6のアーマーでさえ1発目からブチ抜いてくる。多分、リーテンも防げないだろうな。俺だって出来ない。

「当たればね。当たれば」

対してフカ次郎の武器は“FN GL40”というグレネードランチャーで、当たればキラ店長だろうと一撃で倒せる。至近弾でも即死か、瀕死の大ダメージを与えられるだろう。

ただ、弾が放物線を描く上に弾速が遅いので、当てるには相当の技術がいる。しかも1発ごとに再装填が必要なので、外したら一巻の終わりだ。サブで持っているM4A1に期待するしかなさそうだな。

「不安過ぎるんだけど。おい、間違っても俺らに当てるなよ?」

「大丈夫じゃよ、安全装置があるぞ!」

「M443は3メートルで起爆するんだからな!」

グレネードランチャーの弾には色々種類があるが、その中でもM443は発射から3〜5メートルで起爆するので、下手すると射手が自爆する。仲間を巻き込む可能性もかなり大きいので、気をつけて欲しいものだ。

……大丈夫だよな?

「……レイジ、アレって何かな?」

コハルが指差す先、道路横の植え込みに何かが突き立っている。剣が立てられているのはまあいいでしょう。問題は、その柄の部分にマスカヘルメットが被せてあることだ。

一瞬、タチャンカの墓標と思ったが違う。奴は緑のマスカヘルメットなのに対し、これは黒地に白で3本線が引いてある。キラ店長の生首かよ。

「先客がいたようだな。随分悪趣味だけど」

「本当に無法地帯なんだね……」

「いや、普通はこんなことしないからな？」

不安は残るものの、俺たちはULTRAに足を踏み入れた。正面玄関入ってすぐの階段を上がると、レジ周りにいたSCAVが反応する。

いつもみたいにスーカスーカやかましく叫びながらショットガンを撃ってくるが、あの中に店長はいないらしい。レジ打ちだけか。

「コンタクト、SCAV2つ！」

「右は私が！」

ならば俺は左だ。右はレンに託し、左へ移動するSCAVを仕留めた。ヘッドショットだ。コハルにいいところ見せられたかな。

「突っ込みます！」

「おいマジかよ、援護する！」

見かけによらず、レンはアグレッシブなようだ。サブマシンガンは至近距離での戦闘に持ち込んでなんぼだし、正しいやり方であると言えよう。

だから俺はそれを援護する。柱に隠れるSCAVに弾幕を浴びせて制圧し、動けなくなつたところにレンが突っ込んでトドメを刺す。

「仕留めた！」

「フカ、お前の相棒肝が据わってるな」

「でしょでしょ？ でもコハルちゃんの伝説には劣るなあ」

「伝説って何!？」

まあ、ボスを相手に真つ向勝負、拳句俺を踏み台にして大ジャンプからの一撃とか、アスナと肩を並べるレベルで伝説になっているものな。

アスナが神速の連撃で名を馳せるなら、コハルはその苛烈さと言えるだろう。一体誰に似たんだ？

「ほら、その件は打ち上げて話すぞ。さっさとオフィス漁って移動しよう」

すぐ目の前にあるIDEAのオフィスはPCケースがあったり、棚

にレアな電子部品がスポーンしたりする。グラフィックカードとかあつたら狂喜乱舞ものだ。是非とも漁りたい。

「レイジ、私変なことしてないよね？」

「周りに変な奴しか居ないだろ？ 気にしたら負け」

「ねえ、それフォローになってないよ！」

笑いながら歩く俺をコハルが追いかける。まるで雛鳥のようで、レンとフカ次郎は笑っていた。噂話が出回ってるけど、うちのパートナーは可愛いもんだろ？

可愛いコハルを補給できたのはいいが、オフィスの戦利品はクソマズかった。

グラボとまでは言わないけど、せめてG phoneあたり出てくれよな。このあと電気屋でいいものがあるといいんだけど。

11層―3 服屋巡りの最中に

I D E Aを出て少し歩けば、そこには目的の服屋がある。紫のランプで照らし出される“t R e n t”で、マネキンが時々的に見えるから心臓に悪い。その横のエスカレーターから2階に上がることも可能だ。

「よし、タスク進んだよー!」

フカ次郎はそう言いながら店内を見回すが、まあ碌なものはない。畳まれた服とか布地はあるけど、どれもありきたりな代物だ。いいものは紛争初期に略奪されたんだろうな。

「レイジさん、この先はどう行きます?」

「近くの店漁りたいところだけど……特にこの先のエマーコムとか」

I n t e r c h a n g eに行くって知って、使える鍵を幾つか買ってきた。その一つが“E M E R C O M m e d i c a l k e y”であり、この近くにある医療区画を開けることができる。

「いいね、L E D Xとかグラボ狙っちゃおうぜ!」

「フカ、開けるのレイジさんだから横取りはダメだよ」

「いやまあ、早い者勝ちでいいぞ?」

「本当? やった! 今すぐ行こうぜレン!」

もう、とレンが苦笑いを浮かべるが、俺は1人だけ戦利品を独り占めしようとは思わないし、儲けが欲しけりゃソロで来る。慣れたマップだし、P M Cと交戦にならないんだからタルコフの時よりは安全だ。

同じ危険を背負ってるなら、しつかり分前は渡したい。鍵の金を出しているのは俺だが、今の環境ではそれ以上に命を賭けているのだ。

「ここだ。コハル、援護するから鍵開けてきてくれ。レン、フカ、周辺警戒!」

コハルに鍵を預け、俺たちは周辺を警戒する。ここはS C A Vの巡回ルートではないのだが、今の環境でそれは確実ではない。S C A Vが今までと違う行動を取ることはよくあったし、その可能性を考えて動くべきだろう。

「開けたよ！」

「全員中に！ 窓は弾抜けるから気をつけろよ！」

コハルがまず中へ飛び込み、レンとフカ次郎が突入。俺は最後だ。お行儀よくドアも閉めるいい子だぞ。

中はまるで集中治療室のようにベッドやモニター、点滴台の他、医療機器が並んでいる。ショッピングモールというより、病院と言われた方が納得できそうだ。

「レイジ、ここって病室だよね？ ショッピングモールなのに何でこんなところがあるの？」

「ああ、その経緯を説明すると長くなるが……」

このショッピングモールは紛争初期、EMERCOMによる救出作戦の拠点に利用されており、あちこちのテナントが救護所として活用されていた。この鍵はその一角、集中治療室として使われていたであろう区画の鍵だ。

故に、ULTRA内では薬局のほかにこういった医療施設に使われていたテナントで高価な医療品のスポーンがあつたりする。そこは大抵激戦区となる場所だ。

「へえ、だからショッピングモールなのに病院みたいな場所があるんだね」

「さっきの高速道路も、黄色い医療テントとかあつただろ？ モールに目が行きがちだけど、ここ南インターチェンジはポートランド港と工業地帯を結ぶタルコフの主要地点なのさ。救出作戦の拠点にはもってこいつてわけだな」

俺は適当なベッドに腰掛け、マガジンに予備弾を詰め込む。まだ予備のマガジンはいくつかあるけども、店長が出たら厄介すぎる。こまめに弾を込めないと、いざという時に俺が死ぬ。

それに、漁り場所なら腐るほどあるから焦らなくていい。DKBもALSもSAOプレイヤーばかり集めたせいかな、タルコフマップに突入するのをめちやくちや躊躇う。

だから、他のPMCとブツキングしていない限りは漁り放題だ。一定時間後にアイテムのスポーンも復活するしな（箱の中身や柵とかに

湧くアイテムは変わるが)

タルコフマップにMobも出なくはないが、大半はSCAVだからSAOプレイヤーにはきつい相手だろう。銃を使われるのは当然だが、見た目人間なのを剣で斬り殺すのは辛いらしい。

だからこそ、野良のPMCとかアトラスの連中が護衛として雇われるのだ。PMCらしく雇われ仕事というのも悪くはないが、俺は自由にやりたいものでね。

「お、レン！ グラボ！ グラボだ！」

「よく見て、それプリント回路基盤だよ」

「ノオオオオオ！」

うん、これには笑い転げた。コハルにはわからないようで、首を傾げているが当然か。

グラフィックカードもサーキットボードも見た目は回路基盤だから、特に暗いこの室内では見間違えなくもない。

グラフィックカードは上面にファンがあるからそれですぐわかるのだが、机にスポーンしているときは意地悪なことに、下面の回路部分がプレイヤーを向く。本当にひどいトラップだと思うよ。

「ドンマイ、フカ。次は自分で開けることだな」

「うう、まずいよお……旨味は何処に……」

そんな事もあるさ。グラフィックカードやLEDXがスポーンするが、それはその確率があるというだけで必ずあるわけではない。必ずあったらそもそもレアアイテムではない。

俺だって、何回か開けて1回しかグラフィックカードを見たことないしな。まあ、大抵先に開けられてるからなんだが。

「一回IDEA裏の搬入口から外に出て、発電所の電源を入れに行こう。流星に俺も破産しちまう」

IDEAの裏を出てすぐのところ発電所があり、その電源盤から電力を復旧することで、いくつかの鍵が開けられるようになる。

特に、ULTRA医療倉庫とキバストアの2箇所が開けられるのはかなり美味しい。片方は高額な医療機器がスポーンし、もう片方はガンショップだけあって武器のパーツの他、カスタム済みの武器がス

ポーンするのだ。

この2箇所は鍵はビツクリするほど高額だから、俺1人では買い揃えられなかった。

それでリヨールと折半して買ったのだが、それでも足りずに必死に金策したのを覚えている。リシヤラ軍団を銀行扱いしたのはいい思い出だ。

「レイジ、でも私といろいろ食べに行ったよね……?」

「ああ、カードキーの在庫何枚か売った。ラボが見つかってない現状、そこまで高くなかったけど」

それでも数十万コルになったし、まあまあ貯けた。しばらくコハルと飲み食いしても困らないくらいだけど、攻略の資金には足りない位なので、この辺で儲けておきたいものだ。

「よかったの? レアアイテムでしょ?」

「ラボがまだないから役に立たないもん。それよりコハルと飯だ」

「もう、レイジってば……」

コハルが凍りつく。フカ次郎がニヤニヤ笑っていて、その後ろではレンが微笑ましいものを見るかのように微笑んでいた。

たちまち顔が真っ赤になっていく。その七変化を見ていて、やはり笑えてきてしまう。本当によく表情が動いて可愛いものだ。

「熱々だねえ。ねえねえ隊長殿、噂の副官殿を私に紹介してくれたりしないかなあ?」

「いいけど、奴は某スナイパーの下僕になってるぞ」

「問題ないない。私がよしよしと癒してあげればイチコロだぜ!」

まあ、紹介するのはタダか。奴が修羅場になろうが俺は知らねえ。シノンに始末されるか、フカに沈められるか、俺はポップコーンを持って静かに眺めるとしようか。

この後は一回IDEAのバックヤードから外に出て、発電所の電源を復旧するでしょうか。

11層―4 万引き犯にはお仕置きを

順調に店巡りを進めるうちに、ULTRAにある大きいテナントの一つの“Goshan”であり、キрил文字でГошаHと書かれている。

ここは食品マーケットであり、飲食物が大量にスポンする。マップにあるスポーツバッグやSCAVの死体を漁らずとも、棚にスポンしているのだからありがたい事だ。

食料がないと大変なことになる現状で、こんなに美味しい場所があると知ったらどうなる事だろう。恐らくDKBとALSが大喧嘩しながら搔つ攫うだろうか。あ、でも店長いるから無理だな。

「うひよひよ、見てよレン！ Tushonkaが一杯だよ！ タスクが進むよ、やったねレンちゃん！」

「レイジさんたちの取り分も忘れちゃダメだよ？」

レンは取り分の回収を終え、マガジンに予備弾を込めている。彼女がレジ周りのSCAVを始末してくれたのは本当に助かった。

俺のイゴルニクは1発当たりのダメージが低く、アーマーを着ていない相手にはキルタイムが長くなるのだ。お陰で助かっている。

「気にすんな。後でキバストアの鍵開けるからな」

ここに来る前、マップ北東端にある発電所で電源を入れてきた。おかげで店内にブザーが鳴り響き、電源の復旧を伝えている。電源を復旧する事で、目的のキバストアを含めた、特定の鍵を開けられるようになる。

他の所の儲けを全部渡しても、キバストアさえ漁れば取り分としては申し分ないさ。

「でも、お腹減りましたよね？」

「まーな。先にレンとコハルで食っててよ。俺が辺り見張つとくから」

「それじゃあお先に。コハルさん」

「ありがとう。すぐに食べるから待っててね」

「ゆっくりでいいぜ。でも、ケーキがあったら半分こ、な」

俺はしゃがみ、コハルに背を向けて店内を見張る。漁っている場所がGoshanの側面壁際の商品棚ということもあり、下手したら追い詰められて大変なことになる。早期発見は大切だ。

コハルとレンは急いで食べているようだが、そこまで焦らなくてもいいのに。確かにエネルギー残量は心許ないけれども。

「レイジ、食べ終わったから代わるよ」

「隣で食うから、何か動いたら教えてくれよ」

視線がどうしても外れる以上、代わりの目が必要になる。コハルが見ていてくれるのはありがたいけども、彼女のダガーでは戦えまい。

コハルが敵を見つけたらすぐに反撃できるよう、そばにAKを置いて缶詰に手を伸ばす。カラフトマスの缶詰か。水も必要だな。

「ねえ、何かいるよ」

缶詰を放り投げて、コハルの襟を掴んで引き摺り倒す。一瞬だけ見えた黒のマスクヘルメット。それが普通のSCAVではないことは明白で、こうしなければ恐ろしいことになるのをよく知っている。

「伏せろ！」

声は後で出た。無数の銃弾がコハルの体があつた場所を貫き、フカ次郎が食べていた缶詰を取り落とす。

来てしまった。いつだかのアップデートでULTRA全域にスポーンするようになった、店長ことKilliaだ！

「わわっ!? 私のシチューー！」

「そんなことより店長だよ！」

商品棚をブチ抜き、辺りに段ボールや棚の破片が飛び散る。音と貫通力からして、RPKにイゴルニクを詰めてやがるな！

「このクソポジションから撤退しようぜ！ 雨みたいにクソ弾が飛んできやがる！」

「レイジ、口が悪いよ！」

足音がする。キラがダッシュで詰めてきたな。重量嵩む装備の癖に、とんでもない瞬足なのが困る！

「あのバカ来やがった！ フカ、グレポン用意！ レンとコハルはオフィスに下がれ！ 援護する！」

「りよーかい、とっておき行くよ！」

僅かに身を乗り出して応射すると、キラは物陰に飛び込んだ。よしよし、それでいい。コハルたちが下がる時間を稼げれば儲けものだ。

「コハル、レン、行け！ フカ、グレポン撃て！」

「へへへ、月まで吹っ飛べ！」

フカ次郎が身を乗り出してランチャーを構えると、同時にキラが身を乗り出す。最悪のタイミングだ。

キラに俺の弾丸が命中するが、奴はお構いなくフカを銃撃した。

「わわっ!？」

「スーカ！」

フカ次郎が腕に被弾した。タルコフは被弾時の衝撃で狙いが跳ね上がってしまうため、跳ね上がったのと同時に放った榴弾はキラの頭上を飛び越していく。

ああチキシヨウ、アレが当たれば円満解決だったのに！

「フカ、カバーしてやるから退け！」

「レイジは!？」

「自力でなんとかするさ！ 行け！」

咄嗟に身を隠すと、キラの制圧射撃が襲いかかってきた。しめた、フカ次郎から狙いが逸れたおかげで、あっさりと逃げられたようだ。後は俺だけだな。

まあ、そうも上手くないか。キラ店長が走って来てるし、逃げられそうにない。一か八かの正面戦闘を挑む羽目になるとは、俺も焼きが回ったのかもしれないな。

「そのまま隠れとけよ！」

聞き覚えのある男の声。響き渡る金属音と、遅れて硬い床に何か鉄の塊が落ちる音。あの大馬鹿野郎、棚の向こうから俺のすぐそこにグレネード投げ込みやがった。

でも、おかげでキラ店長が叫びながら下がって行く。流石のキラとてグレネードには耐えられないし、そういうアルゴリズムだもんな。

「このクソバカ野郎が！」

俺は走り出す。すぐそこにグレネードはあるけれど、今しかチャン

スがない。飛んできたのが見えたけど、アレならばギリギリ間に合うはずだ。

背中を銃弾が掠め、脚に喰らった。左脚が壊死した俺は転がるように転倒してしまうが、我が相棒はプレートキャリアの取っ手を掴んで物陰に引き摺り込んでくれた。

そこでようやくグレネードが炸裂する。効果範囲が広い代わりに、信管作動が5秒のM67フラググレネードだったのだ。よくアレを使う気になったな。

「よう相棒、まだ生きてるか？　今のうちに鎮痛キメて退がりな！」
「助かったよ、相棒！」

乱入者であるリョーハはもう一個、柵越しにグレネードを投げ込む。今度はスタングレネードでキラの目を潰す。

ここで戦うのは不利。そう判断した俺たちは全力で退却することにした。行き先はキラの巡回ルートから外れた2階。ダッシュで上まで追いかけてくることはあるけれども、目潰しした今ならば追われる心配はない。

止まったエスカレーターを駆け上がり、バーガーショップに駆け込むまではそこまで長い時間を必要としなかった。

「全く、会うたびにとんでもないのを引き連れてくるわね」

シノンは入口を警戒しつつ、そんな軽口を飛ばしてくる。嫌味と言うべきか？　俺は悪くねえ。向こうが勝手にくるんだ。

「ま、今に始まったことじゃねーだろ」

リョーハはゲラゲラ笑いながら別の入口を見張っている。この野郎、後で覚えておけよ？　まーたAS—VALとかいうクソ武器使いやがって。

「おやおや、君が噂の副官殿かね？」

「おうおう、アトラスの死神リョーハとは俺のことよ。姉さんどつかで会ったことあるか？」

おーっと、フカ次郎がリョーハに絡み始めた。シノンが鋭い目でフカ次郎を睨み、その流れ弾を喰らったレンが震え上がっている。体デカイのにビビるなよ。

「とうか、フカ次郎って緩くウエーブのかかった茶髪に、少しダウンーっぽい感じのゆるふわお姉さんみたいな見た目……あ、リョーハの好みドストライクじゃね？」

「やあやあ忘れたかい？ パンを啜えて走ってきた私にぶつかって、その後朝礼で再会したじゃないかい？」

「ははは、あん時のうっかりさんか？」

嘘こけ。そしてシノンさん、ドラグノフの銃口、リョーハに向いてません？ しかも股間に。

「いいねえいいねえ、ノリノリでいいねえ。隊長殿、副官をもらってもいいーかい？」

好きにしろ、と言おうとして俺は凍りついた。シノンの素敵な笑顔が「お前を殺す」と言っているように見えたからだろうな。

勘弁してくださいねえ、姉さん、男の取り合いに巻き込まれて死んだとか、流石に死んでも死に切れねえつす。

「そこは飼い主に相談してくれ。リョーハ、今のところシノンの下僕になつてるから」

「おい相棒、本人の前で人身売買するなや！」

苦笑いを浮かべるコハルへアップルジュースを差し出しつつ、シノンとの交渉へ向かうフカ次郎を見送る。レンが頭を抱えているところを見るに、今に始まった話じゃないんだろうな。

あ、いきなり交渉決裂して、シノンにそっぽ向かれてやんの。

11層―5 バーガーショップ作戦会議

治療が終わって尚、俺たちは2階のバーガーショップでグダを巻いていた。

そりやそうだ。戦力的には強いボスなんていくらでもいるけど、キラの威圧はまた別格なんだぞ。しかも、この環境で真つ向勝負なんてしたくもない。

それと、フカ次郎とシノンの冷戦まで始まったからな。BEARとUSECで代理戦争するな。フカはひつついて誘惑してるし、シノンはレーションをアーンしているし、あの野郎羨まけしからんな。

「ねえ、そのボスって迂回できないの？」

ここで漸く、コハルが真つ当な意見を出してくれた。よしよし、やっぱり俺のパートナーは最高だよ。

「わわっ、恥ずかしいから頭撫でないで……!」

コハルが顔を真つ赤にして照れるのもかわいものだ。レンのジト目が突き刺さるのが痛いけど、気にするものか。コハルが可愛いんだからいいだろう。

「それで、迂回するんですか？」

レンにまで答えを求められれば、答えるしかなからう。コハルを撫でるのをやめて、俺は席に座り直す。

「それも一つの案ではあるが、逃げ切れると思うか？ それくらいなら帰った方が安全だぞ」

キラは店内をウロウロと歩き回る。確かにその場で止まっていることも多いが、巡回されたら厄介だ。店長の警備は厳しいからな。

たまにテナントで音もなく籠ってる事もあるし、入っていきなりスーカブリヤー、って声がしてビビることがある。怖くてたまらない。

「それなら、戦うんですか？」

「リョーハ、奴を落とせるか？」

「さつきタチャンカがキラ狩りしてたし、やれるんじゃないか？ それに付き合わされたから口直ししに来たのに、今度はお前らが絡まれ

てたってな。とんだ厄日だぜ」

「おい、晒し首の犯人あの野郎かよ。兎も角、現有装備でキラを仕留められるな？」

タチヤンカめ、なんでわざわざキラのマスクを晒したんだ？ 本当にあいつのやることは分からない。ブラックバーンもドン引きだろうよ。

「ああ、お前のイゴルニクにフカ次郎のグレポンがあれば間違いなく。だがそれには運と技術が絡むぞ」

そりやそうだ。キラはいかなるアーマーも初撃から貫き、胸部に3発も当たればこっちはダウンしてしまう。いかに被弾を減らし、先に相手を落とすかという削り合いなのだ。

「なら、俺がキラを仕留めてやる」

「おい、俺にもやらせろ。背中を見せるとかゴメンだからな。やつぱり、逃げたくねえよ」

「ダメだよ、危険すぎるー」

思わず面食らった。コハルがいつになく、強い口調で反対を示したのだ。初めてのことのような気がする。

それでも、危険を背負うのは俺だけでいい。命知らずの名は、このためにあるのだから。

「俺とリョーハならば返り討ちにできる。俺らが適任なんだよ。というか、戦いたいんだ」

それでも、コハルは首を横に振った。俺の袖を掴んで、行かないでくれと。でも俺は自分以外の誰かを死なせたくない。

逃げるにしたって、1階は通らなければならぬ。上手く射線を切って逃げることは出来るから、そうすればいいのだ。下手にキラと戦わなくてもいい。

でも俺が、それで満足できないんだ。俺は戦いたい。そうじゃなきゃ、俺がここにいる意味がわからなくなるから。

現実に戻っても、何も残らないから。だからせめて、誇りが持てるこの場所で自分らしく戦っていたい。

「ならば、その囷は私がやります」

手を挙げたのはレンだった。そんな危険な橋を渡せられるか。そう言おうとするより先に、フカ次郎が高笑いし始めた。

「コヒーとキラのかけっこ、ついに実現つつっ！ 早く早く、今すぐやろうぜ！」

「コヒー言うな、レンだから。あと、かけっこなんてレベルじゃないからね？」

ぶっちゃけ、キラは無茶苦茶足が速い。それから逃げ切れるのか？ 「聞いて驚け、レンの持久力エンデュランススキルは既にエリート！ 筋力もそこそこ上げてるし、ドーピングすれば店長からだって逃げ切れちゃう！」 「ハードル上げないで！」

ほうほう、それならば少し希望が見えてきたかもしれない。キラを倒せばこのエリアは安全になる。

でも、なんだか残念な気がする。俺は戦いたかったのだ。生きるか死ぬかの瀬戸際に身を置いて、その中を戦い抜くのが好きだったのだ。

現実なんか帰りたくないって思うような、そんなギリギリの戦場の駆け引きを俺は愛しているんだ。

目を逸らした。レンが何かギョツとしたように見えたが、どうだっ
ていい。使える手札で仕掛けてやるだけだ。縛りの中で戦ってやる。
「ならば、いっちょ暴れてやろうぜ。脳筋タチャンカと違って、俺が知
将だっつとところ見せてやるよ」

おいマジか、つて目をするリョーハの頭をシバいて、俺は作戦を説明する。まあ、これも結局俺の命が賭け金になってるわけだがな。自分自身が暴れたいんだ。コハルを泣かせない程度にやってやるさ。

そうだ、みんなで仕留めるように見せて、俺が最前線に来るようにすればいい。コハルを泣かせたくないのも確かだが、やっぱり俺は戦っていたいんだ。

USEC Operator“LENN”

バーガーショップの片隅で、空になりそうなマガジンに予備弾薬を込める。その間はレイジさんが入り口の見張りを代わってくれてい

て、狼みたいに動かず、静かに辺りを見つめていた。

「ねえ、コハルさん」

「コハル、でいいよ。どうしたの?」

私よりも背が低くて、勿論私が大きすぎるだけなんだけど、可愛い霧囲気のコハルは笑顔を向けてくれた。

「レイジさんとは長いの?」

「うん。最初の日からずっと一緒だよ。でも、タルコフのマップだと、守ってもらってばかりで悔しいけどね」

確かに、フィールドならば相手が相手だからコハルが活躍するだろうけど、SCAVみたいに銃を持った相手じゃ不利だよな。

私もフカとフィールドに出たら、ボア相手にも苦戦してたからね。WoodsならばSCAV相手に余裕を持っていられたのに。

「あの目も、その時から?」

「目?」

「ああいや、ほら! なんだか黒目っていうより、茶色が濃いでしょ?

羨ましいなーって」

「確かに、近くで見るとそうかも!」

初対面の人に聞くような話じゃなかったかな。それでも気になつて仕方なかったから、つい漏らしちゃった。

どうして、全てを諦めたような冷たい目をしているのか。さっきまで爛々と輝いて、楽しそうにしていたというのに。そんな光がフツと消えて、底知れぬ深淵だけがあつたのが怖かった。

茶色が濃い? そんなの少し見ればわかる話。そんな事よりも、ドス黒く、本当に深淵が見つめているかのようなあの目が怖かった。

11層―6 店長こちら、銃鳴る方へ

BEAR Operator” Rage”

「レイジとコハルはキバストア前に移動中」

1階中央の中央通路を警戒しながら進む。後ろにコハルがいて、腰のポーチにはグレネードを入れている。俺のをいくつか分けたのだ。

2階の吹き抜けからはシノンとフカ次郎が狙っている。この辺りにキラがいたならば俺が引きつけ、突っ込んできたところをシノンの狙撃とフカのグレネードで仕留める算段だ。

『フカ次郎、配置かんりよー。ねえねえリョーハあ、この後予定ある？』

『こら、集中しなさい』

僅かに入ったノイズは、シノンがフカ次郎をシバいた音だろうか？

あの野郎、ハーレムになっちまいそうだな。

『後にしろ。こっちはOLIを制圧。キラはいないぜ』

リョーハも本気モードか。バーガーシヨップではフカ次郎やシノンに挟まれて楽しそうにしていたのに、今はただ、刃のように研ぎ澄まされた兵士の姿のみが残る。

それでいい。それでこそ死神リョーハだ。

『こちらレン。IDEAもSCAVだけでした』

ならば、キラはまだGoshanから動いていないんだろう。あそこに湧いたキラがこれで寄ってくるのかは不明だが、試す価値はあるだろう。

「コハル、その扉を開けてくれ。二重扉だから、2つ鍵を開けるんだぞ」

「これだね」

コハルに2つの鍵を託す。キバストアは扉と鉄格子の二重扉になっていて、それぞれ違う鍵を開ける必要がある。

その2つ目、鉄格子の扉の鍵を開けた瞬間に警報が鳴り響き、キラがおびき寄せられる。そうやって釣り出すのが今回の作戦だ。

「ああ、俺が見張ってるから早めにな。後は中に入って待ち構えるぞ」

キバストアは防弾ガラスなので、キラの射撃も防げる。それ以前に、鍵部屋はSCAVの探知圏外だから、ここにいる限りはヘイトを買う心配も無いわけだ。

一つ目の鍵が開いて、それに遅れて重い金属の扉をコハルが開く。俺はそれに背を向けていて、中央通路をずっと警戒していた。

「……レイジ」

「どうした？」

鍵を間違えたか。そう思って振り向くと、コハルが俺の右手に手を添えてきた。その怯えたような目から目を背けられなくて、忘れることもできないだろう。

「……死なないで」

「死なねえよ。今のところ生きてるだろ？」

「何度も死にかけたでしょう？ 少しは私の身にもなってよ」

「わかったよ……って、何度目だろうな、この話」

「言わないと忘れるんだもん。シュトゥルマンの時のこと、忘れてないからね」

それを言われたら、何も反論できなくなる。キラはそれ以上にやばい相手に、クラス5のアーマーでさえ無意味にされてしまう。それを相手にして、無事でいられると確約はできない。

それでも言い切るべきだろうか。嘘になったとしても、コハルを笑わせるために。

「今度こそやってみせるさ。コハルとお別れしたくねえし」

「それは私もだよ。一緒に生き残ろうね」

ああ、と一言返して視線を戻す。中央通路は2階吹き抜けからフカ次郎とシノンが見ている。俺が見るべきはその反対側、壁沿いの通路から来る可能性に備えるのだ。

壁沿いには電気屋のラスミューセンと、スポーツショップのアイツクがある。特に、アイツクはキラが隠れていることもあるので、油断できない位置でもある。

「コハル、開けてくれ。シノン、フカ、射撃用意！」

俺は柱に身を隠し、ラスミューセン方面に目を向ける。中央廊下に

背中を向けることにはなるが、それは上から仲間が守ってくれるから大丈夫だろう。

そうやって生き残ってきたのだから、今回だってそうするさ。生きてここから脱出できるだろうと信じて。次の戦場に立つためにも。

「開けるよー」

カチャ、と音がして鍵が開く。途端にけたたましいアラームが鳴り響き、コハルが可愛い悲鳴をあげるのが少しだけ聞こえた。

足音さえもかき消すこのアラームに、キラは食いつくだろうか。そうでなければ、奴がどこへいるのかわからないまま戦うことになってしまう。

『おお？ G o s h a n 方面から来てるぜえ！ いらっしやいませ！』

銃声にしては間抜けな音がして、僅かなラグのちに爆音が轟く。それは一撃でアーマーを破壊し、相手を死に至らしめる程の大ダメージを与える必殺の榴弾。それが背中爆発するのは怖いし、誤射されたらたまったものではない。

でもまあ、今回はちゃんと敵に当たったようだ。呻き声が聞こえてくる。しかし、この声はキラではないようにも聞こえる。

『今のは普通のSCAVね。キラじゃないわ』

『ちえー、M443は高いんだぞー！』

ハズレだったようだ。しかし、ラスミューセン方面から足音も聞こえないし、キラはまだG o s h a n に立て籠っているのだろうか？

嫌な予感がする。中央通路は上から2人が守っていて、さらに通路中心には花壇がキバストアへの射線を遮っているものの、完全にはない。半分くらいは見えているのだ。

もしも、予想に反してそこから来たなら、どうなるのか？

その答えは銃声だった。右半身を下げるように振り返ると、残された左腕に銃弾が当たる。痺れるような感触と共に赤いガラス片のエフェクトが飛び散った。

「レイジー！」

「無事だ！ シノン、奴はマンティス方面！」

一瞬だけ光が見えた。中央通路を挟んで反対側、青くMantisと店名の光るテナントの中にいたのだ。俺たちがバーガーショップでもたついているうちに移動していたのか？

そんな思考が巡る中、柱の影に飛び込んで背を預ける。いくらイゴルニクとはいえ、柱は貫通できない。でも、その制圧射撃のせいで俺は動けなくなってしまう。この柱が俺の城壁というわけだ。

『レイジ、レイジ、俺もそっちに行く！』

『こちらレン、私は挟みに行きます！』

『レイジ、早く中に！』

コハルが手を伸ばすが、それを狙ってキラの弾幕が降り注いできて、流石にコハルも手を引つ込める。だった3メートルくらいの距離だというのに、遠くに感じる。

足音が聞こえる。詰めてきやがったな。こんな時に限ってシノンとフカ次郎は移動中。俺1人で対処せざるを得ない。

「俺もそっち行きたいよー！」

せめて、死ぬならコハルの側がいいんだけどな。ここで死んだらもったいないし、まだコハルに好きだって、そんな一言さえ言えていないんだぞ。

だから、ポケットからグレネードを取り出してピンを抜いた。突っ込んでくるキラもこれはダメだからな。足止めには丁度いい。

「グレネード投げろー！」

響く金属音と共にキラの悲鳴が上がる。更には、ラスミューセン方向から銃弾が飛んできた。あまりにも静かで、ボルト作動音だけが微かに聞こえる。それが誰かなんて、聞く必要もなかった。

「レイジ、てめーの左後方からカバーしてる！ キバに突っ込め！」

奴の怒鳴り声が聞こえる。右斜め前に走ればキバストアがあつて、コハルが手を伸ばして待っている。動くならば今しかない。

「行くぞー！」

たちまちタゲが俺に向いた。無数の銃弾が飛んできて、当たる寸前を見えない殺意が貫いていく。

腹に当たった。そして、脚にも。左脚が壊死して、俺はキバストア

を前に転びかけた。すぐる思いで伸ばした手は、コハルがしっかりと握りしめてくれる。

「来てー！」

「助かるー！」

コハルに引つ張られ、俺はキバストアの中に文字通り転がり込む。脚をやられてまともに立てないが、それでもなんとか入れた。防弾ガラスに守られる安心感やはり格別だ。

そして何より、コハルを泣かせずに済んだのが何よりも嬉しい。それこそ、軽口を叩く元気もまだあるからな。

「ほら、死なないって言ったろ？」

「ボロボロじゃない！ 早く治療してー！」

「んじゃこれ渡すから、店長が来たら投げつけてやれ！」

コハルにF-1グレンードを追加で渡しておき、俺は治療に取り掛かる。その間にも、リョーハたちがキラを追い詰めていくはずだ。

『レンです。IDEA側からキラを挟みました！』

『シノンとフカも上についたわ。でも、キラがマンティスに入って撃てない！』

ありやりや、あそこに入られたか。暗い上に、病室代わりに使われていたせいでパーテーションが多く、入り組んだテナントだ。突っ込んで接近戦に持ち込むしなくなる。

「レンとリョーハはマンティスに接近して、圧をかけてくれ。治療次第俺もいく。ケリをつけるぞー！」

さーて、そろそろ決めるとしようか。店内の壁にはP90がスポーンしてるし、あれを持っていけば咄嗟に使えるかもな。

11層―7 包囲網

マンティスからはひっきりなしに銃声が響いて、迫っていたレンとリヨーハを寄せ付けない。マンティスは完全にキラの城になってしまっていた。

その間に俺の足と腕の治療が終わり、戦闘体制がようやく整った。コハルは心配そうだが、やらなければ仲間がやばいからな。

マンティスの入口は正面と側面の2箇所、内部は病室代わりに使われていたらしく、パーテーションで迷路のように区切られている。

キラはそこから顔を出しては応戦して来ていて、当てたとしても引っ込んで回復される。つまり、長期戦が嫌なら突っ込んで仕留めるしかないのだ。

『レイジ、籠城されている限りは手出し出来ないわよ。突っ込むとしたら、フカ次郎单品ね』

『M4はあるけど、射撃下手なんだよお……リヨーハあ、守っておくれよ』

『それなら絶賛実行中！ レイジ、そろそろ残弾やべえから代わってくれ！』

「今行く。コハル、悪いけどカバー頼む。俺の死角から敵が来ないか、目になってくれ」

一緒に戦うぞ。そんな意思を込めて声をかければ、コハルは強く頷いてくれた。

「任せて。私が目になるから」

「SCAVだったら無理せず俺に言えよ？ それか、グレネードを投げつけて追い払ってやれ」

コハルはグレネードを手に息を呑むが、決意を込めた目で俺を見返す。

「頑張るね」

「無理しない程度にな。フカ、シノンを上に残して降りてきてくれ」

『聞いたか？ お前が必要ってことだ』

『へへへっ、リヨーハの頼みならすぐ行くぜっ！』

カンカンカン、そんなエスカレーターを駆け降りてくる音がする。フカ次郎も来てくれたなら、一気に決着をつけられるだろうさ。

俺はキバストアを飛び出し、真っ直ぐリヨーハのところへ進む。左右はあんまり見ない。コハルが守ってくれるから、何も恐れることはなかった。

「リヨーハ、スイッチ！」

「助かるぜ。弾込めてすぐ戻る！」

『レイジ、医療施設方面からSCAVが来てるわよ』

次の瞬間には銃声と共に、SCAVの悲鳴が響いてきた。シノンが狙撃で仕留めたようだ。キラを狙えない分、SCAVが不幸に見舞われることになったらしいな。

「随分仕事が早いな。リヨーハが喜んでるぜ」

『リヨーハ、喜んでないで仕事しなさい』

『だから弾がねえんだって！』

しかし、シノンは上機嫌だぞ。だって鼻歌を歌いながら狙撃してるんだ。SCAVにとっては悪夢だろうな。照れ隠しに狙撃されて、しかも正確に脳天をぶち抜かれるんだから。悪夢以外のなんだって言うんだ。

「レイジさん、私もそろそろ弾がなくなりそうです！」

「レンもかよ！ これ使え！」

レンにP90を投げ渡し、俺は再び顔を出すキラへの狙撃へと戻る。AKの60連マガジンをたっぷり持ってきたから、俺はまだ戦える。

店内からはキラが撃ち返してきて、その度に俺らも撃ち返す。でも決定打にはなっていないくて、キラは引っ込んで回復を繰り返す。いつまでも続くようにさえ思えた。

リヨーハさえ来てくれたなら、すぐに決めてやると言うのに。ああもう、どうしてこんなにももどかしい！

「レイジ、今そっちいくぞ！ とりあえず3本フルで詰めた！」

「そんだけありや足りる！ レンと代わってやれ、詰めて仕留めるぞ！」

やっとリョーハが戻ってきた。ようやくこれで終わらせられる。レンは下げて、俺とリョーハが突入してカタをつける。

今頃、キラのアーマーはボロボロだろう。後は一気に火力を叩き込み、回復の間を与えずに仕留めるだけだ。それだけで終わる。

「準備OK。配置に着くぞー！」

「コハル、グレネード用意！ 合図したら、店の中に投げ込め！」

「オツケー！」

マガジンを交換。60発フルに詰まったものに変えて、ライトを点灯する。リョーハも準備が出来たようで、ヘッドセットから準備よし、という声が聞こえた。

「コハル、グレネードぶち込め！」

「投げるよ！」

コハルが投げたグレネードは入口へ飛び込み、パーテーションを飛び越して店のかなり奥に入った。キラの悲鳴と足音に遅れて爆音が響くが、呻き声は聞こえない。

まあ、やることは変わらないか。あとは俺たちの仕事だ。

「突入、突入！」

「誤射すんなよ、突っ込むぜ！」

俺とリョーハは同時にマンティス店内へ突入し、仕切られた区画一つ一つを制圧して進む。そんなの、1分もあれば片付くくらいの量だった。

角を曲がると、暗闇の中からそれは浮かび上がった。近過ぎて、ライトが浮かび上がらせたのはタンカラーのアーマーの一部と、そこに白く書かれた「KILL」の文字だけ。

「Aaaaaaa！」

「クソが！」

キラはRPKを振りかぶり、ストックで俺を殴りつけてきた。こんな行動パターン、今まで見たことがないぞー！

咄嗟にしゃがんで回避し、肩に逆さに取り付けていたナイフを抜き放つ。ここまで接近したら銃よりナイフの方が早そうだ。

でも、その手はキラの銃に弾かれた。クソ、槍みたいに使って来や

がる！

「レイジ、退け！」

「このクソを何とかしてくれ！」

キラと取っ組み合いの格闘になり、リヨーハが後ろから来るけど撃たずにいる。撃つたら俺も巻き添えだ。

「レイジ、離れて！」

今度は後ろから、耳に心地いいコハルの声がする。キラが振り回す銃を弾いてしやがむと、その上を閃光が駆け抜けた。

コハルのソードスキルが緑の光を纏い、キラのヘルメットを捉える。これなら仕留めただろ、誰もがそう思ったし、俺も確信していた。でも、それは間違いだった。マスカヘルメットのバイザー、あの鉄仮面はコハルのダガーを弾き、硬直したコハルは銃床で殴られて後ろへと吹き飛んでいく。

悲鳴が聞こえ、心臓が握り潰されたような感覚がした。そして溢れ出るのは怒りの感情。よくも、俺のパートナーをやってくれたな、このクソが！

堪えられない。例え相打ちでも構わないから殺してやる。AI相手だというのに、俺は堪えられない。殺さなければ、収まりがつかない。

「死ぬ、スーカ！」

前蹴りでキラの胸を捉える。押し出すような蹴りをまともに食らったキラは体制を崩し、俺と距離ができたことでリヨーハが弾幕を浴びせた。

これで落ちるか、そう思ったのも束の間、キラは咄嗟に伏せてリヨーハへ撃ち返した。

「おいマジか!？」

流石にリヨーハの判断は早く、飛び退くように近くの物陰へ隠れる。俺もようやく体勢を整えて撃ちまくったが、キラはクラウチングスタートの如く走り出した。こいつ、元アスリートだけどやってたのは陸上競技じゃねえだろ！

「レン、そっち行ったぞ！」

追いきれない。キラの足が早過ぎるのだ。そして、その逃げた先にはレンが待っている。

「おっと、このフカ次郎様が相手だぜー！」

店を飛び出した瞬間、一つの爆音とともにキラがよろめいた。足から血飛沫のエフェクトが飛び散り、動きが止まる。

榴弾じゃない。確かに何かを撃ったようだが、はてさてどうしてか爆発に味方を巻き込むことなく、キラの足だけを破壊してみせた。後でトリックを聞くとしよう。

「これで、倒れろ！」

柱に隠れていたレンが飛び出す。そのまま、キラの胸にP90を押し付けるようにしてトリガーを引くと、釘打ち機かのように弾丸が胸に撃ち込まれる。

アーマーは俺とリョーハがボコボコにした。P90のSS190でも十分貫けるはずだ。

呻き声上がる。重量物を叩きつけたような音を響かせて、キラがようやく崩れ落ちた。

シノンのため息が聞こえる。今回の手柄はフカとレンに持っていたかんだ。それもそうだろうな。

こうして漸く、ULTARには静寂が戻ってきた。

幕間 クリスマスのタルコフで

BEAR Operator “Rage”
Aincrad layer1 “Woods”

Woodsが雪に覆われるなんて、誰が予想しただろうか？ 少なくとも、タルコフがタルコフだった頃にはなかったイベントだ。どうも、アインクラッドの季節に合わせているらしい。

そんな雪降る森の中をコハルと歩く。どうやら、マップにクリスマスツリーが出現しているらしく、それを確認するタスクが出てきたのだ。

もちろん、PC版のバージョン0.12.12で予習済みだから場所が変わっていないければ間違わない。

「雪景色って綺麗だね」

「去年の年末は散々だったし、気にしてる余裕なかったな」

そうそう、少数部隊で5層のボスに挑むハメになって、レイダーには殺されかけて散々だったな。つい昨日のことみたいにも思える。

あの激動の年末に比べれば、コハルと一緒にクリスマスツリー巡りなんてご褒美みたいなものだ。デートって言い張ってもいいよな？

「あ、アレじゃないかな？」

湖畔の栈橋に、不釣り合いなモミの木が聳え立つ。その根本にはプレゼントボックスがいくつも転がっていて、SCAVが歩いているが敵対する様子もない。

そう言えば、Woodsのクリスマスツリーの周りには特に敵対しないSCAVがいたっけ。後味も悪いし、殺さないでいてやろうかな。

「行くか。あのSCAVは敵対しないはずだし、放置でいいか？」

「そうだね。クリスマスに殺し合う必要なんてないもん」

本当にコハルは優しいんだから。襲ってきたオレンジプレイヤーも殺さない程、心優しい真の善人なんだ。

こんなコハルに、俺は顔向けできるのだろうか？ そんな思いがちくりと胸を刺し、思わず首を振る。今はよそう。クリスマスを楽しみ

にきたんだから。

そうして棧橋に足を踏み入れると、パレットやソファアールの上にアンティーク品がスポンしていた。ツリーを確認するタスクの完了音も鳴り、やることは終わった。

「いいものあったか？」

「花瓶が落ちてたよ。これ、ラグマンが欲しがってたものじゃないかな？」

「コハルは運がいいな。俺なんて馬の置物だよ」

置物をソファアールから取り、バッグへ仕舞う。さて行こうかと思つたが、コハルはそのソファアールへ腰掛け、俺の手を引いて隣へ誘ってきた。

今はPMCに狙撃される心配をしなくていい。少しくらい楽しんでもいいだろうと、隣に腰掛けてツリーを見上げる。

「少し休んでいこうよ。せつかく綺麗なツリーがあるんだから」

「悪くないな。まあそんなこともあるかと」

バックパックから紅茶の入った水筒を取り出し、片方をコハルへ差し出す。丁度、コハルはストレージから取り出したであろうロールケーキを俺へ差し出していた。

「これ、5層の時のじゃないか？」

「正解。迷宮区で食べたの覚えてる？」

「忘れるわけがねえ」

リーダーとしての責任感に潰されかけていたところに、コハルが来てくれたのが何よりも嬉しかった。

隣にいてくれて、いつも支えてくれるコハルが今も心強く思える。

守られてばかりいた少女が、本当に強くなったものだ。感慨深く思っていたら、ソファアールに置いていた手をコハルに握られる。

グローブ越しにもわかる、その手の暖かき。思わずこの体ごと委ねたくなるくらい、優しい手のひらだ。

「またコハルと年の瀬を迎えられて嬉しいよ」

「私もだよ。お互い、やっと生きてここまで来れたね」

そう言つてコハルが微笑む。おかげで目がコハルに釘付けだ。こんなことなら、正式に恋人になつておくべきだった。そうすれば、こ

んなところでヤキモキせずに済んだのだから。

だから、今ここで言ってしまったおうかと思った。でもタイミングを逃してしまつたらしく、コハルは立ち上がって俺に手を差し出してくる。

「行こう、レイジ。まだ行く場所があるんだから」

「了解です、コハル殿」

その手を握って立ち上がると、コハルは手を離してくれなかった。この先しばらくはSCAVもないし、脱出口までこのまま歩くつもりなのだろう。

少し恥ずかしい気もするが、他のプレイヤーは見当たらない。ならば、少しだけ幸せな時間を噛み締めてもバチは当たるまい。

だから、わざとゆっくり歩いた。コハルに歩幅を合わせ、いつもは前に行く俺が隣を歩く。警戒も何もおぎなりだが、構うことはない。

森の中を2人でゆっくり歩き、緑のスモークが上がるバンカーを目指す。取り留めもないことを話して笑い合う、こんな時間が何よりも嬉しくてたまらない。

「レイジ、何かいるよ?」

コハルのその一言には、流石にこの楽しい雰囲気も吹っ飛んだ。すぐに手を離してAKを構え、人影を探す。

それはすぐに見つかった。白髭に赤いサンタ帽、背中には赤いピルグリムバックパックを背負ったNPCは、やはりイベントで出てきたサンタクロースではないか。

「ありやサンタじゃねーか。アイテムくれるぞ」

「本当? タルコフにもサンタさんがいるんだ」

手招きするサンタに近寄ると、メリークリスマスと言いながらアイテムを渡してくれた。俺にはウイスキーで、コハルには何か小さな箱を渡していた。アクセサリーらしいな。

「わあ……綺麗なネックレス!」

「よかったじゃん、着けてみなよ」

すると、コハルは俺へネックレスを渡してきた。笑顔で近寄ってきたあたり、つけて欲しいのだろうか?

金具を外したあたりで、コハルは頭を寄せてきた。抱きしめるかのように手を回し、その細い首に銀のネックレスを着けると、嬉しそうに笑顔を浮かべていた。

「ど、どうかな？」

「可愛いじゃないか。よく似合ってる」

「そう？ えへへ……」

はにかむコハルが可愛くてたまらない。辛抱たまらず彼女の華奢な体を抱きしめて……

※

コハルを抱きしめようとした両腕を空振って、ボロの毛布を抱きしめたところで目が覚めた。

暗いハイドアウトでも、どこかの宿屋でもない。フィールドに点在する安全地帯、そこで雑多な毛布をかぶって寝ていただけだ。寒いし二度寝はできなさそうだ。

傍に置いたAKS-74Uは命からがら、レイダーを殺して奪ったものだ。サプレッサーとリコイルパッド、光学サイトが取り付けられてはいるが、耐久値の減ったボロ。あの頃には考えられない装備だ。着ているアーマーも、レイダーから奪った時に損傷させてしまったTrooperアーマー。明日の食料にさえも頭を痛めつつ、1人寂しく洞窟でクリスマスを越す、なんともひもじい生活か。

それでも、文句を言う権利は既がない。さつきまで夢に見ていた幸せなクリスマスも、コハルと一緒に過ごす未来さえも、俺は自ら捨て去ってしまったのだ。

自らの激情のままに力を振るい、悪魔になったあの日から。まるでSCAVのように身を落とすしかなかったのだから。

11層―8 一難去つて

ULTRA地下のセーフルームに入り、俺たちはようやく一息をつくことができた。フカ次郎なんて、ソファアーにどっかり腰掛けるぞ。尻でビットコイン潰してるのに気づいてないな？

このセーフルームは脱出地点の一つで、作戦会議をしていたバ―ガーシヨップの男子トイレ、その小便器裏に隠されたリーダーに”1ISR”カードキーを通すことでドアが開く。

なんでトイレにリーダーがあつて、シヨップピングモールにこんな隠し部屋があるんだって話だが、キーカード裏にTerraGroppeのロゴがあるからお察しくださいと言うわけだ。

「ちよつとフカ、そこどいて。ビットコイン潰してるから」

「え、ど〜ど〜ど〜!」

「少しは遠慮しなさい。キラの装備貰つたでしょ」

シノンが呆れ顔をしているので、リョーハが宥めようと頭を撫でる。あ、綺麗な一本背負いで投げ飛ばされてやんの。

伸びているリョーハをフカ次郎がよしよしして籠絡しようとしているな。あ、デレデレしてたら今度は頬をつねられてら。

そんな取り合いを尻目にウエポンケースを漁っていたら、コハルに袖を掴まれた。本当にこういう仕草が可愛いんだから。

「どうした、レアアイテムでもあつたか?」

「ううん、そうじゃないけど……」

はてさて、どうしてコハルは少し照れ臭そうにしているのか。で、少し俯くような感じになっているんだろうか。

俺も、少しリョーハの真似を試みようか。グローブを外して頭を撫でてみると、コハルの表情はほんのり笑顔へと変わっていった。どうやら、正解を引き当てたらしい。

「今回もお疲れ様、コハル」

「レイジもね。無事でよかったよ」

「コハルがキラに蹴飛ばされた時は、流石に肝が冷えたよ」

でも、これでよかった。これでまた、俺はコハルとこの先を一緒に

過ごせるわけだからな。

「さ、帰ろう。戻ったらコーヒーでもどうだ？」

「そうだね、美味しいお店探そっか」

新しい街で、コハルと一緒に美味しい店を探すのは楽しみの一つだ。今回は来て早々にレイドに出てしまったから、これから探すとしよう。

ここには命を賭けた戦いがあったて、その中でこうして騒がしい仲間を得られて、守りたいと思う人が、この先も一緒に生きたいって人が出来た。

随分と贅沢させてもらっているわけだし、茅場には感謝しないと。おかげで、俺はリアルで得られなかった幸せをここで手に入れているのだから。

「リヨーハ、漁り終えたらボタンを押せ。おうちに帰る時間だ」

「あいよ、6名様ごあんなーい」

リヨーハが壁のボタンを押すと、ドアが閉まって脱出カウントが始まる。数秒のカウントダウンが終わり、視界がブラックアウトしていくその間、俺はコハルの手を握っていた。

※

「ありがとう、兄弟！ やっぱり見立て通り、ULTRAは宝の山だったのか……早速部下を送り込まないといけないな」

達成報告をするなり、ラグマンは上機嫌になっていた。

タルコフの時と違って、トレーダーもキャラクターモデルがあるのが何より新鮮だし、人間味に溢れていて、プレイヤーと勘違いしてしまいそうにもなる。

「で、報酬をくれないか？ 派手にパーティしたもんで、弾代が無いのさ」

「勿論、ケチケチせずには用意しているさ。そして、そこのお嬢さんのためにも、腕によりをかけさせてもらったよ」

ラグマンの目線の先、そこにいるのはコハルだ。当のコハルは右や左を見て、自分しかいないと知るや、「えー!？」と声をあげた。

「君みたいな子をコーディネートするのは夢だったものでね。これを

受け取ってくれ。きつと気に入るはずだ」

コハルの前にはウィンドウが表示されている頃だろう。タスクの報酬一覧を見つめて、驚いたような顔をしていた。ラグマンは割と太っ腹だし、驚くだろうさ。

うん、金はタルコフ時代より増えてるし、報酬もピルグリムバックパックの他にアーマーもくれるのは嬉しいな。Gzhelはまあ、タスクで使うし取っておこう。

「レイジさん、援護ありがとうございました。これ、お返しします」

レンはそう言ってP90を差し出してくる。確かにキバストアの鍵を開けたのは俺だが、それはもうレンにあげたものだ。それに、俺は使わないしな。

「レンが持つておいてくれ。人にあげたもの取り返すなんてしねえよ」

「でも、結構高いですよね……?」

「弾とマガジン手に入らねえから、売るなり使うなり好きにしてくれ」

レンは俺とP90を交互に見ると、P90を強く胸に抱き締めた。

「わかりました。この銃、大事にしますね!」

「大事にしすぎて死ぬなよ。また一緒に戦おうぜ」

「またよろしくね」

俺とコハルと交互に握手すると、レンは嬉しそうに微笑んで見せてくれた。その後ろでリョーハがフカ次郎とシノンに両腕を引っ張られているのが笑える。

というか、いつそのことうちにスカウトすべきだろうか。見込みはあるし、女2人よりもギルドの庇護があった方が、何かと強みになるかもしれない。アトラスはやべーって有名なからな(アルゴ談)

「レン、良ければアトラスに来ないか?」

「え、私ですか?」

「もちろんフカもだ。2人とももつと強くなれるだろうし、来てくれると俺たちも助かる」

将来有望だし、来てくれると助かるのも事実だ。アトラスの人数は多少増えて、中堅どころもいい感じに育ってきている。ボス攻略も交

代で出撃できるくらいには。

それでももう少し人が欲しい。即戦力とは言わずとも、前線で戦う気概のある人が。そうすれば、俺はもう少し裏で動きやすくなるからな。

「おやおや、このフカ次郎様が必要だつて？ リョーハが言ってくれたら、答えるのもやぶさかじゃないんだけどなあ〜？」

そうは言うがフカ次郎、お前がリョーハの顔面に引っ付いてるせいで答えられないようだぞ。フェイスハガーかテイオーかお前は。

「フカ、リョーハさんを離してから言つて。みんな見てるから！」

「ほら、その便利屋は私のもよ……！」

シノンに引き離され、ようやくリョーハは自由を取り戻す。我が人生に一片の悔いなし、って顔しやがって。後でドロップキックの刑にしてやる。

「フカがああの状態だし、まずはお試しでいいなら入つてみたいです」

「お試し一週間無料キャンペーン、つてか？ ようこそアトラスへ」

こうして、俺たちアトラスにはまた愉快な仲間が増えることとなった。今夜は歓迎会だぞ、とアトラス所属員全員にメッセージを飛ばしておく。

おっと、アルゴに貸出中の”ラングレー”隊にも連絡しとかないとな。セルゲイとダステイにへソ曲げられたら困っちゃう。

「リョーハ、今夜はパーティだ。一旦帰還して準備するぞ。場所は、いつも通り俺のハイドアウトな」

「うーす。俺とシノンは買い出しに行つてくるわ」

「お、ならば私もリョーハについて行くぞ！」

「いや、主役が来たらダメだろ」

ぶー垂れるフカ次郎を宥めるリョーハの後方で、シノンが冷たい笑みをフカ次郎に向けていた。おいリョーハ、相方のことに気付けこのアンポンタン。

※

その1時間後、俺とコハルはハイドアウトに帰ってきた。歓迎パーティのメールには全員が参加と返信してきたし、キリトやクラインも

招待したから多分来るだろう。

「そう言えばレイジ、タスクの報酬がすごく良かったよ！」

「そんなにはしゃぐって、どんだけ良かったんだ？ スイーツ食いまくっても無くならないくらい？」

テーブルの移動やら準備をしているから、キッチンで料理中のコハルに背中を向けながら答える。顔を見ていたんだけどしようがない。後ろ歩きでテーブルを運べるわけがないからな。

「それもそうだけど……新しい防具、性能がいいの。ええと、クラス5？」

「俺のAACPCと同等レベルじゃねーか」

どうも、防具のクラス表示はタルコフと共通らしい。1〜6まであって、クラス5は大体の弾を防げる堅牢なアーマーだ。まあ、俺のイゴルニクならクラス6だろうがぶち抜くけど。

「ただ……ちよつと恥ずかしいかも」

振り向いた時には着替え終わっていた。金属製のブレストアーマーで胸部を覆い、その上からは赤に緑のアクセントが加わったコートを纏っている。おっと、下はショートパンツか。ラグマンナイス。

ただこの装備、だいぶ露出が多い。胸元と臍が見えてるし、纏っているコートも腰のあたりでボタンかベルトで1点を止めているだけ。袖も半袖だから、すらつと美しい腕が丸見えだ。

「……感謝します、ラグマンの兄弟よ」

「ちよつと……！」

コハルは顔を真っ赤にしてしまった。可愛いからいいじゃないか。

「凄く似合ってるぞ。可愛すぎて目が離せねえ」

「いつもこつちを見てるの気づいてるからね？ 視線って意外とわかるんだから」

バレてたか。次はもう少し、目だけ動かしてみれるように訓練しよう。まあ、コハルは笑ってくれているし、許されたと思っていいかな。

「レイジには、服とか装備とかなかったの？」

「あつたぜ。俺のお気に入りなんだけど、あそこ砂漠で暑いから着なかつた」

ウィンドウを開いて、装備メニューからそれを選択する。ペータの時にはこれが着たくて、必死にレベルを上げたものだ。レベル40はまだ先だが、早く着れるならそれに越したことはない。

漆黒のジャケットが俺の上半身を包む。あちこちにファスナーがあり、左肩には白いBEARのワツペンがよく映える。

これこそ、俺のお気に入りである”BEAR Black Lynx”だ。つまりは、黒のソフトシェルジャケットである。

「キリトみたい、とかいうなよ?」

「言わないよ。すごく似合っててカッコいいね」

「はは、そっかそっか」

カッコいいのはジャケットなんだろうけど、コハルにそう言われると嬉しくなってしまう。抱きしめたくなるじゃないか。

本当にやったらアレなので、そつと頭を撫でることにした。少しビックリしたように震えるが、すぐに擦り寄ってくる。目もトロンとしていて、心地良さそうだ。

「心機一転、頑張ろうな」

「うん……一緒に、ね」

こんなことを言われたら、思わずニヤけてしまう。こうしてコハルニウムを補給した俺は、また明日も攻略に勤しむ元氣を得ることができた。

12層―0 Wet Job

BEAR Operator“Rage”
Aincrad“Hide out”

俺のハイドアウトにはアトラスのメンバーが集っていた。と言っても全員じゃない。コハルやシノン、レンとフカには少し買い物に出てもらっていて、代わりに1線級部隊の連中がこの場に集まっている。

「揃ったな。セリョーガ、ダステイ、報告してくれ」

セルゲイとダステイは頷き、インテリジェンスセンターのボード前に立つ。2人はアトラスの諜報部隊“ラングレー”隊のメンバーで、普段はアルゴに貸し出している。アトラスはそのレンタル料として、アルゴから情報を貰っている。

「このところ、オレンジプレイヤーの目撃証言が増えている。被害報告もまた然りで、下層では有志の自警団を組織しているらしい」

セルゲイは溜息混じりに報告する。他のプレイヤーを傷つけたり、NPCの商店から盗みをするという悪事を働くと、頭上のアイコンが緑からオレンジに変わる。

そうなったプレイヤーは圏内へ入れなくなるなど、ペナルティを負うことになる。

そんな連中が圏外で暴れているそうだ。特に、オレンジ共のギルドが暗躍して、グリーンに被害が増えているという。いい加減、見過ごせない域に入ってきている。

「ダステイ、攻略組の動きは？」

「まだ何もないな。あいつらは攻略にお熱だ」

「だろうな」

「それでも、PMC部隊だとオレンジを返り討ちにしたという報告も多い。俺らはPvPを生業にしていたからな。それで、護衛にPMCを雇う例も増えているそうだ」

EFTは元々PvPありきのゲームだ。SAOに取り込まれたから忘れがちだが、SCAVだけでなくPMCとも殺し合う。

殺し殺され、それをPC版だけでなくVR版を1ヶ月体験してきただけでも、やはり殺しへのハードルは随分違う。正直、PKも俺たちには、いつも通り”だ。

「だが、例の扇動ギルドの件があったら？ そいつはどうなった」

リョーハが指し示す場所、壁のコルクボードには扇動ギルドのことを書いた付箋が貼り付けてあった。忘れるわけもない。モルテの野郎が仕組んでくれた5層の事件は本当にヤバかったからな。

「それならキリト、アルゴを巻き込んで最優先調査中。どうも、連中は表に出てこようとしなない」

「それでも、圏内に入れないオレンジ共が武器や食料をどう調達してるんだ？ PKだけじゃあるまい」

フィールドにあるオブジェクトを漁ったとしても、安定供給するには心許ない。武器になると尚更だ。

「それについては調査中。少なくとも、オレンジのグループに何人か調達、連絡役のグリーンがいるらしいな」

ビンラディンを追い詰めたCIAみたいなことしてる、とダステイは苦笑しながら呟く。そのグリーンを特定できれば、アジトへの強襲も可能になるだろう。調べる価値はある。

「2線級部隊で、諜報に適性ありそうな奴はいますか？」

俺が顔を向けた先にはディアベルがいる。5層を生還した彼はずっと、アトラスの2線級部隊長をもらっている。基本的にはSAOもEFTも問わず、後進の育成だ。

「それならば、ちょうど1線級へ推薦しようとしていた人がいる。レコンつて言うんだけど、情報収集能力は確かだ。戦闘能力には不安が残るけどね」

「1線に出れるなら、自衛戦闘くらい問題なく出来るのでしょう？ ダステイ、お前の下につけるから使ってやってくれ」

情報収集能力は生死を分ける。少しでも優秀な奴がいたら引き上げたいし、見込みがあるなら育てていきたい。敵が裏でこそそしているなら、俺たちはそれを暴き出すだけだ。

「アトラスは予定通り12層攻略に取り掛かるが、同時並行でオレン

ジギルドの実態解明も進める。それでいいな？」

異議なし、と声上がり、方針は決まった。その中で唯一、リョーハの手が上がる。

「オレンジの攻撃を受けた場合については？　ここで交戦規則も決めておけ」

「決まってるだろ。もし自身他者問わず、オレンジプレイヤーの攻撃を確認した場合については」

言葉を切ると、全員が俺に目を向けていた。その目はギラギラとしていて、ある日の光景を思い出しているかのようだ。

あの日々を、こいつはもまだ忘れられずにいるのだろうか。

「交戦を許可する。射殺も辞さない構えでいけ」

奴らは俺たちを殺しにくる。ならば殺す覚悟で挑まなければ、こちらの死体が増えるだけだ。タルコフでそれが身に染みているからこそ、生半可に捕獲など言わないさ。

12層―1 夕焼けの海に

12層には海があった。それはまるでShorelineのように美しい砂浜で、ヤシの木も生えている。2層よりここにShorelineを持ってきた方が良かったんじゃないかとさえ思ってしまう。

そんな水平線の向こうには夕日が沈んでいき、空は赤く染められていく。そんな幻想的な光景に、思わず目を奪われてしまった。

「レイジ、すごく綺麗だね」

「ああ、こんなにいい景色があるなんてな」

コハルの隣で眺める景色というのは最高だな。夕陽をバックに振り向くコハルが美しく、思わずスクショを撮ってしまったぞ。

「少し休憩していく?」

「夕陽が沈むまでな。ライト付けてるから帰りも安心だぞ」

「肝試しじゃないんだよ?」

笑うコハルはもっと可愛らしい。隣り合わせに砂浜へ腰掛け、少し息を抜く。この辺りにはMobがスポーンしないらしく、休憩スポットのようだ。どうやら、茅場がご褒美を用意してくれていたらしい。

砂浜に腰掛けて海を眺める。正しくは、海を眺めるコハルを眺めているようなものだけだな。

「2人きりって、久しぶりかも」

「あー、だいたいリョーハとシノンいるし、11層はレンたちも一緒だったからな」

随分賑やかなパーティだったものだ。レンとフカ次郎を入れてレベリングしたり、金策したりと騒がしくも楽しかったが、コハルと2人で歩くのは本当に久しぶりだ。

コハルとの旅路を思い出して、あの時はどうだった、楽しかった。そんな楽しい思い出を語り合い、また笑う。こんな穏やかな時間が俺は好きだ。リアルになんか帰らないで、このまま2人で楽しく生きていたい。

それでも、コハルはリアルに帰ることを願うのだろう。俺はまだ、

この暖かな揺り籠から抜け出す覚悟がつかないでいた。

そつとコハルの手を握ってみると、コハルも握り返してくれた。華奢な指が絡み付いてきて、すぐそばにいることを感じられる。この手を守ってきたし、俺も守られてきた。近くに感じられるのが、今は何よりも嬉しい。

そんな穏やかな時間が過ぎていき、漣の音が耳に心地いい。Com t a c s a e m o 外して、ありのままの音を聴く。コハルの声や息遣いさえもがありのまま耳に入ってきて、フィールドで張り詰めていた緊張が解れていく気がした。

「あ、2人とも久しぶり!」

快活そうな少女の声に振り向くと、エルフの少女がやってきた。アインクラッドにそぐわない彼女の姿はもう見慣れたものだ。

こうして、俺は覚悟を決めることをまた先延ばしにしてしまうのだ。

「よう、リーファじゃねえか。最前線まで上がってたんだな」

「うん、ここならお兄ちゃんもいると思って」

彼女はSAOに囚われた兄を探すため、わざわざSAOへダイブしてきたらしい。その時、別ゲームのキャラクターがコンバートされたとかで、それが今の姿というわけだ。

多くの女性プレイヤーが羨望の眼差しを向けていたのを思い出す。ぶっちゃけた話、最初に出会ったのが森の中だから、クエストNPCかと思ったくらいだ。胸のでかい金髪エルフとか、NPCじゃなきゃなんだって話だ。

そんな彼女の探す”カズト”とやらは、どうも最前線にいるらしい。攻略組に手がかりがあるのではないかと一緒に情報収集したことがあるし、うちの諜報班(アルゴにレンタル中)を使ったこともある。見つからなかったけどな。

「何かタレコミか?」

「それらしき人を見た、って話を聞いたの。まあ、別人かもしれないけどね」

「とはいえ、SAOにいる人間に絞られてるんだ。いつかは見つかる

さ」

死んでいなければ、の話だけどな。

どうやら、その目撃者は10層で露店をやっているらしい。ならばついでに飯にでも行こうか。リーファも混じえて、美味しい店を探しに行くのも良さそうだ。

「コハル、今日の探索はこのくらいにして、あとはリーファの手伝いしよう」

「オツケー。早くカズトさんが見つかって欲しいもんね」

人のため、と張り切るコハルはやっぱり可愛い。思わず頭を撫でて赤面させたのは、まあ別の話だ。

※

10層は和をモチーフにしているらしく、時代劇のような街並みになっている。日光江戸村を思い出すような街並みで、どこか落ち着くのは気のせいだろうか。

そう言えばこの通り、団子とお茶が美味しい店があるんだよな。コハルと一緒に茶屋の軒先で一服した時、通りかかったプレイヤーたちに微笑ましく見られて、コハルが照れてたっけ。

「そーいや、クエストでもらった和服あったよな。コハルにすごい似合ってたんだけどなあ」

また着てくれないか？ とチラチラ目を向けると、コハルはたちまち顔を赤くした。照れちゃって、本当に可愛いんだから。

「もう、今はカズトさん探しでしょー！」

また後でね、と囁いてくれるあたり、本当に可愛い。俺も和服で一緒に歩こうかな。PMCもSAOの服とかを着れるのはありがたい。

「あの……2人って付き合ってるの？」

「り、り、り、リーファさん!？」

おっと、コハルの顔が赤を通り越して爆発しそうさ。そう見られているのは嬉しいんだが、俺がチキンなせいでまだ正式に付き合うに至っていないんだよな。

「そう見えるか？」

「うん、ところ構わずイチヤイチヤしてるじゃん。ラブコメでも見て

る気分だよ」

「はは、そりゃいい」

「よくないよー!」

もー! そんな声を上げながらポカポカ叩いてくるコハルはやっぱり可愛い。おかげで心の栄養補給はバッチリだ。うん、役得役得。

「ところで、目撃者ってのはどこだ?」

「この辺りで露店をしているプレイヤーなんだけど……」

露店といえば、リズベットにそろそろ装備の修理を頼まねえとなあ。少しアーマーの耐久値が削れてるし、AKの耐久値もそろそろ限界だ。修理しすぎて最大耐久値が低下しているから、新品を作ってもらおう。

なんて考えていたら丁度いいところにリズベットの露店があった。地味な女の子とはいえ、女性プレイヤーの露店はやっぱり目立つものだ。

「すまん、寄り道。2人は先行ってて」

「オツケー。レイジさんの武器直すの?」

「というか新調だな。機関部さえ新しくすれば、パーツはまだ使えるし」

「ずっと同じ武器だと思ってたけど、そういうカラクリだったの?」

「あれ、言ってなかったか?」

コハルには言っていたと思うんだがなあ。タルコフの耐久値システムは銃の本体部分にのみ適用され、パーツは特に消耗しない。

新品のAKを調達して、部品を全部載せ替えて使っていたから、コハルには同じ武器をずっと使い続けているように見えたんだろう。変えるには変えたが、AK-74NからAK-74Mに持ち替えた程度の違いだ。

その新品のAKの調達先こそリズベットである。何気、プレイヤーメイドの武器は性能に若干の差異があるのが面白い。特に、リズで作るAKはやけに精度のパラメーターが高いんだよな。

「ともかく、ここぞで銃がぶっ壊れて死ぬのは嫌だし、新調してくる」「じゃあ、私たちは話を聞いてくるね。前のお団子屋さんで合流する

？」

「ずんだが美味しい店だな？ 先食っててよ」

早く来てね、笑顔で見送ってくれるコハルを何度も振り向きながら、俺はリズベットの露店へと足を運ぶのだった。

12層―2 顕現した悪意

「リズ、AK売ってくれ」

一言声をかけると、リズベットは金床から顔をあげた。嬉しそうな顔をしているのは、お得意様が来たからというところか。

「あら、レイジじゃない。また銃を壊したの？」

「撃つてたかもーボロボロ。敵が硬いのが悪い」

「そろそろだと思って、作っておいたわよ。アーマーも修理する？」

「頼む」

リズベットにプレートキャリアを渡し、代わりにAK―74Mを受け取る。いつも通りのやりとりだし、「マスター、いつもの」で通じてしまうかもしれない。

受け取ったAK―74Mのステータスは精度が高め、リコイルやエルゴノミクスは本来の値とあまり変わらず。うん、俺好み。

「部品も全部移植で。あと、ピストルあったりする？」

「あるわよ。お買い上げありがとうございます！」

「おい、まだ買うって言ってねーよ」

まあ買うけど。万一の時のサイドアーム欲しいからな。

「ところで、最近変わったこととかあるか？ オレンジが出張ってきてるって聞いてるぞ」

「そうねえ、噂程度には聞いわ。あたしはレイジたちが護衛してくれるおかげで助かってるけどね」

リズベットが素材集めに行くとなると、アトラスの連中は喜んで護衛を買って出る。割引目当てもあるが、実際のところはリズベット目当てだ。

アトラスなんて男ばかり。コハルは俺にべったりで、シノンはリョーハの飼い主。最近入ったフカとレンは俺やリョーハと絡むことが多く、他の女日照りの連中がリズベットを狙っているわけだ。アホどもめ。

「あいつらも割引してもらって助かってるからな。お互い様だよ」

「それくらいしかないもの。ほら、出来たわよ」

「あんがと。とりあえず、知り合いでもいいからPKの話を知ったら連絡くれ。アトラスの誰でもいい」

「その時はよろしく頼むわ」

うーん、リズベットで情報なしか。まあ、とんでもないバカじやない限りは、アトラスの隊員が護衛しているところに襲いかかりはしないだろう。

最近分かった事だが、SAOプレイヤーに対するヘッドショットにはスタン効果、その他出血や骨折のデバフの他、当てまくれば足や腕が千切れるそうさ。つまり、先制攻撃できるこちらが有利という事だ。

なんで知ってるかって？ メイベル隊に襲いかかった結果、怒れるマリモの弾幕で瀕死にまで追い込まれた大馬鹿オレンジプレイヤーがいたからだ。

そのオレンジは取調べの際「マリモが不気味な雄叫びと笑い声を上げ、電動ノコギリかのような音と共にHPバーが削れて無茶苦茶怖かった」と語っていた。今は1層の黒鉄宮にある牢獄に監禁中だ。

そんな怨念マリモ事件はさておき、マリモより遥かに大事なコハルの姿を探す。

茶屋でお団子を頬張りながら、いつもの可愛らしい笑顔を浮かべているのだろう。そう考えると、なんだか足取りが軽い。

そのはずが、団子屋より相当手前にコハルとリーファがいた。彼女たちと話し込んでいる男女ペアも見覚えがあるな。

「コハル、なんかあったか？」

「あ、レイジ。丁度よかった」

丁度いいも何も、俺はいつだって一緒だろ？ というか目の前の2人組、見覚えあると思っただらやっぱりだ。

「シンカーさんとユリエールさん？ どうもお久しぶりです」

この2人はちょっとした縁で知り合った。1層で互助組織的なギルドをやっている人で、中々フィールドに出られないようなプレイヤーを支援しているのだ。

「どうも、レイジさん。お元気そうで何よりです」

「何かあったんです?」

シンカーの沈痛な面持ちを見て、何も思わないほど心は死んでいない。それに、何もなければコハルが丁度いいなど言うものか。

「……PKです。先ほど生き残りを下の層に届けてきたばかりです」

「どの辺にいました?」

声色が変わったと、自分でも流石に気付いた。レイドに出ている時のような、自分が氷になった気分がする。

「北の……この辺りです。ただ、相手は神出鬼没との事でした、有志の自警団でもまだ」

「アトラスでも独自に調査中です。何か情報があれば、窓口があるので頂けると助かります。こちらからも出せる情報は逐次お伝えしますので」

シンガーとユリエールは随分驚いたようなことをしている。当たり前だろう、馬鹿に戦力削られたらたまったものじゃないんだぞ。PK連中はSCAV同然の扱いだ。

「お早いですね」

「この前仲間が襲われましたね。逆に相手を死ぬギリギリまで追い込んで、黒鉄宮にぶち込んだそうですが」

「ああ、噂になってますよ。怨念マリモだとか、アインクラッドに現れた緑の悪魔だとか」

よかったなタチャンカ。貴様の行いはPKへの抑止力になるだろう。オレンジギルド急襲作戦の時は、奴を前衛にしよう。きつと敵の戦意はガタ落ちだ。「我らは旅順の乃木軍ぞ!」って叫んで突撃したかのような。

シンカーはまだやることがあるそうで、必要なことだけ話して去ってしまった。残された俺たちには、微妙な空気だけが残る。

「こんな状況なのに、どうして人殺しなんて……」

コハルは目に見えて動揺している。そう言う人の悪意とか、そういうものにあまり触れてこなかったのだろうか。

俺は5層でモルテとか言うクス野郎に遭遇したおかげか、ある程度

覚悟がついてしまっている。でも、そうじゃないコハルはオレンジの襲撃を受けた時、自衛とはいえ戦えるのだろうか？

もしもの時は、俺が盾になって守らないとな。

「2万も人がいるんだから、バカも一定数混じってるさ。安心しろ、俺たちがなんとかする」

なんとかするさ。一回掃討してしまえば、他の奴らはビビっておとなしくなるだろう。わざわざ殺されるとわかって悪事に手を染めなくても、生き残る手段なんていくらでもある。

一番手に負えないのは、その殺し自体が楽しいとか言うトチ狂った連中だけだな。

とりあえず、ラングレー隊の連中にメッセージを飛ばしておこう。少しでも情報が多い方が奴らも助かる筈だ。

アルゴの下請けしながらも、きつちり諜報任務は果たしてもらおうとしよう。それが仕事なんだからな。

「私も、レイジに守られてばかりじゃないからね？」

コハルに真っ直ぐな瞳を向けられて、俺は思わず息を呑んだ。もしかしたら人を殺すことになるかもしれないというのに、どうしてそんな目ができる。

きつと、俺のためだ。例えそうだとしても、コハルに手を汚させたくはない。俺は、PMCはその重荷を背負うためにいるのだろうか。

「震えてるぞ？ コハルとリーファはしっかり俺の後ろについてこい」

プレイヤーと戦うのは俺だけ。そう覚悟を決めて振り向いたのに、コハルはそれでも俺の袖を掴んで引き留める。

「ダメ、私も。レイジが悪魔にならないように、ちゃんと隣にいるから」

悪魔、そう言われて何も言い返せなかった。そうだな、淡々とオレンジプレイヤーを処理する算段ばかり考えて、そこに一切の躊躇いも罪悪感も持っていないのだから、見方によっては悪魔だ。

きつと俺は、オレンジ限定でなら躊躇なくPK出来てしまうような

人間なんだろうな。

※

そうして12層に戻ってきたが、何となく気分が浮かない。

リーファはキツチリと情報を仕入れてきていて、カズトラしきプレイヤーが茶髪ロングの女性プレイヤーと話しながら歩いていたという話を聞いたそうなの。

「夕焼けはこんなに綺麗なのにな」

同じオレンジ色だというのに、どうしてこうも違いがあるのだが。

「まあまあ、波の音でも聞いて落ち着こうよ。コハルちゃんも少し休憩していく?」

「レイジと休憩したから大丈夫。早くカズトさんを探しに行こうよ」

そうだな、という言葉が悲鳴に掻き消された。なんかMobにでも襲われたのか?

男が逃げてくる。HPゲージは既に真っ赤で、相当ダメージを喰らっているようだ。相当な強敵に出くわしたか、前線に観光に来たら痛い目にあつたのどつちかだろうか。

「おい、こつちに来い! 援護してやる!」

「助けてくれ! オレンジに追われてる!」

全く、何でちようど話題のオレンジが出てくるかな。

「コハル、リーファ、あの人の手当て頼んだ!」

「あ、レイジ!」

俺は駆け出していた。逃げてくる男の背中にはオレンジプレイヤーが迫っていて、もう距離はない。

それなのに、俺と彼の間は約25メートルくらいある。剣じゃ絶対届かないし、走ってもオレンジが剣を振り下ろす方が早いはずだ。

きつと、俺がSAOプレイヤーだったなら、彼を助けられなくて後悔したことだろう。

だが、残念だったな。俺はPMCで、あそこにまで手が届く。それに、この距離の戦いは慣れっこだぞ。

たった数キロ、指先にそれだけの力を込めるだけでいい。赤い点は敵の頭を捉えていて、リズベットの作ってくれたAKは的を外さな

い。それだけ揃っているなら、十分すぎた。
銃声が夕焼けのビーチに響き渡る。そして遅れて、ドサリと人の倒れる音を最後に静寂が訪れた。

12層―3 止まぬ銃声

「エネミーダウン！ ほら、早く来い！」

オレンジが倒れたのを確認し、俺はさらに早足で接近していく。多分、ヘッドショットのスタン効果で倒れただけだろう。

追撃に2発くらい撃ち込んでいたら、別のオレンジプレイヤーが突進して来た。クソ、トドメを差し損ねた。

「おいあんたら、痛い目に遭いたくなければ装備を置いていきな。見たところ高く売れそうだしな」

「なら実力で奪えばどうだ？ タルコフじゃそれが普通だぜ」

ヘラヘラ笑うオレンジプレイヤーの顔を、ホロサイトの赤点が覆い隠す。交渉なんてするつもりはない。テロリストと交渉しないのが世界のトレンドだからな。

どうやら、相手は怒ったらしい。俺へと振り下ろされる片手剣はAKでいなす。銃が使えなくなったと、相手は悪意に満ちた笑顔を浮かべた。

「バカが！」

銃がないからなんだ？ 腰からRed Reveal Ice Pickを抜き放ち、そのアホタレの頭をカチ割る。

それでも、やはり殺すには威力がなさすぎた。システムのハンデがデカすぎる。スタンして倒れたからいいか。トドメは最後に刺してやる。

「この野郎、死ね！」

「お前が死ねクソが！」

黙って突っ込んでくりや、俺を仕留められたのにな。横に転がって槍を躲し、しゃがみ状態で顎をカチ上げるように撃ち抜く。

BT弾の赤い流星を浴びて、槍持ちのオレンジは倒れる。どいつもこいつも、1人のPMC相手にこの程度か？ もっと楽しませてくれよ。タルコフはもっと楽しい殺し合いができたぞ？

「何だよこいつ、PMCなんてワンパンじゃねえのか!？」

「バカ強え！ おい、女の方を狙え！」

3人抜けた。1人はその背中から頭までを撃って倒し、別のやつはリーファに斬りかかるがいなされ、カウンターを喰らってダウンさせられた。問題は最後の1人。そのクソ野郎はコハルへ剣を振り下ろしやがった。

「コハル、躲せー！」

血の気が引いた。最悪の光景が思い浮かび、心臓が握り潰されるかのような感覚がする。

コハルを失うのがそれだけ怖いのだ。銃弾はきつとあそこまで届くけど、貫通してコハルにも当たる可能性があった。

撃てるのに撃てなくて、間に合わないと分かっているも駆け出さずにはいられなかった。

「負けない！」

でも、コハルは自分でなんとかしてみせた。ダガーで剣を逸らすように弾くと、お返しに一撃を喰らわせたのだ。

もちろん、殺すほどのダメージにならないとわかつての一撃だろう。相手を怯ませるには十分で、おかげで俺が追いついた。

「死ね、このクズが！」

後ろからピッケルを振り下ろすと、奴の右腕が握った剣ごと吹き飛んだ。そういえば部位切断とかあったな。タルコフにはないから忘れてた。

悲鳴が上がる。出血のエフェクトもあるから、相当な勢いでHPが削れていることだろう。

それでも止まらない。ピッケルの刃を首に引っ掛けて引きずり倒し、馬乗りになる。あとはこの刃を振り下ろして、このクズを葬ればいい。

「レイジ、ダメー！」

振り下ろそうとした右手が掴まれ、コハルの声が耳に届く。それが、俺を引き戻すような気がした。

「殺しちゃダメ。悪魔になんてならないで」

怒りに吞まれ、こいつを殺すことしか考えていなかった。コハルのいう悪魔になるなっていうのは、こういうことだったんだろうな。

「わかったよ。でも、仕留めはするからな」

まだ1人残ってる。そいつは逃げようとしているのだが、唐突に乱入してきた剣士によって倒された。

キリトかと思っただが違う。赤を基調とした長身の男性で、少し歳をとったようにも見える顔だが、老いより先に熟練を感じさせる。ありや誰だ？

さらには、スタンから回復して起きあがろうとしたオレンジ共は音無しの銃弾を受けて倒れ、遅れていくつもの足音が聞こえてくる。遅いんだよバカどもめ。

「敵影なし、エリアクリア！ タチヤンカ、撃つのをやめろ！」

「メイベルは展開して掃討にあたれ！ レイジ、無事か!？」

どうやら、リョーハの野郎がメイベル隊を引き連れてきたらしい。でも、あの剣士は何者だ？ あと、どうしてリョーハは俺らが襲われているのを知ったんだろう。

「無事だが、どうしてここに？」

「あの人と話してたんだが、コハルから緊急連絡があつたのさ」

そういえば、コハルも無線機を持っていたな。俺のComTacは乱闘の中でどっかに吹っ飛んでしまったらしく、それでコハルの応援要請を聞き逃したのだろう。

何がともあれ助かった。オレンジ共は倒れて呻いているし、いい気味だクソ共め。

それはそうとして、あの人は何者なんだ？

「リョーハ、あの人は誰なんだ？」

「新興ギルドのリーダーらしい。今回から攻略参加するって」

その人物はツカツカと歩み寄ってきた。長身で、中年と初老の間にも見えるが、それでいて若々しくも見える。騎士より侍の格好が似合っそうだ。

「君が、アトラスのレイジくんだね？」

「ええ、そうです。失礼ですがお名前は？」

「ヒースクリフ。血盟騎士団のリーダーを務めている」

はて、やはり聞いたことのないギルドだ。リョーハの言う通り新興

ギルドなのだろうが、攻略に参加するとはそれなりに実力はあるらしい。さっきのヒースクリフを見ていても、ある程度は予想できたが。」「どうも。状況が状況なので、ゆっくり挨拶もできず申し訳ない」「構わないさ。我々もオレンジプレイヤーを捕縛すべく活動しているね。彼らは私たちが黒鉄宮の牢獄へ連行させてもらうよ」

正直言えば、こんな奴らぶつ殺しておいた方が後々のためだろう。出てきたら同じことをやらかす。

それでも、振り向いた先でコハルが不安そうに俺を見つめていた。まるで心臓を締め付けられるような、そんな感覚がする。

俺の選択を、不安そうに待っているんだ。

「分かりました。念のため、こちらからも兵力を出しましょうか?」

「いや、こちらで対応出来るので不要だ。申し出には感謝する」

彼の連絡を受けたのだろうか、白と赤の衣装に身を包んだプレイヤーがメイベル隊と交代する形で、倒れるオレンジたちを手早く捕縛し始めた。

振り返ると、コハルが安心したような顔をしていた。俺が人殺しにならなかったことに安堵したのだろう。あと少しで、俺は2、3人ほどぶつ殺していたかもしれない。

それも、タルコフと同じように何の感情もなく、さも当然のように。

「では、お任せします」

「ああ。また別の機会にギルド同士での会談を設けたいのだが、空いているかね?」

「攻略会議以外ならば」

「では、その時よろしく頼む。オレンジへの対策について、君たちの意見を聞きたいのだ」

もちろん拒む理由はない。オレンジ共を始末するためにならばいくらでもこの力を貸そう。

それだけ確認したヒースクリフは背を向け、オレンジプレイヤー捕縛の指揮に移る。俺も移動しようと振り向けば、コハルが頷いて見せてくれた。

「随分目的はズレたが、カズト探しに戻るとしようか」

「その……ごめん、巻き込んだじゃって」

リーファは申し訳なきそうにしているが、遅かれ早かれ、オレンジには絡まれていたはずだ。悪いのはオレンジ共であって、リーファじゃない。

「気にすんな、どの道やり合ってただろうしな。ブラックバーン！
後で金出すからゆっくり飲み食いしてこい！」

太っ腹で助かる、とブラックバーンは笑顔を浮かべ、他の連中も喜びの雄叫びを上げていた。おいタチャンカ、お前だけは不気味だから大人しくしてくれよ。

「レイジ、お前だったのか！」

今度は誰だと振り向けば、キリトとアスナが駆け寄ってきた。あの銃声と怒号を聞きつけてきたのだろうか？

「よう、どうした？」

「タチャンカが何か叫びながら走っていくから、追いかけてきたんだ。
足速すぎないか？」

「ああ、確かに気になるよな……」

こいつを知らないものはいない。怨念マリモが走ってきたら道を開ける、そう言われるほどにヤバいタチャンカが走りながら叫んでいたとすれば、何か事件があったと思うだろうよ。

特に、この前絡んできたオレンジを半殺しにしたばかりだ。アトラスの誰かが絡まれた、そう想像してもおかしくない。絡まれていたのが俺というのが意外なのだろうけれども。

「お兄ちゃん……？」

俺にとって意外だったのは、リーファの一言だったけれどもな。

12層―4 再会

リーファの「お兄ちゃん」という一言に俺もコハルも動きが止まった。

リョーハとシノンは何のことだと首を傾げ、メイベル隊はオレンジに襲われていたプレイヤーを護衛して街に戻ったから、ここにはいない。

「え？ カズトさんって……キリトだったの!？」

「マジかよ」

当のキリトは何のことだと混乱していて、そもそもリーファが誰かもわかっていないらしい。

まあ、リーファは何故か別ゲームのキャラがコンバートされているらしく、現実と違う容姿のようだから分からなくてもおかしくはない。

「待ってくれ、君は……」

キリトの言葉を遮るように、リーファは彼の胸へ飛び込んでいた。緑の瞳からは大粒の涙を流し、何事かを語る。

キリトも彼女が妹だと気付いたのだろう。容姿は違えど、一緒に生きてきたからにはわかる部分がある。きつと、気を利かせたCom

Tacがカッツトしているのだ。

そつとコハルの肩に手を乗せると、彼女も俺の意図を察したのだろう。一緒に振り向き、街へ歩き出す。アスナは側で見届けるらしい。

「リーファさん、会えてよかったね」

「キリトが兄貴とは思わなかったけどな。現実で再会を約束する奴はいても、アインクラッドで生き別れの兄貴探すなんて他にあるか」

良いことはあった。それでも、どうにかしなければならぬ悪いことも同時に起きた。いや、元々起きていたのが顕著になっただけか。

5層から大人しくなったと思ったのに、クソ野郎共がまた暴れ出すとはやってられない。

「……あの人、無事かな」

あの人、とはオレンジに追われていた人だろうな。メイベルから圈内に届けたから飯に行くというメッセージが来ていたし、無事ではあるようだ。

ただ、ラングレー隊から聞き取り調査の結果として、彼は仲間を失ってかなり精神的にやられているそうだ。こればかりは、俺たちにはどうしようもない。

「生きてはいるって」

「でも……」

それでも不安そうなコハルの手を、包み込むように握る。俺に出来るのは戦うことだけ。その手で、コハルを安心させられるかは分からない。

それでも、しっかりと握りしめてくれるのが嬉しく思えた。

※

ボス攻略も果たして、それからすぐに攻略組の主要メンバーが招集された。この会議の発起人はヒースクリフで、何を話すかはまあ、俺にはわかっていた。

彼の率いる血盟騎士団の攻略参加については、ALSとDKBがかなり頑なだったから説得に苦労した。アトラスの参加枠を譲るとまで行って、ようやく認めさせたくらいだ。

その上で、彼らは実力を示してくれた。今回のMVP通つても過言ではない働きに、リンドもキバオウも頑なな態度は取れないようだ。

「諸君、集まってくれて感謝する」

「で、ボスシバいた後で何の用や？」

「まあまあ、焦らないで下さいよ」

俺はそう言ってお茶を啜る。隣でコハルが小さくなっているの、机の下でそつと手を握る。

ちなみにだが、ソロ代表とも言えるキリトとアスナはいつも通り隣同士だ。お前ら付き合ってるのか？

「わかっているとは思いますが、オレンジプレイヤーへの対策の件だ」

文句は消えて、全員が真剣な眼差しをヒースクリフへ向ける。実際問題、知ってか知らずか攻略組にも襲撃しているらしく、被害が出て

来ているのだ。

ずっと目を背けて来た問題だ。ここで向き合わなければ、これから先もオレンジのされるがままになるだろう。

「なんや、いい方法があるってんか？」

「それについて、有意義な話し合いができるかと期待している」

それからヒースクリフが語るところによると、血盟騎士団も独自にパトロールや調査を行い、オレンジプレイヤーの捕縛に勤めて来たらしい。

とはいえ少数精鋭で手が足りないので、攻略組からも人員を抽出して対応にあたりたいとのことだ。

随分現実的ではないか。ギャーギャー騒いで混乱ばかり起こしていた攻略組に爪の垢を煎じて飲ませたい。いつも派閥争い云々で嫌になっていたところなんだ。

「でも、オレンジがいつ出てくるかわからないんだよね」

コハルが耳元で囁く。内容は真面目なのに、思わずドキリとしたじゃないか。全く、コハルのASMRでキルされるところだった。

「街に入れない分、どこに潜伏しているかも分からねえからな」

オレンジプレイヤーが街に入ろうものなら、めちゃくちゃ強いガーディアンとかいうNPCが滅多打ちにするそうだ。もちろんオレンジも死にたくないから、街に入るような真似はしない。

だからこそ、フィールドのどこかに潜伏していて、どこから襲ってくるか分からないのが怖いのだ。

有意義な提案のはずだが、リンドもキバオウも渋っている。正直話を聞き流して、コハルを見ているのに夢中だった。会議に集中しろつて、顔を赤らめながら怒っても可愛いだけだぞ。

『レイジ、応答せよ』

会議だろうと着けたままのComTacから相棒の音がする。奴はちゃんと仕事をしてきているらしい。

コハルも無線機を持っているから、リョーハの声が聞こえているだろう。

「会議は紛糾中。ALSとDKBがパトロールの人員を押し付けあつ

てる」

『だろうな。主導権争いしているだけあって、マンパワーを削られたくないんだろ。ここまで来て足引っ張るのか』

「あいつらには期待してねーよ。状況」

『シノンが不自然なモンスターの群れを発見したから、これから調査に向かう』

「MPKか?」

『かもな。そっちは頼むぜ、隊長殿』

それを最後に、リョーハからの無線は切れた。奴は無事に現地へ展開して、作戦を始めたらしい。

ハイドアウトに参謀本部として残したレンからも、各部隊展開完了の報告がまとめて送られてくる。

SAO連中なんかに期待してるもんか。俺たちPMC以上にPVPに慣れている奴もいないだろう。

「ふむ、ではレイジくん。君の意見も聞こうか」

ちようど良く、ヒースクリフは俺を指名のようだ。

「タスクフォース・アトラスはオレンジプレイヤー目撃情報のある8層へ部隊を展開、搜索活動中。既にMPKと思われる不自然な群れを確認し、これより確認すると報告が入っています」

「ちよつと待ってんか! ジブンら、勝手におっ始めたんか!」

「レイジさん、攻略組に一言もなく動いた理由を」

キバオウとリンドが噛み付いてくる。やる気ないんだから押し付けとけばいいじゃねえか。

「別に、事後報告であって、承認を求めているわけでもない。これは、アトラスとしての作戦行動です」

キリトもどこか驚いたような顔をしている。裏でこそこそ動いているのはお前も同じだろ。モルテを追ってるの知ってるんだからな?

「PVPなら自分たちPMCに分がある。オレンジを確実に制圧出来るでしょう」

本来、SAOにおいてPVPはデュエルとかPKくらいのもので、真っ向からの殺し合いなんてそうそう起こらないようなゲーム性だ。

対人プレイヤーは殆どいないと言っている。

それに対して、プレイヤー同士の戦闘がゲームの根幹に組み込まれているタルコフから来たプレイヤーならば、襲いくるオレンジを相手にしても怯まない。人を攻撃することに抵抗がないからだ。

きっと、アトラスの役目はここだろう。コハルには悪いけれども、人と戦うことになる。

「制圧？ 捕縛ではなく？」

「可能なら捕縛しますが、相手が殺しに来ている以上、殺すつもりでなければこちらに被害が出ます。オレンジ相手に限り、射殺も辞さない構えです」

周りがやかましい中、ヒースクリフのふむ、という声だけがやけに大きく聞こえた。コハルは俺の袖を掴んで思い留めようとしている風に見える。

それでも、オレンジの命にこだわって仲間を死なせるわけにはいかないんだ。

12層―5 衝撃と畏怖

「レイジはん、本気で言うてるんか？」

キバオウは珍しく、厳かに口を開く。それはまるで、俺を思い留めようとするかに見えた。

そつと目を閉じ、俺は笑っていただろう。ありがとよ。でも、止まるわけにはいかないんだ。コハルの継るような目を見ないフリしても、やらねばならない。

「冗談で言うても？ 既に部隊は行動を開始し、数日のうちに成果を出すでしょう」

無論、このあと俺もバックアップへ向かう。8層の掃討作戦立案、指揮するのはリヨーハで、今回はサポートへ徹する。

奴ならばやってくれるはずだ。捕獲も討伐も無理でも、少なくとも手掛かり一つは持って帰ってくるだろうさ。

「手加減は必要ない。8層のオレンジには見せしめになってもらう。必要なのは衝撃と畏怖であって、警告も慈悲も必要ない」

その後の話し合いは、正直言って不振だったと言えよう。ALSもDKBもパトロールや捕獲しての黒鉄宮送りくらいしか案を出すことはできず、お互いに割り当て人員数を押し付け合っていたくらいだ。

コハルとの帰り道、彼女はどこか不安そうな顔で俺の袖を掴んでいた。かなり過激なことを言ったから、心配してるんだろうな。

「ねえ、レイジ」

「どうした？」

「本当に……殺すの？」

「こつちが危ない時だけだ。基本的には捕獲だよ」

心配すんな、とコハルの頭を撫で回すが、まだどこか浮かない顔をしている。色々とやらかしてきたからな。またコハルの手が届かないところで死ぬんじゃないかって、不安なのだろう。

「安心しろ、俺は殺人鬼じゃない。ビビらせるだけさ」

コハルは唐突に足を止め、俺の腕をさらに強く握る。思わず足を止

めて振り返ると、コハルに抱きしめられた。

コハルの顔がすぐ隣にある。状況が読み込めずに俺は固まり、コハルを振り解くことができない。そもそも、振り解くつもりもなかった。

「……レイジ、苦しそうだよ。無理しないで、私に頼って」

与えられたのは救いか、憐憫か。コハルにはきつと、傷だらけになってなお笑い、前線に立ち続けているかのように見えたのだろうか。全くもってその通りだけど。

殺す事が怖くないわけがない。でも、慣れてしまったんだ。思考も罪悪感も置き去りにして、目的のためにその目標を撃ち倒す。罪悪感はその後からくる。この前オレンジに襲撃されて、殺しかけた時がそうだった。

でも、俺は止まらない。戦わなければ生き残れないから。戦うことしか、知らないから。

だから、傷を隠したままで戦いに出る。心配するなど嘘をついて、本音を笑顔の向こうに隠したまま。

「大丈夫、今度は上手くやって見せるから」

そう言つて、コハルの頬に手を添える。確証なんてない。相手は狡猾な連中で、どういう結末になるか予想もつかない。

俺にできるのは言い張つて生き残つて、彼女を安心させる事だけだ。

「わがままでごめんね。レイジには生きていて欲しいけど、人殺しになつて欲しくもないの」

「わかってるさ。俺もコハルにはそうでいて欲しいからな」

泣きそうなコハルをそつと撫でて、できる限り優しく語りかける。どうして、こうなったんだろうな。守りたくてやっているはずなのに、傷付けてしまっているんだから。

嘆いて泣いて、でもきつとどうしようもない。なら、進み続けるしかないんだ。脱出地点を探しながら。

さあ、リョーハの野郎を助けに行くとしよう。目先のものに集中していれば、この苦しみを振り払えるだろうから。

A i n c r a d l a y e r 8

B E A R O p e r a t o r “ R y o h a ”

第8層は氷に閉ざされた極寒の大地。ぶっちゃけタルコフよりも、ロシアという国のイメージに近いかもしれない。ここまで来たら、ロシアというより北極だが。

「雪が深いな……シノン、休憩していいか？」

「もう少し頑張りなさい。寒風吹きさらしで休憩したいの？」

「ラッセルって大変なんだぞ？」

近接武器としてシャベルが実装されていて良かったと心底思う。今回に関しては、本来の使い方をしているけどな。

馬鹿みたいに雪が積もったエリアは歩きにくい。俺が道を掘り進めながら進んでいるのだが、どうしてもだか交代してくれない。頼むよ、マジで疲れてきた。

『リヨーハ殿お、私もそっちいっていいかい？』

フカ次郎は別働隊として行動中だ。グリズリー隊に加わって、どこかの丘の上から俺を見ているのだろう。ラッセルを代わってくれるなら、いくらでも来ていいんだけどな。

「代わってくれるならな」

『あー、ちよっち辛いかも』

「だろうな」

そうだろうと思ったよ。しかも、掘ったそばから雪が積もって道が消えている。もうやってられない。山岳部でラッセルやった事はあるけども、こんなすぐに埋まりはしないぞ。

「オレンジ見つける前に、遭難しないといいけどな」

「大丈夫でしょう。フカ次郎がたまには役に立つわ」

『ちえー、リヨーハ殿と歩きたいよお』

「街に戻ったらな」

そんなことを言ったら、なぜかシノンに頭をしばかれた。理不尽極まりないっいたらありやしない。少しくらい鼻の下伸ばしてもいいじゃねえかよ。

「鼻の下伸ばしてないで掘りなさい」

「シノンが優しくしてくれたら掘るぜ」

「帰ってからね」

マジ？　と言って振り向くと、シノンはそっぽを向いた。頬がちよつと赤いのを俺は見逃さないぜ。

それにしても、ここってルートを外れるとかなり酷い道なんだよな。メインルートは氷の道があるが、少しずれたこういうところは雪が積もってまともに歩けず、下手をしたら雪に隠れたクレバスに落ちこちる。いつからヒマラヤ登山してたんだらう。

それもこれも、クソツタレオレンジ共の潜伏先捜索のためだ。外れにある洞窟とか、そういうところを徹底的に掃討しているのだが今の所は成果なし。

「次で最後か？」

「そうだといいわね。夜になる前に帰りたいわ」

「ガチ雪山のビバークは最悪だけど、ここならまだマシだ」

少なくとも、凍死は実装されていないからな。いつだかに吹雪に遭遇して、数日野営^{ビバーク}したけど生きていたのは奇跡今でも思える。寒いだけで、死なないならば儲けものだぞ。

「あら、経験あるの？」

「あるぜ。マジで死にかけたし、凍傷にならなかつたのが奇跡。ついでだからいうと、こいつにも何度か助けられてる」

そう言って取り出したのは Red Rebel ice pick。タルコフではRRと呼ばれるアイスピッケルで、これとパラコードがあれば特定の脱出地点を使えるようになる。

俺は滑落した時に使ったけどな。必死にピッケルを突き立ててブレーキをかけ、なんとか九死に一生を得てきた。それでも山登りをやめない俺は、相当アホなんだろうとよく思っていた。

「じゃあ、やっぱり先行はリョーハね」

「クソ。ヒドウン・クレバス踏み抜いて死んだ、とか絶対嫌だぞ」

くたばれオレンジめ、なんて悪態をつきながら掘り進め、足場を確認すると……言わんこつちやない。踏んだ雪が崩れ、ポツカリとクレ

バスが口を開けてみせた。

こうやって雪に隠れたヒドウン・クレバスは、知らずに踏んだものの命を奪う天然の落とし穴だ。茅場の悪趣味なトラップか、道を踏み外したもののへの警告か。今は、どうだっていいか。

「……ほーら、言わんこつちやない」

『先行部隊、大丈夫ですか!』

『リョーハあ!』

レンとフカ次郎の悲鳴が耳をつんざく。向こうからすれば、急に雪崩が起きたとでも見えたかもな。目の前にいるわけでもなく、高倍率スコープで見ているだけなんだから。

とはいえ、これで向こう側には渡れなくなった。この先の洞窟は出入り不能と考えるべきか。

「心配すんな。クレバスが隠れてただけだ。ここは通れねえから引き返すぞ」

『了解です。でも、目星をつけたところは全部外れましたね』
「つたく、どこに隠れてるんだか」

これで、当たりをつけた箇所は全滅。オレンジプレイヤーのアジトは見つからず、空振りに終わった。全く、どう言い訳しようか。

12層―6 竜使いの少女

地獄のラッセルを終えて、ようやく元の道へ合流出来た。クソツタレな雪はせつかく掘った道をすぐに埋め尽くしてしまい、シャベルをぶん投げたくなる。

「スーカ、2度と雪かきなんかするかよ……低体温症とか実装されてねえよな？」

「寒さに耐える訓練と思いなさい」

発狂して脱ぐぞ、とか言ったら蹴られた。理不尽じゃ。俺の裸を見たくないっていうならば、少しは優しくしてくれてもいいじゃないか。温かいコーヒー差し入れてくれるとか。

で、どうしてシノン俺の体をチラチラ見てるんだ？ そんなに俺の裸に興味あるのかよ？

「気になるのか？」

「リヨールがここで脱いだら、何分耐えられるか学術的興味があるわ」「実験動物かよ!?!」

「ほら、ご褒美」

シノンはそんな冷たいことを言いながらも、熱々のコーヒーが入ったポットをくれるあたり優しいんだよなあ。シノンさんマジ女神。邪魔するSCAVはマジスーカ。

ぐびりとコーヒーを飲んでみると、シノンが頭を撫でてくれた。

あー、このまま撫でられていたい。お座りでもお手でもなんでも出来そうな気分になってきた。

「もつと撫でろー」

「寒いから帰るわよ。もうおしまい」

凍死こそしないが、このマップはクソ寒い。今でこそ俺もシノンもソフトシェルジャケットを着ているが、最初の頃は地獄だった。

特に、BEARのジャケットが解放されたのが11層の話だ。AS―VALの運用コストのせいで新しい衣装を買う金がなく、半袖のBEAR Base Upperを着てここに来る羽目になったのは本当に最悪の思い出だぞ。

「おいフカ、後で撫でてくれよ」

『お主、グイグイくるのう。うむ、答えて進ぜよう』

やったぜ、なんて思っていたら足に鈍い痛みが走った。シノンめ、踵に全体重をかけて踏んだな？ ツンデレなのかクーデレなのか、イマイチわかんねえ。

「何か言ったかしら？」

「いえ、なんでもございませぬシノン様」

何度かシノンに告ってみようかとも思ったが、尻に敷かれる未来しか見えない。とはいえ、フカ次郎に脇目を振ろうものなら最後、こつちを見ろとばかりに何かをして来るんだ。

せめて、もう少し可愛い仕草ならいいんだけどな。そうそう、こんな風に耳をピクピクさせるみたいな仕草とか、猫みたいで普通に可愛いのに。

「……何か聞こえるわ」

「え、なんも聞こえねえぞ」

「Soldinなんて使ってるからよ。Comtacに変えなさい」

「シノンの頼みでも、こいつは外せないね」

「剥ぎ取ってやるから覚悟しなさい」

そうなったら、反撃の名の下にお触りしてやる。パロスペシャル喰らおうが、何しようが構うものかよ。

そんなバカなやりとりをしながらも、声を聞いたという方向を目指して走る。助けを求めるなら行かねばならない。もしかしたら、オレンジが出たのかもしれないしな。

「見つけた。リヨーハ、前方200メートル。追われてるわ！」

「見えた。何だあのペン公の群れは!？」

なんてこった、ツインテロリがペンギンナイトに追っかけられてるじゃねえか。微笑ましいように見えて、ペン公は剣を持った物騒な連中だ。ちびっこいドラゴンまでいるぞ。

「レイジ、応答せよ」

『会議は紛糾中。ALSとDKBがパトロールの人員を押し付けあつてる』

「だろうな。主導権争いしているだけあって、マンパワーを削られたくないんだろ。ここまで来て足引つ張るのか」

『あいつらには期待してねーよ。状況』

「シノンが不自然なモンスター群れを発見したから、これから調査に向かう」

『MPKか?』

「かもな。そっちは頼むぜ、隊長殿」

それだけ報告して無線を切る。シノンはもう動き出していて、狙いやすいように群れへ接近していた。俺もそれを追いかけて、スタミナの限り走り続ける。

距離50メートルまで肉薄した。ようやく、俺の得意な距離だ。

「シノン、どれからやる!?!」

「脅威から言えばドラゴン……待って、ドラゴンがペンギンを攻撃してるわ」

「クエストの類で、ドラゴンが守ってくれてるのか? ならターゲットはペンギンだな。横風成分なし、ど真ん中で撃て。俺は突撃する!」

セレクトターがフルオートになっていふことと、マガジン残量がフルであることを確認する。覚悟を決めて走ろうとすると、シノンに肩を掴まれた。

「私以外にやられたら許さないから」

「お前を置いて死なねえよ。それに、守ってくれるんだろ?」

シノンが守ってくれる。それで俺はどれだけでも強くなれる。恐怖も不安も置き去りにしてきた。ここにあるのは勇気と自信。

嗚呼、久しぶりの突撃で心が躍るぜ。

「突撃!」

『おおつ、リョーハマジか?! グレネードは撃てないよ!』

「あのロリ巻き込むから撃つな。追っかけてきたら、1発ぶちかませ!」

フカ次郎へ答えると、走りながらAS—VALを構えてトリガーを引く。

走りながらの射撃なんて当たりはしない。シユタタ、と小さな銃声
じや威嚇にもならない。

それでもよかった。あれだけ目標が密集してるから、30発のうち
数発は当たってくれたらしい。

「おらおら、俺のロックを聴きやがれ！」

マガジン交換。その間はシノンが狙撃でペンギンナイトを撃破し
てくれる。貫通した弾丸が後ろの奴に当たったり、まるで範囲攻撃だ
な。羨ましいぜ。

そんなことをしているうちにリロード完了。毎秒900発射撃可
能なAS-VALはすぐに弾がなくなる癖して、マガジン容量が少な
い。代わりに、貫通力とダメージ量は折り紙付きなんだ。

「おい、今のうちにこっちに下がれ！ 援護してやる！」

立ちすくんでいたロリっ娘へ叫び、射撃を続ける。これがAKな
ら、銃声で声がかき消されちまってたな。AS-VAL使いであるこ
とに誇りが持てるぜ。

よしよし、こっちに逃げてきたな。で、やっぱりそのドラゴンもつ
いてくるんだな。

「おい、そのドラゴンは味方なのか!？」

「ピナは友達なんです、撃たないでください！」

「俺たちのこと食わなきゃ撃たねーよ。それよりペン公だつ……!？」

油断した。リロードの合間に1羽迫ってやがった。咄嗟にRed
Reveal Ice Pickで脳天をかち割ってやったが、奴の
一撃が意外に重い。

ガードのために突き出した左腕にくらった。当然左腕は壊死して、
重度出血のデバフ付き。それで足らずに結構なダメージをもらって、
全体HPが3分の1くらい削られてしまった。

「ブリャー！」

「リョーハ！ 退きなさい！」

「無理そうだ！」

震える腕で銃を握り、撃ち続けなければ。ペン公はまだ来る。逃げ
るにしても足止めしながらだ。どれだけ持ち堪えられるかな。

嗚呼、まだ来る。せめて鎮痛剤の一つ飲ませろよクソが！

「あつ、ピナー！」

「きゅるるー！」

なんだ、この威厳のねえ鳴き声。ペン公かと思っただら違う。水色のチビドラゴンが俺の周りを飛んでいて、泡のブレスを吐きかけてきた。野郎、トドメを刺しにきたか!?

でも、それは間違いだったらしい。たちまち出血のデバフが消えて、みるみるHPが回復していく。おい、壊死したとこまで治しちゃうのかよ。

「リョーハ、無事なの!？」

「このチビドラゴンのおかげでな！ そろそろお開きにしようぜ！」

いい感じに密集してきたし、カタをつけるでしょう。パイナップルは好きか？ 俺は大好きだ。パイナップルが乗ってるピザって結構好きなんだぜ。家族で俺だけだから肩身狭え思いしてるけどよ。

「プレゼントだ！」

キン、そんな甲高い金属音がして、安全レバーが吹っ飛んだ。ペン公のど真ん中に落ちたF-1グレネードは暫しののちに炸裂して、爆風と破片で奴等を吹き飛ばす。

後は僅かに残った残党狩りだが、残弾が心許ない。ここは逃げの一手に回るか。

「シノン、逃げようぜ！」

「同感よ。ほら、ついてきて！」

シノンが少女を庇うように下がり、俺は俺で適当にペンギンナイトを撃ちながら下がる。遅滞戦術って奴だ。あんまり弾がないからやりたくないんだけどな。

ほら、とうとうマガジンが全部空になっちゃった。あと残るは拳銃だけだ。

「リョーハ、早く来なさい！」

「弾がねえんだよ！」

「援護してあげるから！」

『リョーハ、グレネード撃つから離れて！』

ホント助かるぜ。シノンの援護射撃に守られ、フカ次郎の放った榴弾でペンギンナイトを足止めしてもらい、俺はすんでのところで圈内に飛び込んでことなきを得た。

一体どれだけの距離を逃げ回ったのか考えたくもない。さつさと弾を補給して一息つきたいところだ。

幕間 コハルの誕生日

BEAR Operator "Rage"
Rage's Hide out

2月も終わりが近いとはいえ、まだ2月。アインクラッドのシステムはきつちり冬だと判定しているらしく、あちこちに雪がちらつく。でもハイドアウトならば雪など関係ない。だってどこかの地下室だし、暖房設備もあるから暖かい。

そして、そんなハイドアウトはクリスマススイベント以来の装飾を突貫工事で施し、食堂ユニットではアスナが料理スキルを遺憾なく発揮してご馳走を作る。エギルが良い食材を仕入れてくれて助かった。

それにしても、盆と正月が一緒に来たような忙しさだ。それでも仕方あるまい。今日は2月23日。我らがコハルの誕生日だから、祝うに決まっている。

だがコハルは俺のハイドアウトで同棲しているから、連れ出しているうちに飾り付けを済ませる必要がある。

「よし、今からコハルと出かけてくる。すまんが頼むぞ」

「任せろよ。合図するまで帰ってくんない」

リョーハがそういうと、他のアトラス隊員たちや親交のあつて呼んだ面々が笑う。俺のハイドアウトなのに追い出されるとはな。笑うしかねえ。

「このやるー、後で覚えとけよ?」

「いいからデートを楽しんでこいよ。ついでに告つてもいいんだぜ?」

やいのやいのと冷やかすメイベル隊の連中とリョーハを蹴飛ばし、ハイドアウトを飛び出す。コハルを待たせているのだ。馬鹿野郎どもに絡んでいる時間も惜しい。

そうして5分後。はじまりの街の転移碑前でソワソワしているコハルを見つけたので、手を振りながら駆け寄る。

途端に花が咲いたような笑顔を見せてくれるのがあまりにも可愛らしく、AACPCを貫通して胸部が壊死してしまいそうだ。

「すまん、遅れた」

「時間通りだよ。出撃時間に遅刻しなかったね」

「隊長が何も言わずに予定変更しなければな」

一緒に見たタルコフ公式実写ドラマのネタを覚えていたらしい。思わず笑ってしまおうし、こうして軽口を言い合えるのが嬉しかった。

「今日はどこへ行くの？」

「買い物だよ。普段着というか街着を探したいんだけど、センスがないからな。コハルの服も一緒に探したいし」

「確かに……どこで探そつか」

「時間はあるんだ。上の層までゆっくり探そうぜ」

さあ行こう、とコハルへ手を伸ばすと、自然に握ってくれた。最初は顔を赤らめたり恥ずかしがったりして応じてくれなかったが、最近ではすっかり慣れてきたようだ。

本当に可愛いんだから。そう思っただけで顔を眺めていたら、流石に顔を赤らめてしまった。もう、と言いながら肘で小突いてくるのもまた愛らしい。

「もう、ジロジロ見ないでよ」

「仕方ないだろ、可愛いんだから」

「もう、またすぐに可愛いって……」

モジモジする姿もやはり可愛い。思わず抱きしめたくなくなってしまいが我慢我慢。俺は時間稼ぎであって、メインディッシュはまだ後だ。

その時までおめでどうの一つ言えないのがもどかしい。多分、もやもやし過ぎてとんでもない顔になっていることだろう。

「そう言えば、レイジはどんな服が好き？」

「白系のコートとか似合っただけで好きだな。赤のスカートとか合わせたら完璧だと思う」

「私のじゃなくて、レイジのだったら」

でも、考えておくれ。そう言っていたのを俺は忘れない。コハルに白系の服はすごく似合うと思う。きつと、歩けば数メートルごとにナンパされること間違いなしだ。

普段からも割と声をかけられるらしく、俺と一緒に出かけることが多い。楽しいからなのか番犬扱いなのかはさておき、コハルと一緒にいられるのは役得だから文句はない。

「俺の私服か……リアルでもソフトシエルにジーンズとかだぞ？」

「じゃあ、レイジも白とか明るいのにしてみようね」

「シヨップピングのためにVR始めたとか言ってたし、流石だな」

「もちろん。リアルに帰ってからも、しっかりコーデイナーとしてあげるからね」

「そりゃ楽しみだ」

つまり、デートのお誘いということか。こりゃ嬉しいお誘いだ。帰ってからと言わず、今でもいいんだけどな。

そんなことを話すコハルは楽しそうで、希望に満ちた顔をしている。コハルはいつでも前向きだから、未来を思い描いて楽しみにしているのだろう。

でも、アインクラッドでの暮らしも楽しんでいる。最初の頃に絶望していた姿は何処へやら、すっかり適応してくれて嬉しいものだ。時に命懸けで、時に日常を楽しんで、おかげで俺の心も救われているのだから。

リョーハから帰還命令が出るまで、服屋を巡っては他愛もない会話を楽しんで羽を伸ばす。正直帰還命令が出て欲しくないとさえ思っ
てしまっていた。

「コハル、そろそろ帰ろうか。腹減ったしご飯にしよう」

「そうだね、何か食べて行く？」

「いや、なんか作ろう。ハイドアウトに荷物も置きたいからな」

珍しい、とコハルが不思議そうな顔をする。アスナが作っていると口が裂けても言えないから、こう言っておくしかない。

テキストメッセージで今から戻ると伝えたいし、きつと準備は万全だ。あとはコハルが喜んでくれることを祈るしかない。

ハイドアウトへの帰り道で、俺は緊張し続けていた。ボス戦前みたいな気分で、きつと表情も強張っていたはずだ。コハルと話しながら帰っていたのに、何を話していたか覚えていない。覚えていられるほ

ど余裕がなかった。

きつと、コハルも気づいていただろう。ハイドアウトのドアを開ける瞬間に、少しだけ俺の方を向いて微笑んでいたから。わかっている、知らないふりをしてくれたんだろうな。

「ハッピーバースデー、コハル！」

一斉に声が響き、クラッカーが彼女を出迎える。喜びで言葉をなくす彼女の後ろで、俺も手を叩いていた。

ケーキにチキン、色とりどりの飾り付け。きつと、リアルよりも豪華な誕生パーティーのはずだ。仲間たちも大勢駆けつけて、ハイドアウトは鮎詰め状態なのだから。

ところでタチヤンカの野郎、キラ店長のマスカヘルメットを飾りに紛れ込ませるんじゃない。生首を掲げたのかこの馬鹿野郎。

コハルはずつとみんなに囲まれていた。アトラスの面々の他にもキリトやアスナ、リーファにユウキ、クラインとエギルにサーニャ。リンドとキバオウまで来てるのは驚いたな。

コハルは照れながらも嬉しそうにしている、忽ち人の壁の中へと消えていった。俺はいつもそばにいたいことだし、今日は離れて見守るところにしよう。

みんなが持ち寄ったプレゼントがコハルへと渡されていき、渡した人物とコハルが握手するのを隅で見守る。壁に阻まれて、用意したブレスレットを渡し損ねてしまったけども。

SAO Player “Koharu”

パーティ終了から1時間後

みんな帰った後のハイドアウトを飛び出して、はじまりの街にいる。飲み物を買うに行くと言ったレイジが30分も帰って来ていないから、きつとどこかで寄り道しているらしい。

きつとあそこだ。そう思って足を運んだ噴水前のベンチにレイジはいた。星空を見上げて歌を口ずさんでいる姿が、どこか悲しそうに見える。

「レイジ、ここにいたんだね」

隣に座って肩を寄せると、レイジは驚いていた。どうしてここが、と言う顔をしていたから、思わず吹き出してしまった。

「レイジは意外とわかりやすいよね。覚えてる？ 初日に励ましてくれたこと」

「ちようどこだったな。昨日みたいに覚えるさ。本当、あの時よりコハルは変わったよ。心も体も強くなった」

俺なんていらなくらいに、と笑う横顔が寂しそうに見えたから、私はそつと彼の手を握る。グローブから飛び出した指が冷たくて、暖めようと握れば彼はわずかに声を漏らす。

「今度は、リアルでお祝いして欲しいな。お父さんやお母さんとか、友達と呼ぶでしょ……それで、レイジたちにも来てもらおうの」

「そりゃいい。どつか会場を貸し切らねえとな」
「確かに。うちじゃ入りきらないかも」

最初は、そんなことすらも考えられなかった。生きて帰ることさえも絶望していたのに、今は帰ってからのこと、未来を考えて希望を持っていられる。

きつと、それはレイジのおかげ。いつも私の前に立っていて、その背中を見せてくれた。勇敢さと無謀さを併せ持つ危なさを持っていて、いつも優しさの裏でボロボロになっている。

レイジが私を生きて帰らせたみたいなのに、私もレイジを生きて帰らせた。そして、今度はリアルでデートをしたり、お祝いがしたいから。

「でも、レイジは招待第1号だからね。ドタキャンしちゃダメだよ？」
「そうだな、遅刻できねえや」

これを渡すには遅刻したがな、と言って、レイジは私の手を取る。そして、手首にワインレッドのシンプルなブレスレットを巻いてくれた。

「渡し損ねた。みんなのよりはしょぼいけど、剣を振る時も邪魔にならないそうだからさ」

私に似合いそうで、それでいて普段使いに邪魔にならないようなもの。今日のお出かけで、レイジのファッションセンスのなさがよくわ

かった。

それでも必死に考えて頑張つて選んでくれたのを考えると、嬉しくて胸が温まる。

「ありがとう、大切にするよ！」

「もつといいもの選べればよかったんだけど……」

「十分嬉しいよ」

ならよかった、とレイジは微笑む。レイジとの絆が見えやすくなつたみたいで、どこか嬉しく思える。レイジの誕生日には色違いのものを渡そうかな。

でも、もう少しだけ欲張つていいかな。私が本当に欲しいものが目の前にあるんだから。今だけ、勇気を出してみよう。

「レイジ、もう一つだけ欲しいものがあるの」

「何が欲しい？」

「少しだけ……目を瞑ってて」

レイジはそつと目を閉じる。近くで見ると意外にまつ毛は長くて、ずるいつて思う。顔が近づけば近づく程、緊張とともに鼓動が強くなつていく気がする。VRの体に心臓なんてないのにね。

あと少し、あと少し。慎重に距離を詰めていつて、触れたかどうかわからないくらいに軽く唇を触れ合させた。

レイジは顔を赤くしているけども、ちゃんと目を瞑つていてくれる。きつと、レイジよりも顔が赤いかもしれない。熱でも出たみたいに熱くて、考えがまとまらない。頭が真っ白で、ふわふわするような気分。

触れるだけで離れたのに、何時間もしていたみたいと思う。恥ずかしくてレイジの胸に顔を埋めたら、彼は優しく抱きしめていてくれた。

※ たった一言、お誕生日おめでとただけ声をかけて。

レイジがL i g h t h o u s eで消息を絶つて1ヶ月が過ぎた。レイジのハイドアウトは捜索部隊”ヴィードラ隊”の作戦本部となつていて、インテリジェンスセンターに貼られた地図には、目撃地

点がいくつも書き込まれている。

それでも見つからない。生命の碑に横線が入っていないのがわかっていただけで、装甲列車を見送る姿を最後に私たちは彼の姿を見ない。

オレンジキラーと噂される謎のプレイヤーがレイジだと信じて、攻略の傍らに目撃地点を探す。そんな日々が続いて、まだ足取りすら掴めていなかった。ずっと一緒に約束したのに。

「コハル、気を落とすな」

「リョーハ……そうだよ。レイジ、強いからどこかで生きてるよね」
「あのクソ野郎はしぶといからな」

そう言っただけで励ましてくれるリョーハ自身が一番もどかしく思っているはずなのに。

「ラングレー隊も動いてる。もうすぐ見つかるさ。このアインクラッドからは逃げられねえんだし」

「案外近くにいるかもね」

そうだ。きつとどこかで会える。まだ名前も聞いていないんだから、絶対に見つけ出そう。

「リョーハさん！」

「レコン？ ほら、搜索に行くぞ」

息を切らして飛び込んできた、ラングレー隊のレコン。もしかして、レイジが見つかったのかな。焦って飛び込んでくるんだから、きつとそうだよ。それ以外にないよ。

「それどころじゃ……レイジさんの名前に横線が……！」

私は机のマグカップを落としてしまった。リョーハも銃を落として、静寂に包まれたハイドアウトにその音がやけに大きく響いていた。

12層―7 避難先で

主街区の宿を借り、ルームサービスを頼んで少し休憩。あれだけの激戦の後だから、少し休まねばなるまい。弾もないのに探索なんて出来やしねえ。

ただでさえ容量の少ないマガジンなのだから、必然的に携行弾数は減る。AKに持ち替えようか悩みながら、俺は弾をマガジンに込めていく。あの戦闘で、たつぷり持ち込んだはずのマガジンは空っぽだ。

「あの、手伝いますよ!」

「いいよ、やり方わからないだろ? 逆さまに詰め込まれたら堪らねえし」

「あう……」

肩を落とす少女へ、ドラゴンが慰めるように顔を擦り付ける。圏内なのに入れるとか、Mobじゃないのか?

「そーいや名乗り遅れたな。俺はリョーハで、こっちのツンツンしてるのがシノンだ」

「誰がツンツンよ。ほら、ツンツンしてあげるわ」

シノンは机に置いていた弾薬を一つ手に取ると、その先端で俺の頬をツンツンし始めた。やめれ、背筋が冷えるわ!

「ええと……私はシリカって言います。こっちは友達のパナ!」

キュルル、とピナは鳴き声をあげているが、挨拶でもしているのだろうか。試しに撫でてやると、猫か何かのように擦り寄ってきた。フワフワしてるし案外可愛いなこいつ。

「このドラゴンどうしたんだ? やけに懐いてるけど」

「その、弱ってたので餌をあげてみたら……どうしてかついてきたんです。ちゃんとパーティにも入ってるんですよ」

「珍しいわね。RPGによくあるテイミングってやつかしら?」

リョーハ、お座り」

「わん」

ってあれ、どうして俺はお座りしているんだ? どうしてシノンがニヤニヤ笑って、シリカがドン引きしているんだろう。

「お手」

おっと、合法的にシノンの手が握れるぞ。握らにや損だな。うん、俺のより小さい手で可愛らしい。

「よしよし、よく出来ました」

「くうーん……」

おうおう、頭を撫でてくれるとはサービス精神旺盛じゃねえか。ありがた。ここは一つ撫でられておくことにしよう。シノンが撫でてくれるとは貴重な機会だ。

でも待てよ、なんかおかしくねえか？ これって、何か仕込まれているような……

「つて待て、俺は犬じゃねえ！」

「シノンさん、流石に犬扱いは酷いと思いますよ！」

「リョーハは私の猟犬であり番犬だから、何も間違っていないわよ。変な気は起こさないし、おかげで変な虫が寄り付かないもの。シリカも試してみる？」

「お守りになりますか……？」

おい、本人の目の前で売買交渉始めるんじゃないやねえ。そしてピナ、肩に前足を乗せてキュルルと鳴いたのは、「ドンマイ」とでも言ったのか？

それは置いておこう。お守りという部分に食いついているのはなんだか気になるんだよな。

「変な虫ついてるのか？」

「変な虫と言いますか……」

ルームサービスで飲み物を頼み、それをシリカに差し出す。ホットミルクで唇を潤わせればまあ、話も進むことだろう。

ついでにビーフシチューの缶詰を開けて置いておくと、ピナがそれに顔を突っ込んで食べ始めた。可愛いなこれ。猫に餌やりしてる気分になる。

「その、ビーストティマーって珍しいですから、色々な人に声を掛けられるんです。他にも、変な男の人に付き合ってたか言われたりして……」

「そんなロリコンまでいるの？ リョーハ」

「なんで俺なんだよ。俺の守備範囲はダウナー系なゆるふわお姉さんタイプだ」

シノンが俺に目を向けるものだから、ついつい言い返してしまった。レイジのヤローと性癖合戦になった時にぶちまけたら、凄く共感されたのを覚えている。

しかしシノン様には気に入らなかったようで、俺の足に踵が降ってきた。骨折のデバフがないのは、ここが圈内だからだろうな。

「なら、私たちが一緒にいれば解決ね」

「いいんですか!？」

「ええ。リョーハを置いておけば、大抵の相手は逃げ出すわ。死神だもの」

シノンとシリカの視線が突き刺さる。死神はタルコフの時のじやねえか。そろそろマシな呼び名が欲しいところだ。命知らず以外でな。

でもまあ、ここに来るまで絡まれなかったのも事実だ。死神リョーハより、番犬リョーハの方がいいかもな。ガオガオ。

「でも四六時中とはいかねーぜ。上手いやり方を考えねえと。とりあえず、シリカはどうしたい？ というか、どうして最前線にいるのかからだよな」

シリカのレベル帯でこの辺はかなりキツイはずだ。1対1でも相当ヤバいののに、囲まれたりしたら地獄の様相を呈すること安請け合いだろうよ。

「その、観光に来たんです。転移碑の近くなら大丈夫だって思ったんですけど……」

「そしたら、可愛らしいペン公にやられかけた、ってな。あいつらよちよち歩きの癖して速くねえか？」

うう、とシリカは俯いてしまう。まああれだけ危険な目に遭ったのだ。これ以上無理はしないでだろう。

「なら、私たちが護衛すればいいじゃない」

「その、少しだけでいいので！」

シリカに目をやり、俺はため息をついた。少しくらい、夢を見せてもいいだろうな。それに、俺たちの目的はオレンジ狩りで、狙われやすい少女を守るのも任務のうちのはずだ。

「分かった。少し準備してくる」

はしやぐシリカと、それをみて微笑むシノンを尻目に、俺は部屋を出る。そして、胸元のプレストークスイッチを押した。

「レイジ、動いたか？」

『お前ら派手に動きすぎなんだよ。今来たばかりだが、街中で噂になつてるぞ。アルゴが向かつてるから、少し話せ。テイミングの情報が出回れば、そのロリっ娘とやらの被害も減るだろ』

「ロリコンが多くてたまらないぜ。マニエクのヤローがそうだったか？」

『マニエクは熟女趣味。ロリコンはアイザックの方だ』

「そうだったそうだった。で、天気予報はどうだ？」

『良くないな。嵐の予報とっておくぜ。バックアップ隊は俺が直轄する。メイベルも追加で展開してるから、ヤバくなったら呼べ』

「根回しがいいな」

『ラングレーどころか、アルゴでも尻尾掴めてねえんだからな。会議で大口叩いた以上は結果を出さんとマズイ。俺も行く』

「ああ、またな」

普段はアルゴに貸している諜報班、ラングレー隊まで動員しているのだから、気合いの入りようが違う。

アトラスの一線級部隊のメイベル隊と、フカ次郎含むグリズリー隊をバッグアップに回してくれる大盤振る舞いだ。

「ヨ、リヨー坊。噂のタイマーはそこかい？」

フードを被ったちびっ子アルゴには、本当にすぐそこに来るまで気付かなかった。その後ろについてきたPMCさえ、振り切られて置き去りにされかけたようだな。

「ああ、この部屋」

「じゃ、お邪魔するヨ」

アルゴの背中を見送り、俺はPMCの方に向き合う。俺より年上か

もしれないBEARのセルゲイと、無精髭のUSSEC野郎のダステイ。アルゴに貸し出されたラングレーとは、こいつらのことだ。

「調子はどうだ？」

「酷いね。あちこちぶん回されてクタクタだよ。終わったらウオツカ飲んで寝る、そんな暮らしさね」

セルゲイはやれやれと首を振る。まあ、情報は早いに越したことはないしな。

「で、レイジから嵐が来るって聞いているが」

「その件だ。アジトは掴めなかったが、黒フードがウロチョロして、トリンをしていたのを確認した。DVLを持っていたって情報もあるから、5層でメイベルが世話になった奴かもな」

「おいダステイ、アイツのやり口は狙撃だぞ。わざわざトレインするより、近くのヤベー奴けしかける方が現実的だ」

「そうだろうさ。そうだとしたら、今度はレイジとキリトが捕まえ損ねた奴かもって線もある。油断はするな」

「俺に喧嘩売って、勝てるっても？」

ダステイは笑い出す。本当、5層辺りからケチがついて回っている。なんてたってまたPKやるんだ？ そんなもん、碌に意味はないと言うのに。

12層―8 護衛部隊

アルゴの聞き取りも終わり、シリカを下層へ帰すべく宿を出た。街にいたプレイヤーどもは、俺やシノン、メイベル隊に守られたシリカを見て距離を取る。

絡んでこようとした奴らも、ガチムチPMCの集団、しかも攻略組でブイブイ言わせているアトラスと知るなり、腰を抜かしていたっけ。死神がいるって叫ばれた件は聞き違いだと信じたい。怨念マリモを見て失神した奴はいるけど。

そんな街から一步踏み出せば、そこは極寒の大地だ。氷を踏みしめるブーツさえもが冷えたかのように、あちこちが冷たくて堪らない。そんな時は動きも緩慢になるものだ。

この寒ささえなければ、白と青のコントラストを楽しんでいられるのになあ。

「へくちっ！」

寒すぎたか、シリカはくしゃみをしてしまい、どこか恥ずかしそうに俯く。このツインテロリ、可愛いくしゃみをするじゃないか。

「おーおー、可愛らしいくしゃみだな。風邪引くなよ？」

「気を付けます……アインクラッドで風邪って引くんでしよつか？」

「実験が必要ね。リヨーハ、裸で歩いてみなさい」

「風邪引く前に凍死するわ！」

半袖シャツで歩いてても凍死はしなかったが、メンタルは死んだ。それで十分検証になつてるだろうよ。裸でうろついていたら、それこそハラスメント行為として牢獄送りにされてしまう。

そんなクソ寒い中でも、SCAVは元気にスーカスーカと鳴いている。うるせえんだよこのゴロツキどもが。黙って雪に埋もれてやがれ。

なんだかイライラしてきたので、八つ当たりに頭を撃ち抜く。吹雪に紛れて詰めてきた野郎はピッケルで頭をかち割り、刃を引っ掛けて地面へ引き倒して3度ピッケルで殴りつけ、トドメを刺しておく。

「クリアー！」

「リヨーハ、もっとお上品にやりなさい。シリカが引いてるわよ」

まあ、人間のNPCを割と惨殺したからな。2つの死体が転がり、スプラッタにも血飛沫の跡が残っているんだ。そんな死体の前で、ピッケルを手に立ち尽くしている男とかホラー極まりない。

「というか、支援部隊が狙撃すりゃいいんじゃないやねえか？」

近くの高台や丘に支援のメイベル隊がいて、見守っているはずなんだ。フカ次郎含むグリズリー隊は街に戻っているから、ブラックバーンたちが代わりに援護してくれる手筈なだけだな。

ちなみに、メイベルがバックアップに回された理由は「オレンジさえもタチヤンカを見たら逃げ出す」という理由だ。いつだかにオレンジを半殺しにしたせいで、相当恐れられているらしい。怨念マリモの名前はアインクラッドにも響き渡る。

『こちらアイザック。居場所がバレるわけにもいかなくなってな』

「シリカを眺めてたんだとしたら、クレバスに放り込んでやるからな」
アイザックが変な声を出したのが聞こえる。本当にシリカを眺めてやがったな、あのロリコンが。

『シノンにお熱なりヨーハが言える口じゃねえ。何歳差だよ？』

「黙れブラツク。タンスの角に小指ぶつける呪いかけたからな」

ふざけんな、とブラツクバーンの抗議が聞こえてくるが、俺はそれを無視する。

でも、シノンが頬を赤らめているのを見て、ヤベエと焦る羽目になった。アトラスの無線なのだから、シノンにも丸聞こえなのだ。

「……あんた、実際いくつなのよ？」

「マナー違反じゃねえの？」

「いいから」

スカーフがシノンの顔の下半分を隠すが、目は真っ直ぐ俺を見つめていた。早く答えろ、そう言われている気分だ。

「21」

「……ロリコン」

「はあ？」

どういう事、とシリカは俺とシノンを交互に見て、ピナはキュルル

と鳴く。まさかとは思うが、お前も俺をロリコンと罵っている訳ではあるまいな？

「お2人は、付き合っていないんですか……?」

シリカは純粹に疑問だったのだろう。無垢な目でそんなことを訊いてきたものだから、シノンが噴き出した。顔もたちまち真っ赤だ。可愛いじゃねーか。

「付き合っていないわよ!」

「え、付き合ってるのか?」

笑いながら冗談を飛ばしてみたら、無言のまま雪へと突き飛ばされた。綺麗な大の字で雪に飛び込んだ俺へ、無常にも雪が降り積もっていく。

無線の向こうからの笑い声がイラつくな。メイベルの連中、後で覚えてやがれ。晩飯をグリーンピース山盛りにしてやる。

「馬鹿なこと言っていないで、さっさと行くわよ。またペンギンに襲われたらどうするの!」

「その時はその時さ!」

「大丈夫なんですか……?」

まあ、大丈夫だろう。レイジの野郎がなんとかしてくれるさ。それに、最悪の場合は俺が盾になりながら2人を逃せばいい。

そうそう、くたばるまでに数分は稼げるさ。アーマーも T a c t e c に新調したから、しばらく耐えられるだろう。

「任せろよ。それに、仲間も来てるからな!」

転移碑まではあと1キロもない。雪原の中の一本道で、イエティやらペンギンナイトが点在するくらいの、穏やかな場所だ。何もなければ無傷で通り抜けられる。

『リヨーハ、こっちは転移碑から移動中。どこにいる?』

おっと、レイジもご到着か。

「主街区を出て転移碑へ移動中。目標まで1キロ地点!」

『正面から合流だ。暇そうだったからキリトも連れてきたぞ!』

最高の援軍だな。オレンジも怖くねえぜ。

「リヨーハさん、誰と話してるんですか?」

「レイジ。俺の相棒で、アトラスのリーダーさ。デアデビルのレイジって、どっかで聞いてねえか？」

「確か、攻略組の……もしかして、リョーハさんってあの死神リョーハですか？」

「死神は勘弁してくれねえかなあ、縁起悪すぎる」

苦笑いを浮かべる俺の頭に、ピナが乗っかってきた。ヘルメットを被ったかと思うような重量が加わり、首が痛い。振り向き速度も落ちてそうだな。

「でも、悪い人じゃないんですよね」

「どうしてそう思う？」

「悪い人なら、ピナがそんなに懐きませんよ」

きゆるる、と鳴くピナはどこか嬉しそうだ。ビーフシチューに味を占めたか？ こいつ、肉食だな。

「案外、俺も悪人もよ？ ピナは餌で釣っただけで」

「シノンさんや他の人たちも、リョーハさんがいい人だから一緒にいるんじゃないですか？」

思わず足が止まった。俺は自分自身をいい人だなんて思ったことはないし、言われるような人間じゃないとも思う。傷付けて傷付けて、それで今を生きているんだから。

シノンはどう思っているかな。そう思っただけでシノンの顔を見ようとしたが、躊躇ってしまった。

拒絶されたらと思うと、怖くてたまらない。いつものように飄々と、俺なんてなんとも思っていないように斬り捨ててくれるだろうか。

「俺は……」

『こちらメイベル。リョーハ、お前のケツからイエティの軍団がお出ましたぞ！ 先頭にPMCあり！』

「オレンジか!？」

『カーソルはグリーン。武器は……DVL-10！ あの野郎、カスタムの黒フードか！ レッカー、タチャンカを押さえろ！ 奴を撃つたら、こつちがオレンジだぞ！』

『放せええええ！　ここであつたが100年目！　今日こそ地獄へ墮としてやりますぞー！』

『100年も経つてねーし、地獄に墮ちるのはお前になるぞマヌケ！』
最悪のタイミングだ。今から走つて、安全圏に逃げ込めるだろうか？　難しいだろう。どうやら、覚悟を決めるべき時が来たらしい。

「シノン、シリカを連れて逃げろ。俺が足止めしてやるよ」

「リヨーハも逃げるのよ。死ぬつもり？」

「まあ、そんなところさ」

精一杯笑つてみせた。上からの援護はあるし、俺だつて割としぶとい方だ。くたばるつもりはないし、死ぬにしても数分は稼げる。

そう思いながらAS—VALのセレクターレバーに手を伸ばしたまさにその時、シノンに頬を叩かれた。

バランスを崩し、少しだけ視界が揺れる。シノンが泣きそうな目をしながら俺を睨んでいるのは、気のせいだろうか。

「馬鹿言うんじゃないわよ。ほら、こっちー」

シノンは無理矢理俺の手を引く。転移碑まで逃げるぞ、と言うことか。

「間に合わねえよ。先行けつて」

「うるさいー」

T a c t e cの背中についている取っ手を掴まれ、無理矢理引きずられる。ここでごねても、シノンが逃げ遅れるだけか。大人しく逃げるでしょう。

『あのD V L野郎が道を外れて逃げたぞ！　モンスターは以前お前らの方に向かつてる。あと30秒で追いつかれちまう！』

「貴重な情報ありがとよー」

『早く逃げろつてんだ！　タチャンカ、先頭集団をなんとか止めろ！』

銃身焼けつくまで撃てー！』

『そうとあろうかと、R P K 2挺持ちですぞ！　毎日コツコツ集めた、B S弾の裁きを受けるが良い！』

タチャンカの援護射撃が始まり、フカ次郎たちグリズリー隊も駆けつけたのだろうか、グレネードランチャーの爆音まで響いてきた。

正面には吹雪の中に浮かぶ黒い人影も見えない。どうやら、俺の悪運はまだ尽きていなかったらしい。

「待たせたな相棒、キリト拾ってたら遅れたわ！」

「すまねーが、死なない程度に頼むぜ！」

すれ違いざまにレイジとハイタツチを交わし、俺は振り返る。レイジはコハルとキリトを引き連れていて、少なくとも俺たちよりはMorbを相手に優位な戦いができる編成だ。

「数が多いな……レイジ、コハルを借りるぞ」

「あいよ。後ろから守ってやる。行け！」

「任せたよ！」

レイジのAKが火を吹き、突撃して来たイエティの戦闘集団をスタンスさせる。あの野郎、レーザーサイトを頼りに、ヘッドラインを横薙ぎにしやがったのか。タチャンカみたいな真似しやがって。

そこにキリトとコハルが突入して、瞬く間に数体を倒してしまった。そこでリロードを終えたレイジが再び援護射撃でイエティを怯ませ、再び2人が突っ込む。いい連携してるじゃねーか。

「道を外れて支援するわ！ シリカはこのまま安全圏に！」

「どうかご無事で！」

シリカは転移碑の方へ走る。残りの距離は数百メートル程度だし、無事にたどり着けるだろう。

それより、心配なのはシノンだ。道を外れて、あの雪道から狙撃しようとしている。確かにレイジたちを射線から外すにはそうするしかないが、そこはあまりにもリスキー過ぎる。

「おい、迂闊にそっち行くな！」

シノンを追いかけたまさにその時、彼女の姿が俺の目の前から消えた。ヒドウン・クレバスは静かにそこで口を開いていて、道を外れた獲物をずっと待ち続けていたらしい。

12層―9　ウサギの穴に落ちて

咄嗟にその手を握れたのは、本当に奇跡だった。それでもシノンはずまらず、俺もヒドウン・クレバスへと引きずり込まれていく。

シノン自体は軽いが、装備が重過ぎた。俺の両足ではシノンを受け止め切れなかった。どこかの栄養ドリンクのCMみたいにはいかないものだ。

最後の頼みの綱は一本のピッケル。全てはそれに委ねるしかない。

「腰に掴まれ！」

落ちながら叫び、シノンを引き張る。俺の方がシノンに引き寄せられるようになって、シノンは俺の腰にしがみつくなことができた。

あとは両手でピッケルを持ち、氷壁に突き立てる。急ではあるか、僅かに傾斜がある。垂壁だったらお陀仏だが、これならば僅かに希望がある。

無我夢中でピッケルを突き立てた奴が生き残るのだ。刃が火花を散らし、体はあちこちの岩棚にぶつかっては痛む。それでもピッケルを離すことなく、俺はただ落ち続けていた。

氷壁が砕け、刃の跡が一筋残る。どれだけ落ちたかわからない。岩棚に身体を打ち付けながら尚も落ち、最後はピッケルが壁から離れ、底へと落ちた。

『ハ、――カ！』

耳元で叫ぶな喧しい。誰かがさつきから怒鳴ってやがる。この声はレイジみたいだな。Soldin投げ捨てちまおうか。

なんだか弾力のある枕の上でゆっくり寝てるのに、何であいつに叩き起こされにやならんだ。

『リョーハ！ 生きてんのかこの野郎！ リョーハ、リョーハ！ スーカ！』

奴の声が頭にガンガン響きやがる。震える手でプレストークスイッチを押し、何とか声を絞り出す。

「うるせえな……頭に響く」

『生きてたか……無事なのか？』

「わからねえ……折り返すから待て」

霞む視界がようやくはつきりとしてきた。上を見上げる俺の視界に、シノンの顔がいつぱいに広がる。ここは天国か？

もしかして、この後方部の感覚はシノンの太腿か？ 恐る恐る目線を下へ向けると、その期待は裏切られることなく、シノンの膝がそこにあつた。

「やっと起きた？」

「俺、死んだのか？」

「馬鹿なこと言う元氣は戻ったようね」

シノンが微笑んだ気がする。ウィンドウを開いてヘルスタブを見ると、ダメージはほぼ完治していた。とはいえ両脚の最大耐久値が減っているのを見るに、壊死していたのをシノンが治療してくれたようだ。

「やばかったか？」

「私は無傷に近いけど、Comtacがどこかに吹っ飛んだわ。リヨーハは両脚骨折と壊死、軽度出血も2箇所、分散ダメージもあつて残体力半分ね」

「岩棚にぶつかって、雪に落ちて助かった感じだな。手当てありがとう」
起きあがろうとすると、シノンに両肩を掴まれた。まだ寝ているということらしいので、お言葉に甘えて膝枕を堪能しておくことにする。

とりあえず、レイジにだけは返事しとかないな。多分、俺の落下地点を確保してずっと呼びかけていたのだろうから。

「レイジ、こっちは治療完了して、何とか行動可能」

『脱出出来そうか？』

「ザイルとハーケン、カラビナにアイゼンがあるなら出来るぜ。エイト環も欲しいな」

『……詰んだか？』

「そう諦めんなって。脱出地点探してみるから、水と食料、あとグリズリー2つくらいバッグに詰めて落としてくれないか？」

『わかった。しばらく待つてろ。そう言えば、転移結晶があつたな。』

持ってくる』

「それはとって置け。ボス専用だろ？ 脱出口がなかった時の非常手段にはしておくけど、いきなりは使うな」

『……物資に入れておく。無理だと思ったら迷いなく使え』

よし、とりあえず物資をもらえらなればらく耐えられる。転移結晶はまだまだ貴重品だし、ボス戦での緊急離脱用にとっておく必要があるんだ。まだここで使うべきじゃない。

それにしても、クレバスは底に行くほど狭くなるものだが、洞窟にでもぶち当たったのだろうか。この辺りはやけに広い。トンネルみたいだ。

「しばらく待つか」

「そうね……ごめんなさい、ドジ踏まなければ巻き込まなかったのに」
しょんぼりするシノンはないはずの猫耳がぺたんとして寝ているように見えた。シノンって、本当に猫みたいところあるから幻覚を見たらしい。

そんな頭を撫でてやると、今日は大人しく撫でられるどころか、頭を擦り寄せてきた。いつもならビンタひとつ飛んできてもおかしくないのに、ヘマをしてしよげてるな？

「ヒドウン・クレバスなんてわかるかよ。ありやよく出来てるぜ。リアルでもあんな風にわからねえから」

「落ちたことあるの？」

「その前に見つけたよ。斜面から滑落したことならあるけどな」

その時もピッケルで止めたわけだが、まさかここでも使う羽目になるとはな。氷壁が微妙に傾斜していたおかげで助かった。垂壁なら、ピッケルを突き立てることもできずに転落死していたところだ。

あとは、岩棚に激突して減速したのも助かった理由か。俺ばかり負傷しているけど、よく死ななかつたものだ。

「登山してたの？」

「大学のサークルで……って、リアルの話はタブーか」

「……今ならいいわ。リョーハのこと、教えて」

やけにシノンがしおらしい。膝枕のお礼に、少しばかり自分語りで

暇潰しをして進ぜよう。俺も暇だしな。

前にも少し話したことはあるが、触れる程度だったはずだ。

「俺はどこにでもいるよーな大学生でね。もちろんゲームは大好きだが、体を動かすのも好きだから山岳部にいた。夏山とか冬山とか、あつちこつち登ったりゲームに勤しんだり、サバゲーもやってたから忙しかったんだぜ」

「勉強しないの?」

「ほどほどにな。バカは高いところが好きなもんで」

不真面目ね、とデコピンを食らったが、シノンはどこか楽しそうに微笑んでくれた。そういや、自分の身の上話なんていつぶりだったか。最早、リアルの俺のことさえ忘れてしまっただというのに。

「で、ナーヴギアが出るって話を聞いてからはバイト三昧よ。おかげでナーヴギアは買えて、PC版の頃から大好きだったタルコフが買えたから最高さね」

「レイジとはその頃から?」

「PC版からだ。ファクトリーでキルタスクをやってる時にやり合ってたね。あまりにも腕の良いやろーで、動きも良かった。そこにいるかと思ったら霞のように消えて、いつの間にか側面に回り込んでくるやべー奴だったよ」

確か、その時はレイジにやられたけど、お土産グレネードで巻き込んでやったんだっけ。あまりにも腕が良くて、戦っていて楽しい相手だったからメッセージを飛ばしたら返事が来て、一緒に戦う仲間になった。

そんな出会いを、シノンは静かに聞いていた。あくびが出るようなありきたりの話だと思うが、面白いのだろうか。

「いつぶりかしら、リョーハの話をこんなに聞くなんて」

「身の上話なんてするかよ。恥ずかしい」

そつぽを向こうとすると、シノンの手のひらが俺の頬を包み、その動きを制した。目を開けばシノンの顔がある。どこかクールで、美しい。幼さを残してはいるが、美人になることは約束されたようなものだ。

そんな少女が俺の顔をマジマジと見つめている。正直、興奮した。「リアルに帰ったら、したいことはあるの？」

唐突な質問だった。やけに神妙な面持ちをしているのは気のせい
か。

それにしても、答えに困る。リアルなんてクソなところに、帰る気があんまり湧かなかったからな。

「……考えてねえ。帰れなくても良いって、今でも思ってる」

『リヨーハ、物資を用意した。今どこだ？』

レイジの無線が言葉を遮る。正直言つて、助かったような気がした。

「さつきから動いてねえ。そのまま落としてくれれば何とかなると思う」

『先にスモークを落とす』

程なくして、緑の煙を吐き出しながらスモークグレネードが落ちてきた。ドンピシャ俺のいる場所。ちゃんとクレバスの位置は把握しているらしい。

「OK、確認した」

『落とすぞ』

しばらくして、落ちてきたTri-zipバックパックが雪に大穴を開ける。水と食料と医薬品に弾薬がいっぱい詰め込まれていて、2つの転移結晶もある。これだけあれば、しばらくは戦えるさ。

「物資回収したぞ。探索してくるわ」

『無理すんなよ。ロープ垂らしてでも引き上げてやるから』

そりゃありがたい。とりあえず、望みは捨てずに行動を起こすしよう。この先待っている楽しい戦いに参戦できず、こんなクレバスの底で腐っているつもりはないんだから。

12層―9.5 返らない声

BEAR Operator “Rage”

リョーハ滑落直後

激戦の末、ラツシユかと思う量のMobを撃破したが、相棒はもうそこにはいなかった。口を開くクレバスと、やかましく聞こえる支援部隊の報告がリョーハの行方を告げる。

奴はシノンを助けようとして、巻き添えにクレバスへと滑落したのだ。それが何を意味するか、わからないほど俺も無知ではない。クレバスへの滑落がどれだけ致命的か、奴から聞いていたのだから。

「嘘だろ……おいおいおいおい！」

「レイジ、待って！」

袖を掴むコハルを振り解き、クレバスへと近寄る。とはいえ雪底を踏み抜いて俺まで落ちたらたまらないので、縁までは慎重に、それでも急いで近付いた。

奴のことだ。ピッケルを使ってどこかで止まってるに違いない。奴は雪山に慣れていて、こんなトラブルくらい切り抜かれると信じているから。

「リョーハ、リョーハ、こちらレイジ。応答しろ！」

答えは返ってこない。吹雪の音をシャットアウトするComta cからはノイズが入るばかりで、相棒の声は返ってこない。

プレストークスイッチを押し忘れたのだろう。相棒が滑落して、俺も相当焦っているんだ。

「リョーハ、リョーハ、こちらレイジ。応答しろ」

今度は確かにスイッチを押していたのに、声は返ってこない。恐怖が背中を撫でて、俺の体温は奪われていく。足の震えが止まらなくて、視界が霞む。

感じることのなかった恐怖が俺を支配していた。リョーハが死んだ、それは自分が死ぬことよりも恐ろしく、俺の正気を奪っていく。

「嘘だ……嘘だ嘘だ嘘だ！」

「レイジ、待って！」

ピツケルとパラコードを出す俺にコハルが組み付いてきて、俺は雪に放り投げられた。それでも這いつくばるようにクレバスへと向かうと、いつの間にか来ていたレンとコハルの2人がかりで引きずり戻され、また雪の上へと投げ飛ばされる。

「レイジさん、何する気ですか!」

「降りて救助に行くんだよ!」

「危険だよ、行っちゃだめ!」

「うるせえ!」

コハルとレンを振り解き、ピツケルをクレバスの淵へ突き刺す。例え死体だけでも回収してやる。あいつをここへ置き去りにはしない。俺の大切な相棒なのだから。

「置き去りになんて出来るか!」

一緒に落ちて行けたなら、それはそれで満足だったかもしれない。戦場で背中を預けた相棒を失う覚悟も何も、今の俺にはないのだ。

道連れになっただとしても、構うものか。

さあ、迎えに行こう。覚悟を決めた俺はプレートキャリアの取っ手を掴んで引き戻され、頬を張られた。

その音はあたり一帯に響くほどで、ダメージこそ入らないがよろけてしまう。そして、その犯人は意外にもレンだった。

何をしやがる。頭に血が上った俺はやり返そうとするが、それより素早く足を刈られて、両手を押さえつけられた。レンの体格で馬乗りなられてしまうと、いくら相手が女とは言え、振り解くのは難しい。

「ふざけないでください!」

雪に頭を突っ込んだせいかわ、怒りに歪むレンの顔を見たせいかわ熱が冷めていく。怒りの熱が冷めて冷静さを取り戻して尚、クレバスは俺を呼ぶ。

それでも動けない。レンの顔と、肩越しに見下ろしてくる泣きそうなコハルの顔が罪悪感を呼び覚まして、俺の心は揺らいだ。

「レイジさんまで死んだら、アトラスはどうするんですか! 私もフカも、みんなあなたがアトラスに誘ったんじゃないですか!」

少し顔を背ければ、みんながいた。ブラックバード、レッカー、タ

チャンカ、アイザック、マニエクのメイベル隊5人と、ベイサル、ムスタファ、アリフ、フカ次郎のグリズリー隊が俺を見下ろしている。「レイジ」

聞き慣れた優しい声。コハルはツカツカと歩み寄ってきたかと思うと、コハルの姿が消えた。クレバスに落ちたかと思っただけが違う。体に加わった重み、声が左耳の側から聞こえてくる事からして、飛びつかれたのか。

「嫌だよ、レイジがいなくなるなんて……耐えられないよ！」

コハルが子供のよう泣きじゃくる。レンはようやく怒りがおさまってきたのか、大きく肩で息をした。

そうだとしても、俺は落ちていったリヨーハとシノンを見捨てられない。コハルの涙に胸が痛むし、泣かせたくない気持ちはあるが、それと同じくらい友を失う恐怖が俺をクレバスへと呼ぶのだ。

「……わかったよ。でも、俺はリヨーハのことを見捨てたくはない」みんなわかってくれるだろう。例え冷静になっても、友を、仲間を見捨てたくはない。それが捨て身なのか、生還前提での行動かというだけだ。

「……手伝うから。助け出そうね」

「もつと、私たちを頼ってください。一人で死に行かなくていいんですから」

レンが差し伸べた手を掴み、起き上がる。アトラスの隊員たちは俺に顔を向けて、命令を待っていた。

「ブラック、メイベル隊で食料と医薬品、あと転移結晶を用意してきてくれ。グリズリー、この近辺を確保。クレバスの位置に目印を」

静かに命令を出すと、みんなその通りに動き出す。その場に残ったのは俺とコハルだけ。いつもは一緒にいるリヨーハもシノンも、今はいない。

「レイジ、きっと大丈夫だよ」

「そのはずだ。あいつなら……」

時間が経つほどに、雪がクレバスを覆い隠していく。俺はただ、リヨーハの生存を信じてプレストークスイッチをそつと押し込むし

かできなかった。

12層―10 奈落の先へ

クレバスは底へ行けば行くほど狭くなっていくものだとか教わっていた。氷河の裂け目はV字になっているから、そこへ足が挟まって抜け出せず、命を落とすこともあるのだと。

でも、ここは底が広く、通路のようになっていた。もしかしたら、ダンジョンか何かの入口だったのだろうか。ピッケルか何かがあれば、入る前にゲームオーバーだけだな。

「……ねえ、リョーハ」

「どしたよ?」

振り向いて声をかけるが、シノンにはバツが悪そうに視線を外して首を横へ振る。ハマをした責任を感じているのだろうか。たまにはしおらしいシノンも可愛いな。

それに、2人きりとかいつぶりだろうか。バググアツプ隊もいない、本当に2人きり。たまには、話したりするのにいい機会かもな。

「休憩するか?」

「あれだけしたじゃない。早いところ脱出しましょう。時間がもったいないわ」

「俺は構わねえけどな」

まるで焦っているような声色だ。まあ、気持ちはわかる。でも、そのために判断を誤られても困るし、こういう時は休憩するに限る。

そんな訳で、強引に休憩にした。バツクパツクから取り出した焚き火セットで暖を取り、鍋にアリオンカチョコバーを投入。そこにミルクを少し入れて煮込む。

甘い物は気分転換にいい。ストレス下では尚更だ。こういう小細工で自分を騙し騙し動かして乗り越えていく。俺はその術を知っていて、彼女は知らないってだけだ。

「出来たぜ。リョーハ特製ホットチョコレート。バフはねえけど飲んでけ」

「ありがと」

いつも通りそっけないのに、どこか怯えたような雰囲気はどうして

も気になる。きつと、放っておけばこの小さな溝は大きなクレバスへと姿を変えらる。長い時をかけてゆっくりと。

だからこそ、俺はわざとシノンの隣へ座った。普通ならビンタの一つ飛んでくるだろう、肩の触れる距離。それでも、シノンはわずかに声を漏らすだけで抵抗しない。

「気にすんなよ。お前は悪くねえ」

「……でも、リヨーハを死なせるところだった」

「死なねーよ。雪山で滑落した時の方がよっぽどヤバかったわ」

本当はどつちもヤバかったが、優しい嘘というものもあるさ。俺には優しくねえけど。

カップを握るシノンの手が震えていた。熱々のカップを持って寒いわげがない。だからと言って指摘するのはナンセンス。

そつと手を添えるだけでいい。握る訳でもなく包み込んで、それだけでいい。きつと、伝わってくる。

「相方が生きていてくれりゃ万々歳よ。ただ無意味に死ぬより、シノンのために体張る方がやりがいもあるっての」

「……死にたいみたいな事、言わないでよ」

軽く、触れるようにシノンの拳が俺の肩を叩く。本当に叩かれたのかも分からないほどで、思わず彼女を二度見してしまった。

「一生守るって言ったじゃない。忘れたの？」

「忘れられてるか、ジョークと思って流されたかと思った」

「あんな状況で言われて、冗談なんて思わないわよ」

それもそうか、と笑いが溢れた。なら、シノンは予約済みって事でもいいか。

関係がどうなっているのか一度整理したいけど、弱ったシノンにそれを迫るのは酷だから後回しにする。まあ、いつものシノンになら下僕って言われるんだらうな。その時はフカ次郎に泣きつこう。

「……どうして、手を掴んだのよ」

きつと、クレバスに落ちた時のことを言っているのだろう。あそこでシノンを見捨てたなら、俺は落ちずに済んだ。

でも、間違いなくシノンは死んだらう。その後俺はどれだけ打ち

ひしがれたか。こんな考えも後付けか。

「勝手に動いた。シノンに死なれたくねえからな」

「……バカ」

肩に加わる重みはシノンの体重か。頭を乗せてきたのだろう。

そんなシノンを見ることはなく、静かにホットチョコレートを啜る。止まり木は何も言わず、そこに聳え立つだけだ。少し休んでいきたいと言うならば、微動だにせずそこへ鎮座して羽を休ませてやる。そんな存在であればいいのさ。

「どうして、いつもそうなのよ。何かあったらすぐ駆けつけて、火の粉は自分が浴びようとして。私にそこまでする理由がわからないわ」

そうは言われても、明確に説明するのは難しいんだよな。本当に、本能みたいなものだ。ふわっとした、そんな感覚。一応理由はあるけれども、その理由でさえもがふわっとした根拠しかない。

でも、ぶちまけていいかもしれない。シノンを信じて、それで拒絶されたら……その時はその時か。

「そりゃ、好きだからに決まってるだろーがよ」

「何を言い出すかと思えば……!」

シノンが声を荒げてても、俺は変わらない。何を言われても、俺の気持ちに嘘はつかないし取り繕うこともしない。

それが俺の本心だからだ。誰かになんと言われても揺らぎはしない。この想いの一つ一つが、俺を形作る大切なものなのだから。

さあ、帰ってくるのは肯定か拒絶か。吐き出してスッキリして、気楽に身構えていた俺の視界は急に上を見上げた。

はて、どうしたことか。視界の端にシノンが映っているのを見るに、突き飛ばされたか押し倒されたのか。流星に予想外だ。距離をとっていないのを見るに、嫌われたわけではないようだけど。

「なんで、いつもそうなのよ……5層の時だって、突き放すつもりで言ったのに……!」

きつと、一生守ってという話のことだろう。普通の奴なら逃げ出す。重過ぎるし、背負う覚悟のあるような奴はそうそういない。

でも、俺はそうじゃない。仲間の命を背負ってきて、今更一人増え

たところで変わりはしない。それが、本当に守りたい人の命ならば、心地よく思えるだけだ。

「言った通りだぞ、好きだからって。それに、お前とバディになった時から守るって覚悟はしてたからな」

そつと手を伸ばし、シノンの頬を包み込む。流れる涙は親指で拭つて、もう片方の手は彼女の背中へと回し、引き寄せた。

きつと、セクハラ防止コードが警報を鳴らしている頃だろう。拒絶して、俺を牢獄送りにするならそれはそれで構わない。その時は、想いを捨てて任務に忠実な猟犬になればいいんだから。

シノンが震える指で、俺には見えないウインドウを操作する。終わりの足音がするような気がして、俺は目を背けた。覚悟をしたとは言つても、やっぱりその瞬間は見ていたくないものだ。

レイジは何と言うか。コハルは俺を軽蔑するだろうか。フカ次郎は、慰めてくれるかな。

そんな思いとともに、俺の心はどこへ消えていくんだろう。そんな不安を抱きながら時を待つが、いつまで経つても強制転移させられることはなかった。

その代わりに、重みが加わって動けなくなる。シノンが俺の胸に抱きついて来たのだ。

「……今だけ、こうさせて。弱い私でいたいから、守っていて」

「いつでも。全部、俺が受けてやる」

彼女が抱える傷も、受けるはずだった傷も、全部俺が受け止める。ボロボロになっても笑顔を見せて、背中を向けて泣けばいい。

降り積もる雪がやけに冷たく感じたのは、頬が火照っているせいではあるまい。きつと、気のせいだ。

12層―11 深淵の先に

「落ち着いたか？」

「……ごめんなさい。みつともないところ見せたわね」

「可愛かったぞ。いつでも甘えてくれてOKだ」

シノン目は逸らしながら身を起こし、そっぽを向いてしまう。もう少し甘えていてくれてもいいのに。返ったら抱きしめてみようか。

余韻を味わいながら俺も立ち上がると、シノンは既に前進準備を整え、いつものようなクールさでそこにいた。さっきまでの弱い姿はどこへやら。切り替えがうまいな。

「先へ進もう。出口を探さねえと」

「本物のクレバスなら、登るしかないんでしよう？」

「本物ならば、な。茅場の優しさに期待しようぜ」

落っこちても生き残る可能性があるのに、脱出は不可能なんて鬼仕様を残していないと信じたい。半ばグリッチのようなものだが、何かしら救済は準備されていると信じた方が気も楽だ。最後は登ればいいんだしな。

「転移結晶、落ちてねえかな」

「隠しスタッシユがあるといいわね」

「そんな時に限ってゴミが出るんだよ」

グラボの一つ出てもいいのにな。まあ、転移結晶があるという安心感のおかげか、メンタルを強く持つていられる。レイジは絶対に助けてくれるだろうさ。

「UNTAARアーマーとかね」

「GzheerかSlieck来たって思ったら青アーマーって、悲劇以外のなんでもねーよ」

シノンにも覚えがあつたらしく、クスリと笑った。やっぱり笑つての方が可愛いじゃないか。いつものクールな顔も好きだけどさ。

時々他愛もない話をして、ほとんどは無言のまま進む。俺は前を、シノンは後方を警戒して、終わりの見えないクレバスを歩き続ける。スタッシユのひとつもないけれど、散歩にはちょうど良かった。

そして、この世界が俺には合い過ぎている。こんな戦術なんてサバゲーか自衛隊に入るかでもしなければ役に立たないような代物なのに、ここではそれが全て。

おかげで俺は必要とされている。今の立場がある。悲しいほどに、俺にはよく似合っていた。

もし現実に帰ったとして、失った時間は戻らない。コースから外れた俺を社会は受け入れてくれるのだろうか。そんな不安にさえ襲われる時があるほどに。

「そういや、なんか俺のリアルに興味あるみたいだが……やっぱ、リアルに帰りたいのか?」

「当然じゃない。リョーハは……どうして帰ろうと思わないのよ」

「就職も進学もままならず、放り出されるのが目に見えてるからだよ。ゲームでこうなった奴に、社会は厳しいぜ」

それならばこの世界で戦っていた方が幸せだ。少なくとも、生きていくという実感があるのだから。

例えここで死んだとしても、恐れる必要はないんだ。疲れたからしばらく寝て休む。それだけなんだ。怖いのは、シノンやレイジを置き去りにしてしまうことだけだけれども。

「……だとしても、死んだら終わりよ」

「覚悟は出来てるさ」

言い放った直後に、背中へ重み加わる。バックパックを押しつぶして、シノンが抱きついて来たのだ。深淵まで行ってしまいそうな俺を引き止めるように、縋り付くように。

「生きて。その銃を握ってる限りは、私のこと思い出すんでしよう?」
その約束で渡されたAS-VALは、既に何度か機関部を交換している。それでも銃身やダストカバーのように、その時から変わらずに取り付けているパーツもあった。

つぎはぎだらけの銃で、新品にしても何も変わらない。それでもシノンとの絆を感じて、同じ部品なのに頑なに古いものを使い続けている。これを撃つたびに、シノンを思い出すために。

「わかったよ。ただ、ヤバくなったら約束はしねえぞ」

「そこははつきり言い切りなさいよ」

クスリ、とシノンが笑った。今はそれでいいさ。もしも、この先も一緒にいられるならばその時に改めて……

「止まれ」

思考が切り替わる。確かに話し声が反響して聞こえてきた。ヘッドセットの環境音増幅機能でようやく聞こえるレベルだから、まだ俺たちの話し声は気付かれていないと信じたい。相手が同じものを持ってたらアウトだが。

「なんかいる。複数」

「こんな所に？」

「おかしいだろ。偵察しよう」

足音を立てないように忍び寄る。入り組んだ道の先を慎重にクリアリングしていくと、黒フードのプレイヤーがいた。

頭の上のカーソルに目を凝らすと、オレンジ色に見える。あいつらは歩哨だ。本命はその奥にいて、何かをしているのだろう。あちこち探してもアジトが見つからないわけだ。クレバスの下なんて思いもしねえよ。

「コンタクト、オレンジ2」

「どうするの、主力はあの奥でしよう？」

「まーな。まずはレイジに報告するわ」

声を聞かれたらまずい。テキストでレイジへ、オレンジの居場所を見つけたので調査する、援軍はまだ出さな、というメッセージと共に座標を送る。

返事はすぐに来た。了解と返ってきたから、こっちの方は大丈夫だろう。バッグアップ態勢を整えて待っていてくれるだろうから、こっちは俺のやることを果たすだけだ。

「よし、レイジが上でバックアップしてくれる。シノン、周辺警戒頼めるか？」

「いいけど、どうするの？」

「あいつらをダウンさせて、その先に行く」

AS—VALなら銃声を聞かれることなく奴らを始末できる。殺

さずにダウンさせて、後は縛っておく。その先で何が起こっているかを確かめるには、それが最適の選択だろう。

「……撃つの？」

「ダウンさせるだけだ。捕虜にする」

殺すのか、そう心配しているのだろうか。シノンには俺に殺して欲しくないらしい。それがどうしてなのかはあまりわかっていないけれども、知り合いが人殺しになる姿なんて見たくないだろうしな。

どうしてだか、シノンは殺しの痛みを知っているようだしな。

「お前は撃つなよ。ドラグノフは音がデカすぎる」

「わかってるわよ」

AS—VALを構え、やる気のない見張りの頭に狙いを合わせ、静かにトリガーを引く。亜音速の9×39mm弾が銃声を響かせることなく頭を貫き、もう片方も何が起きたかわからず、声を出せないままに頭への一撃を受けてダウン状態へと陥る。

クリア。もう1発ずつ頭に銃弾を撃ち込んで黙らせ、手早くパラコードで縛り上げていく。シノンも打ち合わせ通りに片方を縛り上げてくれたから、止まるのは最低限の時間で済みそうだ。

ここからは声を出さない。ハンドサインで合図すると、シノンは取り回しの悪いドラグノフからMP7へと持ち替える。こっちはサブレッサーをつけているけれども、消音性能はAS—VALの方が上だ。

そんなことよりも、シノンに人を撃たせたくない。その気持ちの方が強かった。だから、俺が先頭に行く。撃つ痛みも撃たれる恐怖も、全部俺が受けてやるさ。俺は盾として、矛としてここにいるんだ。

今更迷うことなんて、ありはしないんだ。

12層―12 会敵

氷壁からわずかに顔を出すと、そこには黒ローブのプレイヤーたちがたむろしていた。頭の上のカーソルはオレンジで、どうやらここがアジトのようだ。

記録結晶をそつと雪に埋め込み、奴らの会話を記録しておくことにする。ギリギリ映像も入るだろう。決定的な証拠を押さえて、あとでボコボコにしてやる。

「だからトレインは嫌いなんだ。5層でもミスしたし」

あのトレインをやりやがったDVL野郎がボヤク。そうだ、正々堂々やってきやがれ。ウチの怨念マリモがお仕置きしてやるからよ。「落ち着いてくださいよ。ヘッドから、これが最適って言われたでしょう?」

このムカつく話し方、どっかで聞いた覚えがあるんだよな。でも、もう片方はよく見るとグリーンだった。恐らく、工作とか物資調達要員だろう。なんかこいつの話し方もムカつくな。

「あの話し方、どっかで覚えがねえか?」

「5層でレイジがモノマネしてたじゃない。モルテとか言う奴でしよう?」

「ああ、レイジのぶつ殺すリストトップ3のね」

確かにあの話し方はムカつく。堂々の一位は、毎回「俺知ってる!」って煽りやがるALSのジョーだったな。あいつは俺も殺した。どさくさ紛れに、アインクラッド外周から突き落とそうと計画していたところだ。

音を出さないようにライフルスコープを取り出し、望遠鏡代わりに使う。顔を拝んでやりたいところだが、どいつもこいつもフードを深くに被っているせいで見えやしない。

「テイマーについた、護衛も、仕留められればな」

「死神と氷でしょう? 5層でやれば良かったんですけどねえ」

「とは言っても、あいつらにぶつ壊されまくりだぞ。手下はマリモ野郎に半殺しにされて捕まったし、俺とシュピーゲルはグリーンなお

構いなしに殺されかけるし」

シユピーゲル、その名前を聞いて、俺とシノンには顔を見合わせた。シユピーゲルと言えば、5層の森の中で出会ったアイツで、シノンのリアルの知り合いだったはずだ。

確かに、5層でリシヤラにけしかけられた時にレイジが反撃したはずだ。あとグリーンなのをお構いなしに殺しかけたと言えば、レイジがジョーの煽りにブチ切れて威嚇射撃したとか、タチャンカの弾幕がギリギリ外れたくらいだった気がする。

もう少しツラを見せやがれ。あの声には覚えがあるし、フードの影からチラチラ見えるあの髪型も覚えがあるんだ。てめーがジョーだって証拠が掴めるなら、話は早いんだぞ。

「……シノン、転移結晶を準備しろ。一か八かで仕掛けてやる」
「どうするつもり？」

「フラッシュバンで目潰しして、フードを剥ぎ取ってやる。グリーン
の連中のツラが割れば、色々とやりやすいからな」

記録結晶はもう少しだけ持ち堪えてくれるだろう。今すぐ動かなければ、チャンスは永遠に巡ってこないんだ。

ポケットからZaryaフラッシュバンを取り出すと、シノンが手を添えてきた。その目は縋るようで、一瞬だけ後ろ髪引かれてしまう。

それでもやらなければならぬ。ここで奴らの尻尾を掴めたならば、この先死ななくていい人が死なずに済む。泥を被るくらい、なんだというんだ。

覚悟を決めて頷くと、シノンは目を伏せて手を離れた。そして、彼女もフラッシュバンを取り出して見せる。

ピンを抜いた。氷が割れた音なのか、金属音なのかわからないような甲高い音がして、再び静寂が訪れる。

そして、それを投げた。レバーが吹き飛び、黒ローブの連中が謎の飛翔体へ一斉に目を向ける。きつと、それへ反応できる奴はそんなにいないはずだ。

「グレネード……！」

あのDVL野郎が叫んだ。でも手遅れだ。炸裂したフラッシュユバンの眩い光が黒ローブたちから視界を奪い、爆音が耳鳴りを巻き起す。

真っ直ぐ立ってさえいられず、どこに何がいるのかさえわからないだろう。そこへ飛び込んで、無音の銃撃を頭へ叩き込むのは簡単なことだった。

「ツラ見せやがれー！」

目を付けていたグリーンフードを掴んで剥ぎ取り、顔を露出させる。ソイツはやっぱりALSのジョーで、これでオレンジと組んで引つ掻き回してやったことがハッキリした。シノンが記録結晶を持ってきてくれたから、これは証拠として役立つはずだ。

「シノン、そのDVL野郎のツラも押んでやれー！」

「ええー！」

そろそろ、スタンから回復する奴が現れる頃だ。早い所やることを済ませてトングラしなければならぬ。

立ち上がろうとするオレンジの頭にもう1発ずつぶち込もうとして、飛びつかれた。ソイツは槍を持っていて、鋭い突きを銃身で弾くのがギリギリ間に合った。レイジから格闘習ってて良かった。あいつは即応予備自衛官だから、こういう戦技が何かと役に立つんだ。

「お前、アトラスか」

「だったらなんだ、クソツタレめー！」

2度目はない。レーザーサイトを頼りにばら撒いてやるが、奴は咄嗟に伏せてそれを躲した。おまけにこっちは弾切れで、リロードよりも奴の刺突が早い。

AS-VALを手放し、左手で槍を弾く。穂先にさえ触れなければダメーシ判定がないのは実証済みだ。

「バカがー！」

髑髏の覆面で奴の素顔は見えないが、驚いただろうさ。槍の柄さえ握ればこっちのモンだ。そして、抜いたのが拳銃じゃなくてナイフで驚いただろ？

どうせこいつら、PVP慣れしていない連中相手に粋がついているだ

けなんだ。見せてやるよ、PvPの中で研ぎ澄まされた本物をな！

首を刺した。出血のエフェクトを見送りながら引っこ抜き、脇腹、胸へと連撃を繰り返していく。一度で止まるな。相手が死ぬまで何度も突き刺せ。さもなくば、死ぬのは俺かシノンなんだ。

迷いは捨てる。俺は死神、ここでこいつを殺す。他の誰かを殺させないために。

「シュピーゲル……？」

シノンの声がやけに大きく聞こえた。動揺したような声を、Soldierへッドセットが増幅したらしい。思わず気を取られてしまい、敵が槍を離れたのに気付くのが遅れた。

拳が胸を打ち据えるが、アーマーが防いだ。ダメージエフェクトの視界の霞みが発生したが、1ダメージが胸部に入った程度だ。なんともない。

それでも、フラッシュバンの効果はそろそろ完全に切れてしまうだろう。シノンが何やら動揺している様子からして、まともにやり合ったら殲滅される。証拠撮影の任務は果たしたんだ。あとは、ここから生きて出るだけ。

「シノン、撤退するぞー！」

「え、ええー！」

シノンの袖を掴んでいたDVL野郎を蹴り飛ばし、シノンの襟首を掴んで引っ張る。AS-VALも記録結晶も回収した。あとは追いつかれないように転移決勝で逃げおわせてやるさ。

「レイジ、オレンジ共の撮影に成功！ 転移で逃げるわー！」

『グレネード放り込むか？』

「やめろ、敵にグリーンも混じってるー！」

『クソ、死ぬなよー！』

レイジの悪態を最後に無線は切れた。あとは自分で切り抜けるしかない。やってやるさ。シノンをここで死なせるつもりはねえし、俺もまだ死にたくはないからな。

しかし最悪なのは、俺が倒していた見張り2人がよろけながらも起き上がってきたことだ。最悪としか言えねえ。

「どけコラー！」

もはやサイトも覗かない。レーザーサイトで適当に狙って乱射すると、敵さんは二度も喰らうかと飛びのいていった。

「サンキュー！ 行けシノン！」

飛びのいたおかげで、進路がガラ空きだ。シノンが強行突破して、俺はギリギリで捕まってしまふ。まあ、計算通りさ。シノンが逃げる時間は稼げたな。

「リヨーハー！」

「先行け！ すぐ振り解く！」

腕に掴みかかってきた奴は蹴飛ばす。しがみついてきたのは、思い切り壁に体当たりして押し潰し、力が抜けたところで振り解く。

追手はまだ来る。シノンへ記録結晶を投げ渡して、行けと叫ぶ。頼むから早く行ってくれ。じゃないと、俺も逃げられないんだぞ。

「先行くわ。すぐに来なさいよ！」

「レディは待たせない主義でね！」

「……転移！」

シノンの体が青白い光に包まれていく。間に合ってよかった。オレンジの大群がすぐそばまで迫っていて、もうちょいで捕まるところだった。

「さっさと帰れ、このクズが！」

振り解いたばかりの奴へ組みつき、斬り掛かってきたオレンジの前に盾として突き出す。おお、肩口にだいぶ深く刺さった。ありや相だなダメージだな。

「ほれ、返すぞ」

グレネードのピンを抜き、肩口を斬られたオレンジの襟にねじ込んでやる。いくらSAOプレイヤーでも、間近でグレネードを喰らったら耐えられまい。

そして、それが何を意味するのも知っている。知った上でやって、もっと多くの敵を巻き込むために、そいつを蹴飛ばしてやった。

そいつはオレンジの集団の中へ倒れ込む。爆発を見届けることなく、俺は転移結晶を使ってその場から逃げ出していた。

あれから3時間後、レイジのハイドアウトで記録結晶の確認をしたが、残念なことにオレンジ共の顔を映すことは出来ていなかった。どいつもこいつも暴れるせいで、ブレが酷かったのだ。

もちろん、そんなものを攻略組に提示したところでどうにもならない。スパイに引つ掻き回されて、俺たちが悪者に仕立て上げられることになる。

そういうわけで、この記録は一部に留めておくことになった。具体的にはキリトとかアルゴ、あとは血盟騎士団のヒースクリフだ。

引き続き、裏で証拠集めをすることになる。少なくとも、俺が襲撃した件は向こうに知られているから、口封じを仕掛けてくることになるだろう。本格的な戦争になりそうで、嫌になってしまう。

俺はベッドに横たわって目を閉じる。決まって蘇るのは、あのオレンジ野郎の胸ぐらにグレネードを突っ込み、蹴り飛ばした瞬間。

爆発の瞬間を見ることなく転移したし、覚悟はしていたから気にすることは無いと思っていた。あいつらは悪人で、殺しても代わりに他の誰かが死なずに済む。だから、正しいことだと信じてきた。

でも、圏内に帰還した瞬間に表示されたキルログを見て、それがずっと頭から離れない。倒した敵の所属を示す“FACTION”の欄に“SAO”が2つ並んでいた。

ドッグタグを回収していないから、名前が表示される“Player”欄の表示は“???”になっているが、確かに殺したのは確かだ。名前も知らない誰かが、俺の手で死んだ。

俺自身がオレンジになっていないのを見るに、どっちもオレンジプレイヤーだったのだろう。だとしても、この手で葬った事実が脳裏にこびりついて離れない。

だからここ数日はよく眠れていない。無駄に寝返りを打って目を閉じて、それでどうにもならないから休憩スペースのテレビをつける。

何度見返したかわからない、タルコフの公式実写ドラマの戦闘シー

ンを見続ける。

Skifたちは敵を殺しても、味方が死んでも次へ次へと進んでいくのに、俺はなんてぎまだ。そう思うと溜息が出る。

「リヨーハ」

今日も眠れぬ俺の元に来客が来るとは珍しい。時計を見れば午前2時だというのに、シノンは一切何をしにきたのだろうか。

「どしたよ、こんな時間に。眠れないか？」

「それはこっちのセリフよ。眠れてないんでしよう？」

「添い寝してくれたら、眠れるかもな」

いつもみたいに怒って、鉄拳制裁を落としてくれればいい。そう思っていた。きつと、そうしてくれたならばシノンは気付いていない。人殺しになった俺のことを、見放さずにいてくれるだろう。

「……ほら。ソファーじや私が寝れないでしょう」

でも予想は外れた。シノンは俺の襟首を掴んでベッドへ引き摺り込むと、本当に隣に寝転んできた。

背中を向けているとはいえ、マジでやるとは思うまい。どうすればいいのか狼狽していると、シノンは顔を少しだけこちらへ向けてきた。

「……殺したのね」

「……わかるか？」

「あからさまにおかしいもの。みんな気付いていて、言わないだけよ」
そういえば、レイジには気にすんな、お前は正しいことをしたと言って背中を叩かれた。メイベルの奴らも、お前は英雄だと称えてくる。

つまりは、分かっている励ましてくれたわけか。どいつもこいつも、優しいとか覚悟が決まってやがる。SAOプレイヤーだったなら、オレンジとはいえ殺したことで敬遠されたかもな。

「気を遣わせたな」

「……苦しいなら、最初から言いなさいよ」

乾いた笑いをする俺を、シノンは抱きしめた。平たい胸に抱きしめられたところでそういう気分にはなり辛い、代わりに安心感があ

る。

守られているような、そんな気分がした。俺はまだここにいらんだと、そう実感できる。

「……私も、人を殺したことがあるの」

「どこでか？」

首を横に振ったようだ。動きが伝わってくる。つまり、何があったか知らないが、リアルで人を殺したということか。

「強盗に巻き込まれて、母親が人質にされたの。お母さんを守らなきゃって、子供ながらに抵抗して……奪った拳銃で、撃った」

思った以上に壮絶だった。きつと、それからも引きずり続けたことだろう。一撃では死なないと分かっているけど、人を撃つことを躊躇うのはそういうことか。

「その時の銃が、54式。トカレフのコピー品だったの」

「リシャラの時の、そういうことか」

シノンは静かに頷く。トラウマが蘇ってパニックに陥ったのだから。そうでなければ、あの取り乱し方は異常すぎる。

「トラウマ克服のために始めたのに、無様なところを見せたわね」

「仕方ねーだろ……でも、それが普通なんだと思うぜ」

俺は殺した瞬間を見ていない。それをやれば間違いなく死ぬと分かっているグレネードを突っ込んだし、巻き込んでやろうと蹴飛ばした。

それで、殺したと知ったのはキルログでだ。どこかぼんやりとしていて、実感が無い。だから、こんな風になっちゃったのかな。

そうでなかったとしても、俺はまだ人でいられるのだろうか。殺すことさえ痛みにも思わない、怪物と成り果てたのではないかと、そんな風にも思ってしまう。

「……リヨーハだって、苦しんでるじゃない」

「実感がねえ、バグみたいな気分なだけさ」

「差はあっても、ちゃんと殺した重さと向き合ってるからこそ、でしよう」

それでも、俺には正当化するだけの理由があった。その逃げ道があ

るのが救いで、シノンはそれを言い訳にしなかった。その違いだと思う。

きつと、俺はまた殺すことになる。他の人たちが死なないために、誰かを殺す。その時に、俺はまだ人でいられるかと不安で仕方ない。「今だけ、涼って呼んでくれねえか？」

「それって……」

「俺の本名。葉月涼だ」

自分がただの大学生の涼なのか、PMCのリョーハなのかわからなくなりそうな時に、シノンに止めて欲しい。俺が涼だって思い出させて、踏みとどまらせて欲しかった。

「涼……今は、ゆっくり休みなさい。そばにいてあげるから」

「スパシーバ、シノン」

ようやく俺は久しぶりの眠りに身を任せることができた。シノンに守られながら、久しぶりに安らぎを思い出したような、そんな気がしていた。

20層―0 悪夢の中で

Aincrad

BEAR Operator“Rage”

あの時どうするべきだったかなんて、今更考えたって遅い話だ。少なくとも、あの時そうするべきだと思った。怒りに身を任せていたのだとしても、そう判断したのは他でもない俺なのだ。受け入れる他にあるまい。

でも、後悔はしていない。仲間だと言えるサーニヤに、そして何よりコハルに刃を向け、人質にしがったオレンジを俺は許すことが出来なかった。

だから、コハルの願いを忘れたように暴れた。力のままに、感情のままに銃を撃ち、ナイフを振り回して。

その報いが今だというのであれば、受け入れるしかない。コハルと一緒に眠っていたハイドアウトにはもう帰れない。どこかのワールドの安全地帯で、他のプレイヤーの存在にまで怯えながら眠らなければならぬ。

目を閉じれば、紙芝居のようにあの時の光景が一つ一つフラッシュバックする。人質に取られたコハルの姿が浮かび、ホルスターに手をかけて飛び起きた。

ある時は、榴弾が降り注ぐ中で戦っていた。ローグの放つグレネードランチャーの弾幕の中へ、オレンジプレイヤーを蹴り飛ばして自分は逃げた。悲鳴が耳をつんざき、跳ね起きた。

次は何だっただろうか。そうだ、俺の目の前で次々と死んでいく仲間たちの姿だったな。彼らの名前を叫んで、その手を掴もうと足掻いた。

掴んだ。そう思った瞬間には彼らの姿は消えて、俺の手は虚空を掴むばかりだった。

最後に見たのは、脱出用の装甲列車にコハルたちが乗り込む姿だった。あの手を掴んでいたならば、きっと違う未来があつたのかもしれない。

でも、掴めなかった。その手を振り払ってしまったのは俺自身の意思で、彼女に背を向けてしまった。その代償が今なんだ。

結局、守りたかったものは何一つ守れなかった。そして、コハルにもう顔を向けることは叶わない。俺はそこまで堕ちてしまって、アトラスにいたことさえも出来ない。

補給もなく、略奪で食い繋ぐしかない。武器もSCAVから奪ったボロで、かつて使っていたカスタマイズAKに比べたらゴミのようなスペックにしかない。フィールドでは交換できるパーツな制約があるから、仕方ないことだ。

いい加減、移動するでしょう。ここも安全ではない。他のプレイヤーに見つかるわけにはいかないのだから。

雪が降り積り、俺の足跡を消してくれる。きっと、誰にも見つかることはないだろう。そこにいたからこそわかる。あいつらはどこを探すか、どう考えるかを。だから、俺が捕まることはないさ。

髑髏のバラクラバを被り、フリースキャップの上からヘッドセットを被る。次はどこへ行こうか。何をしようか。辺りには俺を片手間に殺せるようなモンスターがウヨウヨしている。どこへ行っても同じだ。

罪の証を背負いながら、また行くしかないんだ。願わくば、かつての仲間に出会うことがないように。

でも、死ぬのならば仲間と呼んだ人たちに殺されたいなって、そんなふうにも思ってしまうんだ。

20層―1 浮かない顔で

Aincrad layer 20

BEAR Operator "Rage"

順調とは言えないものの攻略は進み、いつしか20層に辿り着いていた。

コハルと一緒にここにいられるのはやはり嬉しい。インカのピラミッドを思わせる遺跡から草原を眺めて、肩を寄せ合っているだけでも幸せを感じる。

でも、コハルはどこか浮かない顔をしている。理由はわかるが、もはやどうしようもない事だ。割り切るかどうか、それでしかない。

「……ねえ、20層も無事に攻略できるかな」

13層のボス攻略で、ALSが3人の死者を出した。幸いなことにアトラスは負傷者こそいたものの、死人は出していない。

それでも、やはり意識してしまうものだ。正直な話、俺自身もどれだけコハルや仲間たちを守れるかわからない。コハルはずっと頑張ってきたけど、死を目の当たりにして、始まりの日のように怯えた顔を見せるようになった。

「大丈夫だって。コハルのことは俺が守るから」

だから、俺も始まりの日のようにそう答える。例え自分が不安であったとしても空元気を出して、何事もないように振る舞ってみせる。

恐らく、それはリーダーであるが所以の責任というやつだ。アトラスにいる連中の命と、コハルの命のために。そのためには、自分さえも犠牲にしても構わないとまた思うようになっていく。

そんな俺を引き止めるように、コハルは袖を掴んできた。震える手で、縋るような目で。

「レイジ、そう言っただけで無理するんだから……」

「無理はするけど、無茶はしねえよ」

「どっちも同じだよ」

軽く重みが肩に加わる。コハルが預けてきた頭を受け止めて、そっ

と撫でる。風は心地よく、隣には特別に思う少女がいて、幸せと呼ぶに相応しいと思ってしまう。

例えリアルでも、忘れているだけで死の危険はあちこちに転がっている。そう考えれば、今も大して変わりはあるまい。

俺自身は帰還に興味はなくて、前線で戦って身をすり減らす中に生きていく実感を得ているに過ぎない。

でも、コハルと歩く未来に希望を見出してしまつて、それで100層を目指している。コハルがいるならば、あのクソみたいなリアルに色が戻ってくるかもしれない。

「行こっか。次のクエストはなんだつたつけ？」

「カマキリ野郎を20匹、あとはその辺に転がっている鉱石の回収だつたかな」

さつさと行こう。コハルに手を引かれてフィールドに降りると、早速戦闘が始まる。敵が接近してくるまで俺が弾幕を浴びせてHPを削り、近付いたらコハルが斬り捨てる。いつも通りだ。

流石に独力で仕留めるのは不可能な域に入ってきているが、コハルと連携すれば安全に狩れる。コハル単体でも行けるかとは思っているが、コハルによれば「ソードスキル発動後の硬直時間を守つてくれるのが心強い」らしい。

そういや、その硬直時間を補うようにスイッチとかいう技術があつたな。タルコフだと、負傷したとかで前衛を代わってもらうときによく言つてたつけ。

そう考えながら戦っていると、コハルのダガーが光り始めた。ソードスキル発動と見た俺は中途半端なマガジンを捨て、新しいマガジンへ変える。

「レイジ、スイッチー」

コハルのソードスキルが終わると同時に、俺はカマキリ型Mobへ弾幕を浴びせる。ノックバック効果でカマキリは思うようにコハルへ追撃することができず、たたらを踏んだ。

そこにコハルが襲いかかる。硬直が解けたところでもう一度ソードスキルを叩き込み、トドメを刺した。本当に鮮やかなもんだ。

そういえば、このところユウキとデュエルして鍛えてるんだっけ。もうすっかり俺より強くなったかもな。

でも、そんな油断がよくなかったかもしれない。何匹目かでコハルがしくじった。カマキリが攻撃モーシヨンを取っているのをノックバックと勘違いして、突っ込んでしまった。

ソードスキルはキャンセルすると長い硬直時間が発生する。どの道、避けることは出来ない。

「おい、危ねえ！」

コハルのHPなら耐えられる。それでも、俺は庇わずにいられたかった。HPが多いから食らって大丈夫なんて、このSAOで言われるような状況ではない。

鎌とコハルの間に割り込み、AKを盾にして防ぐ。結局は押し倒される羽目になったが、その頃にはコハルが懐深くに潜り込んで、カマキリを滅多刺しにしてしまった。ピストルを抜くまでもなかったな。

「レイジ、大丈夫!？」

「AKがお釈迦だ。撤退しねえとダメそう」

「ごめんね、迂闊だったよ」

「次、気をつけてくれよ」

AK-74Nは機関部が凹んでしまって、耐久値も0になっていった。またリズベットに作ってもらうしかあるまい。

それでも、コハルからもらったサイトはまだまだ無事だ。それだけが心の救いと言えよう。

「ほら、帰るよ」

しょんぼりとしたコハルは、叱られた後の子犬に見えた。思わず頭を撫でたくなる、そんな可愛らしさだ。つい撫でてしまったのはご愛嬌。

「れ、レイジ……!?! 恥ずかしいよ……」

「悪い、出来心」

そう言って笑って見せれば、もう、と言いながら手を握ってくれる。そうそう、時々からかって笑い飛ばして、ガス抜きしなければやってられるか。コハルは真面目過ぎるから、時々俺がふざけてガス抜き

してあげないとパンクしてしまいそうで怖い。

「AK買い替えついでに、なんか食べようか。少し息抜きしたい」

「そうだね。20層のスイーツ巡り、まだ出来てないもん」

「ビットコインファーム作ってよかった」

俺のハイドアウトではビットコインファームが絶賛稼働中だ。無理に無理を言わせてグラフィックカードを50枚挿したから、発電機を24時間回し続けても元は取れる。

正直、この不労所得で食っていけるから戦わなくてもいいんじゃないか？ のんびりコハルと暮らしてられるぞ？ などという誘惑に目が眩むのもまた確かだ。

「あら、ご機嫌よう」

そんな声に振り向くと、銀髪ツインテールで赤を基調とした服装の少女がいた。もちろん知り合いで、こうしてフィールドで会うのは14層以来になる。

「サーニヤさん、こんにちは！」

「Здравствуйте！」

ロシア語で挨拶すると、彼女もロシア語で返してくる。サーニヤはロシアから日本に来たらしく、絵に描いたようなお嬢様言葉の日本語はそういう本で覚えてしまったらしい。

とはいえ日本語でも普通に通じる。要は、雰囲気の問題だ。BEARはロシア系PMCだしな。

「お二人は本当に仲がよろしいですね。モンスターだらけのフィールドでデートですか？」

「そんなところや」

「れ、レイジ!？」

顔を真っ赤にするコハルはやっぱ可愛い。サーニヤがクールなツンデレ美少女なら、コハルは可愛い全振りの美少女だろう。子犬系とも言えるかもしれない。

「そ、そうだ！...これからレイジの奢りでスイーツ巡りに行くんですけど、サーニヤさんもどうですか？」

「おいコハル!？」

サーニヤはピクリと耳を振るわせる。魔女とかいう物騒な二つ名持ちではあるがれつきとした乙女故に、甘いものには弱いようだ。

コハルは俺に振り向いて、サーニヤに見えないように舌を出す。てへぺろというより、あかんべーに近い。こいつ、揶揄った制裁に財布を攻めてくるとは……

「もちろん行きますわ。私もいいお店は知っておきたいですもの」

「じゃあ、決まりだね！」

『アトラス緊急招集！ レイジのハイドアウトに集合せよ！』

無線から、当直のレッカーの音が響いてくる。何かあつたらしい。

最初はその非常呼集を救いに思った。それが地獄への呼び出しだと知るのは、まだ先の話だ。

少なくとも、俺はコハルやサーニヤと一緒にスイーツを楽しむ、そんな平和な時間を過ごしていたかっと思ふ事になる。

20層―2 搜索救難任務

ハイドアウトに帰り着くと、既にアトラスの主力メンバーが揃っていた。レンとフカ次郎はグリズリー隊に随分馴染んだらしく、雑談を楽しんでるように見えたが何かおかしい。

嗚呼、誰も笑っていないんだ。何だかおかしい緊張感が漂っている。

「リヨーハ、状況は？」

「お前待ち。攻略中だったか？」

「ああ。サーニヤに待ってもらうことになったから早めにな。じゃないと、待つてる間のお茶代が嵩む」

リヨーハが洗面を浮かべたのを見るに、ちよつとで終わるトラブルじゃなさそうだ。そもそも、非常呼集が掛かるといふのは大事なのだ。簡単に終わる話なわけではない。

特に、DKBのシヴァタまでいるのを見るからに、また攻略組絡みの何かだろうと予想がつく。またアトラスが尻拭いする羽目になるのか。嫌になる。

「報告してくれ。何があった？」

「5時間前だ。リンドを含めたDKBの一隊がLighthouseへ出撃して、そのまま連絡を絶った。生命の碑を見るに、生きてはいららしい」

考え得る中でも最悪に近い。DKBのリーダーが行方不明など、ギルドや攻略組の崩壊にも繋がりがかねない大ごとだ。最優先で解決すべき事態と言えよう。

しかも、場所は最悪なことにLighthouseだ。蜂の巣を突いていなければいいのだが、もしもあいつらに喧嘩を売っていたとしたら……俺たちが到着するまでに壊滅してもおかしくはないだろう。「レイジ、ライトハウスって灯台のことだよな？ またタルコフのマップ？」

コハルはまだLighthouseには行ったことがない。アトラスでさえも危険極まりないということで、万全の準備と幾たびにも

及ぶ卓上演習を繰り返し、偵察にも出て、そろそろ本格的な調査に行こうとしていたところだ。

「そうだ。Shorelineとは地続きになるエリアで、灯台の他にUSECの隠れ家、浄水施設がある。特に、この浄水施設はヤバイ」事前偵察でも、パーティを全員USECで固めた上に迂回した場所だ。恐らく、今回は避けて通れない道になるだろう。行方不明になるとしたらここしかない。

「そんなに危ないの？」

「元USEC工作員の”ログUSEC”が彷徨ってる。この倉庫上にいる奴らは重火器で正確に狙ってくるし、地上の巡回部隊も数百メートル先から正確に頭ぶち抜いて来るぜ」

正直危険すぎる。熟練プレイヤーでもやられる可能性が高いし、実際Lighthouseで消息を絶ったプレイヤーもチラホラという。ほぼ確実にログの機銃を受けて死んだのだろう。

「前回の偵察の時、俺たちの隊も迂回したところだ」

グリズリー隊を率いるベイサルは苦い顔で言う。白髪の混じる中年だが、何かスポーツをやっているのか体は引き締まっているし、目付きも鋭い。歴戦の老兵という風貌だ。

そんなベイサルは数日前、グリズリー隊を率いてLighthouseへ偵察に行ってきたばかりだ。グリズリー隊は全員USECであるため、ログから攻撃を受ける危険が少ない。

とはいえ危険を冒すわけにもいかず、ログの根城である浄水施設は迂回しながら巡ってきたのだ。

「今回ばかりは避けられねえな」

渋い顔をするアトラス隊員たちを見て、シヴァタの顔は青ざめていく。正直なことを言えば、1パーティのためにどれだけの損害が出るかわからない。

正直なところ、諦めろと言っても責められる謂れはない。自分のギルドの尻拭いは自分でやれと突っぱねることも可能だ。

とはいえ、見捨てるわけにもいかない。俺の大嫌いな、政治的理由というやつだ。

「これでリンドが死んだりすれば、本気で攻略組が瓦解してしまうよなあ」

ブラックバードも天を仰ぐ。実際問題見捨てるわけにはいかない人物の上に、DKBではローグへの対抗手段がない。ローグ狩りは狙撃一択だからだ。SAOプレイヤーでは、いくらHPが多かろうと近づくと蜂の巣だ。

「リョーハ、作戦計画を作れ。ちよつとサーニヤに詫び入れてくる」
スイーツ巡りの旅は後回しだ。これから先、ボス攻略にPMCがついていけなくなつたとして、代わる役目はこういう搜索救難任務になるんだろうな。

※

「そういうわけで、スイーツ巡りはリスケで頼む」

この通り！ と手を合わせる向かいで、サーニヤはショートケーキを頬張っている。あれ、結構お高いんだぞ。コハルも食ってるけどな。

「あら、私も手伝いましたよ。人手が必要でしょう?」

「だが、行き先がなあ……」

正直言つて、コハルも置いていきたいくらいに危険なエリアだ。ベータ版の時にも散々ローグ狩りはしていたが、はつきり言つて勝率は高くない。必ず損耗は出たし、不安要素が多すぎる。

「そのローグ? がないエリアを担当すればいいのですわ。そこしか探さないわけではないのでしょうか?」

サーニヤの言うことも正しい。LighthouseはShorelineや Woods に肩を並べるくらいには広いマップで、ローグの射程圏外でもかなり探すべきエリアはある。

ならばそこを任せるべきか。1番危険なエリアは、俺たちアトラスで受け持つ事にしよう。

「わかった。そのエリアの搜索を任せたい」

「承りましたわ」

ニキータハウスのあたりならば大丈夫だ。自分にそう言い聞かせるしかなかった。そうだ、味方がやられる前にアトラスでローグを始

末すればいい。シノンもいるのだから、容易い事だろう。それが1番安全だ。

不安要素を希望的観測で埋める事はしたくない。それでも、さすがに無かった。そうでなければ、俺なんてあっさり潰されてしまうのだから。

今度の任務をしくじれば、その影響は計り知れない。いつも以上に落ち着きをなくしているのはわかっているけれども、それでも落ち着くことはできなかった。

コハルに手を握られても、俺の心は落ち着かなかった。

20層―3 灯台

BEAR Operator "Rage"

Aincr ad layer20 "Lighthouse"

少しずつ視界が効くようになって、岩場と森、その先の美しい海原が見えてきた。

設定上はShorelineと地続きになっているダルニー岬はUSECの上陸地点となっており、拠点として使われていた赤い屋根のコテージ、通称赤ニキータハウスはその名残か高額アイテムがスポーンする稼ぎ場所だった。

「漁ってる暇ねえな」

そんな軽口を叩くりョーハだが、シノンに尻を蹴飛ばされていた。今回の任務は搜索だ。アイテムを探す暇なんてあるわけがない。

「あったとしても、リンドたちが漁った後よ」

「それもそうか」

「リョーハ、漁るよりもシノン連れて岩場から監視を頼む。コハル、サーニヤ、俺と来い。中を探す」

「任せて！」

「承りましたわ」

シノンとリョーハが岩場へ登っていくのを見送り、赤ニキータハウスへの道路を進む。

向こう側にPMCのスポーンがあるからって、相当警戒しながら進んだことを覚えている。漁り目的の軽装だったり、戦闘目的のガチムチだったり、この場所で俺は何回も命を落としていた。

でも、今日はSCAV1匹いなかった。逆に不気味に思いながらも、コハルとサーニヤにハンドサインで合図して呼び寄せる。裏口からハウスに突入して、中を探すのだ。

さすがはトッププレイヤー。俺の合図に従ってくれて、ピッタリ背中に着いてくれる。

ドアを開け、一気に突っ込む。その瞬間、俺のAKが黒い剣に弾き飛ばされた。何かが待ち伏せしていたらしい。

小癩な。咄嗟にハンドガンを抜いて、待ち伏せ野郎へ銃口を向ける。焦りはしない。ただ、その頭を吹っ飛ばすだけだ。

「レイジ、ダメー！」

コハルの声が安全装置をかける。落ち着いて襲撃者を見てみると、見慣れた黒一色の剣士がそこにいた。この野郎、何してやがる？

「キリトかよ……脅かすな。顔吹っ飛ばすところだったぞ」

「悪い、SCAVかと思ったんだ。どうしてここに？」

「人探しき」

「何かあつたのか？」

実は、と切り出そうとした途端に、上からドタドタと足音がいくつも聞こえてきた。あそこは、ビリヤード室だったか？ 柵とか段ボールの上に高額アイテムがスポンになるところのはずだ。

「キリトさん、なんか高そうなものありましたよー！」

降りてきた数人のプレイヤーは、その外見から中堅クラスに見えた。キリトが後進の面倒を見るとは珍しい。何か心境の変化でもあつたのだろうか。

そう思っていると、その一団の後ろを見覚えのある少女が降りてきた。あのパーティの紅一点は、いつぞやに出会ったサチではないだろうか。

「あれ、サチ？」

俺よりもコハルの方が反応が早い。サーニヤはどうしたかと振り向くと、岩場のシノンへ敵じゃないと合図を出していた。デキる女は違うな。

「コハル？ あ、レイジ……！」

「あ、サチー！」

コハルはサチに駆け寄ってその手を握る。仲良いことは良き事かな。その周りのメンバーも、1層でサチを迎えにきたメンツではないか。

「キリト、ちょっとこっち来てくれ」

「ああ」

サチとコハルの横を通り抜け、上のビリヤード室へキリトを呼ぶ。

サチの一行は月夜の黒猫団とか言ったか、時々攻略を助けてくれるありがたい人たちではあるが、こんな暗部に巻き込みたくはない。

「アトラスが人探して、誰がいなくなつた？」

存在感の塊たるタチャンカはあり得ないだろ？　なんて軽口を飛ばすあたり、元気ではあるらしい。あのマリモが消えたら秒でわかるさ。メイベルが静かになるんだから。

「リンドがここで消息不明になった。状況からして、水処理上の可能性が高い。既にアトラス3個パーティと、シヴァアタの一隊でローラー作戦してるよ」

ニキータハウスから道路を挟んだ向こう、海岸と岩山にメイベル、シヴァアタ隊が展開。水処理場東側の岩山にはグリズリー隊を先行させて、ローグを排除させる作戦になっている。

俺たちはこのまま水処理場方面に向かってリンドたちの痕跡を探しながら前進、水処理場に突入する作戦だった。

「なら、俺も探すけど……先に黒猫団は脱出させたい」

「途中にPass to Shorelineがある。そこから脱出すれば安全なはずだ。護衛しよう」

水処理場に行く前の岩場に脱出地点がある。ローグに狙われずにそこまで行く道を知っているから、サチとその仲間は安全に逃げられるだろう。俺がキリトの立場でも、そうしたいと思う。

「助かるよ。伝えてくる」

キリトはそう言って黒猫団を集める。俺は本来の役目を果たすべく、いないだろうが念の為、赤ニキータハウスの中を搜索する。

サーニヤとコハルも手伝ってくれたおかげで、それはすぐに終わった。いないのはわかっていても、念のためは大切だ。いないという確証は得られる。

「こちらリンドン。赤ニキータにパッケージはなし。キリトのパーティに遭遇したから、青ニキータ搜索後キリト以外はPass to Shorelineから脱出させる予定」

『こちらメイベル。枯れ木岩まで到達したものの、痕跡なし。リンデンの青ニキータ出発に合わせてこちらも進行する』

ブラックバーンたちのメイベル隊は枯れ木岩と呼ばれる岩山にいるらしい。てっぺんに一本の枯れ木が生えているから、そういうふうに呼んでいる。

その枯れ木岩から道路を挟んだ向かいが青い屋根のコテージ、通称青ニキータハウス。それを勘案するに、リンデンは俺たちより少し先に行っているようだ。

『グリズリーは廃村の調査完了。川を超えてローグ岩まで前進中』
ベイスルからも報告が来た。マップ東側、青ニキータハウスと水処理場の間に流れる川の中洲に廃村があり、その搜索を終えて先へ進んでいるらしい。

そこを越えれば、水処理場全域を狙撃できる岩山にたどり着ける。気をつけないと地雷を踏むことになるが、ベータ時代からタルコフをやっているベイスルたちがそんなハマはしないだろう。

とりあえず今わかっていることを総合すると、ローグはまだ健在で、リンドたちの痕跡は何一つ見つかっていないということだ。

「各隊、作戦に変更はなし。問題がない限りはプラン通りに作戦を遂行」

了解、の声が返ってきたのを聞いて無線を切る。ちょうどキリトも話を終えたらしい。

「レイジ、黒猫団も手伝いたいつて言ってるんだ。どうする?」

「……危険だと言ったよな?」

「そりやもちろん。それでも、攻略組の危機なら自分たちにも何かしたいって」

その申し出はありがたいが、勝手を知るPMCでさえも危険極まらないエリアで、中堅を率いて戦う自信はない。ありがたいのは、この層のLighthouseはPATCH0.12.12時台のものが適用されているらしく、ボスがまだいないという点だ。

だからと言って油断はできない。何が起こるかかわからないのがSAOであり、EFTなのだ。装備なら兎も角、命まで懸かっている状況下で素直には領けない。

「レイジ、大丈夫だよ。アトラスの強い人たちが揃ってるでしょ?」

みんなを信じよう。コハルはそう言って手を重ねてくる。俺は天を仰いで、了解と一言呟くのがやっとだった。

20層―4 キリトの苦悩

赤ニキータハウスを出発して、次の搜索予定地点の青ニキータハウスまで草むらを進む。このコテージエリアはSCAVがスポーンするため、油断していると痛い目を見ることになる。

『こちらメイベル。青ニキータにSCAVを確認。少し待て』

ブラックバーンの報告と共に、遠くで銃声があった。サプレッサーで減音されているせいか、微かにしか聞こえない。

それでも確かにSCAVの悲鳴が聞こえた。アイザックが狙撃したのだろう。役目を奪われたシノン是不満そうだが、仕事が減るに越したことはないさ。

「キル確認。よくやったロリコン」

『おい、大声で言うな!』

アイザックが悲鳴を上げる。アトラスでは公然の秘密であるが、そつちに同行しているDKB隊にはバレただろう。ざまあみろ。シリカの追っかけしてるの知ってるんだからな。

「……サイテーね」

「言うなよ、実害を出してないからまだ誠実なロリコンだぜ」

リヨーハよ、フォローになつてないぞ。アイザックの銃口が俺を向いていないといいんだけどな。

「あんたもロリコンじゃない」

「おい、どういうことだ!?!」

「ほら、さつさと青ニキータを探すぞ。リヨーハ、シノンを連れて中を搜索。外は俺とコハルで見ろ。黒猫団も連れて行け」

「あいよ。そら、行くぜー!」

リヨーハが一団を連れて中へ入っていく間、俺は背負っていたサブウエポンを取り出す。

ボルトアクション式スナイパーライフル、M700をカスタムして持ってきた。最軽量のAICSストックを搭載、サプレッサーを取り付けたそれを持ち、岩場で辺りを見張る。コハルは背中を合わせるようにして、俺の後ろを見てくれる。

「コハルはあつたかいな」

「レイジもね。もう少しだけ、くつついついていい?」

「大歓迎」

コハルはこんな俺に寄り添っていてくれる。いつもキツイ状況に置かれてメンタルをすり減らす中でも、コハルが側にいてくれるだけで救われる気がする。

何度も告白しようかと思ってはチキンを発揮してしまうのをどうにかしたいところではあるけれど。

「レイジ、少しいいか?」

「いいように見えるか?」

キリトめ、黒猫団と中を探しに行ったんじゃないのか。クソ、邪魔しやがって。

コハルはこんなところを見られて恥ずかしそうにしているし、当のキリトも気まずそうに苦笑いを浮かべる。

まあ、奴の方から声を掛けてくるなんて相当の理由があるのだろう。聞いただけ聞いてやろう。くだらない用事だったら海に沈めてやる。

「搜索が終わるまでだぞ」

「悪いな」

話しながらも、目線は向けない。見張りという役目がある以上、自分の守るべき範囲は見えていないといけない。キリトの相談に乗るにしても、役目は放り出せない。

「今、黒猫団に臨時で加入させてもらっているんだ」

「お前が? 珍しいな」

ずっとギルドにも入らず、アスナとつるむかソロを貫き通していたキリトがギルドに臨時加入とは、雨でも降るかもしれない。

「当ててやろう。入れてもらったはいいいけど、居辛いな?」

「まあ、その原因は俺自身なだけだな」

一体何をやらかした。キリトがボツチなのは今に始まった話ではないが、居辛い原因を作るような真似はしないはずだ。

あり得るとすれば、悪名のせいといったところか。

「ビーターか？」

「……そう言われるのが怖くて、レベルを低く言ってるんだ。攻略組ってことも隠してる」

「めっちゃ隠してるじゃねーか」

特に、レベルの偽装は今のSAOでは生死を分ける要素になるから、あまりいい顔はできない。今のところは少しレベル高めな教官役のようなポジションらしいが、隠し事の後ろめたさに苦しんでいるようだ。

「わかってるさ、隠してるのが原因ってことは」

「でも、本当のことを言って受け入れてもらえる勇気がねえんだろ？」

「……レイジはよく分かってるな」

「お前よりは長く生きてるし、その分碌でもない人間関係のピンボールの中生きてるからな」

正直人間関係に疲れていたのは確かだ。要らない関係を断ち切つて、リヨーハたちのような気の合う奴とだけつるんでいた。

別に、それだつていいだろう。そんな生き方をしていた俺に、キリトのことをとやかくいう資格はないのかも知れない。それでも、苦しいというならば手助けするくらい、許されてもいいだろうか。

「カミングアウトしちゃえよ。今ならまだ間に合うだろ」

「それが出来なくて悩んでるんだけどな」

「やるかやらないか、だろ。お前の仲間は、正体知った途端にビーターって突き放す冷血漢の集まりか？」

キリトは何も答えないが、まあそうだろう。ここで即答できるようならば、そもそも悩みなどしない。

気持ちはわかるし、言うのは簡単だ。俺自身ができるかどうかで言われたら怪しくはあるが、その方がいいということくらいは頭でわかっている。

「ま、ダメだったらウチに來い。奢ってやる」

「わかったよ。あとで言ってみる。レイジに聞いたらこうなるだろうって思ってたけど、やっぱりか」

「俺はそういう人間だぞ」

「レイジ、ニキータハウスはクリアだ」

ちょうど、リヨーハから搜索完了の連絡も入った。この話は終わりで、この後どうするかはキリト次第。俺にできるのは、受け皿を用意しておいてやるくらいのものだ。

「コハル、移動しよう」

「うん。レイジも、たまにはいいこと言うんだね」

「たまにはってなんだよ?」

俺はいつたい、どんな風に見られているんだ?　せめて、コハルにはかつこよく見られたいんだがな。

「リヨーハ、俺たちも移動するぞ。グリズリー、ニキータ周辺搜索完了。移動したいが、ローグの状況はどうなってる?」

ここより先に進もうとすると、水処理工上のローグから機関銃掃射を受けるハメになる。迂回したグリズリー隊が排除してくれたかが重要だ。

それなのに応答がない。はて、狙撃に夢中になっているのだろうか?

「グリズリー、グリズリー、こちらリンデン。応答しろ」

もう一度呼びかけるが、応答はない。それに、狙撃をしているにしては静かすぎる。サプレッサーを使っているにしても、気味が悪い程に静かだ。

何かがおかしい。この静かさは嫌な方の静かさだ。

「リヨーハ、戦闘用意。グリズリーから応答がねえ」

「おかしいぞ。狙撃してるにしても、5人いて誰も返事しねえのか?」
グリズリー隊の顔が浮かぶ。何が起きて、どこにいるかもわからない。それでも動くしかないだろう。

「メイベル、予定を変更してこつちに来てくれ。グリズリーから応答がない」

「了解、道路を渡ってそつちに」

ブラックバーンの返事をかき消すように、爆音があたりに響き渡った。銃声でも、グレネードランチャーでもない。嫌という程に聞きなれた、地雷の爆発音。そして、遅れて重機関銃の銃声まで聞こえてき

た。

「おいレイジ、今のはなんだ!?!」

「山の方の地雷だ。グリズリーが踏んだか!?!」

「あり得ねえ、あいつら地雷の位置も熟知してるはずだ!」

しかも、ローグに見つかって掃射されているのを見るに、ローグを排除できていないのだろう。

「こちらグリズリー、オレンジプレイヤーの攻撃を受けて退却中。死傷者あり!」

血の気が引いた。全身に鳥肌が立つような感覚がして、俺の思考は停止してしまう。

死傷者あり、ベイサルの報告は何よりも重く、銃弾以上の破壊力を秘めていた。

20層―5 挟撃の中で

USEC Operator ”LENN”

20分前

「ローグ岩スポーンとはツイてる。アリフ、先行して好きな地点に」
「了解」

私たちグリズリー隊は水処理場東側を覆う岩山からローグを狙撃する任務があるから、目的の岩山麓でスポーンできたのは嬉しい事だ。マップの端から歩かなくて済むんだから、楽でいい。

狙撃手のアリフを始めとして、隊長のベイサルとムスタファもローグを狙撃できるように、何かしらのスナイパーライフルを持っている。

その中でも、私とフカは護衛要員として来ているからスナイパーライフルは持っていない。万が一の近接戦闘というのと、ローグ狩りに慣れていないからだ。

「2人とも、ちゃんとついてくるんだぞ。この岩山、地雷埋めてあるところがあるからな」

ムスタファの注意は冗談ではない。この岩山から水処理場の間で、地雷が埋まっているエリアがある。システムのものだから回避は不能だし、2〜3回踏んだら死亡してしまう厄介なものだ。

今の環境で、それを踏むわけにはいかない。この辺りに不慣れな私たちを案じてくれてるようだ。

「はいはい」

「フカ、ちゃんと返事しなよ」

「はは、最近のギャルってやつか？ 娘を思い出す」

ムスタファは気にせず笑うが、振り向きざまの横顔は少し寂しそうにも見えた。彼もベイサルよりは若く見えるが、私から見れば中年の域に足を突っ込んだ人で、子供がいてもおかしくはない。

もう少し話を聞いてみたいけれども、作戦中だ。それに、リアルの話にはあまり踏み込まない方がいいだろう。

「登る時できるだけ岩から頭を出すなよ。ローグの奴ら、めざとく狙

撃してくるからな」

忙しい隊長のベイサルに代わって、新人の私たちを教育してくれているのは彼だ。面倒見と気前がいい中年で、イケおじとはこの人を言うのかもしれない。

「そういえば、みんなの名前ってどこから取ってきたんです?」

「映画からさ。トルコ軍特殊部隊が主役のマイナーなやつだけど、面白いで」

なるほど、映画でトルコの方だというならば、聞き慣れない珍しい名前というのも頷ける。どうやらベイサルは隊長で、ムスタファはその補佐、アリフは凄腕のスナイパーだという。

「そのまんまですね」

「そりやそうさ。似てるキャラの名前をもらってるからな」

「そろそろローグの視認範囲だぞ。集中しろ」

ベイサルに無駄話を咎められてしまったけれども、人となりが少しわかったのは嬉しいかもしれない。

私とフカ、アトラスに入ったばかりで、パーティプレイに慣れない私たちを手取り足取り育ててくれた、楽しくも厳しいこのチームで、きつとこの先も生き残れるような気がしていた。

「アリフ、発砲許可。主力が来る前に片付けるぞ」

「了解。3番屋根のローグから始末する」

岩山から1番近い3番倉庫屋根の銃座まで、距離約150メートル。ローグは300メートル以内なら視認できるらしいから、この3番と中央2番倉庫の銃座がこの狙撃地点の天敵だという。

攻撃するか、接近しすぎるまで敵対しないUSMCだからこそ、1番危険な敵を安全に排除できる。レイジさんは、これが狙いだっただろう。

「ムスタファ、2番こちら側を同時にやれ。そうすれば楽になる」

「了解。アリフ」

「なら、近い方はムスタファがやってくれ。2番は俺が」

2番倉庫の銃座のうち、岩山を狙うものは250メートル先にある。難易度が高い方を、狙撃に長けたアリフが受け持つらしい。

「いいぞ」

「先に撃て。合わせる」

「レン、観測頼んだ」

「了解です」

私はムスタファアの隣から顔を出し、単体で持ってきたライフルスコープを覗く。ローグはこちらに無防備な側面を晒していて、攻撃してくる気配はない。

それにしても、ヘルメットやアーマーも本当にいい物を使っている。ちよつと羨ましいかも。

そんなことを思っていたら、ムスタファアが撃った。ローグはもんどり打って倒れて、機銃の横にある鉄板に血飛沫がへばりつく。

3番倉庫の屋根には1人しかいないみたいだし、これで制圧かな。

「キル」

「アリフ、撃て！」

銃声は聞こえたけど、何かがおかしい。アリフのT-5000つて、こんなに音小さかったつけ？

それに、2番倉庫のローグには当たったけれど、頭じゃない。被弾したローグは逃げ出して、一瞬遅れて頭があった位置に着弾した。

「クソ、横槍が入った！」

「下がれ！」

ムスタファアが私を突き飛ばす。次の瞬間には、私がいたところをローグの猛射が薙ぎ払った。

敵対フラグが立った上に、私たちを射界に収める銃座の始末に失敗した。地上を巡回するローグからも猛射を受けて、考えられる中でも最悪の状況だ。

「くそつ、どうなってる!?! ベイサル！」

「湖の岩上、オレンジが見えた。待ち伏せしていたらしいな。フカ、アリフを頼む」

そう言いながら、ベイサルは既に応射を始めていた。ムスタファアも撃ち始めたところで、何か嫌な予感がした。後ろから迫る微かな足音を、ComTac2は聞き逃さない。

「誰!？」

振り向くと、そこには黒いローブのプレイヤーがいた。フードで顔を隠した男は笑みを浮かべていて、ナイフを私へ突き出してくる。

咄嗟にP90でそれを弾き、蹴りを入れて押しつける。

レイジさんから教わってよかった。背が高い分リーチがあるんだから、うまくいかせて。嫌いなこの背丈も、今は役に立ってくれたみたい。

「チツ、勘のいい奴だ」

「おうおう、ウチのお嬢様に集るハエがいるぜえ!」

フカが援護射撃してくれるけれども、避けられている……というより全部外している。やっぱりフカは射撃が下手だ。

「ムスタファ、後ろの奴を倒せ! あのスナイパーは俺がやる!」

冷静なベイサルも声を荒げる。どこに隠れていたのか、あちこちから黒ローブのプレイヤーが現れて、その全員が漏れなくオレンジだ。

待ち伏せされた、そんな考えが過ぎる。オレンジたちは躊躇なく襲いかかってきて、私たちは戦う以外の選択肢がない。

「退却するぞ、斜面を降りて3番倉庫に籠城する!」

「あそこは地雷原だぞ!」

「岩伝いに行けば踏まん。アリフが回復したら行く!」

「レン、フカ! 移動の時は絶対に離れるなよ!」

この岩山から水処理場へ続く斜面がある。でも、そこは地雷原になっていて、下手に足を踏み入れればランダムで爆発ダメージを受け、3回踏めば必ず死亡してしまう。

でも、他に選択肢なんてない。私たちは劣勢で、このままだどどのみち死ぬんだから。

「わかりました! フカ!」

「合点承知の助!」

フカのグレネードランチャーが敵をまとめて吹き飛ばす。それでも相手はSAOプレイヤーだから、やはり即死はしない。

動けなくなってくるからそれでいいし、戦う私たちもその方が気が楽だ。

「ベイサル……動けるぞ」

アリフはようやくスタンから回復して、動けるようになった。ちょうど残弾も心許なくなってきたから、正直助かった。

「退くぞ！ ムスタファ、行けるか？」

「クソ、こっちは……！」

「レン、ムスタファがやばいぜ！」

ムスタファはゾンビのように迫るオレンジプレイヤーに追い詰められ、フカが必死に援護しても間に合わない。

そして、私を襲った黒フードにナイフで斬りつけられ、崩れ落ちるように倒れた。

20層―6 撤退

あのナイフには麻痺毒が塗ってあるらしい。ムスタファはまだ息があるけど、オレンジたちに捕まってしまった。

跪かせられたムスタファに力はなく、抵抗すらできないようだ。彼を盾にされた私たちは、撃つに撃てない。間違いなくムスタファに当たってしまう。

「下手なことはしてくれるなよ？ お仲間が大事なんだろう？」

ああ、本当に醜悪な笑みだ。何度も見てきた人の悪意が目の前にある。

話には聞いていたけれども、アトラスはこういう人たちと戦っていたんだ。他の誰かがこうならなかったために、自分たちを犠牲にしようとして。

「彼を離してください。撃ちますよ！」

「その頭に風穴開けられたいようじゃないかい？」

私とフカが銃口を向けても、相手は全く動じない。アリフも狙っているはずだけど、ムスタファに当てないという確証が得られないのか。

「ははは！ 人を撃てるなら撃ってみなよ！ まっ、無理だろうけどな！」

人を撃てるのか。改めて考えて、躊躇ってしまった。

一撃では殺せないのを分かっているけれども、人を殺すこと、傷つけることを絶対の禁忌として生きてきたから、人へ向けてトリガーを引くことを躊躇ってしまった。

SCAVならば撃てたのに。ベータ版のタルコフならば、PMCでも迷いなく撃てたのに。私はまだ、普通の人である証拠なのだろうか。

誰かを見捨てるくらいならば、人でなくなっていればよかったのに。

「……アリフ、俺の家族を頼んだ！」

ムスタファの叫び声が意識を引き戻す。家族を頼む、それはまる

で、自分はここで死ぬと、現実には帰れないと悟ったように聞こえる。
「何言ってるの、ムスタファアさん！」

「おいおい、待って……！」

「……守ります！ 俺が、あなたの代わりに！」

アリフが絞り出すように叫ぶ。待って、アリフにとつても大事な仲間のはずなのに、なんで受け入れてしまうの!?

止めよう。そう思った私の前で、ムスタファアはグレネードを取り出していた。ポケットからこっそりと取り出したF-1グレネードが、やけに大きく見える。

「ベイサル、上手くやれ！」

「……行け、すぐに追いつく」

ムスタファアは笑顔で頷く。この後の運命を受け入れて、心安らかに。

「二人の死が……！」

ピンを抜いた。やめて、そのレバーから手を離しちやダメ！

——千人を救う！

毒ナイフの男は逃げ出した。周りのオレンジたちはその姿に目を取られ、レバーの外れたグレネードに気付くことができない。

巻き起こる爆発、飛び散る破片がムスタファアの周りにいた2人のオレンジプレイヤーを巻き込む。いくらSAOプレイヤーでも、至近距離で爆発に巻き込まれば即死は免れない。

それは、ムスタファアも助からないということの意味する。自分を人質にされて、仲間へ危害を加えられることを防ぐために、自ら犠牲になった。

「……アリフ、そっちのスナイパーはどうなった!？」

戦友の死に、ベイサルは目を背けた。隊長として見届けなければならぬのだが、それ以上に苦しすぎた。

そして、その苦しみは声にも現れる。絞り出すような、慟哭のような声が現状を掌握しようとする。

ベイサルにとって今大切なことは、敵討ちよりも残りの仲間を生かすこと。ムスタファアの犠牲を無駄にしないことだけだ。

「捕捉したが、奴はグリーン！ 撃てないぞ！」

それを撃てば、今度はアリフがオレンジになってしまう。できるとすれば、せいぜい威嚇射撃程度だ。どうして、こうもオレンジ数人よりもグリーン1人が厄介なのか。

「オレンジを突破するぞ。斜面の地雷原を超えて3番倉庫で籠城。アリフ、レンとフカはお前に任せる」

斜面は地雷が埋めてあるが、それは地面が土のところだけだ。中腹までは岩肌が続いており、そこから先、地雷を踏まずに越えられるかは運次第だろう。

「了解！」

アリフは進路を邪魔するローグを狙撃しながらも、PKギルドの一員であろうグリーンのスナイパーを牽制する。

落ち着きさえすれば、歴戦のスナイパーであるアリフがローグなんかには負けたりしないのはよく知っている。

それなのに、私もフカも、どうしてまともに戦えない？ リロードの手が震えて、マガジンさえ取り落としてしまう。

早く行かなきゃ。それでも、地雷の位置がよくわからない。いつもみたいにムスタファが先導してくれるはずだったのに、彼はもういないんだ。

「マズイ……！」

ベイサルの弾薬が尽きた。突っ込んでくるSAOプレイヤーを止める術はなく、倒れているオレンジも、すぐにスタンから回復してくるだろう。

そうなれば、待つは崩壊。それを察したベイサルは、悲しそうに目を伏せた。

「待ってー！」

撃たなきや。それなのに撃てない。突っ込んでくるオレンジを止めなければいけないのに、人が目の前で次々と死んでいくショックがトリガーを引くことを躊躇させた。

そんな私たちを守るために、今度はベイサルが盾になった。

そして、そこからは見事としか言えない。目にも止まらぬ、キレの

いい足払いでオレンジを斜面へと投げ飛ばし、地雷原に放り込んだのだ。

爆音が響き、オレンジは致命的なダメージを受ける。さらには、地上を徘徊していたローグに捕捉され、激しい銃撃を受けてHPを削り切られた。

「こちらグリズリー、オレンジプレイヤーの攻撃を受けて退却中。死傷者あり！」

ベイサルはようやくプレストークスイッチを押すことができた。本隊に連絡さえ取れば、すぐにレイジが飛んでくる。

「現在地知らせ！ 岩山か!？」

ベイサルが答えるより前に、別のオレンジがベイサルへ飛びついた。無線のスイッチさえ押せず、銃もナイフも抜くことができない。

「……アリフ、レンを連れて行け！」

「待て、ベイサル！」

ベイサルはオレンジと組み合ったまま、自ら斜面へと身を投げる。そこは地雷原で、勢いのままに転がれば止まることもできず、地雷を踏んで死亡してしまう。

「ベイサルさん！」

「お前たちは、生きろ！」

ベイサルに捕まったオレンジは悲鳴をあげるが、彼はしっかりと掴んで離さない。転がり落ちる中で何度も地雷が爆音を轟かせ、その悲鳴は途絶える。

ベイサルも死んだのだろう。力なくオレンジを手放して、さらに下まで転がり落ちていく。

そして、彼らの死体は岩肌が途切れたあたりで止まった。まるで飛び石。俺たちを踏み超えて逃げる。そうとさえ言うかのように。

「嘘……ベイサルさん！」

「レン、行くぞ！ フカも先に行け！」

彼らが死んでも、オレンジはまだいる。生き残るにはこの斜面を超えて3番倉庫へ飛び込み、籠城するしかない。

迷うだけの選択肢は与えられなかった。私は岩肌を駆け下り、躊躇

う時間もなく、彼らの遺体を踏み越え、地雷原を乗り越えていく。

ドツグタグの回収さえできない。ローグの射線に入っている以上、迅速に離脱しなければ死体の仲間入りを果たしてしまうから。

だから、どうか私たちを許して。

幕間 魔法陣に祈る声

BEAR Operator “Rage”
Aincrad layer62 “Customs”

攻略もかなり進み、わかつて来たことがある。上層へ行くと、下層で出て来たはずのタルコフのマップが再び現れ、説明書きのマップ難易度が“Extreme”に変わっているのだ。

どうにもSCAVに混じってRaiderが湧いたり、ボスのスポン確率が上がる他、SAOのMobまでスポンするというなんでもありのカオスなマップになっているようだ。

「コハル、スイッチー！」

「行くよー！」

前にも増して強くなったコハルがスタンした狼型のMobへ突撃し、目にも留まらぬ連撃でそのHPを削り切る。自分のいない間にメキメキと頭角を現したコハルは誰とでも、何なら1人でもやっていけると思うが、それでも自分と一緒に戦いたいと譲らなかつた。

「ナイススキル！」

「レイジも、援護ありがとう」

ニコリと可愛い笑みを浮かべるコハルに目と心を奪われつつも、ハーフマスクを引き上げて口元を隠す。そうでなければ美少女の微笑みを前にして、ニヤけずにいられる自信がない。

「後はここだったね」

「ああ。穏やかに終わるといいな」

コハルとCustomsへ来た理由はひとつ。The Cult Part2というタスクを終わらせるために他ならない。タルコフの各所にある魔法陣へマーカーをセットするというお使いタスクがあり、それを終わらせに来たのだ。

そのためにボスのスポンポイントであり、激戦になる3階建ての寮へ来ている。こここの3階奥の部屋に魔法陣があるのだ。

「俺が2階へ突入するから、いつでも飛び込めるよう準備頼む」

「オツケー。離れないからね」

コハルはダガーを右手に構え、左手も同じ高さに上げる。その時僅かに薬指が光り、思わず笑みを溢してしまった。そりやあそうだ。真正銘のパートナーってやつなんだからな。

そんな彼女を信じつつ、外の非常階段を登る。いつもは金属を踏む足音で敵に気付かれることを警戒するが、今はNPCだけが敵だ。心配する必要はない。

「行くぞー！」

ドアを蹴破り、一気に廊下へ飛び込むけれど、そこにはSCAVの1人として歩いてはいない。その代わり、廊下には折り重なるようにSCAVの死体が転がっていて、ライトで照らしてみれば全て額を撃ち抜かれていた。

ほとんどは漁られてもいないが、不自然に武器を奪われている個体がいる。はて、高額パーツでも付いている武器だったのだろうか？

「2階はクリア、かな？」

「クリアだな。先客もいるようだし、誤射に気をつけよう」

お目当ての魔法陣は3階の奥にある部屋だ。袋小路だから敵を殲滅してから行くしかない。そうでなければ逃げることもできず、すり潰される結末が待っているんだ。ベータの時にリョーハ共々魔法陣部屋に追い込まれてグレネードで吹き飛ばされた痛い思い出がある。

それを警戒しながら階段を上がるが、あまりにも静かすぎた。

「ねえ、何か聞こえない……？？」

「SCAVか？」

Comtac2の集音機能は微かに響く声を捉え、俺の耳へと増幅して届ける。聞こえる声に濁音はなく、SCAVがよく口走るロシア語とは違う響きに聞こえる。

それでも何か不気味だ。低い男たちの声の不協和音で、この先へ進むことが憚られるような気がした。何か聞き覚えのある言葉まで聞こえてきやがったからだ。

「この声、マークド部屋からだよね？」

「……コハル、今日は帰らないか？ スイーツ巡りのデートと行こうよ」

「それはまた今度ね」

「今回ばかりは逃げられねえか」

溜息を吐くと、頬に柔らかな何かが触れた。心地よいノイズが一瞬耳に響き、その近くではコハルが微笑む。元気が出るおまじないってやつだ。

「行こうか。終わったらご褒美頼めるか？」

「もう……」

照れるコハルはやっぱり可愛いな。あとでたつぷり愛でるとしよう。今は目の前の連中を片付けなければならんだから。

それなのにどうして、こんなにも不気味な声が響いているのだろうか。コハルの可愛い声を聞いていたのに、この不協和音はそれを許さない。スーカ。

——……神様、モ……様、我らに

俺は何も聞いていない。ただマーカーを設置して帰るだけだ。魔法陣に湧く高級品とかいらなから、俺とコハルを無傷で帰してください何でもしますから。

「……誠に不本意ではあるが、突入しないと」

「ええと、どうしてそんなに嫌そうなの？」

「すぐにわかるさ」

覚悟を決めるといふより、諦めてため息混じりに扉を蹴破つて突入すると、怪しげな黒フードの集団が魔法陣を囲んで跪いていた。どう見ても邪教のミサです本当に以下略。

「レイジ、これってカルティスト!？」

「落ち着け、PMCだよ。カルティストってのは否定しないけれども」
「何を言われますか! 我々は由緒正しき使徒、敬虔なる神の使い!

この銃は持っているものに加護を与え、不信心者に裁きを下す尊い銃なのです!」

そのカルティストの1人が掲げるのは随分と古臭い銃。木製のストックと槍のように長く、スラリとした銃身。どうして21世紀にそんな物があるのかはさておいて、弾と精度は現代でも通用してしまうのが困ったものだ。

「モ神様万歳！　モ神様万歳！　モ神様万歳ア！　レイジ殿、貴殿もかつてはモ神様の導きに従って悪逆非道のオレンジを罰した同志ではございませぬか！　その手のAKを手放したまえ、その手にはモ神様こそ相応しい！」

「うるせえ、俺には同志カラシニコフとコハルの加護があるんだ」

ソビエトの生んだ傑作ライフル、モシンナガンモシンナガンを神と崇めるタルコフ最大の邪教、モ神教がミサをしている真つ最中だったようだ。コハルがドン引きしているが仕方はない。正直、ベータ版の時にも同じ光景をリヨーハと目撃してしまつて凍り付いたからな。

「こんな奴らの手を借りたのが人生最大の間違いなんだが」

かつてオレンジになつてしまい、陰ながらオレンジキラーとして暴れ回っていた時分、攻略組に紛れたラブコフのスパイを暗殺するためヤバい奴にこのモ神教の手を借りてしまつたのだ。そろそろ顔を忘れていてくれると思つたんだが。

「……レイジ、帰ろう？」

「それには賛成だけど、こいつらの馬鹿騒ぎでお客さんが来ちまつたみたいだ」

ドカドカと響く足音、高めの独特な声。どうやら馬鹿騒ぎのせいで2階寮にいたボス軍団を呼び寄せてしまつたらしいな。

「コハル、戦闘準備！」

「オツケー、任せて！」

いつも通りに俺が撃つてコハルが突っ込む。それで全てを片付けるつもりだったのに、モ神教司祭的な奴が俺を押し除けた。その手には室内線に不向きすぎる長いモシンナガンモシンナガンを持って。

「使徒たちよ、我が神の力を示す時がきましたぞ。モ神様の裁きの下！　SNB弾で奴らのアーマーをぶち破れ！」

モ神様万歳！　モ神様万歳！　モ神様万歳！　そんな声が響き渡る。呆気にと取られているうちにモシンナガンモシンナガンを手にした黒フードたちは叫び声を上げながらマークの部屋を飛び出していき、ボス軍団の弾幕を浴びた。

しかし奴らは怯まない。モ神への信仰を叫びながら散発的な反撃

を繰り出し、取り巻きを仕留めていくではないか。いかに硬いアーマーを着てバイザーで顔を守ろうとも、高貫通力を誇るS N B弾を前にしては紙も同然。どうして狭い室内でそんな戦いができるのかはわからないけれど、兎も角強い。」

「あの人たち、なんだか強くない？」
「恐怖心が麻痺してるんじゃないか？ 弾幕浴びて頭引っ込めないとか狂ってるだろ……」

実際、モ神教徒たちは次々と被弾して倒れていく。ダウン状態で済んでいるようだし、やられる前に取り巻きをしっかりと道連れにしているあたりはさすがだ。

それでもモ神教徒もほとんどがやられ、流石の司祭も下手に頭が出せなくなっていた。ボスと取り巻きの1人はまだ中央階段にいる。あいつらを始末しなければ、ダウンした連中を助けることもできないな。

「そろそろ出番だな。ついて来れるか？」

そう言つて振り向くと、コハルはニコリと笑つてダガーを抜いた。始まりの日に怯えて泣いていた少女はもういない。俺がいなくなつてから随分と成長したらしく、背中ではなく隣に立つて、勇敢に戦う戦乙女へと生まれ変わっていたんだ。

「遅れたこと、あつた？」

「ねえな。行くぞー！」

まずは中央階段目掛けてグレネードを投げ込む。壁にぶつけて跳ねさせたから、ボスは背中の方にグレネードが落ちてきた形になる。

ボスと取り巻きが悲鳴をあげて角を飛び出してくる。グレネードにケツを叩かれる形になったのだから、必然的にこっちに逃げてくるよな。

そこへ弾幕を浴びせ、先頭の取り巻きを仕留めた。コハルはもう飛び出していて、俺の射線と平行に突っ込んでいく。これならコハルが被弾することはないし、敵も弾幕で行動に制限がかかる。随分と磨きがかかったものだ。

しかし間に合うか。ボスがグレネードの有効半径を離れて射撃体

制を整えるのが先か、コハルのダガーが届くのが先か。もうコハルが射線に入ってしまうから、支援者撃破できない。

「やあああああ！」

コハルのダガーはボスの首を貫き、そのまま壁へ磔にした。おかしいな、コハルのダガーってあんなに長くないし、そもそも手を離れてないか？　なんかファンネルみたいな感じに見える。

それもそのはずだろう。突っ込む途中で拾ったであろうモシンナガンの先端にダガーが取り付けられているぞ。タルコフに着剣なんてシステムはなかったはずだが、これもキリトがちよいちよい使っていたシステム外スキルとやらなのか？

「お、おお……モ神様が更なる進化を遂げられた！」

「着剣モ神様でボスを仕留められた！　女神様だ！」

「モ神様万歳！」

「え、えええ！」

コハルが困惑してオロオロとしている。そこは昔と変わらなくて可愛らしくも思えるが、邪教徒に囲まれて崇められる姿はなんだか微妙だな。コハルを拜んでいいのは俺だけだぞ。

「コハル、ダガーを回収して早く逃げよう。モシンは置いていくんだぞ」

「じゃあ、ボスのAKと交換しておくね」

随分とちゃっかりしてるじゃないか。いい奥さんになりそうだ。

「待ってくださいれイジ殿、コハル殿！　どうかあなた方もモ神様に！」

あいつら、次のボス攻略の時には最前線に立たせてやる。後ろからタチャンカの射撃支援付きでな。

——数日後

「なあレイジはん、軍の連中から”古臭い銃を持ったPMCが始まりの街でカルト教団の勧誘をしている”って報告があったんやが」

「俺は何も知らん」

「青龍連合でも”あちこちの魔法陣で怪しい祈りをしているPMCの集団がいる”って報告が上がっているんだけど、何か知っているか

い？」

「アトラスはなんの関与もありません」

どうして俺が対応に追われなきゃならないんだ、スーカ。

20層―7 終わらない悪夢

BEAR Operator“Rage”

ベイサルからの報告は途絶え、地雷の爆音だけが轟く。それから静寂だけがLighthouseを支配し、生き残りがいるのか、問いかけることすらしたくなかった。

それでも行くしかない。仲間を見捨てる事は決してしない。それが、リーダーとしての責務だから。

「メイベル、水処理場前面のローグやれるか？」

「了解。マニエク、正面機銃をやれ！」

ブラックバーンの命令に遅れて、マニエクが道路沿いの櫓でグレネードランチャーを構えるローグを狙撃して仕留めた。あと1体、機銃を構えた奴がいるはずだ。

しかしマニエクがいつまで待っても撃たない。狙うのに手間取る位置ではないはずなのに、一体何をもたついているんだ。

「レイジ、こっちも襲撃を受けた！ 支援をくれ！」

クソが、奴ら狙撃地点に待ち伏せをしていたのか。あいつらの支援なしに、水処理場への侵入は不可能だ。

かといって、黒猫団を連れたまま支援に行く事はできない。どう考えても足手まといになる事は間違いないのだ。これはPVPなのだから、彼らに戦う覚悟があるわけもない。

「キリト、黒猫団を連れて脱出しろ。この道路を水処理場と逆に行けば脱出地点がある。リンデン、岩山のメイベルを救援する。タチャンカが暴れてる間に行くぞ！」

「あいよ。コハルとシノン、サーニヤも置いていくか？」

置いていかないと、コハルはきつとそう言うだろう。そうだとしても、これから先は殺し合いになる。そんなところにこの優しい少女を連れて行きたくはない。

でも、置いていかないと約束してしまった。俺は、守りながら戦えるだろうか。

「レイジ」

ああ、決意に満ちた目をしてやがる。その目で俺を見る時は、大抵引くつもりがない時だ。

「……分かった。俺の背中を頼むぞ。相手が銃を持っていたら、つべこべ言わずに隠れろ」

「任せてよ。私もレイジと戦うから」

「私も戦いますわ。足手まといにはなりませんことよ」

「……すまん、援護頼む」

サーニヤの実力は知っているが、果たして対人戦闘はどこまでやれるだろうか。決まった動きをするモブと、有機的に動く人間が相手では勝手が違う。何より、心の持ちようさえもが。

目を逸らすようにリヨーハを見ると、奴もシノンの圧力に負けてしまっていた。これで、方針は決まったな。

「頼むぜキリト。お前がことの顛末を攻略組に伝えてくれ」

「分かっているさ。けど、レイジたちも無事に帰ってこいよ」

「ああ。でも泣き寝入りはごめんだ」

キリトの背中を見送り、俺は覚悟を決めた。この先、初めてプレイヤールを殺すことになるだろう。それも、コハルの目の前で。

生捕りとか、誰も殺さずに済むようになって甘い考えは最初からない。殺しにきている相手に不殺プレイなどしても犠牲が増えるだけだ。それに、俺の仲間を殺しやがったのだから、情けをかけるつもりなど最初からない。

それでもいい。こういう汚れ仕事のために俺たちはいるんだ。PKが当たり前で、殺し合い、奪い合う世界に身を置いていたから。

いつか最前線に立てなくなる日が来るのなら、これを俺たちPMに与えられた役目だと信じ、それに殉じて見せようじゃないか。

攻略のための礎に、PK集団を殺す。何を守って何を切り捨てるのか、答えはとっくに出ているのだから。

※

岩山で交戦するメイベルの救援に向かう間も、悲痛な叫びが無線から聞こえてきている。なんとか手榴弾を投げつけて時間を稼いでいるようだが、その頼みの手榴弾も底をつきかけているようだ。

おまけに相手はS A Oプレイヤーで、P M Cの火力ではなかなか殺しきれない。いずれ数に押されてすり潰されてしまおうだろう。

シノンがニキータハウスに残り、狙撃支援をしてくれる。コハルとサーニヤはそれを守り、俺とリョーハが岩山を駆け上がる。敵が銃を持つているなら隠れると言ったし、これで置いて行ったことにはなるまい。

「レイジ、こっちは持たねえ！ 橋の方へ離脱するから奴らを叩けー」
ブラックバーンたちは崖から飛び出た岩を伝い、滑り降りるといふより転げ落ちていく。岩山は頂上まで敵が来ているが、即死しないように降りるルートは知らないらしい。ブラックバーンたちを追いかけられず、迂回に手間取っているように見えた。

「奴らを挟んだ！ 撃てリョーハ！」

敵の背後を捉えた。メイベルに気を取られて背後が疎かだぞバカどもめ。弱いものいじめばかりで本気の殺し合いなんてしたことないんだらう？

だから俺とリョーハに撃たれて泡を食うんだよ。ここで1人持つて行ってやる。

手前の1人、グレネードを喰らったのかかなりの大ダメージを受けている。そこにリョーハのヘッドショットを喰らって倒れた。ギリギリスタンで済んだようだな。

だがダメだ。お前たちは俺の仲間を殺した。倍は持つていかないと、グリズリーの連中の弔いにもならない。

「あばよ、クソ野郎」

倒れた体に数発撃ち込む。断末魔と共にH Pバーが消滅して、そいつはもう脅威ではなくなった。まだだ、まだ敵が残っている。

「リョーハ、グレネード行くぞー！」

「俺に当てるなよー！」

目の前の敵へ、ピンを抜いたグレネードを投げつける。そいつはなかなか勇敢で、落ちたところを拾って投げ返そうとしたのだろうか。飛んでくるグレネードに駆け寄った。

バカめ。次の瞬間には地面に落ちたグレネードが突然炸裂した。

即死範囲に入っていた敵は何が起きたかもわからずにHPを全損して崩れ落ちていく。

RGNグレネードは初めてか？ 効果範囲こそ狭いが、着弾即爆発のインパクトグレネードだ。一撃即死の害悪武器を喰らって、コンティニューができないのはさぞ不満だろうけどな。

「奴ら引いて行くぞ！」

「ここで仕留める。リヨーハ、このまま押ししていけ」

「いつも通りやるか、30秒で来い！」

30秒、俺がいなくなってもリヨーハは完璧に敵を押し留めてくれる時間。そして、俺が突破口を開くには十分過ぎる時間だ。

「任せた、相棒！」

火力が減る分、敵が崖を降りるよりリヨーハの方を突破にかかる可能性があった。そして響く足音はその予想を裏付ける。

でも、おかげであいつらは気づいていない。側面に迂回出来る段差があつて、命知らずの大馬鹿野郎がそこを迂回してきているなんて。俺たちはここで散々戦ってきたんだ。簡単に殺せると思うなよ。

「奴ら押さえてる！ やれ！」

リヨーハめ、俺がいい場所に着いたつてよくわかったじゃねえか。約束の時間より少し早いけれど、奴らの側面を奪った。

狙う必要もないほどに近い。レーザーサイトを頼りにトリガーを引けば、無防備な側面に弾幕を浴びたオレンジが倒れた。

唐突な側面攻撃に驚いたオレンジはたちまち崩壊し、再び崖の方へ逃げて行く。メイベルが降りたところを辿るつもりらしい。

「ブラックバーン！ 網にかかった！」

「やれ、タチャンカ！」

崖の中腹、テラスに降りたオレンジたちは怒れるタチャンカの弾幕を浴びて次々倒れて行く。さらには鬱憤晴らしにか、残るメイベルのメンバーからも猛射を浴びて手も足も出ていない。

「シノン、こっちに合流しろ。援護はいい」

「了解」

援護の必要もなくなり、シノンたちに移動を指示する。もちろん、

その指示はこの光景を見せないためのものだけでも。

「死ね、クソ野郎ども」

逃げ場のないオレンジの残党の中へグレネードを落とす。一網打尽、まさにこういうことを言うのだろう。裏で手を回して攻略組を疑心暗鬼に陥れ、多くのプレイヤーに恐怖を植えつけた殺人集団だと言うのに、あまりにも呆気ないほど一方的な虐殺となってしまうた。

これが、PMCに課せられた使命だとも言うのだろうか。

20層―8 進撃

岩山の麓でシノンたちも合流し、ようやく部隊の立て直しが出来た。その間にレンからの報告もあり、グリズリーがリンドたちと水処理場3番倉庫で合流、立てこもっていることも分かった。

「面倒なのは、ローグが全く片付いていないことだな。橋を越えようとすれば機銃掃射が待ってる」

リヨーハが地図で進行ルートの候補をいくつか示すが、必ずどこかでローグたちの銃座に捕捉される。戦わずに通れない道だが、オレンジの残党に捕捉される危険もあった。

「仕方ないわ。私とマニエクで屋上を始末するから、リヨーハたちで地上を掃討できる？」

「やるならば俺たちの稼ぎルートを使おう。1番と2番屋上、道路前の櫓を始末すれば、水処理場敷地に忍び込める。機銃は死角になるから、地上の奴らに気をつければ撃ちたい放題だ」

ブラックバーンがベータ時代に使っていた侵入経路は20層開放時の偵察で試したこともあり、確かに使える道だった。それでも強力なローグと地上戦を繰り広げる関係上、位置取りを間違えればたちまち殺されることになる。

しかし時間がないのも確かだ。オレンジが次の手を打ってくる前に、こつちが仕掛けて逃げる必要がある。これ以上余計な犠牲を出すことはできない。

「なら先に道路を始末しよう。マニエク、テラスから狙撃頼む。アイザックはその援護で、残りはレイジへついて行く」

「狙撃なら私も行くわ」

「シノンは待機してくれ」

リヨーハはマニエクを追ってテラスに上がろうとするシノンを止める。あそこにはグレネードで吹き飛ばしたオレンジの死体が山ほどあるのだ。そんな光景を見せたくないのだろう。

「……分かったわよ」

「すまん。代わりにもう一度青ニキータハウスに行って、岩場から橋

の方を頼む」

「ゴハルとサーニャは俺と。海岸側を迂回して水処理場へ。レンたちを助けに行こう」

「わかったよ。案内よろしくね」

「承りましたわ」

これから行く道も、水処理場正面に存在する監視塔2つを制圧しなければ危険なルートになる。グレネードランチャーと重機関銃が据え付けられたそこをマニエクとシノンが制圧しなければ、先行する俺たちが死ぬことになるのだ。

「リヨーハ、援護頼んだぞ」

そう言つてM700をリヨーハへ渡す。VSSで400m級の狙撃はほぼ不可能だし、機動力が必要な先行部隊は少しでも荷を軽くしておく必要がある。弾薬をまとめて渡してやれば、装備重量はかなり軽くなった。

「あいよ、任せておけつて。死ぬんじゃねえぞ？」

「それはお前次第だな。死んだら葬式にはサイコーにダサイドレス着てこい」

「縁起でもねえぜ」

このくらの軽口を叩く余裕があつてもいいだろう？　これから地獄に突つ込むのだから、心の余裕一つ持っていなければ先にメンタルが潰れてしまう。

※

「先行部隊は橋近くだ」

ローグの根城である水処理場正面には川があり、ニキータハウス側と隔てられている。橋はあるけれどローグの銃座から狙える位置にあるため通行は危険で、渡るとすれば西側へ広がる砂浜沿いに橋下へ迫り、浅瀬を渡るしかない。砂浜沿いは窪地になつているおかげで、銃座の死角へ入れるのだ。

そのまま水処理場側の砂浜を西へ抜けていけばローグをスルーして逃げられるが、今日はそうともいかない。

「こちらマニエク。こつちからは先行部隊が見えん。とりあえず道路

側はクリア、銃座にも敵影なし」

「こちらリョーハ、こっちは僅かに見えた。シノンが2番倉庫の機銃を排除する」

「あそこまで400か500メートルはあるだろ、大丈夫か？」

次の瞬間には特徴的な甲高い銃声が辺りへ響いた。シノンが返事代わりに撃つたのだろう。SVDで使う7.62×54R弾ならば、かなりの距離でも頭にさえ当たればローグを一撃で仕留める威力を持つ。

「右側機銃を仕留めたわ。何か言ったかしら？」

「……ナイスショット」

きつとシノンはドヤ顔をリョーハに向けている頃だろう。きつさと付き合え、バカどもめ。

「先行部隊は前進する。コハル、サーニヤ、俺について来い」

「オツケー」

「承りましたわ」

橋周りは水処理場正面銃座の射程であり、重機関銃とグレネードランチャーの猛射を受ける危険地帯だ。銃座のローグの死亡確認をこちらでしていないのが不安な点ではあるが、支援部隊から見えていないならばまあ大丈夫だろう。

少し遅れてブラックバーンのチームも来る。何かあっても彼らの支援が受けられるだろう。

「待って、正面銃座で動きあり！」

「レイジ、退避しろ……違う、マニエク！ アイザック！ そこから逃げろ！」

リョーハの怒号をかき消す銃声は機関銃とグレネードランチャーのものだ。こちらを狙ってるものと思い、とっさにコハルとサーニヤを地面に押し倒し、庇うように覆い被さる。

それでも、弾は俺たちの上を飛んでいった。その着弾地点ははるか向こう。ローグの反応圏外であるはずの場所で、マニエクとアイザックが陣取っていた狙撃地点のあたりだった。

ローグがあんな長距離を撃つなんて見たことがない。射程ではあ

るが、ログの団地範囲外なのだから。

だとすれば、やったのはオレンジか。

「マニエークー！ アイザック！」

ブラックバーンの怒鳴り声がヘッドセットから響く。それでも答えは返ってくることなく、爆音だけが轟き続ける。あんなものを食らって生きていられるわけがない。2人は死んだ、そう考える他ないんだ。

「クソつたれ、櫓にいるぞ！」

「レイジ、近くの茂みに動きあり！」

土手の上の茂み、地雷原の手前から黒フードのオレンジたちが飛び出してきた。咄嗟に射撃しても止めきれない。接近戦になれば、やはり銃よりも刃物の方が強いのだ。

1人ダウンさせた、次に1人。AKを弾き飛ばされればアイスピックで顎を貫いて引き倒し、切り掛かってくる別の剣はナイフで防ぐ。

「死ねー！」

アイスピックで敵の右腕を切り落とした。続いてナイフで突き、アイスピックで脇腹を引き裂く。これでもまだ殺せないなんて、本当にインチキだとしか思えない。

ナイフを振り回し、刹那に見えた。必死に戦うコハルとサーニヤに忍び寄る影と、あまりにも毒々しい色をしたナイフ。どう見てもやばい、あれを食らってはいけないと本能が叫ぶ。

「コハル、かわせー！」

ナイフを投げつけたけれど、それは槍で弾き飛ばされた。ドクロマスクのクソ野郎が防ぎやがった。

「レイジ……！」

ナイフを突き立てられたコハルが崩れ落ちる。あんなので死ぬわけもないが、何かしらのデバフ効果がついているのだろう。考えられるのは麻痺か。

「その手を離しなさいー！」

コハルの近くにいたサーニヤが魔剣“フィンスタニス”を振るう。敵のHPを吸って自らを回復する魔剣と彼女の戦闘能力が合わされ

ば、こんなオレンジ連中に負ける訳はない。

でも、彼女に人を傷つける覚悟はない。どう見ても武器を弾き飛ばすような戦い方をしているから、次第に押されてしまっていた。

「コハル、サーニャー！」

A Kに持ち帰るけれど、すぐに弾が切れた。背中を切りつけられて倒れる俺の目の前で、ドクロマスクがサーニャを捕える。跪かされたコハルとサーニャは首に刃先を当てられ、下手に動けばすぐさま殺されてもおかしくない。

「ワンダーウン。レイジだったか？ お前も動くなよ」

どうなるかわかるだろう？ そう言わんばかりに奴はナイフをチラつかせる。

ああ忌々しい。今すぐぶち殺してやりたいが、今は武器を捨てるしかない。コハルを殺されてしまったら、俺は正気でいられる自信がない。

武器を捨てた途端、背後のオレンジが俺を殴りつける。悲鳴を上げるような痛みではないが、ともかくムカつく。

「レイジ！」

「レイジさん！」

「クソが、勝ったつもりか!?!」

ドカドカと好き放題蹴つてくれるじゃねえか、クソ野郎どもめ。覚悟しておけよ？

20層―9 殺戮

蹴り上げられ、踏みつけられ、どれだけの時間が経っただろう。どさくさ紛れにPropitalを使ったおかげと、クラス5のアーマーのおかげで大したダメージは受けていない。

だがともかく頭に来る。弱い癖に調子に乗りやがって。

何より、人質がコハルなんだ。生かして帰す者か。隙を見せたら全員ぶち殺してやる。

「ああクソ、レッド！レッド！ブラック急げ、レイジがヤバイ！」

「今向かってるよ！タチチャンカがな！」

「こつちも狙撃地点を変える！シノン、頼むから撃つてくれよ！」

吹っ飛んだComTac2からは仲間たちの声が漏れ聞こえる。大方、リヨーハとシノンの狙撃に合わせてメイベルの残存が突入、こいつらを追い払うのだろう。

こんなことならキリトを連れてくれば良かったと思うが、黒猫団が巻き込まれる可能性を考えればこれで良かったんだ。

「レイジ、いいから逃げて！」

「逃げられるかよ……っ！」

もちろんオレンジどもは笑っている。なんだかゲスなことを言っていた気がするが、何を言っているかわからない。

そろそろ頭に血が昇って、どうやってこいつらをなぶり殺すか、それしか思い浮かばないんだ。

「狙撃地点について。メイベル、そつちは？」

「突入準備。そつちの合図に合わせる」

BEAR Operator “Ryoha”

「ああマズイ……シノン、槍の方を頼む」

レイジから預かったM700、それに乗せられた6倍スコープはしっかりと黒頭巾を視界に捉えていた。

レンジファインダーで距離も測った。これならば確実に頭をぶち抜けるけれど、心配なのはシノンの方だ。

「おい、聞こえてるか？ シノン、シノン！」

「分かっているから……撃つわよ。SCAVと同じでしょう？」

「そうしなきゃ、死ぬのは俺たちの仲間だ。それに、ドラグノフ当たったくらいで奴らは死なねえよ」

「そうね……そうよね」

やはり震えている。それで狙撃が当たるわけが無い。

「落ち着け、深呼吸しろ」

そつとシノンの手を握ると、彼女は俺に顔を向けた。おいおい、スコープから目を離すんじゃないよ。

「お前は私利私欲で殺すんじゃない。仲間のために戦うんだ」

「……半分、リヨーハも背負ってよね」

「その為にいるんだろが。メイベル、スタンバイ……ああレッド、レッド！」

コハルを捕まえている短剣野郎がコハルを刺そうとしている。このままじゃレイジが捨て身で突っ込んでしまうじゃねえか。

「撃て、シノン！」

それだけ叫んで呼吸を止める。どこまでも透き通ったスコープの中、浮かぶ十字線はすっかり奴の頭を捉えていた。

BEAR Operator “Rage”

殺す、殺す、殺す、殺す！

あの短剣野郎は死んでも殺す。コハルに手を出させるもんかよ、死ねクソが！

「撃て、シノン！」

背中を踏むクソ野郎を振り解き、大腿部のホルスターからハンドガンを引っこ抜く。

そして、銃声が響いた。俺が撃つよりも早く、コハルとサーニヤを人質に取っていたオレンジどもの体が揺らぐ。

「突入、突入！」

「ここで会ったが百年目！汚物どもよ、消毒の時間ですぞ！」

ブラックバーン率いるメイベル隊が突っ込んできた。タチヤンカ

の弾幕が俺の周りにいたオレンジを薙ぎ払い、その弾幕を掻い潜りながらブラックバードとレッカーが突撃を仕掛ける。

一瞬にして混乱が巻き起こる。そりやそうだ、俺たちは伊達にPvPの経験積んできているわけじゃない。

PvPを忌避する連中を一方的に痛ぶっているような奴らを相手に、負ける要素などありはしないんだ。

「ぶち殺せ、生かして帰すな！」

AKは吹っ飛ばされた。手にはMP―443だけ。頼りないハンドガンでも、頭に当てればノックダウンさせられるんだ。

まずは近くのボケを1人。次の奴はアイスピックで片手剣を絡め取って、無防備になった頭へ至近距離から撃ち込む。

おっと、槍持ちの雑魚が突進してきたな。それは今撃ったオレンジを盾にして槍を受け止める。あ、死んだけどいいや。

「ありがとよー！」

そのまま槍野郎も撃つ。ダウンを奪ったなら、後でまとめて始末するだけだ。

「クソどもが逃げておりますぞー！」

「ほっとけ、いや追い立てろ！殲滅してやるー！」

ブラックバードめ、いい判断をしてやがる。タチチャンカに追い立てられた間抜けどもは知らずに道路際の地雷を踏んで次々に倒れていった。

そこ、岩伝いに歩かないとすぐに爆死するんだ。知らなかったな？

「ブラックバード、そのまま追跡して全員仕留めろ！コハル、サーニャ！ニキータハウスの方に逃げてリョーハと合流しろ！俺たちが止める！」

「待って……！」

コハルの返事も聞かず、短剣野郎へ飛びかかっていく。こいつだけは逃がさん。必ず殺してやる。

「死ね、クソが！」

まだスタンは効いているはず。ならば俺のナイフは遮られることなく奴に届く。

そのはずだったのに、弾かれた。もう動けるのかよ。

「チツ、鎮痛剤使ったな？」

「お前らだけの専売特許と思うなよ！」

奴の蹴りに合わせて後転し、受け身を取る。

なるほど、PMCの使うような鎮痛剤でデバフを打ち消したか。たまにSCAVやルートボックスから手に入るし、フィールドで細々と生きていなきやならないこいつらが持っていて不思議はないな。

「また、な。次は、殺す」

「待てや！」

槍野郎は話し方がムカつくな。もう一度黙らせてやろうとハンドガンを構えたところで、ヘッドセットが何かの足音を捉えた。

後方、接近してくるな。敵か。

「邪魔すんなクソが！」

振り向きざまに飛び込んできた野郎を刺してやろうとしたが、腰を抱きつくようなタックルで吹き飛ばされた。

ただやられるだけではいられない。すぐにそいつを殴りつけて、その不気味なドクロマスクを剥ぎ取ってやる。

「死ねこの野郎！死にやがれ！」

MP-443をそいつの頭へ突きつけ、撃ち込んでやった。コイツもオレンジギルドの一員ならば死んで当然だ。コイツだけでも地獄へ送ってやる。

なのに、どうして警告が出るんだ。グリーンプレイヤーへの攻撃を警告するそれを、俺は理解できなかった。

「つぶね！」

そんなことよりも、槍野郎が突っ込んできた方が問題だった。転がるように回避しながら、ドクロマスクを引っぺがす。

「てめーも纏めてくたばれや！」

「生憎、死ぬのは、お前だ」

煙幕が視界を覆っていく。クソ、あの槍野郎が投げやがったか。

緑の煙に視界を覆われ、追跡はほぼ不可能。あとはブラックバロンたちが掃討してくれればいい。

「……あのドクロ野郎、シユピーゲルとか言ったよな」

ドクロマスクを引き剥がした刹那に見たあの素顔、かつてどこかの層ですれ違った覚えがあった。

シノンの知り合いで、シユピーゲルとか名乗っていた少年。その顔に間違いはないだろう。

いったい、その事実をどうシノンへ伝えりゃいいんだ。

視界が歪み、声が漏れる。長い戦闘の中で蓄積したダメージのせいで、アバターが悲鳴を上げているんだ。

腹部と右腕が壊死、他のところもヤバイ。胸の軽度出血も治療を忘れていた。

おかげで水分とエネルギーも切れかけ。もう少しで脱水と疲労のスリップダメージで死ぬところだった。

「……みんな、大丈夫かな」

殿を務めて仲間を逃し、たった1人川縁で治療と補給をしているのは中々心細い。

回復アイテムは殺したオレンジから拝借したし、水と食料は手持ちがあつたから賄えた。予備弾薬が心許ないが、とりあえず動くことは出来るだろう。

「リヨーハ、こちらレイジ。生きてるか？」

『こっちは列車に向かつてる。合流できそうか？』

水処理場の奥には倉庫群があり、そこには一定時間経過で装甲列車がやってくる。

時間経過で使えるようになる特殊脱出のひとつであり、列車の到着時間も発車時間もランダムなので、今使えるのは中々幸運と言える。

「回復終わったから、今から向かう。ローグの装備を回収する暇はないな」

『欲張ると死ぬぜ』

「タルコフの常だな」

『メイベルもこっちに向かつてきてる。お前も遅れないように急げよ』

まだ痛みのエフェクトは残っているけれど、動けるから問題ない。ローグは全滅しているようだし、あと数百メートル走って仲間と合流すればいい。

静かになった水処理場を走り抜ければ、大きな倉庫が目立つエリア

に辿り着く。

おそらく物流拠点だったのだろうが、コンテナが積み重なり、トレーラーが止まっている。ここに来るタスクがあれこれとあったのだが、いつもローグに邪魔されて中々終わらなかつたっけ。

そんな懐かしさの中、コンテナの向こうで待機している装甲列車が見えた。メイベル隊の残存3名も同時期に違うゲートから敷地に入ってくるのが見えて、少し安堵できた。

「ブラック！」

「レイジ、生きてたか！そろそろ出ちまうぞ！」

ちょうど装甲列車が汽笛を1回鳴らした。出発1分前の合図で、3回鳴らしたら発車になる。

走って30秒くらいの距離だし、間に合うだろう。そう思っていた矢先に、ズドンズドンと重い銃声が響いた。

「隠れる、2番倉庫の機銃！」

レッカーが叫び、たちまち列車に乗っていなかった俺やメイベル隊はコンテナへ身を隠す。

2番倉庫屋上にはひとつだけ、この倉庫エリアを狙える機銃が設置されているのだ。ローグは全滅したって聞いていたというのに。

「クソが、リヨーハ！列車から狙撃できないか!?!2番から機銃掃射を受けてる！」

『ちよい待ち、シノン！』

『5秒待つて』

確か、装甲列車の位置は機銃の死角に入ったはずだ。恐らくシノンならば一撃でガンナーを仕留めてくれる。

『え……』

そのはずだったのに、シノンは撃たなかった。

なぜか？ 多分、ガンナーはローグじゃない。

「リヨーハ、シノンはダメだ！あのガンナーはPMC、シユピーゲル！」

『あんのガキヤ……！』

「こつちで対処する！」

俺はギリギリ死角に入った。ここから制圧射撃でメイベルを逃すしかない。当たらなくてもいいから、アイツに撃てないようにするしかないんだ。

「ブラック、援護してやるから走れ！」

「ああクソ、頼む！」

距離100メートル、まともに当たるか怪しい距離だが、銃座へ弾幕を張ってやれば、たちまち機関銃の銃口が上を向いた。銃座を離れたか、その場に伏せたのだろうか。

「行け行け行け！」

ドタドタと重装のPMCが走る音が響く。あと少し、あと少しだけでもってくれ。

あと5秒、そんな願いは沈黙が撃ち破る。60連マガジンは中途半端にしか弾薬が残っておらず、もう少しのところで弾切れを起こしてしまった。

「マズい、リロードだブラック、急げ！」

「このタイミングで……」

「兄貴、先に！」

最後尾のレッカーはその場にしゃがむと、銃座へ向けて射撃を始めた。

隠れる場所のない開けた場所で、それは自殺行為とも言える所業だ。

「やめろレッカー！」

叫ぶブラックバーンの声は銃声にかき消されていく。それはM4の軽い銃声ではなく、重機関銃の重い銃声。

たちまち降り注ぐ雨はレッカーを撃ち据え、その威力は440しかないHPを一瞬の元に消し飛ばす。

断末魔を上げる間もなく、たった数秒の足止めの対価にレッカーはその命を落とした。

「レッカー！返事しろレッカー……蓮也ア！」

ブラックバーンがいくら叫んでも、死体となって倒れ伏すハッカーが返事することはない。

目の前で弟を殺されたブラックバーンの目にみるみる憤怒の炎が宿る。

「マズイ……タチャンカ、ブラックを連れて引け！」

「わかりました！ブラック殿、急いでこちらへ！」

「離せ！あのクソガキぶち殺してやる！生かしてアインクラッドから出してやるか……ふざけたギルドごと、ぶち殺して存在もろとも消してやる！この城を墓にしてやる！」

殺す、ずっとそう喚いて突撃しようとするブラックバーンをタチャンカが引きずり、なんとか列車まで引っ張っていく。

タチャンカの筋力がエリートに到達しているからこそその芸当だろう。

「そのまま行け、カバーする！」

『レイジ、お前も戻れ！そろそろ列車がでちまう！』

「あと10秒なら大丈夫！それよりリョーハもこっちきてブラックを引っ張れ、長くは持たせられねえ！」

ブースターを装着して、銃座のシユピーゲルへと制圧射撃を繰り出す。

頼む当たれ、そう祈りながらの射撃もたちまち重機関銃の弾幕に封殺され、物陰への退避を余儀なくされた。

それでいい、俺を狙え。その間はブラックたちも生きられるから。

「レイジ、お前も退いてこい！」

無線ではなくリョーハの叫び声が直接聞こえた。

援護はない。しかし走ればあと少しで機関銃の射角から逃れられる位置、走るしかない。

「逃げ逃げ逃げ！」

「今行くよ、くそがあああああ！」

走り出したと同時に、まるで雷鳴のような銃声とともに機関銃弾の雨が降り注ぐ。

激しいリコイルが弾道を散らし、足元を縦断が跳ねていく。

そのうちのひとつが脚を捉え、痺れるような衝撃とともに駆け足が歩きへと変わる。

走ろうとしても走れない。視界の端のダメージ表記は左脚の絵師を示し、移動速度の低下を招いていた。

鎮痛剤はもう残っていない。

銃座の射角からは外れたけど、ノロノロとした歩きでは列車が発車するまでに間に合わないだろう。

脚を治すにも20秒かかる。尚更間に合いはしない。

「レイジ、急げってんだー！」

「脚をやられた、間に合わねえー！」

「レイジ、急いでー！」

コハルが乗り口から身を乗り出し、早くこいと手を伸ばしてくる。

あと少し、あと少し。脚を引き摺りながらコハルの手が届くところまで。

動け、動けってんだこのクソ脚め！

「あと少し……!?!」

もう少して手が届く。

もう少して触れるはずだった手を、コハルは引いてしまった。

その目には驚愕と恐れと、絶望を宿して。

「レイジ、アイコンが……」

ああ、そうだったな。

夢中で戦っていたあの時、シュピーゲルはまだグリーンだったんだ。

それを攻撃した俺は、いつの間にかオレンジになっていたんだ。

それを理解した瞬間、手を下ろしてしまった。

コハルの手を握る権利はどうに失っていたんだ。

手を差し伸ばされる権利さえ、もうないんだ。

あの優しくって純粋な女の子の手を、血に染められた手で握るわけにはいかない。

「何してんだコハル……！レイジ、手を伸ばせ！」

コハルを押しつけたリョーハが手を伸ばそうとした瞬間、列車の汽笛が鳴り響く。

発車を告げるその音と共に扉が閉まっていき、リヨーハの手は扉を叩いた。

「おいレイジ！諦めんな掴まれ！」

「リヨーハ、もう無理よ！」

窓から身を乗り出そうとするリヨーハをシノンが押さえる。

それでいい、仲間を巻き込みたくはないんだ。

ゆっくりと走り出していく列車へ右手を掲げて敬礼と共に見送る。

「レイジ……レイジ！」

絞り出すようなコハルの声でした。

ごめんね、もう一緒にはいられないんだ。

でも大丈夫、コハルにはもう仲間たちがいるだろう、両手に抱えきれないほどに。

コハルはもう大丈夫、攻略組でも負けないような強いプレイヤーなんだから。

汚れ仕事も罪禍も、全部俺が持っていくからね。

——
Прощайте